

二名子

ふおーればー・びー・びゅーていふる・ちゃいるど。

私は眠気に耐えず啜った珈琲をソーサーに載せ、そして波紋となって水面に同心円を描いた。珈琲カップの内側にぶつかって反射し、干渉して無数に分裂した私がアラベスクになる、音もなく。私は表紙を捲ってシナリオの一頁目を開く。

今日は何がありましたの。わたくしに話して御覧にならない。口にするのも厭なくらい、厭なこと？ 自分のことなんて何も言葉に出来ないくらい、人生に退屈しておられるのかしら。ところで今日は暑かったですね。どうして、此処にいらしたの。

最初に私が尋ねる。

するとあなたは答える。疲れきって綿となった波の底にひっそりと発育する黒真珠のような心の〈窓〉を輝かせて。

「恋人に、〈鏡〉を買いにゆくのです」

恋人に鏡をプレゼントするとは、浮浪者のような見掛けに因らずファンシーな御仁ですね。そういう話題がお好みかしら。政治の話は、臯月賞は？

わたくしは雑貨屋さんじゃありませんのよ。この街には生憎、あなたの彼女さんが喜びそうな気の利いた雑貨は売っていないのです。それにもう深夜ですし。お家は内回り、それとも外回り？ そうか。じゃあ、総武線ですね。山手線なら目の前なんですけど……此処から中央・総武線の駅まで走って五分だとして、終電は一時三分だからギリギリかな。でも、もう、走る気力もなさそうですね。

今、此処の時計で、十二時五十六分になったところです。時計の針は常に時計回りに回転し、不思議なことに、時計回りが反時計回りになることは決してないのです。奇妙な現象ですよ。それでもございせん？ 私はそのことを考える度に発狂しそうになるのですけれど。

ところで、時間はあるのかしら。

あなたは頷く。「電車が無いのなら仕方がない。此処で眼下の車道を行き交う不穏なパトカーの赤色灯を眺めながら夜を明かすしかないのだろう。それに、この藪睨み気味の世間知らずな女が騙されてくれれば、ホテル代を浮かすことも出来るわけだ。もっとも、これから宿を探しても泊めてくれるところは風俗得意のラブホテルくらいだろうが」なんて下心があなたの衷心を掠める。

おありよね、人生に退屈しちゃってることば、これと言っていたいこともないってことですから。

何、「したいことはないけど、しなきゃいけないことはある」？ 駄目ですよ、そんな言い訳。じゃあ、あなたが此処にいるのも、誰かの命令でってことですか？ わたくしは何も実體として売るものがない本当の意味でのサービスマンでございますから、厭なら何時でも帰っていいんですよ。此処があなたの日常世界より退屈だったら、むしろ、帰ったほうがいい。仕事がありますよね？ もしかして、家族とか、居られたりする？ じゃあ、なおさらです。

あれ、まだいてくれるんですか。本当にわたくし何も持っていないですよ。もしか、お目当てがわたくしの體だったりとされると、逆に困ります。ないから、體。私はただの活字情報、聲、言葉、日本語。見てお分かりでしょ？ 実は、子供も居ります。

私にそう指摘されるまで、あなたはその事実に関心がいなかったようだった。私の顔を、洋服を見た、スリーサイズを想像した、私の軽い斜視がやけに気になったのも、よくある錯覚の一つだったのだろう。私を若い女と勘違いするなんて。日本の小説の世界には彼女や彼よりありふれた、このへ私を。幾分胸を突かれたらしきあなたを、私の冷静でしっかりとした語り聲が鎮静するのだった。

そういうこと出来る人がいいんだったら、風俗がいいんじゃないかしら。御覽の通り、今でもこの通りは日本有数の慾望街くドヤ街なんですから。悪くございませんですよ、お金払うんでしたら。こんなところに来ちゃうことに較べたら、ずっと健全。ところで此処に来たこと、絶対周りの人にバレちゃ駄目ですよ。あなたには大切な日常があります。今はどうでもいいって思えてても、いつか、大事になるときが来ます。ところで體がない、は言い過ぎかもしれません。実は存在するのですけど、私は今、あなた自身とちょうど対称的な位置にいるのでございます。想像なさってください。鏡じゃないなあ。だって、鏡像は左右逆ではありませんか。鏡像性も対象性のものでございます。わたくしはもっとずっと洗練された、高級な対称性なのでございます。恥ずかしいのですけど。だって分かっておられるでしょ、全身を綺麗に映せる鏡を買うのよりもっと高いお金払って此処にいるのは、あなた自身なんですから。

「金？」あなたが怒鳴る。「金なんて払った覚えはないぞ！」

あれ、もうお忘れになったの。財布の中身を確認して御覽なさい。

あなたは慌ててポケットに手をつっ込み、紙入の紙幣を数える。

違う、違う。現金じゃなくて。私は微笑んで、あなたのクレジット・カードを卓の上に差し出した。あなたはそれを手に取り、本当にそれはもう、狐につままれたような面持ちで、無然と財布に戻した。「グリーン・オフがある。法律は消費者の見方だ。明日朝一番で銀行に行って」と回転する理性を他所に、あなたはすでに私に引き込まれているようだった。「左右が逆転しない鏡？ 面白いじゃないか。最後まで見届けて、満足が行けば、引き落とされた料金はそのままにしてもいい」そんなあなたの意識の流れを透視したかのように、私は語り始めるのだった。否、本当に透視したのである。私はあなたの、あなたとあなたの世界のすべてを反復するもう一人のあなたのだから。鏡の表面を手に触れることは出来ない。鏡の裏側も、それどころか、鏡の内側も存在しない。此処は、あなたと私とを切り分ける純粋な境界の上なのである。

損はさせませんよ。わたくしは面白い。すんごく面白い。我ながら。ステージで死んだあの捨て身のお嗤い芸人などよりずっと面白い。本当ですよ。信じて戴けたら、嬉しいんですけどね。

何故なら、わたくしはシナリオ・ライター。テレビカメラの中の世界を作っている、物書きなのでございます。従って、テレビの中やステージの上で起こることより、定義上、面白い。しかもわたくしの場合普通のシナリオ・ライターとはちょっと違う。わたくしは、自分の価値が完全に、シナリオの中にしか存在しないってことを分かっている、自覺的シナリオ・ライターなのです。嘘だと思ふなら、私を読んでみてください。きっと、一味も二味も違ふって、分かってくれる。読まずに文句言ってくる人が、これがまた、多いんだ。最初のワン・シーンと最後のワン・シーンだけ見て、面白くない、金返せだなんて、本当に困りますよね。詐欺はそっちだよ。次のお客さんもいることですし、何なら、警察呼んじゃいますよ？

「シナリオ？ 何の？」なんて、あなたはもう好奇心そのもの。お金のことは忘れたみたいなのだった。

ほら、今、あなたが発聲した、その台詞。それも、わたくしのシナリオ。そういうこと。ううん、いいの。分からなくても。分からない方が自然。分からない方が可愛いわ。分かった瞬間、きっと、あなたというシステムが壊れてしまうのです。あなたが踏み込んだ場所は、つまり、そういうお店なのであります。じゃん！ ゆっくりしていらして。わたくしはこれからあなたについてのお話をいたします。だから、こわばらないで、寛いで、心をオープンにして、ありのままの情報に身を任せるのです。わたくしがあなたについて教えて差し上げるわ。はい、三つ数える間に力を抜く！ 一、二、三！

いいですか？ 此処だけじゃないですよ、通牒ってものはみんなそう。あなたの買ったハード・ディスクや光学ディスクに入ってる情報、それ、全部、あなたのもの、あるいは、あなた自身だって言い切れますか？ もしそう仰りたいんだったら、あるいはもし、事実上すでにそう言ってしまったら、そういう前提の下で社会生活してるんだったら、一刻も早く全部自分の脳の神経結合に翻訳しておかないと詐欺ってことになりませんか？

今は、情報もみんなお金に換算できる時代なんです。あなたも情報なの。しかも、脳髄という極めて限られた場所にある、十の十乗くらいしかない小っちゃな情報。その情報にあなたの上司はお金出してるのです。毎月給料振り込まれてますでしょ？ アレ、アレ。あなたは嘘を吐くいていない、擬物を売りつけていないって言い切れます？ 確かに絶対バレない嘘だとは言える（すでにあなたが嘘を吐いているという前提の下で会話を進めるあやしげなわたくしなのでした）、頭部を開く手術っていっぱい資格持ったお医者さんがさらにいっぱい資格を申請なきゃ出来ないわけですから。お金の力じゃ無理ですよ。でももし仮に、誰か、例えば宇宙人が現れて、あなたの時間を止める魔法の麻醉銃を撃ったとしよう。ところでカントは「宇宙人は存在する」と言っています。宇宙人はあなたの頭部を魔法のメスで開く。ついさっきまであなたが持っていた情動的な意味ってのは電気的な解釈項に過ぎないから消えて、もうない。あなたというシステムの表象、リプレゼンテーションだけが手術台の上に晒されている。言い忘れたけど、この宇宙人は地球のことはついでさっきまで何も知らなかったの。地球の進化系を知らないどころか、その前提としてダーウィンという引き籠りの本すらまだ読んでいないわけです。だから、あなたの身体的特徴、若々しさとか、格好よさとか、そういうのは分からない。でも SFの世界と違って、この宇宙人は絶望的に頭がいいから、見慣れない地球人の體とかを見て嗤ったりしないわけです。宇宙人の前には、目的もまだ分からない、皮膚によって外界と区別され終わったばかりの単独の要素、おそらくエクस्पレーションを欠いたステートメントがあります。そして、宇宙人はそのステートメントを美しいと感じたのです。何で美しいんだらう。もう

一つ、言い忘れたのですが、その宇宙人が持つてゐる価値基準って言うのは真善美でいうと、美だけなのね。他の二つも昔はあったんだろうけど、それらが退化してもう痕跡が残ってないくらい、進化してゐるの。

この話、面白い？ 正直言つて、わたくしは面白くないと思う。出足はでも、こんなものかな。但し、まだフォアブレイも始めておりませんのよ。だから、もしよかったら、時間いっぱい最後まで、ゆっくりしていましてね。

さて、話は飛んで、宇宙人は頭頂葉と全頭葉の区別もついてない状態から長い時間をかけてついにあなたというシステム及び、もっと重要なことだけど、あなたが此処にいること、その目的や前後の長い長い文脈を解読し終わりました。宇宙人は満足の面持ちで、魔法の糸で傷口を縫合します。どうやら、あなたに次の一瞬を与えて、あるいは神経系から読み取った限りでの情報を元に計算して、つい前の一瞬の電気信号の状態を再構成して、あなたを次の状態に遷らせようとしています。長い長い、しかも美的原則のみに基づく計算の結果、宇宙人はあなたを見捨てなかった。あなたの次の状態を実験して、計算上のデータと比較しさらに満足を深めたがっている。

そう、もう分かった。あなたはついさっきから、眼に見えない宇宙人に観察されてゐる。ただの思考実験だって言い切りたい？ 勿論、そうだよ、これはただの思考実験。だけどわたくしと関わりたい人には絶対一度経験して戴く実験なのです。私と同じくらい美しくなつて戴くために。怖くないよ。実験室にはよく磨かれた試験管と真新しい分銅しかない。後は、存在の泉から湧き出る水。ひたすら、水。エウポリアつてご存知？ そうですね、まだ辞書には載っていないけれど今の日本語で「きもちいい」って単語が持つてゐるような意味です。私のお仕事はお客さんをそこに導くことなのでございます。事務的かつコンヴィニエンスに。お客さんみたいに清潔で格好いい人だけじゃなくて、ほら、例えばその筋の方とかも来るわけ。だから、こういう思考の消毒実験がコースに入っているの。だって、そういうルールを設けとかなないと、私が汚れちゃうじゃないですか、絶対。一回汚れちゃったら、壊れちゃったら、素敵なお客さんにだってもう二度と遊んで貰えなくなる。分かつてくださいね。

あなたは試験管の中にいて、あなたの思考の全ては、逐一、美以外の価値基準を持つていない宇宙人に観察されてゐるのです。ちょうど、娯楽目的だけに書かれたフィクションの登場人物と同じ状態って言うのと怖くないでしょうか。ピカピカの宇宙人を、古着の着たきり雀の日雇いシナリオ・ライターに置き換えてみてください。モデルがあつたほうが想像し易い？

じゃあ、例えば、此処に一人の登場人物がいます。男でもまったく問題ないんだけど、その人物はどちらかというと女です。男より女のほうがどちらかというと美しいという社会通念に従つたまです。そして彼女はとても若く（と、ト書きに書いてある）、すんごく可愛い（と、ト書きに書いてある）。安易かな、判り易過ぎて逆に想像し難い？ いいですか、これくらい判り易くないとわたくしもみたいなコンビニ稼業は成り立たないのです。この後ちよつとずつ具體例を出して行きますから、その中で彼女の若さと可愛さを想像してください。あなた好みに想像していいですよ。そのことに罪悪感を感じますか？

あなたにもし現実の奥さんとか、彼女さんとかいるんだったら、気にするのは変ですよ。此処は完全なフィクションの世界なのですから、此処で見たものを現実のあなたのパートナーの體に投影しても論理的矛盾はまったく起こらないのでございます。どうやらあなたはまだフィクションに慣れてないみたいですね。毎日朝から晩まで仕事じゃ無理もないわ。だけど、これが中々時々役に立ったりするものなのです。もし役に立たなかった場合でも邪魔にはなりません。だって虚構なんですから。ね。あなたが私に高いお金を払つたってことを忘れれば、全部虚構なわけでございます。貰つたお金のことは覚えてなきゃ駄目で

すけど、払ったお金は出来るだけ早く忘れたほうがいい。わたくしが申しますのも盗人猛々しいって感じですけど。申し訳ございません、わたくしにも生活があるのでございます。お金が必要なのです。しかも買うのはコスメとか洋服じゃなくて、スーパーとか家賃とか、ね。勿論パチンコもスロットも興味ございませんし、やり方知らないですし。

むしろ、夢を見なきゃ駄目ですよ。あなたのパートナーのために、夢を見ることは実はあなたの義務だったのです！ 教育委員会大絶賛！ だから、以下に出てくる主要登場人物、仮に、鈴木高音と書いておきましょうか。後でもっと可愛い名前を思い附くかもしれないけれど、名前なんて正規表現マッチで何時でも書き換えられますし。高音と書いて、タカネと読みます。その彼女が不自然に可愛過ぎても、怒らないでください。

あなたの彼女を侮辱してるわけじゃないのでございます。むしろあなたの彼女を大絶賛しているのです。お判りかしら、それがフィクションってことです。フィクションを信じるのは、いいことです。いけないのは、フィクションと間違えてこの実在世界上にターミナルとして表出している、あるいは時間的、空間的にプロットできる実在を信じてしまうことです。例えば、フィクション内の世界と隣接しているシナリオ・ライターの體、例えばこの文章を書いている若くて可愛い脚本家の像を信じてしまったんだったら、失礼ですが、ちょっと不毛かもしれません。もしそれがあなたの友達の友達とか、實際飲みに誘ったり出来るくらいの間柄なら信じてみたらよろしいんじゃないでしょうか。そうじゃないなら、時間とお金の無駄ですよ。って言うか、その前に彼女さんに失礼です。フィクションに登場する團體や人物にはかなり具體的なモデルがあります、あなた自身を含めまして、あなたの周囲にいるそれとは絶対関係ありません。特に後半に出てくる編輯プロダクション辺りが偶然何者かに似てしまっていないかという危惧があります。あれのモデルはある会計事務会社でございました。語り手がそういう注意するのは莫迦莫迦しいのかもしれないませんが、わたくし自身が本やインターネットを読んでいる、関係妄想と申しますのでしょうか、類似障害と申しますのでしょうか、よくそういう下らない錯覺をしてしまう人なので、念のために。

タカネに限らず、フィクションの登場人物は概してみんな引込み思案で臆病なんです。だから、彼女にお引き合わせする前にこんなに色々と注意事項を申し上げなければなりませんでした。あれ、もしか、わたくし自身がずっとお客さんのお相手するって思っておられました？ フッフ、真打ちはこれから出てくるのですよ。

さて、タカネとは一體何者なのでしょう。

かつて映画監督北野武が行なった定義に従うなら、タカネちゃんは女優であります。ちなみに北野武は女優というクラスに関して、それに、「自ら女優になることを望んだものではない」と、アポレティックな定義を行っているのです。どういうことかお判りでしょうか。模範的近代国家は確か、全ての個人に、自由意志及び幸福の追求の権利を認めていますよね。後者に従うと、女優が女優であるためには、女優であるその瞬間は少なくとも、自ら女優であることを意思していなければなりません。結論。どんな国にも、それが国連に加盟してるみたいな国であれば、その国民と女優との共集合は空集合になります。ブリーアンなら、偽です。C言語なら、0です。ところが北野武が間違っていたのか、あるいはルソーが間違っていたのか、この世界には女優が沢山いらっしゃいます。しかし、自らの本質を「演技するもの」と主張することは、確かにちょっと近代的ではないかもしれません。

分らない。現実世界のことは法律家に相談してください。兎に角、私の虚構世界では、女優であるのは、つまり自ら役者であることを望んでいないのは、鈴木高音だけです。それはプロット上わたくしが彼女に自由意志を附与しなかったからです。兎に角、タカネは自由意志を持っていない。そして、タカネは女優。タカネの行動はすべて物語の外からわ

たくしが決定する。タカネは虐められっ子。都内は四ツ谷の有名私立の女子高に通っていて、プライドが高い。すんごく可愛いから何となく彼氏はいるけど、本人には余りその自覚がありません。彼氏の性格どころか、普段の行情すらまったく知らない。言われるがままにデートはしてるけど、自分が夢見る「恋愛」はそれとは別の次元に存在すると信じて疑っていいない。女優だから、現実には絶対的に現実じゃないわけです。

エウポリアの物語に相応しく、最初の舞台設定はゴールデン・ウィーク。不況をものともしない女の子とファッションの街路、渋谷。

天候は勿論、現実にはありえないくらい激しく晴れ渡っている――。

どんなフィクションでも、ようは思考実験です。試してみても駄目なら捨てればいいし、現実とマジでできそうなところがあればそこだけ切って利用すればいい。法律的にも、多分、大丈夫。

余計な前置きはこれくらいにしましょう。では、いよいよ、タカネの頭脳の中に視点を移すことにします。

混み合ったハチ公口をやっとの思いで脱出した人たちは、虹を型どったと思しきカラフルな壁面を背景に、センター街の方向に流れて行きます。壁面の下部は腰かけられるようになっており、壁はオブジェであるらしく、月と太陽の積もりでしょうか、右に銀、左に金の円盤を配し、一面に十五から二十の信楽焼きの狗が埋め込まれておりました。此処、北口前が一九九〇年に「ハチ公広場」と改名された折りに、ルイ・フランセンが北原龍太郎の原画を元に制作したこのレリーフは正式名称を「ハチ公ファミリー」と謂うのです。みんなの新しい「待ち合わせ場所」としてJRが企画したこのベンチ付きオブジェは一部の東京人には壁ハチと呼び慣わされていますが、待ち人によって自然発生的にラッシュ時の山手線車内を延長したかのような鈴生り状態が形成されるハチ公銅像附近と較べると閑散としたものであり、今も、人口二、三人を数える程度なものでした。

改札が吐き出した流動體の中で一つ、黒い頭が歩速を落とし、かの壁ハチの方に逸れて立ち止まりました。三メートルほど離れたところに座っていた高校生くらいの少女が立ち上がり、キュッと嗤って胸元で手を振りました。何でもない白いワンピースが地味な透明のサンダルに映えてパリスに拐われる直前のアプロディテを彷彿させるのは、洋服の一つ一つのパーツがジャストサイズだからでしょうか。もしくは、パーマメントも染色も施さられていないその髪に、リンスやトリートメントのケアに依るのではない生來の線の細さからくる光沢と軽さがあるからでしょうか。その髪の繊細さがちょっと眠たそうな目元を隠して、鼻筋と口元の繊細な造型美を引き立てていました。兎に角、タカネは女優という肩書に恥じないだけの優美な外貌を備えていたのです。――然り、その少女がわたくしどもの主人公、スズキタカネ嬢なのであります。

昨今の若い女の子の一員であるとは思えぬ厭味のないタカネの笑顔を愉しむために、わたくしどもはこの姿勢のまま彼女を氷結させて少しく無駄話を続けることにしましょうか。こんな風に邪気のない余裕に充ちた微笑みに出会うことは今では珍しい出来事となりました。

タカネが女優として名を馳せるのは、正確にはそれから數年後、高校を卒業して仕事のスケジュールにあわせた生活を始めてからのことでした。当時の彼女はファッション雑誌の読者モデルでした。それにしても、日本で有名な女の子のトップ5に入っていたこともまた事実なものでした。然るに知名度への言及は彼女のレヴェルを伝えられません。彼女は紛れもなく、もっとも好感度の高い日本人でした。同世代の女の子だけが彼女を崇拜していたわけではありません。男の子にも愛されていたし、大人からも小さな子供からも、老人

からも愛されていました。彼女は現在のメディアにおける愛の寓意だったのであります。

タカネにアイリからその電話があったのは半年前のことでした。もしかすると、キヨミだったかもしれません。わたくしは直接その場に居合わせなかったため詳細は判然としないのですが、タカネの親友の一人がその電話をかけたという事実には確信を持っています。

「来週の日曜日、空いてる？ 私ね、勝手にあなた（タカネ）の寫眞を***（わたくしどももよく知っている若者向けの女性ファッション誌）に送ったんだ。一次予選、通過だって」

次の瞬間、タカネは側にいた母親に、その日の予定を確認しました。母親と買いものに行く約束をしていたのです。

「日曜日？ ごめんなさい！ 活け花教室の先生がなさる展示会、お友達に誘われちゃってるの。お母さん、ほら、断るの苦手でしょう。お買物は次の日曜日に延期しよう」

手を合わせて泣き聲を出した哀れっぽい母親を見てタカネは頷き、電話口に答えたのでした。

「大丈夫だよ。勝手に応募なんてされると、困るんだけどな。私は、本当にモデルになりたいと夢見ている女の子たちと椅子取りゲームなんてしたくない。でも、もう応募しちゃったのなら、行かないと審査の人達に失礼よね」

最終審査が行われた当日の夜、勿論タカネは全国から集まった並み居る美少女を競り落として見事審査に入選したのですが、彼女は七時のニュースを見ながら冷えたビールのジョッキを傾けるパリン（四十一歳大手地方銀行恵比寿支店勤務）に、次のような証言をしたことが知られているのです。

「私はあの中で一番ブスだったわ。でも御洋服の引立てかたを知ってたの」

これはおそらく彼女の本音ではありませんでした。そしてわたくしどもにはそう推測するに足る理由があるのです。と言うのも、タカネはまさに同じ日の深夜、二階自室の寢台で髪を乾かしながら、二ヶ月前から交際中のタイキ——今、壁ハチでタカネを俟たせていた少年のことですね——に携帯電話をかけたのですが、そのとき彼女の口から、若い恋人同士の親密さがそうさせたのだろうか、四時間足らず前にリヴィングで肉親に対して述べた控えめな見解と競合する言葉が聞かれたのでした。

「日本のコンクールで一番になったって、嬉しいとかそういう実感はないの」タカネは素っ気なく言いました。「これが***じゃなくてV O G U EとかE L L Eだったら、超スマイルものなんだけど。勿論、日本版じゃない本物の方ね。ああ、アメリカに行きたいな」

「日本はいい国だし、アメリカなんかより断然お洒落だよ。他のアジアとかアフリカの国と較べてみなよ」と答えたタイキにわたくしどもは同調しなければならぬでしょうか。

心に留めておいて戴きたいのは、それが傍聴者のいない、同世代の者同士の親密な電話の会話だということです。そうした状況ではこのような率直な軽口が叩かれることが稀ではないのであり、新聞やテレビの報道の網からはこぼれるそうした社会の陰部を細密描寫することは物語芸術の役割の一つなのです、なんて一々言い訳するのは子供じみているかもしれません。此処でわたくしは二百年前のフランスの小説の『作者の聲』を模倣している。タカネ達登場人物は、ギリシャ叙事詩と推理小説のイミテーションです。わたくしどもは「文學」のイミテーションです。ファッションは模倣すること見附けたり——なんてフリーズも、二十世紀後半のポストモダンの模倣の再帰。わたくしどもはただ模倣しているのではありません。わたくしどもの模倣は、模倣の模倣なのです。一度限りの模倣と入れ子の模倣の間には、後者の持つ無限反復への可能性という点に最も顕著な差異があるのですが、この違いが根本的な亀裂をもたらすのです。フィクションだろうと現実の生存だろうと関係ありません。わたくしどもにとって重要なのは、視点を回転させ、重ね合わせる

際の支点の決定——この世界の何処にフォルムを見出すか。フォルムを形成する境界線をどれだけの強度で引くことが出来るか、目の前に立ち塞がった壁の何処にこの爪を食い込ませるかということなのです。

タカネは彼のパセティックな反論には答えず、無言のまま電話口で微笑むのみでした。

だがしかし、タカネの叶わないはずの夢が叶って戸惑う自分の姿をカーネギー・ホールでの舞台挨拶のステージに見出すのは、それからたった数ヵ月後のことなのでした。マイクを渡されたタカネは打ち合わせを無視し、彼女が主役として抜擢された来シーズンのミュージカルの観客数千人を前にして流暢な英語で言いました。

「（原文英語）女優になってこの舞台に立つのが私の夢でした。夢を追いかけるのは本当に素晴らしいこと。でも、実現することによって大切なものをそれより沢山失ってしまうような夢であるんですね。たった今、私が実現した夢もそうだったようです。私にはニホンに大切な家族がいます。友人と、何より大切なボーイフレンドがいます。この夢は、夢のままにしておかせては戴けませんか。私は女優のように美しいと言われたかった。一流女優と同じだけの『価値』が慾しかった。ですが、女優の仕事がしたかったわけじゃないみたいなのです。ごめんなさい。皆さん、ごめんなさい！ 私、日本に帰ります！」と絶唱してマイクをステージに置き、一歩前に進み出て満場の拍手喝采を浴びるタカネ。

背後でタカネの相手役だったあるロック・バンドのヴォーカリストが不満そうに喚いているのが見えます。彼は兼ねてから、このミュージカルを山車にして「あのニホンのあいどるを狙う」とタブロイド誌で発言していたのでした。微笑み一つで彼を宥めるタカネ。

ちょうどその頃、外国嫌いだったはずのタイキはまとめた荷物と共に「ニ空港に降り立ったところだった。心を入れ換えてタカネの夢の実現を喜び、彼女と共にアメリカに移住する決心をしたタイキ。

普通の女の子に戻り、日本の空港に降り立つタカネ。出迎えにタイキがいないのに気づくタカネ。

数日後にアメリカから帰って来るタイキ。それを空港で迎えて微笑むタカネ。

「私、普通の女の子だよ。ごめんね、普通の女の子になっちゃった」と涙ぐむタカネ。

そんなタカネを力強く抱きしめるタイキ。

「俺が惚れたのはタカネ、君だよ。特別な女優やモデルでもなく、勿論、誰でもいい普通の女の子でもない、君自身なんだよ。もし俺でよかったら、結婚しよう」

しゃくり上げて聲も出せず、満面の笑顔で何度も頷くタカネ。何度も、何度も――。

あれ、物語が。

失敗。ちょっとアドリブ入れ過ぎたかな。盛り上げようとしたつもりが、裏目に出ちゃった。申し訳ございません！ 何分わたくし、語り手になったのはこれが始めて。かつて舞台女優なんて仕事をさせて戴いてたこともございますが、現在はしがない駆け出し脚本家として、裏方に徹している者なのでございます。本当はもっと長いんですよ。そりゃあもう、はらはらドキドキの物語だったはずなんです。もう一回最初からやり直しますね。お願い、帰らないで。ではいいよ、タカネの脳髓の中に視点を移すことにします。今度は台本通りに進めることに致しましょう。

超有名美人女優としての生活に、正直なところ、タカネは頗る疲れていました。どんなに虚勢を張って気焰を構成してみても彼女にはそれを隠し切ることが出来ないようでありました。

タカネの髪型は猫の鬚のように左右に拡がった夢見る聖子ちゃんカットでした。彼女はタレントでした。表情が眠く見えるのは一重瞼のせいですが、彼女はそれを一重に近い奥二重と思い込んでいました。哀しいことに一重に似合うお化粧や洋服は二重よりずっと幅が狭くなるので、タカネはまだ、自分の本当の魅力を引き出す方法を探し出せずにいるようでした。

射幸心を噛み締めてふり仰げば、蒼白い天蓋となって高昇した奇跡の鳥の囀りは羽音となって閉塞状態に陥ったかと思うとまた等角螺旋を描いて渦巻く水音となりタカネと大地とを籠むのでした。

――連休末日は果然粋を越えた人通りでありました。

平日の早朝や若しくは終電真際に訪れると街並みの意外に清潔なところが見得できました。うが、原宿は休日白日に行路すべき所ではないのです。渋谷の奥底から表参道に抜けるキャット・ストリート。タカネならきっと入ったことがないだろうものの、満員のサウナの如き人混みという想像して戴けるでしょうか。いずれにせよ、ダンスフロアにも古着のジーンズにも掻い撫での方心しかないわたくしども文科人間には酷のない都市ではございます。

しかし、タカネを勝手気儘に包む人々の澱みは草臥れた蛹であり、幾千の蟻となった汗ばみに蝕まれるような熱気。外から見ているに過ぎないこちらまで嬲々といたします。テレビの中のドラマでもないし、ファッション雑誌の撮影でもな

てみれば背景人物たちの斯く在る行為の無軌道は当たり前なのでしょうか。みんな一般人なのですから。

明治通りは神宮前の交差点。向かいのコンドマニア上から巨大な土屋アンナが嘲笑するかのように信号待ちの庶民を見下ろしており、涼やかに煙る樺並木と二頭の大きな石灯笼を挟んで、右手の頭上ではL A F O R E T の七文字が透かし彫りになった円筒が走馬燈のように回転しておりました。明治神宮の門前町の名残を残した区画に意趣を尽くした高級洋品店が林立する此処の風景は面白く、裏ビデオ屋や風俗が軒を連ねる裏路地からホストクラブとキャバクラのテナントが集中する区役所通りに抜ける、歌舞伎町でもっともコアな地区に突如折り目正しき新宿区役所の庁舎が出現する界限と並んで、東京でもっともわたくしの氣に入るトポスの一つです。関東大震災後、一九二七年に建築された同潤会アパートは今ではもう、數十年のサイクルで枯れていく灌木のように鉄筋コンクリートが老朽化して景觀から消えてしまったが、そのたった七年前に平安前期の流造を引用して創建されたサンクチュアリの景觀は悠久の針葉樹林のように生き延びようとしており、根元には下草の如く次々と新しい店舗が建っては身を潜め、數年後にはその名前を思い出すことすら出来ず――。

タカネはずっと黙って手を繋いでいるタイキの顔をふと見て、プツと噴出しますと、「何ー、どうしたのー」

タイキが怪訝そうに、屈託のない造作の顔を歪めるのでしたが、表情が彼の屈託のない氣分を反映しているというわけにはあらず、彼の顔には元々屈託がないのでありました。この無邪氣な屈託のなさに安らぎのようなものを見出せた季節も束の間、「おしゃれな彼でない」という理不尽な理由だけで彼を見下すタカネの矜持に憤慨したこともあったけれど、しかるに、彼がこの屈託のない表情のままでグラビア・アイドルにファンレターを出したり、恋愛シミュレーションゲームの攻略法をググったりする姿を頻繁に目撃するうち、わたくしも次第にタカネの意見に同調せざるを得なくなったのでした。

わたくしどもは多かれ少なかれ、デートをするのは恋人に快樂をあたえるため、労働するのはお金を儲けて遊ぶためと、娯楽という言い訳をしながら他者と関係しております。特に生まれながらの女優であるタカネのような人物にとってはそれこそが唯一の道德なの

であり、従って、自分の快樂中枢にまったく刺激を与えないまま此処に存在しているタイキは怪しげな右翼の街頭演説と同じ位、悍ましい存在なのでありました。

タカネがタイキと知り合ったのは一年余り前、付き合い始めたのは三ヶ月くらい前。でも、未だに一度たりともタカネがタイキのことを好きだったことはないし、きっかけが何だったのか、何時だったのかも定かではないのだから付き合い始めたという用語弊があるかもしれないが、少なくともタイキは付き合い合っていると認めていました。俺の気持ち分かってくれてありがとう、あんどき頷いてくれてすんげえ嬉しかった、とか、そんな記憶ないんですけど、とタカネは思うのでした。が勿論口には出しません。これはいうなればボランティアなのだ、そしてタカネは、哀れな障害者を介護するために神様に遣わされた白衣の天使なのだ、と一人で納得。ちょうど今日、上下白っぽいね。白黒のストライプのワンピースにアイヴォリのショート・パンツ。タカネは路上系のファッション雑誌に載っていた服しか買わないようでした。折角東京に住んでて服屋さんが足伸ばし圏内にあるわけだし、と考えてつ本当は、自分で考えるのが面倒臭いからであつたかもしれない。ファッションなんて考えちゃ駄目なんだよ。流行に盲従するのみ。で、タカネの服はそれでいいとして、タイキの服はこれはどうなんすかって話でした。でも文句なんてない。白衣の天使はめげちゃいけないってこと、とタカネは深呼吸をしてやんわりと穏やかな天使の表情を作ってみました。私はいい人。こんな男と手を繋いで歩いているの、それはボランティア活動、と周りにアピール。みんなに見せびらかすためにいい男とばっか付き合い合う女って、さもないかしら。傲慢というか。ホモ・サピエンスを人為選択するべきではないわ、などと考えながら、タカネは周囲を行きかう人混みの群集に自己を同化し、タイキ一人を色分けして孤立化しようとしているのでしょうか。

違ふよ。

タカネはそこに境界線を引いてるわけではないようです。むしろ孤立しているのはタカネ自身の方で、その見地からしてタイキはグレーの群集に同類項で括られて溶け込んでしまふ。周囲のグレーに対して、タカネの體は透き通ったグリーン。限りなく透明に近いブルー。淡く発光する螢の透明なレモン・イエロー。タカネは、私は違う人種って確信していたのです。実際、途轍もなく具象的な、だけど奇妙な確信が彼女の心にはあつたのです。

交差点の信号が青に変わって、動き始めた人の群れに混ざって二人も歩き出そうとしたとき、タカネのタイキと手を繋いでるのは逆側のシオルダー・バッグを掛けているほうの肩がすっと軽くなったのです。人混みに紛れて視界の片隅に何者かのナイフが燐き、肩紐をすっと切り裂いて通り過ぎたのでした。シオルダー・バッグ本體も一緒に。肩紐が新體操のリボンみたいにフワッと一回転舞ってタカネの肩を離れました。タカネが立止まり、

「どうした」とタイキ。

「バッグが」

「どうしたの」

「掏られたみたい」タカネがバッグが消えていったほうを向きました。誰が掏ったのかも分からない、人が多過ぎるのです。「なんだけど――」

タイキが眉間に皺を寄せました。

「何やってんだよ」

「だってさあ」

「あんなでかいもの、掏られてんじゃないよ。ぼっとしてた？　で、何か大事なもん入ってたの？」

タカネは時々、タイキを怖いと思いました。せつついたペンギンみたいな喋り方、しかも無表情、というよりも表情が作れない人みたい、とタカネは内心思っているのです。

「とりあえず、携帯くらい」

「じゃあ警察届けなきゃね」

「どうしよ」

「どうしよもないんじゃん」タイキが鬱陶しそうに鼻で息を吐きました。「誰にやられたか分かんないんでしょ？ きっと出てこないよ。行くよ」

「でも——」と愚図つくタカネの手を引いてタイキが先に進もうとしたとき、背後で、ヒャ、という数人の女の子の叫び聲が聞こえて人の流れが部分的に止まり、何人かの通行人がそっちを振り向いておりました。五メートルくらい離れた路上で円形に道が空いて、人垣が出来ているところを観察すると、喧嘩みたいですね。タカネがタイキの手を振り解いて見える位置まで移動し、タイキも後から附いて来ました。

野次馬の肩の間から身なりのいい金髪の若い男がキャスケットを被った男の頬を殴りつけるのが見えました。キャスケットの方が胸に抱きしめているのが自分のバッグであることにタカネが気づいて、タイキに、ねえ、とそれを示しました。キャスケットは凝っと俯いて立ちすくんでいます。金髪がさらにもう一発拳をこめかみの辺りに食い込ませると、キャスケットは脳震盪を起こしたらしくボクサーみたいに一瞬風に吹かれる感じで揺らめいて、二、三步前に蹠跟めきました。キャスケットの年齢はよく分からないし、表情も見えないのだが金髪のほうは二十六、七くらい、ひたすら肩で息をしています。堅気には見えない感じがですが、チンピラって言うよりホスト系——大して変わらないでしょうか。その金髪にキャスケットは襟元を掴んで引き寄せられ、膝蹴りを鳩尾にきめられてタカネのバッグを取り落とし、さらに足を払われて歩道に膝から崩れ落ちました。その顔や腹を、金髪がひたすら無言で蹴り上げています。「こえーよ」と野次馬の中の誰かの聲が聞こえました。次第に息が荒くなっていく金髪の蹴りが執拗にうつ伏せでもう動かないキャスケットを襲います。

「ヨ」と初めて金髪の口から聲が漏れ、軽く助走をつけて胸の辺りを蹴り上げられたキャスケットの體がゴロリと仰向けに裏返りました。キャスケットの顔は大変なことになっていました。鼻と口から大量の血液が流れ、唇は裂けて頬と瞼が紫に腫れ上がっています。

野次馬は一瞬凍りついて興味本位の見物から良識ある公衆の一人に一転し、金髪の残虐さへの告発とキャスケットの容貌の醜惡さへの嫌惡に紛々とし始め、低俗な見世物に引き寄せられたことを恥じるように、一人また一人と人通りの中に消えて行くのでした。タカネが傍にタイキがいなくなっているのに気づいて周囲を見回すと、彼も人混みに紛れて帰って行くのが見えました。タイキは振り返り、タカネと目が会うと気まずそうに手を振り、それでもそのままドンドン歩いて結局タカネを残して去ってしまったのでした。混乱するタカネでしたが、目の前に自分のシオルダー・バッグがあるため後を追うことが出来ません。頭の周りに無数の疑問符が飛び交います、意味不明……。

キャスケットはぐったりしています、どうやら死んではいないらしいのでした。息をしているのが分かりました。そして金髪は最早攻撃を止め、凝っと見ているのでした、タカネの方を。

「これ、あんたんだろ？」とバッグを指差して囁く。

「てへへ」

タカネもそう聲を出して笑顔を作って見せた。お手柄のワンちゃんみたいにかっこいいわけですが、ありがとうございます、とか言うべきなのでしょう。タカネは金髪とぐったり横たわったキャスケットを見比べました。金髪、あ、ちょっといい男とタカネは思い、その事実は否定することが出来ない性質のものでした。女優タカネも普通の女の子だってことでした。

タカネは恐る恐るキャスケットの傍に駆け寄って、落ちてたバッグを拾い上げ、パンパ

ン、と埃を払いました。

「拘られちゃった？」と、相変わらず笑顔の金髪はずっとタカネのことを見ているのです。タカネは頷きました。

「はぁ。そうだ、警察——」二人の足元にはキャスケットが転がっていて、未だに立てるうもない様子でした。「呼ばないほうがいいみたいですね。はは」

「逃げる？」金髪は悪戯っぽく（とても言いたいのでしょうか？　って感じで）嗤い、タカネの反応を俟つ仕草が演技っぽいのはこの人の普段の喋りからかたしてこうなのであるうか、って言うか、なれなれしいんすけど、私は共犯者じゃないっての、などと考えつつも、タカネは、「はぁ」とにっこり肩をすくめて頷いたのです。顔に傷一つなく服も乱れていない金髪と、ずたぼろのキャスケットとのこの対照は何でしょう。もしかして実は手がジンジン痛んだりするのかも、あんなに殴ったんだもの、などと推測しつつタカネは男の後について素早くその場を離れたのです。

「どころでさっき、キミ、連れいなかった？」男が振り向きました。

「あ、あれはいいんです。関係ない人ですから」きっぱり、一言。そうそう、ボランティア、ボランティア。

タカネはバッグを拘られ、その決定的瞬間をその人は見てたらしいのです。そこまではいいですね。で、犯人をリンチ、手打ち、酷刑私刑、そして引き回し、晒し首（……ナンデ？）、タイキが去る（……ナンデ？）、意味不明、これって不意打ちだよ、ナンパとかついてたこともないのに、これは例外的事態ってことで、と内言するタカネなのです。それにしてもこの男、お姫様（タカネ）を助けた正義の味方のつもりでもいるのでしょうか。私、許すわ、ブサイクじゃないから、などとタカネの思考回路は意味不明な回転を続けるのであります。

五分位歩いてタカネはあるカフェに連れ込まれました。別に高級感漂う現代的な珈琲店と言うわけではない、ただの大衆フランチイズ・カフェ、と言うかスタバでした。

エスプレッソ、二つ。

タカネの前に座った男は、明らかに仮そめに急ごしらえされた男であるようでした。少なくともこの時点ですでにタカネにはそんな予感がしたのです。

「もう大丈夫。けど手、痛いよ」

やっぱり痛かったのか、と納得してタカネは喉まででかかるありがとうをもう一度飲み込みました。不用意なことは言わない方が安全です。

「名前、聞いてなかったね」

タカネは肩をすくめました。

「歳は。何処から来たの」と男は一通り履歴を尋ねたいようでした。

「十七か。高校生。なるほどね」

男はイチドウリョウと名乗りました。胡散臭い名前、本名じゃなさそう、ホストなのでしょうか。これって営業活動の一環？　私を客に誘ってるわけ？　などと訝しましたが職業や歳をこちらからたずねるのも面倒臭い気がしたのでタカネはただ、はぁ、はぁ、と頷いていました。

「彼氏、いるの？」

「イマセン」再び断言。即答。

しかしまたタカネは逡巡するのです。恋人がいるかと聞かれていないと答える、これでは不用意に相手にチャンスを与えているみたいではないか、とは言えタイキを恋人と思われるのは癪でした。じゃあ、さっきのあいづは違うけど、他に恋人がいるというべきなのでしょう。それでも何となく、やっぱり嫌なのは何故でしょうか。やっぱり自分についてあう程度の男なんてこの世にいないから？　そんな感じなわけでした。

「物静かな、子なんだね」

タツミリヨウがついにその結論に辿り着きました。そう、私はね、とタカネは少し寂しい気分になって頷きました。

「はあ」

何時だって、誰だってそう、物静か、暗い、無口、大人しい、穏やか、温和、温順。そうですね、私はどうせ、でも、大人しい人は実は心の中ではお喋りなんだって何かの本で読んだんだけど、私は違う、とタカネは考えました。頭の中も、真っ白、空洞。月の砂漠とは私のこと、それはいいのですが、タカネは氣まずそうに眉根を歪めて気の効いたことを言ってみようとするのでした。

「面白い顔、だったね」ムム、違うなあ、そんな話題しか出てこないのです。「さっきの私のバッグ掏った人」

「氣持ち悪かった」

「いつもあんなこと、やってるんですか」

「まあね」

「やばいっすね」タカネが顔をしかめました。「ひと殺したこと、ある」

「それは、ない」と、普通の返答がかえってきました。「あれは仮りそめに急ごしらえされた人間だから大丈夫。マネキン人形なんだよ。本物の人間を殴ったことなんてないよ」

本当に何者か分かんないけど、何者か分かんない男とこうして話してるって状況はありだなどと思うタカネでした。

「ねえ。今夜オレんちこない？」

「いきなり何なんですか」

「うちね、ハムスター飼ってるんだ。これがもう可愛いんだ。見にきて欲しいなって思っ
て、って、ほら、よくある会話じゃない。ハムスター飼ってる人ってよくそういうこと言
わない？」

「でもこのシチュエーションではちょっと、唐突ですよ」タカネは汗を拭ってみせまし
た。

「じゃあさあ、ケータイ教えてよ」

キタキタ。予測通りの展開です。

「えー」嫌そうな顔を作っておきます。

男はまじまじとタカネの顔を見詰めて來ます。こいつ、よっぽど自分の顔に自信がある
んだな、そんな顔してる、と呟きながらタカネは仕方なく相手の顔を見ました。

あれ、何だか変な感じですが、此処で問題なのは「横」という関係概念が何を表すかです。
溶ける。溶けていく、光の中。男の顔が海になってあふれ出して來るのです。車が走って
います。〈窓〉の外の風景です。卓らしきものがあります。喫茶店。そうか、〈鏡〉です。
男の顔を見ていたんじゃない、タカネはその片方の瞳に注目していたのでした。瞳が鏡に
なっているのです。と言うことはあの真ん中に映っている洋服の布地はタカネのものに違
いない、じゃあ、その上で光っているあれは、タカネの顔に違い不大的のです。タカネの瞳
も歪面鏡になっているのでした。その瞳の中にまた男が映っています。合わせ鏡です。外
側から順番に、喫茶店、男、タカネ、男、タカネ、あ、次はまたタカネだ、次は男、タカ
ネ、男、次はどっちなのかわかりません。もう小さ過ぎてタカネの視力では見分けがつか
ないのでした。眼を凝らそうとした瞬間、全體がずれました。連続する入れ子状の人物像
のうちの一つ、ちょうど三番目のタカネが體を動かして立ち上がったのでした。

「ごめんなさい、トイレ」

そのままそう言って奥の方、レジの脇の化粧室に消えます。數十秒後に戻って來て元の

席に座りました。その次に、自分の顔を見ました。まだ口をつけてない珈琲のソーサーに添えた、スプーンの裏にそれは映っておりました。普通の顔。いつもの自分の顔。これと違って綺麗でもない――そんなの分かっている、スプーンの中でタカネが「窓」の方に目を背けると、外から鳥の叫びが聴こえました。

みんな、グレー。群集も、目の前の男も、もしかしたらタカネ自身も。タカネはむっつり黙り込んでしまうのです。

「ムリだよ」タカネは出しかけていた携帯を引っ込みました。「私、ちょっと、一般の人には――」

「一般？」タカネの口調が急に事務的な感じに変わったので、男はちょっと面食らいました。「一般で、俺？」

「そ。一般」

男は、で、あんたは誰なんだとでも言いたげな顔で、「君、高飛車って言われたことあるでしょう」

「私、いいこよ。私、タレントだけど、ねはいいこよ！」タカネは白けた感じの目で腕時計を確かめました。「ごめんなさい、私、ちょっと帰る。これから仕事だし」

お勘定もそのまま、上着だけ羽織ってスタバを後にしたタカネの心臓は実はバクバク動いていました。タカネが特別なわけではありません。特別なのはタカネの仕事。なのに、何でもみんなタカネに気を使うのでしょうか。タカネだって一人ぼっちにされたら寂しい、恋もすれば失恋もする、普通の女の子なのに。中學の頃は特定のグループの子としかつき合えなかったタカネでしたが、高校に入ってからには広範囲の友達と仲良くするようになっていました。無視したり、暴力振るったりしてくる友達とも。兎に角お仕事あるんだから、スゲジュールきついんだから、と呟きながらひたすらタカネは人混みを掻き分けて帰路を急ぎました。丁度、夕ご飯が出来ているはずの時間帯に家に帰り着きましたが、誰もいません。

リヴィングの電気をつけます。

自室に直行して寝台に體を投げ出すと、隣の母親の部屋から物音がしているのでした。

「お母さん、帰ってるの。ご飯は」

タカネは跳ね起きて暗い廊下に出ました。普段は父親の部屋で寝ているため虚ろであることが多い母親の部屋の扉から白熱灯の光が漏れていました。母親は鏡台に向かっているらしく、タカネは扉を押しました。

「ねえ、お母さん」

頭に無数のカーラーを附けた後ろ姿の母親の右手に、何か光る物がありました。コンピュータの部品、なんて言ったつけ、日本が沢山輸出しているらしい、あのムカデを平に押し潰したような形の集積回路の名前は。トランジスタだったでしょうか。母親はそのチップをカーラーの隙間から側頭部に差し込みました――。

「お母さん、何してるの。それ、今頭に入れたの、何」

「ん？ コレ？ DNA」鏡の方を向いたままで母親は事もなげにそう答えました。

「DNAって、だって、トランジスタだったよ」

「DNAなの」母親は断言して、「さあ、お夕食にしましょうね」と、カーラーを附けたままタカネを押し退けて部屋を出て行くのでした。残されたのは一人のタカネでした。あれがタカネの母親だったのでしょうか。タカネはその顔をよく見ませんでした。

タカネには小さい頃の記憶というのが欠けていました。タカネが生まれたのは東京ではありません。昔女優をやっていた未婚の母になったタカネの母親が子育てのために選んだ地は日本の最北端、南稚内だったのです。元女優は田舎町ですぐに次のアヴァンチュールの相手を見附けます。大手都市銀行に勤める会社員で、稚内支店に赴任中だったその鈴木

さんは後のタカネの「パリン」のことでした。二人の間にはタカネの妹として可愛い女の子が生まれました。タカネはその妹について、その臉が父親譲りのくっきりとした二重であることしか知りません。両親の悲しみとなるべく妹は生まれてすぐに死んだのでした。大好きなテレビを見ていたそうです。釧路岬の沖合いで太平洋プレートが北米プレートに滑り込もうとしてうっかり引かかった関係で北海道に地震が起こり、軽い地震だったらしいのだけれど、新婚の鈴木家ではテレビにまで地震対策が行き届いていなかったらしく、それは「歌のお姉さん」に見入るわれらがいたいけな赤ん坊の上に落下してその頭蓋骨を完膚なきまでに破砕したのでした。妹が女優になるのが夢だと言うくらいテレビが好きだったというのが自ら女優の経験がある母親のでっち上げでないとしたら、妹はもう赤ん坊ではなかったのかも知れませんが、その辺りの記憶がタカネには定かでないのでした。「タカネの妹は女優になるはずだった」、「タカネの妹は可愛らしい二重だった」と言うのはタカネにとって、母親の機嫌を損ねる度にその口から聞かされて覚え込まされた事実であるに過ぎないのでした。ただ、気になるのはタカネの幼少時の記憶の中に母親の抜け殻のそれが二、三、映像として含まれていることの方です。それが抜け殻である、しかも母親のものであると、何故自分に分かったのかについての記憶はタカネに欠けていました。兎に角そのことをタカネは思い出していました。

母親のDNAが今見たようにICチップだとしたら、彼女が元々仮そめに急ごしらえされた人間である可能性は否定できないのではないのでしょうか。だとしたら、タカネの家族設定と自分自身についての記憶も紛い物の模造品なのでしょうか。

タカネは考えるのを諦めて一階に下りました。そういう難しい問題より空腹の方を優先するタイプの女の子だったからでした。

テレビは殺人事件のニュース特集を放送していました。若く有能な編集者が、彼の企画した文学賞の第一回受賞者に殺害されてしまったという痛ましい事件です。受賞者は川本菊という精神不安定の少女で、罪状の判断は専門家による精神鑑定の結果に委ねられている、というアナウンスの背後で今日行なわれた編集者の告別式の映像が流れています。信頼を売る職業である編集者らしく、告別式には多くの人が集まっていました。異體が発見されたビルの宿直室には〈窓〉が二つあるのですが、犯人の少女がそのどちらから忍び込んだかも明白ではないようでした。明らかに殺害はどちらかの〈窓〉から侵入して決行されているのですから、少女は嘘を吐いて犯行を偽証しようとしているか、心身阻喪に陥っているのです。

「どうでもいいことで人の命を奪う事件が多いわね、最近」と、背中を向けて台所で冷凍食品を順に解答している母親が言いました。

「可愛そうだね、折角、受賞させて上げた人に殺されるなんて」とタカネも言いました。

ユイが強姦されたって話を聞いたのは次の日の放課後でした。

五限の授業が終わってみんなが三々五々鞆を抱えて帰る中、アイリが、ちょっと、とタカネを呼び止めたのでした。

「今日昼さ、タカネの携帯から電話あったんだけど」

タカネは、あ、と口籠りました。前日タカネは掏摸から取り返したシオルダー・バッグをうっかりスタバに置いて来てしまい、携帯もその中に入っているはずでした。きっとあのイチドウリヨウとかいう男がそれを持っていて、着歴か何かでアイリの番号を見つけてとりあえず掛けてみたってことでしょう。じゃあ、昼掛かってきたときに教えてくれればいいのに。わざわざ放課後まで俟ったアイリの魂胆は見え透いていました。

「ねえ。あれ、誰？」

黙って俯くタカネにアイリは言葉を重るのでした。

「預かってるって、バッグ。『あ、あの、タカネさんのお友達ですか？ 実は、昨日タカネさんと一緒にいたものなんですけど、その、タカネさん、バッグを忘れられて……』」アイリは淡々とそう口真似しながら、「バッグを」のどこかを強調して、やたらと引き伸ばして発音した。「誰だろう。タイキじゃ、なかったけど」

タカネはそれを見無視して、「バッグ、返してくれるって？」と訊ねました。

「向こうの電話番号、言ってた。『タカネさんの方から連絡ください』だって」

「その番号、教えてよ」

「やだな。どうしようかな」

アイリは素知らぬ顔でタカネから目を逸らし、そう言いました。そこに鞆を肩に背負ったキヨミが寄って来ました。

「よ。何してる？」

長い髪にロングロッドのパーマをあてているアイリに対してキヨミの頭はショート。教室にるのはすでに三人だけでした。

近くの机に座ったキヨミに、アイリが事の次第を説明しました。

厭な展開でした。さっさと帰ればよかったと、タカネは思うのでした。しかし今回はバッグのことがありました。いずれこうなる運命です。

「で、此処に向こうが言った電話番号をメモったわけだけど」とアイリがプリントの切れ端を取り出しました。一同が数秒沈黙した後、よせばいいのにタカネがそれに思わず手を伸ばした瞬間、アイリがその足を払い、タカネは派手に机や椅子を倒して床に突っ伏しました。

「そうだよ。ただで渡しちゃいけない。タイキ君に悪いもの」と、腕を組んだキヨミの無関心な声。こいつらは、自分にボーイフレンドがいることを嫉んでこういう陰湿なことをし続けるのだろうか、とタカネは考えるのでした。でも箱入りのお嬢様が通うので有名な女子高とはいえ彼氏がいる子ならうちのクラスにだって他にも何人かいるわけだし、第一タイキなんて嫉んだりやかんだりする対象には程遠いのです。むしろ逆に、タイキみたいなレヴェルの低い男と付き合う自分のプライドの安さに掣肘を加えているつもりなのでしょうか。だとしたら「ボランティア」の意義を分かっている、とタカネは思うのでした。おそらく何も考えていないというのが真理なのでしょうが、他人の行動や態度の裏に安易な意図や物語を想定しようとしてしまうのが人間の常ってものです。そこから多分、妄想や狂気が始まるのです。

モゾモゾと起き上がってスカートを払ったタカネは、イジメラレッコはこの世の華って、誰かの言葉を思い浮かべました。そのタカネの膝を後ろからゆっくりアイリが蹴りつけて、倒れ込んだ椅子の背凭れが腹に突き刺さり、間拔けな聲を出して再び顔から床に落下するのです。不意に目頭がジワリと温くなったと思うと、見る見る涙が砂埃の堆積した床を濡らしました。

暫くアイリとキヨミは無言で、どんな表情をしているのかも分からないのでした。キヨミが込み上げてきた空笑を抑えきれずにくつくつと小さく肩を震わせ、「立ちなさいよ」と聲をかけました。それがタカネには命令に等しいのです。俯いて膝をつき、椅子に手をかけて起き上がるのでした。言いなり。優柔不断で意志薄弱、悪い癖だと思うけど、これが一番楽なのです。無言で液體噴流のように他人の言葉に服従している限り、タカネは何も考えなくていいのです。

今度はキヨミが、「何で普通に立ってるのよ」と、机に座ったまま腹を蹴り飛ばしました。そんなに強い蹴りだったわけでもないに関わらず、タカネはふらっと蹠踉めいて後ろの机に倒れこみ、尻餅について白い下着がもろに露わになりました。惨めで、かなり哀れ

を誘う姿勢をとっているのがタカネ自身にも分かりました。ロバート・キャパが此処にいたら喜んで被寫體にしそうな感じ、崩れ落ちる兵士。タカネは内心北叟笑みました。タカネの勝ち。スカートは花弁、下着は花蕊なのでした。

その下着を見下ろして溜息を吐き、キヨミが促しました。

「まあいいわ。教えて上げましょうよ」

で、アイリが無言でプリントの切れ端をタカネの目の前に投げ出しました。タカネはそれを掴み取り、むすっと起き上がって自分の席に戻り、鞆に無造作にしまつて教室を出ようとなりました。

「ちょっと俟ってよ。ありがとも言わずに帰る気なの」

後ろからキヨミにそう投げつけられて、タカネはびくと立止まりました。

「やっぱりね、タカネって間違ってるのよ、何か」キヨミは静かにそう言いながらゆっくり教室の前に歩き、先生の机の引き出しを開けてホッチキスを取り出し、それを持ってタカネに近づきました。「腕出しなさいよ。制裁よ」

動こうとしないタカネの二の腕を後ろから掴み上げて、キヨミは無理やりホッチキスの針を押し付けました。鈍い銀色の金具がそこに刺さり、二つの血の球が膨らんではじけ、筋になって肘の方に流れました。表情なく、それを眺めているうちにタカネの中で何かが壊れました。

「やめて」針を毫り取ってタカネが上擦った聲で囁きました。「女優の大事な肌に傷つけないでよ」

キヨミが後退りました。「タカネの目がイッてるよ……」

猫の鳴き聲の着信音でアイリが鞆の中から携帯を取り出して耳にあて、「ユイ？ 今日学校どうしたの」と言いました。

タカネがふっと胸を撫で下ろし、場の雰囲気が溶解しました。もし学校を休んだユイが来てたら、タカネは三度も床に倒れ込むことも、流血することもなかったでしょう。ユイはそういう、永世中立国みたいな存在。

ユイは学校の裏のマックにいるらしいのでした。

「電話では話し辛いことがあるんだって」

アイリが携帯を切ってそう言いました。

「二人も、来る？」

「行こう」とキヨミがタカネを振り向きました。

結局三人してマックに行くことになりました。ハンカチを出してタカネが腕の血を拭うのをキヨミは凝っと見詰めていました。運動部のボックス脇の通用門を出て学校の裏手に回ると、ハナノキの木立の陰に潜んだ雑居ビルの一、二階がマックになっています。一階がカウンターとキッチン、二階がホール、三階より上に何があるのかは誰も知らないのです。眼鏡をかけた大學生風のスタッフが一人でレジを打っていました。タカネが爽健美茶、キヨミがオレンジ・ジュースとポテトのラージ・サイズを、アイリはマックバーガーを二つに水を頼んで会計はキヨミより安くなる、マック通の注文の仕方でした。階段を上がるときちょっとアンバランスな二人連れが下りてきました。タカネが卒業した中學校の制服を着た少女と、スタジャンを着た四十代後半くらいの陽に焼けた男。「即席狂気——記録済み」と囁いて摺れ違ふ瞬間、奇跡を察知した男が鋭い視線を三人に投げたのをタカネは見逃しませんでした。

二階に出ると、前面に大きく剝かれた硝子窓のまるで朝の光のような白い光に包まれ、今まで起きていたのが嘘みたい、激しく液化した覺醒感の雫が落下しました。室内の中ほどに比較的大きなポトスの植え込みがありました。もしかしたら造花なのかもしれないのでした。窓際の真ん中の二人席にユイがいて、他に客はおらず、〈窓〉の外に眺望が

拡がる。軽い傾斜があるのと、この辺りは一円が住宅地だからたった二階からでも風景が青く霞むところまで見渡すことが出来ました。

ユイはカップの珈琲に口をつけながら本を読んでいた。新潮文庫の「椿姫」。タカネたちが近づいても、ちょっと目を上げて、あ、と言ったきり、また黙々と頁を繰り始めるのでした。三人は周囲の卓から椅子を集めて、小さな卓の周りに落ち着きました。アイリは同じマックバーガーなのに二つある包みのどっちから手をつけるか暫く迷った後、一方を選んでぱくつき出します。キヨミは自分のポテトをタカネとのあいだに押しやり、タカネが無言でそれに手を伸ばしました。

「話って何なんだろうかしらね」アイリがキヨミの方を向いて言いました。

ユイは本を読みながら、ああ、それがね、と言った切り沈黙し、また一頁捲ったところで漸くナプキンを挟んで本を置きました。

「ある男にレイプされてしまったのよね、私」

ある男、って言うちょっと謎めいた言葉を選びながら、ユイは剩りにも単刀直入にそう言ったものだから、アイリはそれを冗談だと思って「レイプ、って、誰にだよ」と嗤いましたがユイは嗤わずに、君らの知ってる人よ」と答えました。ユイの、涼しいというか、暗いというか、感情も愛想もない表情を見て、ちょっと自慢してるみたいだな、と内心タカネは思うのでした。

「知ってる人にレイプって、それは、成立しているのか？」

アイリはまだ冗談めかそうとしています。

「レイプよ」ユイが呟きました。「夜道で待ち伏せされたんだから。隅田川の土手のところ。ほら、私あそこを通って塾に行くじゃない？ つかこういう目に遭うんじゃないかと思ってたわ。歩いてるところを後ろから忍び寄って羽交い絞めにされて、土手を降りて河川敷のセイタカアワダチソウの茂みに連れ込まれて。信じられる？ 外でされたのよ。せめてホテル代ぐらいケチんないで慾しかったわ」口調からはユイが自嘲しているのか、本当に大したことと思っていないのか判断できません。「私がこういう性格だって、あの人は分かっていたのよ。襲われても聲を出して助けを呼んだり出来ないタイプだって。じっさい、暗闇で力で捻伏せられて胸を驚掴みにされた後はもう抵抗できなかったわ。言いなりよ。あの人は分かっているのよ。私が警察に届けることはおろか、名前をみんなにばらすことも出来ないってこと」

「ねえ、誰なの？ 教えなさいいよ」とアイリが口を挟んだのは多分純粋な好奇心からでした。

「私には言えないわ」

「何で」

「だって、悪いじゃない。——何だか可愛そうだわ」

「可愛そう？ 何が？」

タカネが思わず小さく叫びました。

「男の性よ。何だか、がつついてたし。私が大人しくなってるからは優しくしてくれたし。というか、優しくしようとしていてくれたみたいだし。よりにもよってこんな私を狙って襲うなんて。人事とは思えないもの」

キヨミもアイリも、ユイが何を言おうとしているのかよく掴めないらしいのです。ユイの目鼻立ちはそれなりに個性的に、可愛くて、どちらかといえばもてる方だと思うのですが、タカネには、彼女が美少女なのかどうかというところまでは分かりませんでした。美しい人間の基準がどういふものなのか判断できないのでした。人間はそもそも、内面的にもそうだけど外見上も、グロテスクで救いようのない生物だと思う、だけど、タカネはユイを襲った男の気持ちは想像できました。想像しただけです。

「それが先週の土曜日のことね。それから連休中ずっと部屋に籠ってて、今日もなんとなく憂鬱で、みんなと顔合わせたくなって、休んだの」

ユイの口調は棒読みだけど、彼女は元々、いつもじゃないけど時々、そういう喋り方をする女の子でした。

「兎に角、そんなことする男だけは許せないな。死刑だよ。――あ、それ、ユイどうしたの」

キヨミがユイのパーカーの袖口から出ている手首に包帯が巻かれているのを発見しました。

「あ、これはね、だからそのときに。土手を滑り降りたときに木の枝に引っ掛けちゃって」
「オイオイ、マジで」

遠慮もなく手を伸ばしたキヨミにユイは包帯を触らせました。

「医療費、請求できるかしら？ でも傷とか、どうでもいいのよ。心の傷よ、問題は。ムカツク。私は附け込まれたのよね。みんなも気をつけたほうがいいわ。こんなに悔しいものだなんて、思っていなかった」

そう言ってユイは珈琲に口をつけました。キヨミとタカネはひたすらポテトに手を伸ばし続け、アイリのマックバーガーはすでに二つとも紙屑になっています。

「復讐よ」とタカネが口籠りました。「復讐、するしかないんじゃないの」

「どうやって？」とアイリ。

「だから、警察とか。法律は弱いものの見方」

「ありえないわ」一瞬、タカネの顔を呆然と見詰め、溜息を吐いてユイが断定しました。

「タカネ、女を男に対してそんなに弱いものだとも思ってるわけなの？ だとしたらそれって欺瞞だわ。男だって本来、感情的で衝動的で意気地なしな弱い動物よ。レイプとかだってしたいと思ってる人は沢山いると思うんだけど、普通それを行動に移せない。色々面倒臭いのよ。観念と行為は別物ってこと。私だって、例えば大切な人を大切にしたいって言う感情は常にあるわ。だけど、本当に大切にするのは、面倒臭い。おしゃれしたいって気持ちはあるけど、実際に服を選んだりコーディネートしたり、お化粧に凝ったりするのは面倒臭い。面倒臭いって言うか、照れくさいって言うか……。そうやって、何かが起こるのを俟って、自分からは何も行動を起こさないで人間は平凡に時間を無駄にしているのよ。それを、あの人はあんな大それたこと、実際にやっちゃったんだから。大したものだと思う、そこは評価せざるを得ないのよ。今頃きつと、自分のしたことに責めさいなまられて悩んでるんじゃないかしら」

「まるで人事ね」

キヨミが言いました。一同、同感。

「だから、私、悔しいって言ってないかしら」ユイはフワリと嗤ってみんなを見回しました。「そんな、私は被害者、加害者は悪人みたいな、遠山の金さんの色分けが出来たら、誰も悩まないんじゃないの？ 私は暴力に屈したことを恥ずかしいとは思わないわ。むしろ、暴力で私を捻伏せた向こうの方が沢山のリスクを冒している。世間の判断もきつとそうだと思うのよね」

「ユイのそういう、理性的なところ尊敬するし、大人だと思うけど」キヨミが眉を顰めて諭すように言いました。「だけど、判んないけど今度の場合はちょっと……。だって、そいつは腕力使ったんだよ」

「何度も言うようだけど」と返答するユイは相変わらず柔らかく嗤いつつも、語気は、冷たいというか強いのでした。「弱者は向こうなのよ。もし、強い――尊敬に値するような人が私にこういうことしたんだったら、私は迷わず、警察に行くなり何なり、それなりに報復的な手段をとって直接相手にぶつけたと思うわ。だけど、そういうことしたくなるよ

うな人ですらないから。あんな人のこと、真面目に取り合ったら、私、嗤われちゃうわ。こうしてみんなに愚痴ってるだけで、大丈夫、私、全然気が晴れるから。あ、だれどごめんなさいね、呼び出してこんな愚痴聞かせちゃって。みんな、関係ないのに」

「いや、それはいいんだけど——」と言いつつもアイリは事態をどう受け取っていいか分からないうなのでした。

タカネには、ユイの言うことが分かる気がしました。何だか共感できたのです。格好いいとも思いました。雰囲気ですう思ったんだけど、まあ、そういう感じでした。少なくとも自分に暴力を振るうアイリやキヨミにレイブ魔の暴力を弾劾する資格はないはずです。それは事実。

その後ユイが、じゃ、帰る、と言い出し、一も二もなく解散となりました。

家に帰って體を張って入手する羽目になったイチドウリョウの番号に電話してみても出なかったのも、自宅に電話されなくなかったタカネはルス録にパソコンのメールアドレスを入れておきました。あの血の気の多い男に今日のユイの話を聞かせたらどうなるだろう。そんなことをぼんやり考えるうちに、タカネの覇氣は監獄に繋がれて皮下注射器から隔離された性転換者の乳房のように見る見る萎んでいくのでした。

二日後、イチドウリョウからメールが来ました。

さらにその二日後、新宿で彼と会うことになりました。

タカネは放課後図書館で時間を潰して、五時半に約束の東口に降り立ちました。その時間帯の東新宿は通勤のキャバ嬢やホストでゴった返します。その中にイチドウリョウも紛れていました。今日はスーツを着ていて、まるっきりホストじゃん、って格好です。サブナードの安っぽいブティックの前に腕を組んで立って辺りを見回していて、まるでキャッチしてるみたいです。タカネは近づくのが躊躇われました。彼女が今着ているこれ以上地味に作れないというような暗いデザインのセーラー服はかりにも都内で名の知れた有名女子高の制服です。躊躇しているうちに、向こうから人間の犬群が足早に行きかう改札前で佇んでいるタカネに気づいて近寄って来ました。えー、とタカネは心の中で呟きました。自分の顔が苦虫を噛み潰したような表情になるのが分かります。學生鞆の取っ手を両手で握り締めました。

「ヨ」

イチドウリョウは飽く迄明るい、と言うか、軽いのです。

「こ、こんにちは」タカネは上目遣いで頭を下げました。「すみません、どれくらい俟ちました？」

「いやいや、ジャストじゃん」と、イチドウリョウは腕時計に目をやります。「そうだ、ハムスター」

「ハ」

「こないだ言ってたじゃん、おれんちで飼ってるって。連れて来た」

リョウは手をつた込んでポケットからフワフワした小動物の頭を覗かせました。はあはあ息をしています。そんな小さな空間に閉じ込められたのは初めてだったのでしょう。まさか本当に飼っていたとは、と心ならずもタカネは感心してしまいました。一人暮らしで動物を飼えるって言うことは、この年頃の男性にしてはマメなところがあるのではないのでしょうか。ところで本当に一人暮らしなのかその辺りの話はまだ聞いていませんでしたが、何だか気になってしまうのです。

「アルペジオって言うんだ」リョウは嬉々としています。

「アルペジオ……」タカネは彼が例のシオルダー・バッグを持っていないのに気づいきま

した。「あの、それよりバッグを」

「バッグ？」男はキョトンとした顔をしました。「あ、そっか、バッグ返さなきゃいけないんだっけ。いけね、家置いてきちゃった。今度でいい？」

殴りつけてやりたい、タカネはバッグを取りにきたのです。他に目的はありません。

「今度とか、ムリなんだけど」

「そうだよね……」

「そう。携帯とか、すぐ必要だし」

「じゃあさ、今これから取りに帰るから、ちょっとついてきてよ」

「近くなの？　こんなとこ住んでるんすか？」

「ああ、御苑のほうだけど」

「私、急いでるんすけど」

「どれくらい？」

「晩御飯、外で食べるって言ってないから」

「大丈夫、すぐそこだから」

二人は地上に通じる階段を上りました。

なんとなく男のペースに乗せられている気がしてタカネは苛立ちました。西の空が薄く茜色に色着いて、鳥が飛んでいました。埃まみれのゴキブリのように彷徨くホームレスのぼかんとした様子が白亜紀からタイムスリップしてきた原始人のようでした。人が沢山いるけれど、タカネのような高校生は一人も見当たらないのでした。

「何してる人なんですか」とタカネが尋ねました。

「街の美化」

「ホストなの？」

「俺？　違うよ。何で？」

「服、物腰、喋り方」

「そっか」男は頷きました。「昔、やってたことがある」

「なんだホストなんじゃん」

「違うよ。元ホストだろ」

「関係ないよ」タカネは露骨に厭な顔をしました。「私、ホストの知り合いとかいらんすけど。って言うか、そもそもこういうとこホストと一緒に歩きたくないんすけど」

二人は石畳の道突っ切って、ドンキホーテ前の交差点で靖国通りを右に折れました。

「今は何してるの？　仕事」

「ちよっとね——」男は言い淀みました。「——歌舞伎町で、ちよっとね」

「ホスト？」

「だから、ホストは元だって言っただろ」

「……ヤクザ？」

「何でそういう方向に発想が飛ぶかなあ」男はポケットに手突っ込んで、上の空って言うか、他のことを考えている感じでした。あらたまって言いました。「なあ、本当に夕飯付き合えないか？」

「『本当に』って……、だから、家帰んなきゃいけないってさっき言ったよね」

「じゃあ、ご飯までに帰れるようにするからさ、お茶だけでも飲んでいこうよ」

「すいません、私お金持ってないし、だいたい未成年なんでそう云うの止めてください」

「違うよ。だからホストはもう辞めたんだって」

区役所前を通り過ぎて丸井の辺りまで来ると比較的人が疎らになりました。新宿御苑の木立が見える周辺になると、さらに落ち着いて来ます。鳥の飛ぶ姿もさっきまでと違って幽玄って感じがしました。東京に江戸が重なりました。

「じゃあ、私を何処に連れて行こうとしてるんですか？」

男はその問いに答えようとしません。タカネは本気で不安になって来ました。バッグという担保さえなければさっさと逃げ出すところでした。

「タカネちゃん、キョウカイって聞いたことあるか？」

男が唐突に口を切りました。

「教会？」

タカネは身構えました。こんなタイプの人が見かけによらず——宗教なんてホスト以上に興味がありませんでした。宗教の人は、はっきり断ったりし辛いから質が悪いのです。そんなことをしたら相手の全存在を否定してしまうみたいな気がするし、第一反論したところで相手は聞く耳を持たないのです。神様がいないなんて、こんな簡単なことを理解できない場合があるんだから人間ってよく分かりません。

「いや、そっちの教会じゃなくて、境目目のほうの、〈境界〉って書くんだ。全然別のものだと考えたほうがいい」男の口調が少しずつ熱を帯びるのが分かりました。ますます胡散臭い。「ところで教会ってどういうものか分かるか？ 説明してみてよ」

「だから、宗教を信じてる人たちが集まって、十字架を拝んだり、歌ったりして、癒される」

「うん、だいたいそれであってる」男はまるで学校の先生みたいにしてその答えを評価しました。「俺は小さい頃から宗教に興味があったんだ。宗教って言うのは、ひたすら救済だけを目的に構築されたシステムだ。救済って言うのは、不安をなくして幸せになるってことだ。でも、幸せを彫像だとすると不安はそこに出来る影みたいなもので、それぞれを分離して體驗しようとすることはそもそも原理的に無理があるんだ。宗教はその無理を片附けるために、幾つかの欺瞞を用いた。まず、自己と他者を分けること。自己って言うのは、一つ一つのこの體を持った個人のことだけじゃない。血縁とか、母国と異国とか、人間と動物とか、生物と無機質とか、そういう差別を捏造した。この差別は、結果的に憎しみや嫉妬、嘘、無理解、孤独や悲しみ、戦争、飢えを生んだ。不安から幸福を救い出すために起こった二次災害みたいなものだ。そこでこの自己と他者との不均衡を乗り越えるために、今度は宗教は、自分の慾望や快樂を否定するって言う第二の欺瞞を思いついた。他者の不幸を代償として自己の幸せが得られたって言う事実を目を瞑るために、幸せを望むことや感じることも放棄しようとしたんだ。これは最初の欺瞞よりもっと大きな災いをもたらした。人々は生きる希望を失ってしまった。つまり、他者とのあいだだけでなく自己の内部にまで亀裂が入り、生きているってこと、生命を謳歌しているって言う状態と、そのためには禁慾しなければならないって言う戒律が分離したんだ。そしてついに宗教は、分離とか差別がそもそものいけないんだって考えるようにまでなって、全ての差異を否定し始めた。科學を否定し、國家を否定し、道徳を否定し、社會を否定してとうとうただのテロ集団になりさがり、世の中に完全に見捨てられた」

そんな風に喋りながらイチドウリョウの歩みはドンドン遅くなり、交番前の交差点のところで立止まりました。

「宗教はそんな風にして失敗し、今じゃすっかり時代遅れの過去の遺産になって、教養あるまともな人達は見向きもしない。そうだろ」

「うん。でも、それでも宗教を必要としてしまう人たちって言うのは現にいますわけだけど」「そうなんだ。現代の宗教は反社会的だけど、宗教を求める心、つまり、幸せになりたいって言う感情は変わらず社會に根付いている。未だにそれが社會を支配しているって言うのも過言ではない。そしてそこに目をつけた会社があるんだ。アレックって言う有限会社なんだけど」

会社？ 話が再びやばい方向に展開してきたようでした。勧誘とか、やめて欲しい、そ

う言うくだらない押し付けで人の大切な時間を奪わないで悠しい、そう思いませんか。そんなタカネの内心を読み取ったようにイチドウリヨウはあわてて言葉を継いだのでした。「いや俺もね、初めて聞いたときは信用できなかったよ。先輩のホストに聞いたんだけどさ。ホンジョウさんって言うんだけど、ホンジョウさんも騙されてるんじゃないかなーって俺思ったよ、正直。でも、そのアレックって会社について色々聞いて、自分でも色々調べてみて、これはもしかしてすごい会社なんじゃないかって分かってきて。ちょっとややこしいシステムだし、一回聞いただけじゃ多分わかんないと思うんだけどさ、詳しいことは君もセミナーに行ってみてくれるのが一番わかりやすいんだけど、簡単に言うと、まずアレックは営利目的の会社だってことが大前提なんだ。慾望を否定している宗教は普通金が大それたなんていわないだろ？ 何でか解かるか？ 要は、信者を沢山得るための偽善だよ。貧乏人は金が世界を支配してるなんて信じたくないし、金持ちだってみんな何時その金がなくなるんじゃないかって不安におびえているわけだから、本質的に同じことだ。それで、宗教は、ウチは金で人を差別したりしませんよって言うけど、詐欺だよ。その証拠に、お布施とかお香料とか、最終的にはいっぱい取られて信者は損をする。だけどアレックはその逆なんだ。会社経営のために、一応金を取られる。その代わり、俺たちみたいなフェロー——フェローって言うんだ。何のことかわかんないかも知んないけどこれもそのうち理解できるはずだから。——フェローも、がんばればがんばっただけ儲かる可能性があるんだ。タカネちゃんだって金は悠しいだろ？ 金は人を駄目にするとか、あいつは金で変わったとか言うけどさ、やっぱり金も大事だよ。金がないと、服も買えない、友達と飲みにも行けない。金がなくて病気になるらどうする？ とりあえず、入会したら当然毎月契約金をとられるんだけど、まあそれは先行投資ってとこだよ。何てことはない、二人紹介したら元は取れるし、三人紹介したらもう儲けが来る。しかも、その人が解約しない限り永遠に収入があるんだ。それを権利収入って言うんだけどね」

タカネが遮りました。「ちょっと俟って。単刀直入にそれって鼠講？」
イチドウリヨウは一瞬啞然としました。

「全然違うでしょ。——ああ、そこから説明しなきゃいけないのか。鼠講は違法だけど、アレックのシステムは——バイナリ・システムって言うんだけど——合法。これがまず大きな違いだね。何で鼠講が違法になったかって言うと、結局消費者が損をするからなんだ。アレックだと、誰も損なんてしない。みんなで一緒にお金を儲けて、幸せになっていきましょって会社だ。例えばさ、俺が君を紹介するだろ、ぶっちゃけ、君は一人も紹介できなくてもいい。俺が君の代わりに四人入会者を見つければ半分君の権利になる。それに、もし君が一人しか見つけられなかったとしても、そこから連鎖が広がって、君の下にもすごい遣手のおぼちゃんが現れたりしてさ、その人が何十人って契約とってくれば、君も莫大な収入を得ることになるんだ。ごめんね、困ってる？ いや、会社の趣旨にとってすごく大事なことだからお金の話をまずしちゃったけどさ、目玉は当然会社の提供する『幸福』の體驗ってことになる。君も體驗してみたら絶対人生観かわるって。絶対人生観かわるって」

男は二回繰り返しました。タカネは熱意に押されて自分の意思を述べること出来ません。此処まで附いて来たのが間違いだっただと漸く気づきましたが、もう遅かったようです。

ちようど車道を反対向きに流れて来たタクシーをイチドウリヨウが止めました。

「ちょっと、何処か行くんですか？」

「君も乗るんだよ」

「え……。だって、晩御飯が。お母さんが心配します。ちょっとムリ」

「今、五時五十五分だから、急げば七時半には家に帰れる」

タカネの目を見て、ゆっくりと、諭すように、判決文を読み上げる裁判長みたいな調子でイチドウリョウはそう言いました。タカネは頷きました。

「晩御飯までに帰れるなら。分かった」

車が走り出し、四囲の〈窓〉が景色を流し始め、加速するにつれてその景色が光の渦になって溶けて行きます。車は夜の街を駆け抜けて行くのです。

「何処に向かっているの？」

「〈境界〉だよ。行けば分かる」

タカネは暗い車内に浮かび上がる男の横顔を見ました。今あらためて綺麗な男だと感じました。ジャーニズ、ギリシャ彫刻、全盛期のヴィジュメン……、うまい形が見つかりません。映画俳優？ そうだ、この男は俳優なんだ、そう思えばしっくりくる気がして、タカネは心の中で彼のプロフィールに俳優というレッテルを貼ったのでした。俳優に連れ去られる女優。〈窓〉の外の景色はスクリーンプロセス、運転手は、向こうをむいた顔では退屈そうに嗤いながら背中だけで演技する脇役です。悪くない。これは現実であり、非現実です。

「〈境界〉は宗教にすぐ近いんだけど、宗教じゃない。わかりやすく言うと、濃度が違うんだ。宗教的なエクスタシーの體驗って、聖人とか預言者とか呼ばれるすぐ感受性の強い人にしか出来ないものだろ？ 〈境界〉はその百万倍濃縮タイプだと思えばいい。いわば、化学合成された宗教なんだ。君は意識的には何もしくなくていい。禁慾して性を否定したり、他者を否定して自分の殻に閉じ籠ったりする必要もない。ただ、リラックスして無意識を解放するだけでいい。後は〈鏡〉が全部かわりにやってくれる」

「カガミ？」

「君も、逢えば分かる」

〈窓〉の外はいつのまにか見知らぬ町並みでした。普通の住宅街みたいにも見えませんでした。だけど、不思議なことにタカネにははっきりそうだと判断することが出来ませんでした。

でも多分此処が歌舞伎町なんだと思う、そうに違いない、随分虚構くさい風景でしたから。

蕎麦屋の前でタクシーが止まり、タカネは歩道に降り立ちました。その雑居ビルの階段の脇に「アレック」とロゴが入った小さな看板が立っているのをタカネは見つけました。

蕎麦屋の裏からその上に伸びていく暗くて狭くて汚い階段をタカネはイチドウリョウに連れられて上って行きました。二階はいかにも入り辛い感じのアウトローの香り漂う分厚い木の扉で、ゲーム喫茶らしい小さな表札が出ていました。多分、ポーカー賭博でもやっているのでしょうか。三階は空き部屋らしく防火扉が閉まっていて、その上に掠れた青のマジックで「Japanese Only! ↑」と書かれたザラ判紙が貼ってありました。四階からは明るい光が漏れて来ていました。二人は螺旋階段を回りました。

小さなカウンターの前にオレンジ色のジャージを来た若い男が納まっていました。二人が接近すると「いらっしゃいませー」と妙に元気のいい聲で迎え、イチドウリョウに、

「あ、おつかれっす、イチドウさん。えっと」と挨拶して、タカネを横目で示した。

「キャッチしてきた」とイチドウリョウ。

「えっと、初めてのお客さんですね。当店会員制となっております。えっと、入会金は……」

そこでイチドウリョウが、「この子の今日の分は俺が持つから。つけといて。そう、イチドウリョウ、経費、棒線でもいいから。そう」と口を挟み、タカネに、

「じゃ、後でね」と言い残して奥のカーテン中に消えて行きました。

「じゃ、入会金と初月分の契約料はイチドウさん持ちってことで」と言いながらジャージの男はバインダーに挟まれた用紙に記帳しました。「それではですね、当店システムの方なんです、契約先払い制となっております、一ヶ月ごとにお客様のほうの判断で契約

更新して戴くようになっております。では、まず会員証のほうおつくりしますんで、こちらのほう印のついているところの空欄のほう埋めて戴きまして——」と、差し出された簡単な記名用紙とボールペンをタカネが受け取りました。

「そうしましてですね、当店一ヶ月の契約料のほうお先に一万八千円戴く形になりますが、半年契約ですと全體で六千円、一年契約ですと二万一千円お得になりますんでこちらのほうお勧めさせて戴いております。とりあえず、今月分はイチドウさん持ちっことで、差し引かせて戴きます。よかったですよ、本当、イチドウさん中々そういうことしない人なんでね。俺の知る限りこれが初めてですよ」

「そう」

タカネが差し出した、嘘の名前と嘘の住所を書いた用紙を受け取り、店員はそれをカウンターのノートパソコンに入力しました。

「ではですね、こちらのほう、お客様の会員証になりますんで」

差し出されたクレジットカード大の「カラオケボックス・アレック」とプリントの入ったプラスチックのカードには、タカネの書いた偽の名前が浮き彫りになっているのでした。「それからですね、システムのほうなんですが、お客様、一ヶ月契約された段階で、二百七十分の持ち時間を差し上げる形になります。来て戴いても構いません。ですが、毎回、三十分、五十分、七十分の中から好みのコースを選択して戴きます。こちらの二百七十分のほうですね、使い残して戴いても構わないんですが、そうなりますと効果のほう、実感して戴けないかと思えますんで出来れば月に二百七十分は来店されるようにしてください。使い残された場合の払い戻しはございません。二百七十分を超えた場合、超過料金を毎回戴く形になります。やはり、毎月超過されるお客様のほうが多いようです。その他の契約内容と禁止事項につきましては、こちらのほうを必ずお読みください。場合によっては強制退会、警察への連絡などの処置を取らせて戴くことになりますので」

タカネはホッチキスで三枚綴じられた、細かい文字の印刷された薄いパラフィン紙と大きくアルファベットの書かれた番号札を渡され、カーテンの中の狭い待合室に通されました。小ぢんまりとした三人掛けのソファとスツールが二つ、テレビと漫画が並んだテレビ台とで部屋は一杯で、人が摺れ違ふ余裕もありません。

何人か先客がいました。浮浪者にも見えかねないような汚い格好をし、膝を組み帽子を目深に被って新聞を読む四十絡みくらいの男。小學二年生くらいの少年は、ソファに座って足をブラブラさせながら、万能ナイフで林檎の皮を剥いています。それから、タカネと同じように制服を着た金髪顔黒の女子高生。見たことのない制服でした。多分、公立でしょう。三人とも席の一・五人分くらいを占領してゆったりと落ち着いており、タカネが入って来ても顔を上げようとすらしないため戸惑いましたが、立っているしかなくことが分かって入り口附近で俟つことに決めました。

部屋には入り口を除いた三壁に一枚ずつ額縁が掛けてありました。タカネの正面は奇妙な海の寫真でした。海の寫真って言うパラソルや椰子の樹を配したりビーチがあったり、ヨットが浮かんでたりカモメが飛んでたりって言うカットを想像するかも知れませんが、この寫真は海だけです。上半分が雲一つない空色、下半分が深い色の海。遠くに水平線が霞んでいます。

左側の額縁は細部まで丁寧に描き込まれた位相幾何學にモチーフを借りたりトグラフでした。鬱蒼と密生したヒマラヤシーダーの森の中。確か、ペンローズ・トライアングルと言うのでしょいか。メビウスの輪みたいな歪みのある正三角形と正六角形の木の枠が二つ転がっていて、その上にタカネと同じくらいの年頃の少女が腰かけていました。さらにその膝の上に彼女の貌を見詰めて困惑した様子のゴブリンが描かれていました。もしかしたら困惑してるんじゃないかって、泣いてるのかもしれないし、嗤っているのかも知れませんが、

そのときタカネはゴブリンの表情が、人間のそれと違っていて判読が難しいものであることに初めて気づいたのでした。ただサイズが小さいだけではないようでした。小人には小人だけの、侵してはならない世界があるのでしょう。最後の壁には鮮やかな水彩画が架かっています。それをじっくり観察しようとしたとき、後ろのカーテンの外から聲がしました。「番号札、Gでお候ちのお客様、〈鏡〉のほうのご用意できました！ ご案内です！」待合室の人々が一斉に動いて、自分の番号札を確かめますと、Gと書かれている札を持っているのはタカネでした。

「それではお客様、これから〈境界〉へご案内になりますが、こちら、貴重品入れ袋になります。傷害行為その他、〈鏡〉の嫌がる行為など絶対禁止でお願いいたします。初回は一律五十分コースとなっております。それでは、向かって右側、十番の〈境界〉にお進みください！」

タカネはアコーディオン・カーテンを開いて中に進みました。狭くて照明を落とした通路の両側に同じアコーディオン・カーテンが並んでいます。突き当たりのカーテンが開いていて、そこが十番らしいのでした。

咄嗟に、誰かいる、と思いました。

六畳くらいの全面黒く塗られた、何処となく虚構くさい部屋。七〇年代のアングラ劇団の舞台背景みたいです。〈窓〉はあるにはあるのですが、黒い塗料で塗り潰されています。一隅に低い棚があって、その上に内線電話が乗っています。壁に蛍光塗料で描かれた星空の模様とタカネの制服が、ブラックライトで紫色に浮かび上がりました。

部屋の中央にパイプ椅子がありましたが見たところ調度はそれだけでした。椅子にはマネキンが一體座っています。入ったときにした人の気配はどうやらそれでした。ずっと自分より年上の母親くらいの年齢の――、否、ちょうどタカネと同じ年齢の、多分女の子。否、男性かな？ そんな気もしないではありません。マネキンに年齢とか性別なんて、明らかに変だ、私は狂ってると思って、タカネはそれ以上詮索しないことにいたしました。

さっきからずっと自分だけに話しかける聲がきこえているけれど、何を言っているのか、言葉から意味が抜け落ちてるって言うか、意味が滑っていくって言うか、よく分からないのです。さして気にもならないのですが。気にならないながらも、ちょっと焦るのです。

話しかけられているんだからタカネは返答しなきゃいけないはずなのですけれど、意味のない言葉への返事はやっぱり意味のない言葉ですものなのではないでしょうか。意味のない言葉の意味のない文章に統語するには、一體どれくらい神経を集中させなければならぬことでしょうか。いずれにせよきつととても疲れてしまいそうです。何も考えずに喋ったら、もしかしたら意味のある言葉が口から飛び出してしまいかも知れません。否、むしろ意味のある言葉が出てくる可能性のほうが高いでしょう。あるいは意味のない言葉を統語することによって意味のある文章が創造されるものなのかも知れませんか。

分かりました。マネキンの中にスピーカーが入っていて、どうやら聲はそこから聞こえてくるらしいのです。だけど不思議なことに、肌は透き通って内臓丸見えなのに、それらしい装置は何処にも入っていないのです。と言うことはマネキン自身が喋ってるってことなんでしょうけれど、流石にそれは莫迦莫迦し過ぎて信じる気にもなれないのです。間違えました。聲なんて何処からも聞こえて来ない、全部タカネの空耳だったのです。

そこは原野の沼沢でした。プリンス・エドワード島の「輝く湖水」。生命の泉。風が心地いい。草々がそよいでいます。ニンフが集まって来て、タカネを見守ります。タカネを称えています。何を？ タカネの美しさを。顔に痛いほど視線を感じました。沼は何処だろう？ タカネは水面を探しました。初めから目の前にそれがあつたことをタカネは思い出しました。うん、この透き通ったマネキンがそれです。水面は銀波を発して細かく執拗にさざめいています。一瞬、タカネの顔がそこに映し出されたかと思うと、溶けた、像はす

ぐにゆらめき、粉々の破片になり、粒子となって消失するのでした。だけどおかしい、溶けたのはタカネ自身なのでしょうか。他に溶ける可能性のあるものが此処にあるでしょうか。兎に角、マネキンは小波立ちながらそこに存在し続けています。それが存在しなくなったら？ きっと暗闇です。すべてが終わってしまうことでしょうか。だけど存在しているのはタカネ自身でした。タカネは等身大の自分自身と対面していました——だけどタカネは自分の質料が押し流されて、新しいそれに置き換わっていくのを知覚しました。そうか、此処は沼じゃなくて川なのです。だから流れているのです。でも何で？ タカネは、今、生まれて初めて、こんなにはっきりと目の前に出現した自分の像をみて驚いたのでした。剩りにも美しい。だから、これは自分じゃない、ありっこないのですから。いや違います。タカネはずっと知っていました。ずっと昔から、こんなにも側にこの自分自身を見詰め、その存在を信じていました。と、その像が今度はすうっと奥の方に遠のき、川床に——否、マネキンの中に納まった内蔵に変容して消えたのでした。何のことはない、自分の鏡像が水面に映っていたのでした。

「へ鏡」って、あんたのこと？」

タカネがそう訊ねると、マネキンは揺らめいて、私のこと？ と聞き返しました。今、言葉が通じました。百パーセント、言葉が通じたのです。だから、それが完全なタカネそのものを映し出しているのと同じように、それは、タカネが言ったことと、言ってるときに思ったことを完全に繰り返したのでした。

「ね、そうなんですよ」

タカネの推測が確信にかわって行き、それ、へ鏡の表情が固まりました。

「ほらあ。やっぱりそうだ！」

タカネは赤ん坊のように無邪気に嗤って弾けました。その瞬間、へ鏡が消えたのでした。タカネは一人ぼっちの無重力状態に抛り出されました。タカネがいらない？

タカネはまた間違えていたのです。そもそもへ鏡がいなくなるわけがないのです。つまり、へ鏡がいるんじゃないくて、いることがへ鏡そのものだったことでした。消えたのはへ鏡に映ったタカネの像だけで、それがすべてでした。それは何者でもありません。だから、曖昧なことなんて何もありません。

人の形だと思っていたその物體は、実は球體でした。直径一メートルくらいの大きな鏡の球がタカネの目の前に浮かんでいるのでした。最初それが人の形に見えたのは、タカネ自身の體を映し出していたからでした。自分の鏡像を鏡そのものの形と思い込んでいたのでありました。だけどじゃあ、鏡自體の形って、そこに映った像の形じゃないとしたら何でしょう。

多分、そんな鏡自體の形なんてない気がするのです。だけど、へ鏡は現にこうして存在しているのですから、否、存在とはへ鏡なのですから、形があってもいいんでないかしら。ないと困ります。あるはずです。あるはずのモノ、つまりそれはタカネ自身の形なわけです。何故ならその形を造り出すことが出来るのなんて、タカネ以外に誰でもないのですから。それだけのことでした。

それだけのことでした。此処にはタカネ一人しかいない、タカネ一人で一杯に充たされて、しかもタカネ以外に誰もいない、空っぽの世界でした。

それがその時、タカネが「分かった」ことでした。分かることなんて最初は全然望んでいなかったのに、分かってよかったと思いました。そう思うと涙がこぼれました。

だけどじゃあ、何故へ鏡はタカネ自身じゃないのでしょうか。どうして、へ鏡に映った自分は絶えずこんなに揺らめいて、まるで不意に消えてしまいうので、わたくしどもを不安にさせるのでしょうか。

ついに、タカネは鏡の表面に小さな亀裂を見つけました。そこから鏡面に映った自分の

存在がシュウシュウ音を立てて漏れています。何だ、やっぱり張りぼてなんだ、マネキンなんだ、興ザメって感じで、一気に夢から覚めるのでした。

〈鏡〉はそれをテレパシー(?)で読み取って、悲しそうに言いました。

「聞こえている？ 私はあなたの屍體なんだよ」

「屍體？ 私の？」

〈鏡〉はコックリと頷きます。

「私もいつか、死んで、あんたみたいになるのかな？」

「そうだよ。だって、私は鏡に映ったあなた自身なんだから！」

「それは、遠い未来のこと？」

「そう。でもない未来に。その日はまだ俟っても来ない。その日は、今。絶え間ない今。今はまでも到来しない。それが、私に、あなたの姿が映し出されているってことの意味」
そうか、って感じてした。無性に悲しかったのです。自分の死體を見て悲しくならぬ人など何処にいますようか。

「さっきから聞こえているんだけど、この水音は、何処から聞こえてくるの」とタカネが尋ねました。

「その水はねえ、あなたの頭から漏れてくる雫だよ」と〈鏡〉が静かに答えました。「あなたの脳髓が融けて漏れているの。ほらほら」

「ううん」と言いながら、タカネは吃驚して手の甲で目元を拭きました。「これは涙だよ。滅茶苦茶言わないで」

「信じないのはあなたの勝手ね。ところで」〈鏡〉が徐に質問をかえました。「何か相談したいことはない？」

「えっと、私には夢があって、その、女優になりたいって言う」素直に、自分の気持ちですらすら言葉になるのでした。「何でなれないんだろう。それが私には理解できない」

「何言ってるの」〈鏡〉が感情的な高い聲を出しました。「あなたはすでに女優だよ。女優が、女優になりたいなんて、それは、無理な話だよ。論理的に。女優がもう一回女優になったら、何になるの？ 女優×ニ？」

嬉しかった、またしても、ひたすら、そうか、って感じがしました。

「ところで、もうすぐ時間なんだけど」

もう。長かったようで短かった、たったの五十分。会話は殆どしていません。名残惜しくてたまりません。

「延長する？」

「ごめん、帰らなきゃ。ご飯に間に合わない。って言うか、お母さんに怒られる」

「うん」〈鏡〉は屈託なく嗤って、それから口籠り、上目遣いで恥ずかしそうに付け加えました。「また来てくれたら、私なりに嬉しかったりする。ナンテネ」

内線電話のベルが鳴ったのはそのときでした。急いで受話器をとりました。

「フロントですけどお時間のほう五分前になっておりますが。延長料金は――」

いいです、もうすぐ帰ります、と答えてタカネは受話器を置きました。

暗い部屋。伽藍堂の黒い部屋。振り返ると〈鏡〉はもういませんでした。始末が悪かったのは、ポツンと残されたパイプ椅子。

「お客さまお帰りです！」という威勢のいい聲に背中を押されてタカネは、出口で俟ち受けていたイチドウリョウと一緒に薄汚い階段を下りました。

「どうだった？ 初〈境界〉は」

「ウーン」

「想像してたのどだい違ったでしょ」

「そだね、宗教って言うよりは、アレ。アレだった」

タカネは意識してそっけなく答えました。

「もしよかったら、続けてみようよ。それで、学校の友達とかも誘って。儲けていこうよ。詳しいことは、紙貰っただろ？」

蕎麦屋の横に出て、随分人通りが多いと思ったら、駅前でした。真上で高架が通りを跨いでいます。知っている人なんてそんなとこに一人もいるはずがないのに、すごく恥ずかしいのでした。恥ずかしいって言うか、世間に申し訳ないって気がしました。悪いことしてるわけでもないのに。中央線の小駅でした。

「じゃあ、帰ります」

まだ引き止めたそうないチドウリヨウに手を振って、タカネは改札に進みました。

新宿で山手線に乗り換えて、家に帰ってご飯食べて宿題してお風呂に入って、寝台に潜り込んだ頃になってシオルダー・バッグのことを思い出しました。取り戻すためには後一回はあの男に会わなきゃいけないってことですな。

別に今さら厭ってわけじゃないんですけど。

次の朝のことをタカネは余り覚えていません。

鞆の中に、昨日へ境界で貰った契約書が入っていたので、ホームルームが始まるまでの暇潰しに読んでいると、キヨミと同じクラスのヤマブキミサキが来て、それを中断しました。

「何読んでんの？」

「別に。ちょっとね」

「アイリは」

タカネは教室を見回しました。

「まだ来てないみたいよ」

「そうか、困ったな」と、ミサキは時計を見ました。

「どうしたの」

「いやね、アイリの妹に塾のプリントコピーさせて貰おうと思って。昨日サボって彼氏んちに行ってたのよ。親にバレたら、やばい」

ミサキとアイリの妹は同じ塾に行っています。ユイが帰りにレイプされたって言うあの塾です。それでミサキの彼氏って言うのはユイのお兄ちゃんのキョウスケです。狭い世界です。タカネは契約書をさりげなく隠して机の中に滑り込ませながら訊ねました。

「ユイはどうしたのよ」

「ユイ？」

ミサキはぽかんと、どのユイ？　って感じの顔をしました。

「ユイも昨日塾さぼったの？　だってさ、ユイに借りればいいじゃんプリント」

「でも、ユイは豚みたいに死んだんだよ」そう言って再び時計を確かめ（もうホームルームの時間です）、「アイリが来たと言ったってよ。本当マジやばいんだから」と言い残しミサキは自分の教室に帰って行きました。

アイリはホームルーム中、先生が畑の間のぬかるみ道を三十分かけて通學した子供時代から団地が出来て人が増え、その団地の建物も老朽化してさらに再び過疎化しつつある地域の歴史について随想を述べているのを中断して（先生は生まれたときから五十八年間この地区に住んでいるので、思い入れの深さは五十八年分です）教室の前から入って来たけれど、タカネがミサキの言伝を思い出したのは昼休み、弁当を食べているときでした。

「何だろう、ミサキ、ユイに聞けばいいじゃない、もそうしてるのに」

「そうよね」タカネは頷きました。「私もそう言ったんだけど。そう言えばそうだ、豚み

たいに死んだって、ユイ。ミサキが言ってたよ」

「何よ、豚みたいって。だいたいユイ豚じゃないじゃん。本当に死んだにしても、豚はひどいよ。でも、死んでないんでしょ？」

「分からない。そのところはよく判らなかったの。本当に死んだとしたら、先生たち知ってるはずじゃない？ ミサキが知ってるんだから。でも先生たちそんな風に見えなかったわ。普通に授業していたし」

「死んでないことを祈るよ。あ」アイリがタカネの目を見て肩を叩きました。「そうだ、もしか死んだんだとしたら、アレが原因じゃない？」

「いや、自殺だなんて誰も言っていないし、そもそも死んだのかどうか定かですらない」

「絶対そうだって。自殺。レイプを苦にして自殺」

「そんな、ユイ、レイプで傷ついているようにも見えなかったけれど。それに自殺だとしても、理由がああ事件だって決まったわけじゃないでしょう。理由がはっきり一つに特定できる自殺のほうが少ないんじゃないかな。こんな退屈な世の中、生きてりゃ、誰でも漠然と死にたくなったりもするでしょ」

二人はお昼を食べ終わってユイのクラスに行ってみました。ミサキは窓際に立って、ひたすら校庭を携帯のカメラで撮っていました。

「何してるの？」とアイリが聞いても、ミサキは、「うん、ちょっとね」と言うだけで答えません。

「ユイは？」と、タカネが訊ねました。

「ブタみたいに、一人勝手に死んだよ」とミサキ。「あれ、本当に知らないの？ でも、彼女が死んだ理由は、タカネ、タイキと付き合ってるあんたなら知ってるはず」

「私？ タイキが、何か関係あるの？」

「あら、とぼけちゃって」

「だから、本当に判らないんだって」

「本当に？」ミサキは呆れた風でした。「君たち本当に付き合ってるの？ 哀れよ、そうだとしたらタカネが」

タイキとはシオルダー・バッグがひったくられたあの日以来会っていないし、連絡も取っていません。〈窓〉の外の校庭には誰もいません。ミサキが何にレンズを向けていたのかは不明でした。

「ミサキは誰に聞いたの」

「だから、彼氏だよ」

キョウスケとユイはきょうだいです。

「復讐するって言ってた、彼氏」ミサキが急に深刻そうになりました。「止められないかも知れない。やばいよ。彼氏がマジでやっちゃったら、あなたのせいだからね」と、タカネを指差しました。

「だから、何のことか私はさっぱり」

「ごめん、タカネは関係ないのよ。でもこのままじゃキョウスケ捕まっちゃうんだよ」

ミサキの聲が掠れます。校庭は明るく輝いていました。砂が日に焼けて煌いています。此処のところ数日怖いぐらいの快晴が続いていました。余りにも日差しが強烈で、鬱になります。〈窓〉の外には誰もいません、校庭にも、校外の路地にも、見渡す限り続く屋根瓦の下にもきつと。

世界は空虚な抜け殻でした。

放課後、タカネは途中までアイリと一緒に帰りました。タカネはユイの自殺が信じられなかったのですが、アイリのほうはユイが死んだこと自體信じていませんでした。

「ミサキに担がれちゃ駄目だよ」

「いや、何か本当っぽい言い方だと私は思ったけれど。人間に与えられた時間は永遠じゃない。死ぬときは簡単だよ。ああいう風に、あっけないもんなだと思ふよ。死ぬときは誰でも豚みたいに」

「それ、本気で言ってるの。タカネっていつもそういう感じだよ、感情がないって言うか、友達を友達と思っていないって言うか、他人を大切にしないって言うか。基本的に、自分のことしか愛せないタイプ。そういうところが嫌われる原因じゃないの。じゃあね」

アイリと別れ、タカネは一人自分の家に向かいました。タカネが超然としているのは他の人にはない特別な才能があるからだと思うのです。女優であるということ。才能は永遠でした。若さとか美貌のような、失われていく特権とは違うのです。ずっと遠く、自分が死んだ後の先まで見えるから、明後日の自分はもう自分じゃないみたいに目の先の若さにしがみつく莫迦な友達をブランドンって言うか、頑固だとタカネは思うのです。そう言うみんなの弱点を見透かしてるところが苛められる要因なのであります。知的優越はいつも迫害を受けるのです。サルの群れの中に一人人間が混じるようなものです。平凡な女子高生の間に一人本物の女優が混じるようなものです。接点なんて見つけようがない、何をしても無駄なのです。

それにしても、タカネは今日ミサキに言われたことが気になって、タイキに数日振りに連絡を取ってみようと思えるのでした。だけど携帯がイチドウリョウの家にあることを思い出しました。もしかしたら、タイキの方からタカネに連絡を取ろうとしていたかも知れないのですが、分からないわけです。家に帰るとコンピュータにイチドウリョウからメールが来ていました。メールを開けるのが怖い。自分から誰かに送るのと違って、人から来たメールって何でそう厄介なのでしょう。自分の存在を全面的に裁く判決が届いているみたいな気がするのです。自分の部屋から出て、ダイニングを彷徨いて冷蔵庫を開けたり冷蔵庫の扉に張り附いているプリントを捲ったりして、服を着替えてからタカネは意を決してメールをクリックしました。

シオルダー・バッグのことは書いておらず、長々とアレックのセミナーについて書いてありました。あの鼠講もどきの説明会が週末、五日後の日曜日にあるらしいのです。一応、手帳にメモりました。〈境界〉での不思議な体験を反芻してああ言うのには手を出さないのが一番利口なんだと思うのですが、だけどタカネはもうあの体験をした日以前には戻れないと感じているのでした。もう、タカネはやってしまった、知ってしまった、アフターです。セミナーは行くからその日バッグを持ってきてくれるようにと返信しました。

郵便受けにユイの死亡通知が来ていました。葬儀は明日です。やっぱりミサキの言ったことは本当だったわけですが、死因については書いていませんでした。

翌日、學校を休んで制服でユイ家の菩提寺に行くと、アイリやミサキ、その他数人學校の友達が来ていました。キヨミもいました。喪主（ユイのお父さん）の挨拶を聞くと、どうやらユイはやっぱり自殺だったようでした。流石に（レイプのせいじゃなかったにしても）動機までは言及されませんでした。参列者から「最後の対面」の申請がありました。断られました。顔も見せられないような死に方をしたのでしょいか。一體どんな。すごく気になりましたが、流石に遺族に質問することも出来ません。葬儀がたった三十分くらいで終わるともう出棺でした。霊柩車の前でカツラギユウキと墨書きの名札を附けた濱田マサル似の青年——それはユイの実のお兄さん、ミサキの彼氏のキョウスケさんだったのですが——から、「本日は、皆様ご多用中にもかかわらず、故カツラギユイの告別式にご会葬くださいまして、厚くお礼申し上げます。故ユイ存命中は、皆様より賜りましたご厚誼に深く感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬご厚誼をお願い申し上げます。以上、簡単ではございますがご会葬のお礼とします」と冠婚葬祭のハウツー本から丸寫したかのような謝意表明がありました。まったく莫迦にしてる、何だかよく分からないけど、タ

カネはそんな気がしたのでした。

その後アイリたちと連れ立って学校に行き、午後からの授業には出席しました。そう言えば、タイキは葬儀に呼ばれておりませんでした。タイキとユイは仲がよかったはずであることが、若干、奇妙で、不吉な感じがして、しかも実はその予感当たっていたのでした。畢竟、小説やドラマの中と違ってその手の予感が現実に当たってしまうのは珍しいのです。

翌日の放課後、またタカネはキヨミとアイリに医務室の裏、校舎の壁とブロック塀の間を通過して少し行ったとこに開ける、誰が埋めたのかわかんない、メダカとかヒヨコの墓があったりする空間へと呼び出されました。今日は珍しくミサキもいて、その上ミサキが今回の首謀者らしいのでした。

「分かってるよね」とミサキ。

「タイキに聞いてると思う」キヨミがその後を継ぎました。

「知らない、彼とは此処のとこ連絡とってないんだけど」

それは事実でした。キヨミがちよっとたじろいで、「本当なの」と呟きました。

「じゃあ、教えて上げなきゃいけないことになるわけだけど。何処まで知ってるの？ ユイが死んだよね。自殺だった」

「ウン」

「原因は、タイキに強姦されたことだった」

「ウン……え？ タイキ？」

それは初耳でした。

「それ、何時のことかしら」

「連休前よ」

「……本当」

つまり、あの表参道でバッグをひったくられた日、すでに彼は犯罪者となっていたわけでした。レイプなんてしようと思えば出来る程度の男の子ではあったという唐突な事実とそれが惹起する愁悶は、謂わばくもりを通した図の縁が地にずらされて無数の副像を生ずるように正確な定量化を拒むのでした。

「つまり、分かってるよね。タカネが責任取らなきゃいけないって」とアイリ。

「俟ってよ。タイキが何したのか知らないけど、私は関係ない」

「惚けないことよ。もとをただせばあなたがタイキの性慾をちゃんと処理していなかったのが悪いの」

「そんな……」

冷静に考えればアイリの言い分は無理なものでございましたが、そこには一端の真理も含まれているようでタカネは強く言い返すことが出来ませんでした。否、付き合ってる相手に他人をレイプされた挙句その罪を追及されているタカネって何なのでしょう。ミサキが演劇調の悲痛な口調で言いました。

「悪いけど、私タカネのこと赦す気になれない。キョウスケは兄として威力でタイキに復讐しようとしている」

「だから、何で私になるわけ？ 何で私なの。悪いのはタイキじゃないこと」

「やっぱり、口で言ってもわかんないみたいね」と溜息を吐いたキヨミはくすねてきた例のホッチキスを握って近寄り、アイリが後ろから羽交い絞めにして押さえつけたタカネの射倅心が色彩となって分解されていくのを、ミサキは絞め殺される鶏でも見るみたいに眉を顰めて凝視しているのです。

「よくって」キヨミが額をタカネの額に近づけて悪辣に言いました。「今日は、顔よ。責任は全面的にあなた自身にある」キヨミはホッチキスをタカネの頬に近づけました。

「や、やめて！ 顔はやめて！ 顔に傷をつけないで。この顔の価値が判るでしょう。やめて！」

ホッチキスがタカネの頬に触れたところでキヨミが手を止めました。

「じゃあ、言うこと聞くことね」

「言うことって何よ」

「タカネが、ミサキの彼氏の代わりに復讐することよ。彼氏が殺人で捕まったりしたら、ミサキが可愛そうよね、そう思わないこと。思うよね」

「判った」タカネは頷きました。「何でもする、兎に角顔はやめて」

ホッチキスが、タカネの頬から離れました。

「それでは、約束。可及的速やかに、タカネがタイキを殺すこと。早くしないとミサキの彼氏が先にやっちゃうから、急いでよね」

タカネは何度も頷きました。喜劇的な状況を引き受けてしまった気もしました。自分は何でそういうも狗のように言いなりになってしまのか分からないし、でも、自分の顔を傷つけられるかもしれないという危機に瀕しては、タカネは何事も冷静に判断することが出来なかったのでありました。自分の恋人を殺すべきなんですって。意識が鑿のように混濁していました。美貌か否かは問題ではなく、定義によって顔は女優の命であり（大命題）、兎に角女優の女優性がタカネの存在命題そのものだったのです（小命題）。

駅を降りたところで、ミサキと合流しました。

ミサキは最初、タカネを無視しようとしたが、でもタカネが彼女の方を見てたから無理でした。顔に笑顔を作って手を振って寄って来る、それが、謂わゆる友達です。贅沢言っではいけません、世の中にはこういう社交辞令程度の付き合いを嫌々してくれる相手すらいないわたくしどものような人間が山ほどいるのですから。

ミサキの会話は、普通でした。先生の話、テストの話、天気の話、と言ったように。あれ、タイキへの復讐の話とか、冗談だったんじゃないか、夢だったんじゃないかって思えてくる、でも夢ではありませんでした。

教室に入ると、タカネの机の上に小鳥が乗っていました。青い、小鳥。名前は分からないけれど、鳩でしょうか。小鳥は死んでいました。

ミサキはそれを見た瞬間、幽霊でも見たみたいな怯え方をしました。

タカネにとっては日常茶飯事です。イジメごときのためにわざわざ小鳥を買って来て殺して、ご苦労様って感じでした。小鳥の左側の首には太目の釘が差し込まれていて、そこから流れた出血量が死因であるようでした。鳥の青い羽毛にも、タカネの机にも真っ赤な鮮血が溜まっていました。小鳥の首には糸がくくりつけられていて、そのもう一端は机の中に消えています。

「これ……」ミサキが聲を震わせました。「きつと……いや、そんなのありえない、でもじゃあ誰が？」

ミサキも知ってる癖に、加担してる癖に、とタカネは内心厭きれました。それにしても演技にしてはリアルな怯え方です。ミサキに女優の才能があったなんて。教室中が、制服たちが女の子たちが、タカネの机とその周辺を無視しています。そこだけスポットライトが当たってる感じでした。でも誰がやったのでしょうか。ミサキはさっきからずっとタカネと一緒にいました。その小鳥の死體は殺されてから三十分経っていませんでした。血が固まってないから。それに小鳥の體はまだ温かそう、生きてるみたいでした。硬直はしていません。ミサキがやったとしたら此処で殺して駅まで帰ってタカネと落ち合って再び一緒に此処まで来たことになるけど、それだと少なくとも見積もっても五十分はかかるし、大體駅でタカネと都合よく落ち合うことを誰が保証できるでしょうか。

「殺せてことでしょ」タカネが一人ごちました。「こうやって、この小鳥と同じように、

タイキのこと」

「いや、そうじゃなくて……じゃなくて」ミサキが掠れた聲で言いました。「でも、ただこのこと知ってるのは私と……じゃあ、ただの偶然？」

混乱した様子です。ミサキは「ごめん、私……行くね」と、タカネを残して自分の教室に去って行きました。

タカネは机の上の小鳥を見下ろしてしばし沈思しました。みんなが注目する中、こいつを処理して机から血を拭い去るのは余りに惨めです。でもそのままでは授業が受けられません。逃げ出したいと思いました。

そうこうするうちにキヨミとアイリが連れ立って教室に入って来ました。二人はタカネの中ですでに容疑者です。そんなことするの、そもそもユイの死の理由とタイキへの復讐の経緯を知っているのはミサキとアイリとキヨミだけですから。

「何、どうしたの、コレ」

アイリがまず、小鳥の死體を見つけました。知ってる癖に。

「可愛そう」

後ろから、キヨミが覗き込みました。

「この釘何？ 生體藁人形じゃん、これ。タカネどういうこと」

「私がやったんじゃないよ。来たら、あった」

「いや、それはそうだろうけど。何で。しかもタカネの机の上にあるのはなんで」と、アイリ。二人とも嘘を吐いてるようには見えませんが、一見何か考えてる人は実は何も考えてなくて、何か考え込んでるように見える人は実は頭ン中が白紙って言いますよね。ならば嘘を吐いてる人に限って、きっと、嘘なんて吐いてないみたいに見えるはずです。

「二人がやったんじゃないの」

タカネは単刀直入に尋ねると、二人は顔を見合わせました。

「私、家からキヨミと一緒に来たし、起きたの八時半だし。起きて、パパとママと朝ごはん食べて、それからキヨミが迎えに来て」

アイリが弁明しキヨミも頷きました。

「そうだよ。私たち一緒に學校来たんだから。まあ」とキヨミは悪びれるのでした。「疑いたくなる気持ちは分かるけどね——ミサキじゃないの」

「ミサキは、私と一緒に来たの」

そのとき前の扉から先生が入って来て、教室の中に散乱していた制服たちがそれぞれのおのの席に着きました。キヨミとアイリもタカネの許を離れました。タカネは、思わず小鳥の屍を素手で掴み、机の中に押し込んで、鞆からノートを一冊出して机の上の血の池の上に広げました。先生の話聞きながら、タカネは小鳥の首に結びついていた糸を手繰ってみました。端に小さなカードが添附してありました。

貴方は自らの

そう書かれています。

小鳥を殺した人がカードを添附し、従ってその文句を書き附けたのに決まっています。「自分の」って何でしょう。省略を補うとすれば、「自らの意志を」でしょうか。自分の意思で、タイキを殺せと言うことでしょうか。それともアイリたちの言いなりにならずに殺人を思い留まるべきだったことでしょうか。前者だとしたら容疑者リストにはアイリも、キヨミも、ミサキも、もしかしたらミサキの彼氏（ユイの兄）も含まれるでしょう。否、

ミサキの彼氏は自分でタイキに復讐しようとしてるんだからリストから外れます。後者だとしたら、容疑者リストには——誰も挙がりません。ことの成り行きを知っているのがアイリ、キヨミ、ミサキその他だけであり、彼女らは皆タカネがタイキを殺すことを望んでいるのですから。第三の可能性もあります。メンバーの中の誰かが秘密裏に、タカネに密かシンパシーを持っているか、あるいは、このメンバー以外の誰か第三者がことを知ってタカネを制止しようとしているか。

そんな優しい、他人の運命に心から興味を持つような人間なんて人間の中にはいないはずです。だから第三の可能性は、消去。第二の可能性も勿論切り詰めねばなりません、オツカムの剃刀です。誰も該当者がいないのですから。

タカネは容疑者をアイリとキヨミに限定しました。二人で示し合わせて嘘を吐いているに違いありません。ミサキはタカネと一緒にいたわけですから。ある程度の確信を持って昼休み、タカネは二人を問い詰めることにしました。

「私の意志って何のこと」

「何？ 意思って」

ソーセージを頬張りながらキヨミが怪訝な顔を上げました。

「惚けないでよ。判ってるはずよ」

「突然現れて意思がどうか、分かると思う？」と、アイリも箸を止めました。惚けているようにも見えるし、裏心ないようにも見えます。

「私は——タイキを殺さなきゃ二人の気がおさまらないんだったら。だけど、本当にそうなの」

「本当について？」とキヨミ。

「だから……本当に、タイキの死を望んでいるのかしら」

タカネはそう言い切って、二人の顔を順に眺めました。アイリが、また弁当に箸をつきました。

「それはおかしい」キヨミが考えながら言いました。「タイキの死そのものじゃなくてタカネがタイキを殺すことが私たちの希望だから」

キヨミは理窟が通っていないけど、理窟なんて現実世界じゃ〇、一パーセントも通用しないのです。

「私があいつを殺すこと？ それが、復讐と——タイキがやったレイプへの復讐と、どう関係あるの。罪のない小鳥まで……こんな陰湿なマインドコントロールずっと続けるつもり？ タイキが死んで、私が逮捕されてテレビに出て、それをみんなは嗤って見たいって言うこと？ 何が楽しいのよ」

「だから」キヨミが答えました。「小鳥のことは私は知らない。それ以外はタカネの勝手な妄想でしょう。誰かが殺さなきゃいけないんだよ。お前しかいないんだよ。名誉ある役目を選ばれたのよ」

箸を口に運びながらアイリも頷きました。

そして、放課後です。

アイリと連れ立って教室を出たタカネは、下駄箱を開けて大変なものを発見しました。女子高に在りがちであると言われるビアンなラブレターじゃない、また小鳥でした。しかも今度は何匹も何匹も首を糸で繋がれて——まあ、少なく見積もって四十羽はいるでしょう。それが靴箱の中、タカネの靴の上にみっちり詰め込まれているのです。すべての首に左から釘が打ち込まれています。すべての小鳥の首にです。鮮血が流れ、靴の中に溜まっています。タカネはアイリと顔を見合わせました。

アイリはさっきまでタカネと一緒に授業を受けていました。キヨミも同じです。四十羽の小鳥の首に釘を刺すなんてしてる時間はなかったのです。

小鳥の青に、血の赤が振動して目がチカチカしました。

「ね、私は違ったでしょう」と言い残してアイリは一人で帰りました。タカネは糸の端を摘んで小鳥を中庭のソメイヨシノの下に捨て、靴を水道で洗ってハンカチで拭き、まだ濡れてるその中に足を突っ込んで校舎を離れました。

校門のところに凭れている女の子がいます。ミサキでした。

「俟ってた。ちょっと話そう」

ミサキはそう言ってタカネをマックに誘いました。

ドリンクを盆に載せて雑居ビルの二階に上がると、〈窓〉の光の中に包まれて、ユイの幻が、あの日彼女と最後に会ったとき座っていた席に座って、今日も文庫本に目を落として——でもそれは同じうちの高校の制服を着た、別の女の子なのでした。知らない顔だから、多分、一年生でしょう。

「ちょっと、打ち明けたいことがあって」ミサキは椅子に落ち着くと開口一番、そう切り出しました。「ところでタカネ、本当に、キョウスケの代わりにタイキを殺すつもりなの」ミサキは店内を見回して、「殺す」って言う単語のところで聲を潜めました。「私信じられなくて。タカネがやってくれたら私も助かるんだけど」

「ミサキの彼氏に思い止まらせるすべはないの」タカネは悲しげに目を細めてミサキに問いかけました。「もし彼が自発的に復讐なんて莫迦げた真似を思い止まったら手を汚す必要がなくなる」

「何度も説得したんだけど、。決心は固いみたい。彼、よっぽどシスコンだったらしくって。ちょっと妬けるけど、言うこと聞いてくれないの。それでも今でも諦めずに説得、続けてるけど」

「頼むよ。諦めちゃ駄目だよ」

「でもさ。例の、今朝の小鳥のことなんだけど」

「あれね、続きがあった」と、タカネはさっきの下駄箱の顛末を説明しました。

「そう」とミサキはぎこちなく目線を逸らして、少し黙り、小さく溜息を吐いたのでした。「こんなこと言ったら私が一番疑われるかもしれないって分かってるんだけど、タカネのこと信じて打ち明けることにする。何で小鳥の死體を見たとき、私が驚いたのか。約束してくれる？ 私を、その、疑わないって」

「分かったわ。約束する」と言いつつも依然としてタカネはミサキのことを一番疑っているのです。もう少しで何か情報を得られそうな好機に正直にやっぱり場合によってはあなたを疑うなんて莫迦正直を言って相手の意気を挫く手はないのでした。下駄箱の小鳥に関してはアイリとキヨミの嫌疑は限りなく薄いけれどクラスが違うミサキなら、授業がもし早く終わっていたら出来るかも知れません。朝の小鳥だって、ミサキがやって駅に戻ってタカネを待ち伏せてアリバイを作った可能性は十分考えられるのです。

「そう、ありがとう」ミサキはちょっと安心して表情を崩し、ドリンクに口をつけました。

「あのね、小鳥の殺され方、首を吊られて左の首を突き刺されてたでしょ？ あれ、ユイが自殺したときのやりかたと同じなの」

「どう言うこと」

「だから……ユイもああやって、アイスピックで頸動脈を突き刺そうとして——ほら、ユイ、左利きでしょ？ 首のどっち側を突き刺したかは私は聞いてないんだけど——これ、みんな彼氏に聞いた話なんだけど——多分絶対左側だったと思うのよ。何回か突き刺したんだけど、運悪く——って言うか、頸動脈には命中しなかったらしく——ほら、ちゃんとした解剖学的な知識持ってる人でも自分で頸動脈を貫こうとすると、鏡を見て狙いを定めてそれで二三回刺してそれで一回ぶつかるかなって程度らしくって。五個から六個、ユイの首には突き刺し傷が残ってたのね。死ねないからユイ、部屋の電気のとこに電気コード

引っ掛けて、それで首を吊って死んだの」

「そう。ふうん、そうだったの」

「うん」ミサキが頷く。「同じでしょう。あの小鳥と。それであれを見たとき、私吃驚しちゃって。ユイが——ユイの怨念のメッセーじなんじゃないかって……莫迦みただけけど、本当にそう思ったの。ユイの靈魂がまだこの世に残って彷徨ってるんだって」

「その話、他に知ってるのは」

「いないはずよ。ユイの家族と、それから私以外には。兎に角、アイリやキヨミは知らないはず。だから彼女たちが犯人だとしたら……それこそ怖いわ。そんな偶然の一致ってある？」

ミサキは本当に怯えているようでした。嘘を吐いているようではありませんでした。

「それ、本当、確信ある？ キョウスケ君がアイリに話したとか、他の……ユイのお母さんとかお父さんが」

「ないわ」ミサキは確言しました。「あんな忌まわしい死に方、家族の人が他に漏らすわけない。すごく、隠してるんだよ。私だって、キョウスケと付き合ってたから……その」ミサキは口籠り、タカネの目に自分にかけられた疑いの色を認めて思い切った言うのでした。「寝台で、話してくれたの。そんなでもなければ、私だって聞き出せなかったと思うわ。それにね、もう一つ」とミサキは印象的な逸話を付け加えました。「ユイの遺書って言うか、短いダイニング・メッセーじみたいなものが見附かってるらしくて。私よく覚えてないんだけど、そこにね、鳥についての言及があったらしいの。『人間の言葉を話す奇跡の鳥』を見たとか、何とか。不気味でしょ。そういう気持ち悪い話って、実際にはよくあるんだろうけど、遺族の方は隠したがる傾向があるからお葬式でも言わないだろうし、私の話が信じて貰えないって言うんだったらそれで仕方がないけれど。でも、それがさっき私が驚いた理由だから」

次の日曜日はまた、バッグを口実にリョウと会うことになっていたのでしたが、もう新しいシオルダー・バッグを買っちゃったし、それにタカネは携帯がない生活に慣れつつあるようでした。

「行ってきました」と聲をかけるタカネに何処にとも聞かず居間で日曜美術館を見ている父を背にいそいそと家を出ると、今日も快晴でした。

路上、白い小猫がブロック塀から飛び降りて道の真ん中に蹲りました。暑そう、陽炎が立ちそうな程の陽気でした。小猫を白い帽子を被ってグリーンのシオルダー・バッグを肩に掛けた女の子が撫でていました。まるで自分のペットみたい——あのバッグは、見覚えがあると思ったらタカネが持ってるのと同じでした。渋谷で買った縫いつけの悪いやつ、あいつが何時までも返さないものですから。柄が気に入ったから等ではなくて、単純にファッション誌コーナーの立ち読みで開いた頁に載っていたバッグの中で店の道順が辿れたのがそのバックだけだったのです。考えたら終わりと言うか、自分の美的センスにまったく自信がないと言うか、兎に角プライドを持って自分の趣味に引き籠るなんて自分の周囲に自分より醜いものがないという現実には直面した人間の防衛反応、汚い顔を余計に歪ませる行為だとは思えないものでした。バッグの女の子が立ち上がりました。白いワンピース、細かい縮緬地の綿が心地よく太陽の光に透けました。同じなのはバッグだけではありませんでした。髪の毛の長さも、質も、タカネと同じなのでした。歳も同じくらいでしょうか。近寄れば近寄るほど似ている……心臓が高鳴りました。カメラの絞りを調節するみたいにフワッと明るくなって周囲が真っ白になったかと思うと、誰彼時みたいに暗くなるのです。すごく長い時間がたったみたいないな気がするのに、イブキの並木の位置が動いてないのです。

多分、二歩も進んでなくて時間が物凄くゆっくり進んでいる——違う、逆にタカネの脳髓が物凄い速度で回転してるのです。時間を得している気分でした。不意に空間が歪み始めました。空気が水になったみたいに小波だって、渦巻いて、あちこちに濃度や透明度が違う溜まりを作っているようでした。此処は「境界」なのでしょうか。白いワンピースの女の子が振り向くと、もう表情も確認できるくらいにまで近づいていたのでそれがタカネ自身であることがはっきりと分かりました。そして、消えました。

残された白い猫一匹、ニャアと鳴き、頭の芯が痛みました。女の子が炊かん自身だとしたら、タカネが今会ったのは「鏡」に違いありません。タカネは不安の渦に飲み込まれました。そんなの聞いてない、「境界」の外で日常生活中にフラッシュ・バックするなんて。そのまま狂ってしまうのだろうかと思うと、背筋を恐怖が駆け抜けるのでした。小學生の頃、保険體育の時間に見せられたシンナー中毒で脳が溶けてしまった非行少年のドキュメンタリー・ヴィデオを思い出しました。最初はほんの出来心から——タカネ自身がこんな目に会うなんて！ 耳の奥で誰かが喋っている、遠く、微かだけどアクセントの妙にはっきりした聲、ちょうど周波数のあってないラジオみたい。あのときタカネは嗤いました。廃人になって社会の外にフェイド・アウトした非行少年を見て、友達と一緒に嗤ったのです。脳が溶けた男の子にこれっぽっちでも共感するなんて子供のタカネには無理であり、致し方のないことでもございました。

風が吹く。風。

違う、風ではありません。風に吹かれてるわけでもないのにタカネの體は揺らいでいました。體の表面の境界が緩み、曖昧になる。溶ける……！

そう感じとった瞬間、タカネはタカネの外にいました。外にいて、外そのものになって。タカネの視界の中にタカネがいて、そしてタカネ以外何もないのです。しかも顔も頭のとっぺんも、胸も背中も、脚も足の裏も全部、襖の裏側まで全部一度に見えるのでした。タカネは絶叫しました、口がないから——口は目の前のもう一人のタカネのものだから、心の中で目一杯見えているそれがタカネではなくなり、タカネがいた空隙に風景が広がりました。よく知ってる情景、家の前、さっきいた場所、そう、タカネは同じ場所に立っていました。猫は、もうおりません。タカネは胸を撫で下ろしました。あのままあっちの世界に行ってしまったらどうしようかと思いました。今まで、タカネは大嫌いな世界も、大嫌いな自分も消えればいいとそればかり祈って生きて来たのに、本当に消えそうになる怖さと言ったらどうでしょう。二度と思い出したくもないし、二度と起って慄しくありませんでした。兎に角、「境界」にはもう二度と行かないと決意して先に進む以外、タカネに取る方策はありませんでした。

電車に乗って新宿で乗り継いだ丸ノ内線の地下鉄の中でタカネはミサキを見ましたが、キョウスケが横にいたから、話しかける気はしませんでした。それに自分がおかしくなり始めているらしいことに戦慄していて他人と話す気分にはなれなかったのです。向こうは気づいておらず、座席の隅っこに並んで掛けていて、タカネはその背後の扉際に立っているのです。

ミサキとキョウスケが一緒にいるところを目撃するのは初めてでした。電車の音にかき消されそうだけど、それでもこんなに近くににいるから話し聲が断片的に聞こえます。

「……華柄鏡面體……」

「……お昼は……後で？」

今ブンカムラのシアター・コクーンでやってる、『華柄鏡面體』という演劇の話をしていうようです。タカネもお父さんに誘われたけれど、家族と外で歩く気にはなれませんでした。タカネがそう言ったら、お父さんは寂しく一人で見に行きました。それにしても丸ノ内線では遠回りですから、他に何処か寄るところがあるのかも知れません。電車が駅に

止まって静かになりました。

「分かった、そうしょ。で、何が食べたいのよ」

「だから、俺はどうでもいいって腹減ってないし。お前、店もう決めてるって言ってなかったっけ」

時計を見るともう十一時を回っていて、タカネはお昼をリョウと一緒に食べる予定だったのを想起しました。今日は、そういう予定なのです。

「だからさ、お兄ちゃんが言い出したんじゃない……ビーフ・ストロガノフ……」

自動扉が開まってちょっと後ろに滑ってからエンジンが掛かり、ゆっくりと電車が動き出すと、二人の話し聲はまた聞こえなくなるのでした。「お兄ちゃん」？　こっそり振り返ってみると、やっぱり、ミサキの横にいるのはキョウスケです。確かにキョウスケなのです。

「……何で……黙るの？　お兄ちゃん……はつきりしなさいよ……」

また言いました。お兄ちゃんって言いました。もう一度振り返って確かめてみても、ミサキとキョウスケ、他に誰もいません——。キョウスケって、ミサキの兄なのでしょうか。彼氏ですよね、だって、タカネは初めてデートしたときのこと、キスしたときのこと、克明な報告を聞かされたのです。正確には、キスの話のほうが先でした。初デートの話はずっと後になって聞かされたのです。でも馴れ初めの話とか、その他諸々、あのお喋りなミサキは何も話してないし、何か二人の関係で腑に落ちないところは確かにあったようです。だけど、きょうだいとしたら、それはそれで意外ではありませんか。大體、高校生にもなる女子がお兄ちゃんとフェルメールといった性向はミサキは持っています。それに、きょうだいとしたら何でそれを隠さなければいけないのでしょうか。——近親相姦しちゃったから……？　なるほど。

それが一番自然な解釈でありましょう。勿論友達として複雑ではあるけれど、今のミサキの「お兄ちゃん」の一言は聞き間違ではないのでした。いくら自分の精神状態が信用できない状態だからと言っても、幻聴と本当の言葉との違いくらいは区別できます。勿論、キョウスケが変態で、ユイに抱いていた近親相姦的願望を願望を彼女であるミサキに投影し、自分に対する二人称として「お兄ちゃん」を強要しているという可能性も考慮に入れなければなりません。だけど、ミサキの口調は余りに自然でしたし、大體ミサキはそういう男の趣味とかに合わせるタイプの女ではありませんでした。それに、状況が状況です。近親相姦なんて何処でも転がってる話だろうしはつきり言ってどうでもいいのですが、小鳥の死體の一件もあることだし、タカネは二人の周辺を調べたほうがいいような気がしてきました。何か秘密があるのです。兎に角、二人の関係を洗ったら何か分かるなら、分からないままよりは分かった方がいいわけです。

今日はタカネの方が先に、東口の待ち合わせ場所に着きました。

まだ昼間なのに、やっぱり化粧の濃い人たちが多い。お勤めですかあ。この街は馴染めないし馴染みたくもありません。

「お俟たせ。どしたの？　元気ないな」

「うん。ちょっとね」

ハイブランドのスーツに身を包んだイチドウリョウが周りの人混みを泳ぐタカネの視線に気づきました。この男はいつもこんな服装で外出するのでしょうか。男なのに、髪が綺麗だ、とタカネは思いました。

「キャバ嬢が珍しい？」

「それでも……まあ、家の近所にはいなくなっただけで。いて悠しくないけど」
「いたら厭か？ 差別する？」

タカネは無言で頷きました。

「差別とか、そう言うんじゃないけど。ってか、みんなブス」

「そうかあ？」

二人は地下道を歩き、地上に出ました。

「ブス。ブス。ブス」

「キャバ嬢は可愛いんだぞ。風俗嬢は、微妙だけど」

「え？ 風俗嬢もいるんですか？ どう違うの？ キャバ嬢と風俗嬢って」

「キャバ嬢は、名字がある。風俗嬢は、名字がない」

「ふうん。風俗嬢よりキャバ嬢のほうが可愛いのか？」

「風俗嬢は、ブスでなくちゃ」

「えー、ブスじゃなきゃいけないの？ 綺麗を売る商売なのに」

「それは、表面を掠っただけの理解だな。風俗嬢は、やっぱブスじゃないと醒める」

「あ、そ」力説しようとするイチドウリョウをタカネがそっけなく遮りました。「そうだ、本物の拳銃ってどうしたら手に入るか知ってますか」

「ネットで売ってるよ。何に使うの？」

「ちょっと。あったら便利じゃないですか。『拳銃』とかで出てきますよね」

「それは無理。その手のサイトは検索ロボット拒否してるから。例えば」と言っただけはメモ帳にURLを書き、タカネに渡しました。

「B A H A Rですか。ボールって読むのかな。ありがとう。今夜探してみます」

「此処でいいか？」

二人は地下の喫茶店に降りていく階段の前で止まりました。

今日はスタバとかじゃなくて、もうちょっとましなところで、従ってその店名をタカネは知りませんでした。店入ったところで注文するんじゃないかと、席についてからボーイが聞きに来る喫茶店。

「あれ。セミナーじゃないんですか」

「セミナーは、都合により中止」

「どうしたの？ 何があったんですか」

「ああいや、タカネちゃんは気にしないでいいから」イチドウリョウはそっけなく取り繕いました。

店内は静かです。奥のほうの席で、柄の悪い感じのおじさんたちが何か喋っています。他に客はいないようでした。冷房が効いていました。

心なしか天井が傾いている気がします。そう言う設計なのかも知れませんが、タカネの目の錯覚かも知れません。真ん中にぶら下がったシャンデリアがあちこちの鏡に映っていました。黄色い輝き。

「暑いね」リョウが卓に肘をついてタカネの顔を見詰めました。

「いや、涼しいですけど」

「何で俺がタカネちゃんをへ境界」に連れてったか、判るか」

タカネは首を振りました。

「そうか。実は俺にも判らない。こんな話、するの何なんだけど、俺は普段は、人をへ境界」に誘うことはあっても、会費や契約費の面倒までは看たりしないたちなんだぜ」

「らしいすね」

「何か、あの日、君のバッグがひったくられて、それで出逢ったわけだろ？」
「はあ」

「運命的だと思う」

「あの、私、カプチーノで。何か此処のカプチーノ美味しそう」
タカネが反対側から見ていたメニユーの寫眞を指差しました。

「ゆっとくけど、俺、減多に女の子にほれたりしないんだぜ。これでも普通の人よりは、目、肥えてるつもりだし」

「はいはい。あの、ところでバッグは？」

「ごめん！ 今度持って来る」

「へえ、また忘れたんだ」タカネの頬に冷たい嗤いが浮かびました。「携帯ないと困るんすけど。宅急便で送って貰えます？ 住所渡すんで」

「今度！ また逢うだろ？」

「ええと」タカネがリョウの目を見返して単刀直入に訊ねました。「女子高生がそんなに珍しいですか？」

われながら、クルーシャルな質問です。

「そんな、女子高生が女子高生珍しいとか、そういう発想自分で持つもんじゃないよ」

「悪いですけど、兎に角私、未成年なんで、あんまり馴れ馴れしくしないでください」

「俺が未成年と付き合っちゃいけないなんて法律、ないだろ？」

「ありますよー」

「マジ？」

「調べといたほうがいいですよ、絶対」

ボーイが持ってきた珈琲に早速口を付けました。熱い。

「いや、通常の成人男性は駄目かも知れないけど、俺はいいの」

「はい？ あなた、何者なんですか？」

「俺？ 俺は、ヨウセイ」

「妖精？」タカネが露骨に眉を顰めます。「随分可愛くない妖精なんですね」

「失礼だな」

リョウは自分の珈琲を無視したまま、タカネを見詰め続けるのです。

「なあ、損はさせない、俺に抱かれてくれよ」

「……」タカネの目が本当に点になりました。「ゴメン、嗤っちゃうから」

「もしかして、処女？」

「ちょっと、マジ、うけるんだけど」タカネは嗤いました。頷いた方が自分の価値が高くなるのでしょうか、それとも首を振った方がいいのでしょうか、あるいは黙って嗤っていた方が？

「じゃないだろ、ってか、そんなのどっちでもいいんだけど……いや、どっちでもよかないか」などと言いつつリョウはタカネから目を離しません。手が、タカネの髪に伸びました。振り払おうかとも思ったけど、撫でられるがままにしておくのでした。

あちこちに反射したシャンデリアが綺麗でした。宝石箱をぶちまけた、お星様に囲まれて、宇宙空間を漂っているようです。とける、體の芯から、とけて行きます。タカネは狗でした、考えるのも、考えて断るのも、面倒臭い。

こんな男の言うことを聞くのが嬉しいわけではありません。まして、抱かれないわけでも。単に、答えるのが面倒臭いのでした。

卓の上にあるものが、とけて行きます。タカネを包む部屋の空間も、シャンデリアの燐きも、とけて行くのです。いま、タカネの世界には二人しかいません。自分と、リョウ。自分の息遣いだけが耳に籠って聞こえるのでした。

この男は、タカネの心のうちをどれくらい読んでいるのでしょうか。もし完璧に分かっているとしたら、即座に、じゃあホテルって言うはずでした。いや、目で促すかも知れま

せん。今のタカネなら、彼の目の動き一つで全てを承諾できたでしょう。

だけど、リヨウはタカネの髪を掻き回すばかりで、何も言い出そうとしないのです。目附がさっきより褪めてる気さえしました。違う、絶対今タカネじゃない他のこと考えています。醒める、世界が冷めて行きます。世界はそんなに冷たい、タカネの心は、タカネの體の中はこんなに燃えてるって言うのに。

何か言いたいんだけど、伝えたいんだけど、聲が出ないのです。弱ります。頭の中に、言葉さえ湧いて来ないのです。無口な人は頭の中では沢山喋ってるものだってよく言うけど、あれは嘘ですね。頭の中にだって、言葉はないのです。ただ感じるのは、胸の鼓動とこの體温。伝えたいのに。タカネは女でして、高校生とか、未成年とか、処女とか、そんなのどうでもいいのです。

なのにリヨウはついにタカネの髪から手を離し、よそ見して珈琲を飲み始めました。孤独と虚無。タカネは苛ついたけど、それがはつきり態度に出ません。女優のプライドはどうした、って感じです。だらしくリヨウの視線を追いました。タカネは狗なんです。タカネを飼って、ワンワン！

今、世界に、タカネとリヨウ、二人っきりです。早くしてくれないと、テンションが落ちてしまいます。また意識が混濁して、日常のルーティンの中に埋没して――。

「ねえ、私って、綺麗かな」

やっと掠れた聲が出たけど、それが最も効果を期待できる発言であったかどうかは自信が持てません。

「綺麗だよ」リヨウが頷きます。

通じました、言葉が。だけど、何か違うのです。言葉は通じたけど、それと引替えにもっと本質的な何かが切断された感じでした。冷房が効いてるはずなのに、涼しいはずなのに、額に汗が噴き出して来ました。お化粧が落ちていないか、本当に綺麗かどうか心配になって来ました。限界。

「ねえ、何か言うことないの？」

リヨウはキョトンとした顔をしました。

「言うことって？ だから、綺麗だよ」

「じゃあ、何で私を此処に誘ったの？ 何で、誘ったの？」

真剣に問い詰めると、リヨウは口籠りました。

「別に――逢いたいって思っちゃ、駄目か？」

「もういい。出ましょ」

とどめようとするリヨウを無視してタカネは立ち上がり、ポーチを手に化粧室に向かう。当面の手直しは出来たけど、ひたすら汗が噴き出して来ました。今日は終了です。

戻るとリヨウが会計を済ませて俟っていました。

「おい、どうしたんだ？ 悪かったよ、もうちょっと一緒にいようぜ」

「ごめん、悪いけど」

もううっとうしいから、と出てきた言葉を喉許で抑えました。

「まじ？ 帰る？ そっか、じゃあ……また、連絡するから。バッグ返さなきゃな」と素直に引き下がるところが、またうっとうしい。手を振って、そこにリヨウを置き去りにし、区役所前で靖国通りをわたって路地に入りました。アドホックの前から紀伊国屋本店の前に抜けるビルの中の通路に入ったところの左手にあった、「加賀屋」って言う店の前で立ち止まりました。ナイフと喫煙具の専門店であるようです。店頭にはインドのお香とかエスニックテイストなジグソーパズルとかが並んでいます。

ナイフのコーナーは右奥でした。大小の刃物が陳列された硝子棚の前に、「KNIFE E」って言う雑誌が積んでありました。中には刃渡り十センチくらいありそうなやつとか、

背にギザギザがついているやつとか、つまり殺傷能力を計算して設計された刃物も飾ってあるのです。誰かそれを買う人がいて、それを見込んで作った人がまた他にいるわけです。現実にか、妄想の中では別として、「殺人」を夢見ている人が他にもいるのです。そういう共同體があるのです。タカネはそれを確認したかったのです。もとよりそんなところで凶器を買うつもりなんてありません、流石に。身分証の提示を求められる可能性は大いにあるし、そうでなくても……よく分かんないけど、普通犯人はこんなところでナイフを買やあしないだろうって気がしました。捕まりたくないって言う結果論よりも、普通、まがりなりにも殺人を計画するような人間はって言う一般論の方が先。タカネは店を出て暗くて埃っぽい服屋とか、世界で最も小さいんでないかって言うような、通路の壁にへばりついたCD屋とか、あと、小っちゃいアメジストとかが中に埋まった巨大な岩石、ほら、何石って言うんでしょう。「耳をすませば」に出てきた例の少女趣味な物體とかアンモナイトらしき化石を打っている店。そう言うのを通り過ぎて、新宿通りの人混みに出ました。出たかと思えますと、人混みを嫌って紀伊国屋の横の階段からファーストキッチンの前に下りるのです。まあ、地下道も人が多いことには変わりないのですが。もしタカネがそのままタイキを殺してバレたら、リョウはもうタカネを抱いてくれないでしょうか。褪める、でももしかして、監獄の面会室に現れたりかって（防弾硝子。会話の内容を筆記してる人の背中）、想像しつつもそこまでの深い愛情は逆に鬱陶しいと言うのが本音。まあ、バレなきゃいいんだけどバれますよね。科學的操作網とかやつで。鬱ですよ。よく判んないんですけど。警察、鬱陶しいと思いました。だって、こっちにも都合ってものがあるわけですし、「殺人罪」は「殺人罪」で十把一絡げって言うのは余りに官僚的って言うか、露骨に白痴的って言うか、兎に角間違っています、人間が言葉に縛られるなんて。否、人間を縛る言葉が必要だってことは認めましょう。でもその言葉に乗っかって、狗みたいに支配されて、借り物の権力振り回して正義の味方&法制度の番人面したやつらがこんなにいるってのが、職業選択の自由とかそういうの通り越して、はつきり言って悲しいのですよ。同じ人間として。タカネはいいけれど、親が可愛そうだと思いませんか？ 何も犯罪者の娘を十七まで育てるために、若い二人が出会って愛を誓い合ったわけではないのですよ。世間様に申し訳が立たないってもんです。科學は數學者の特権にして言語には空想しか出来ないと言うことでしょうか。

新宿駅に入っただけ、帰り道の山手線のホームに行く気が何かしなくて、ちょっと迷って中央線に乗りました。もう一回「境界」に行こうと言うのですが、そんな状態で行っていいのでしょうか。「鏡」様は受け入れてくれるでしょうか。嫌がられやしないでしょうか。だけどタカネは胸の鼓動をどうしようもなくて、そのまま家に帰るなんて無理なのでした。しかも、悲しいことにそんな状態を背負って他に行く宛てがないのが事実だったりするのです。携帯がないから、タイキには連絡取れません。取れたとしても受け入れてくれないでしょう。そう言う、生身の生々しい女を、女の牝の部分を受け入れられるタイプではありません。中央線の赤いシートに座った自分のパンツが意思を持って、ジンワリ熱を帯びたまま浮遊しようとしています。こら、駄目だよ。タカネは自分のパンツの中に言い聞かせるのですが、濡れてるかどうかまでは判然としませんでした。

気がついたら、タカネは「境界」の受附でカードを手渡していました。後ろを振り返ると、最初来たときは気づかなかった五階の方によっていく階段がちょっと気になりました。真っ暗で何も見えないんだけど、埃がたまった感じはしないのです。上に誰か生息しているのです。

待合室に通されると、週末の午後なのに誰もいないし繁盛してるのでしょうか、大丈夫なんでしょうか。此処まで来ると引き返せないと言う観念が妙に押し掛かって、もう「鏡」に寄せて来た期待よりも緊張感、怯え、後悔のほうが強くなっているのです。唾が鉄の味、

喰えない、喰おうとすると引き攣る、齒ががちがり鳴りそうになるのです。両手と頭の芯が痺れています。

タカネは左の壁に掛かった水彩画を見ました。フォービズムに影響を受けた若手の現代アーティストの失敗作って感じ……否、それはただのローシャッハテストでした。タカネも何かの本で見たことがあります。足元に生き物の気配がしました。ソファの下に何かいます。ゴキブリより大きい気がするし、鼠よりもまだ大きい感じ、って言うか、タカネは鼠が蠢くときの気配を知らないのです。意を決して、ソファの下を覗いてみました。

クリクリした目と湿った鼻が突き出しています。スター・ウォーズに出てくる小っちゃい宇宙人みたいです。可愛い、タカネは温かい體の下に手を差し伸べて抱き上げてみるのです。ハアハア息をしている、多分マルチーズです。しかし、何でこんなところに仔犬が？

番号を呼ぶ聲が聞こえます。勿論、タカネが持っている番号札の番号でしかありえません。タカネは仔犬をソファの上に戻して、カーテンの外に出ました。

前回と同じ注意事項を聞かされて「境界」に通されました。今度は三号室、左手入ってすぐの部屋でした。

誰もいませんでした。伽藍とした個室に、パイプ椅子が一つ。おかしいくらい安っぽくて嘘臭い部屋の雰囲気は前と同じでした。

「ねえ、いないの？」

タカネが呼びかけると、「——いないの？」と聲が答えました。

「ねえ、何処？」

「——何処？」

それはタカネ自身の聲の響きです。だから、いるのは自分一人です。じゃあ何で、聞こえてくる聲はタカネが発した聲じゃないのでしょうか。タカネが喋ってから聲が聞こえるまでのその遅れは何でしょう。沈黙。自分が分裂したみたいな感じで、喰える、おかしい。

タカネは、聲を出す自分と聲を聞く自分の中間、その「境界」にいるのです。

「ねえ、いるんでしょう？」と、タカネが思い切ってそれに聲をかけてみると、「分かった？」とあっけなく返事がしました。「久しぶり。確か二回目だね。何しに來たの？」

「何しにって、判ってる癖に」

後ろ手にアコーディオンカーテンを閉めました。思い切って誘おうとした瞬間、向こうから聲をかけてきました。

「触って」

だけど、それは勿論タカネの頭の中に響いてくる聲だけで、實體としては誰もいないのです。部屋にはタカネが一人切りです。

「いいの？」

「うん。今日は大丈夫な日」

「へえ、〈鏡〉にも安全日とかあるんだ」

「冷める？」

「ううん、大丈夫」

「私だって、あなたと同じ、女だよ。思い出して、私はあなた自身なんだから」

タカネはクスクスと肩を振るわせました。苦しいほど切なくて悲しいのに何故か空笑を抑えられないのです。

「あなたも女なの？ 私も女だよ？ じゃあ、レズだね。じゃあ、それじゃあ安全日とか気にするの、関係ないじゃん」

「一応、気にしてみた方が雰囲気が出るかな、と」

「そんな演出いらないんだけど」

話し合ってるだけで十分気持ちいいんだけど、タカネは自分のすぐ側にその体温まで感じるのに、手に触れることが出来なくてもどかしいのです。もし〈鏡〉が自分自身なのだとしたら、それじゃレズ以前、ただの自慰です。と、すでに自分の右手が自分のクリトリスを触っているのに気づいてタカネは嗤い転げるのでした。

〈鏡〉も、それを反響してクスクスと空笑しました。

「ねえ、お願い、出てきてよ。何処にいるの？」

「そんなに私を見たいの？ ウーン、仕方ないな。じゃあ、下を見て」

タカネが薄暗い足元を見回すと、床一面に大小の鏡の破片が散らばってるのが知覚出来ました。ちょうど、ミラー・ボールが無数の光を暗い床の上に撒き散らした、あの状態がありました。

「なにこれ！ どうしたの？」

「ちょっと」〈鏡〉は口籠りました。「前のお客さんに、乱暴されちゃって」

「それで割れちゃったの？ こんな、粉々に。ヒドイ」

「これで分かったでしょ。〈鏡〉はいつも、無抵抗だから」

「そう言えばさあ」タカネは込み上げてくる嗤いを一通り抑えて、ふと思いついたことを口にしてみました。「私、もうすぐ人を殺すんだ」

「相手は誰？」

「多分、私の恋人に当たる人」

室内に沈黙が広がりました。

「状況を説明してみて」と、深刻そうに〈鏡〉。

「そうだな。私の友達が死んだ。理由は、多分、謂わゆる強姦。しかも犯人は私の彼氏であると判明。これから、私は彼を殺すことになっている。復讐として。ねえ、おかしいかなあ」

「あら、いいんじゃない。どうして？」

「だってさあ、殺人って、罪なんだよ。私、警察に捕まっちゃうし」

「そんなの関係ないよ。少なくとも、こっちでは」

「こっち？ そっちって、どっち？」

「ほら、此処は〈境界〉でしょう？ こっちって言うのは、〈境界〉の、こっち側」

タカネは辺りを見回しました。その部屋に満ちた空間、それが〈境界〉。そしてタカネが——タカネの體が、つまりタカネの領土が、そのこっち。内側に広がるのは、タカネ自身の自由が広がる果てしない外部でした。しかし、その外部はタカネ自信の表面を覆う皮膚によって閉じているのです。じゃあ、〈境界〉のあちっつのは？ 何処でしょう。

「あなたは女優だったよね」

「うん」

タカネが嬉々として頷きました。

「そしてあなたは絶えず演技をしている。生まれたときからずっとね。思い出して、そうでしょ？」

「そうかも知れません」

タカネは熱く照らしつける白熱灯の明かりの中で、目を閉じました。

「だけどそれは、〈境界〉のそっち側での話。私は——つまり、〈境界〉のこっち側のあなた自身は、あなたの演技をずっと観劇してきた。生まれたときからずっとね。つまり、こっちではあなたはあなた自身の全てから解放される。だって、全部演技なんだから。嘘だよ。虚構だよ」

タカネは込み上げてくる空笑を抑えることが出来ませんでした。

「ね、おかしいでしょ？ あなたは女優なんだからそれに無意識では気づいてるはず。こっ

ちにきちゃえばいいんだよ、嫌になったら。そしたら、あなた自身の演技も、殺人も犯罪も、罪も、すべて舞台の上の絵空事として消え失せる」

「すべてかぁ。それも、何か虚しいものがある」

「むなしも何も、そこは演技の世界、云うなればテレビカメラの中なの」

「カメラの中？ カメラの『前』じゃなくて？」

「そうだよ、見て」

聲のほうを見下ろすと、床に散らばった鏡の破片に、一斉にタカネ自身の顔が断片となって映りました。タカネはその中の一枚を拾い上げました。タカネです。タカネが瞬きすると、指先にかざした破片の中のタカネも、それから床一面の百万のタカネも、一斉に一重の大きな目をパチパチ瞬かせました。

「みんな、私を見てる——」

「そう、これが、テレビの前のあなた自身。あなたの演技を凝っと見守っている」

「何でこんなに沢山私がいるの？ そして何でこんな沢山の眼に見詰められなきゃいけないの？」

「それが『女優である』ってことでしょ？ あなたは物心附いた頃から分かっていたはずよ」

それでもタカネは呆然として鏡の破片を見回しています。

「分からない？ どうして思い出そうとしない？ 強情ね」

突然のことです。〈鏡〉の聲が歪み、苛立ちを帯びるのです。脈絡がまったくよく分からないのですが、怒っているらしいのです。

「思い出させて上げる。子供の頃の、穢れなきあなたを。無理やりにでも」

タカネは真っ赤な光に包まれました。一瞬、タカネは自分が目を閉じたのかと思いました。瞼の裏みたいで、そこに透ける真っ赤な血潮みたいで、一面の赤。不意に、頬に、髪に、顔に強い風を受けて、タカネは自分が廃屋のビルの屋上にいるのを思い知らされました。赤は、空一面を覆う夕焼け雲でした。夕焼け雲なんていうと生易し過ぎる感じがします。タカネがいるのと反対側の隅に、五、六歳くらいの少女がいました。錆び付き朽ち折れた欄に凭れて、長い髪は風に流れて顔を覆っているのです。兎に角風がすぐ目目に砂が入ります。コンタクトが飛ばされそうでした。

「思い出した？」

耳のすぐ後ろで〈鏡〉の聲がしました。

あれが、私？ 聞き返そうとした瞬間、少女の姿が霞み、テレビの砂嵐になったかと思うと、消えました。

「降りて！ 早く！」

〈鏡〉の聲に突き飛ばされて、タカネは臍脂に錆び附いて下塗りの錆び止めが浮いた重い鉄扉を押して非常階段に飛び出しました。カァン、カァン、カァン、と高く足音が空の中に、タカネの内耳に響きました。錆びて剥がれた欄の塗装が掌を刺しました。下を見下ろしても、螺旋階段は果てしなく続き、大地は霞んで見えません。

「思い出せそう？ どう？ まだ？」

判らない、判らないから。お願い、教えて、私は何を思い出せばいいの？ 次第に、足音の間隔が長くなって行きます。心なしか、階段のステップの間隔が広がっている感じがします——否、それは勘違いで、逆にタカネの脚の長さが縮んでいるのです。背も低くなっています。タカネは必死で駆けながら自分の掌を見ました。幼女の、小さな掌。一際強い突風がタカネを包み、攫いました。

足音だと思っていたのは、目覚まし時計の秒針でした。

タカネは自分の部屋の寝台の中にいます。今、目を覺ましたところです。自分の部屋っ

て言っても子供の頃、小學校に上がる頃までタカネの一家が住んでいた南稚内の自分の部屋です。時計の音が耳の奥に響き、タカネの幼さを蝕み、生のままの感覚を錆び附かせ、腐らせ、硬化させて行きます。生まれ堕ちた瞬間から人間の老化は始まっているのです――。時計の音がし大きくなり、じんわりと滲み、溶けてタカネの體を包み、中に溶け込みました。それはタカネ自信の心臓の拍動でした。

無重力の暗闇に、幼いタカネは浮かんでいます。

目の前に浮かんでいるのは一體のテレビでした。画面が明るい、余りに、余りに鮮明な画像でした。

女の子が映っていました、高校生ぐらいの。タカネはそれが未來の自分自身であることを思い出しました。メビウスの輪のように振れた記憶の回路。ゆったりと、何処かの旅館の縁側風情の場所で映像のタカネは肘掛け椅子に落ち着いて屈託のない笑顔で何か喋っているのですが、音聲は継ぎないらしいのでした。〈窓〉から零れる木漏れ日に横顔が耀いています。身振りを交えて何か喋っています。白い木蓮のように美しい。激しく可愛いい！

「どう、思い出した？」

〈鏡〉の聲が響いて、テレビの画面が切り替わりました。川のせせらぎが聞こえました。川辺に咲いた、一輪の黄色い水仙の画像でした。水音が心地よい、と、また画面が変わり、
「何が何が何が何が何でも、花になること」とゴシック體でテロップが出て、テレビはぷつりと消えました。

はい？ 意味が分かりません。ところでちょっと、「何が」が多過ぎた気がするのはわたくしだけでしょか。

タカネはまたものの〈境界〉にいました。

「……今のが、そっち側の世界？ たったあれだけ？」

「そう。だけど、こっちが虚像なんじゃない。そっちのあなたの體が虚像なんだ。もう分かった」

もう分かった――その言葉は〈鏡〉じゃなくて、タカネが発した言葉なのでした。

「あなたにその統合された綺麗な體は似つかわしくない。床に散らばっている鏡の破片、それがあなた」

その聲を聞きながら、すでにタカネは自分が実態を失って行くのを感じていました。麻酔を吹き付けられたかのように皮膚の表面がフワリと麻痺し、対象を失ったその諸感覚が體の内側に向かい、表面が縋れてリボンのようなぺらぺらの紐になりました。目の前を、ちようど重力に逆らうような形で、薄桃色のビラビラした半透明の膜がフワフワと上昇して行きます。水中華？ 花びら型に加工された石鱗？ 兎に角、花卉であることに違いはありません。芙蓉でしょうか。季節柄ムクゲかも知れません。タカネ自身の體が、縋れて、解けて、花びらになって上昇して行くのです。不思議に、水の中みたい。すごく澄んだ、無菌状態の水。水はそれが清澄であればあるほど、澱沈んだ性を連想させます。タカネはそれがやるせない性の象徴となる以前、自分にとって何を意味していたのか思い出すことが出来ないほどでした。じゃあ、その花びらはやっぱり石鱗です。天井に達する前に、輪郭がぼやけて空中に溶けて行くから。そしてそれはみんなタカネ自身の體なのでありました。花びらの一枚一枚がものすごく薄いから、こんなに沢山溶けて行くのにタカネは自分が徐々に消滅して行くのをかなり長い時間に互って観察することになりました。でも、それもそのうちに終わりました。最後の一枚が微かに蒸散したかと思うと、後はただ現実そのものが溶けて行くだけなのでした。こっち側のタカネは液體になって床に零れ、澄んだエーテルの水溜になりました。

部屋の中にはかわりに〈鏡〉がいます。タカネの體を身に纏ったあっち側、〈鏡〉。そ

れをタカネは凝っと注視しています。もう體もないのに、従って眼もないのに、何処からどうやって注視していると言うのでしょうか。視界は不思議なほど平面的で鮮明でした。後にはただ、幼女の嗤い聲が響いていました。それが自分のものなのか〈鏡〉のものなのか見当がつかなかったし、つける力すら最早感じませんでした。タカネは、もう、いないのです。存在しないのです。

始めに在るのは言葉でも行為でも静寂でもなく通奏低音のような耳鳴りでした。呼吸と吸気との一致する規則で亢進は重なりあい、強制された忘却によって融合するのです。最後には心地よい疲労の中で軌道を外れた光輪がダンテ的に虚空に回転するのを見上げ、漸くすでに記憶となって退いたそれが全體としては生命の體驗であったことを知ることになるのです。皮膜であることに疲れたタカネはテレビの外に出るために枯死する方途を探していたのです。

そしてそれでお仕舞いでした。

お退屈さまで。物語はドンドン盛り上がってきておりますが、わたくしどものタカネ嬢は如何ですか？ プロットの失敗やわたくしの粗相があつて不愉快な点があつたかも知れませんが、もしそうなら、あなたに楽しんで戴けますよう万全を期している語り手のわたくしと致しましては遺憾の限りに存じます。

なになに、「もう設定が混乱してきた」？ タカネちゃん以外の名前は覚えなくて結構なんです。覚えてどうするつもりだったんですか！ リラックスしてください、物語の聴き方のコツは、気散じに徹することなのでございます。覚えて友達に自慢しようとしたり批評を書くために理解しようとしたりし始めると人生を棒に振ります。虚構を理解することなんて作者にだってきつと出来ないんだから。もし現時点でタカネの名前があなたの記憶に入っていないかったら失読症の検査をお勧めしたいですが、わたくしもキヨミとアイリの区別はついておりませんし、現実には人を区別する必要なんてないんです。それより、あなたの現実の生活に重なる部分を探して感情移入してみると、物語はその時間だけあなたの実生活を濾過してくれるはず。因みにわたくしは高校時代を思い出して音信不通になった友達や苦い初恋の記憶を蒸留しながら語ってありました。物語は個人的なものであり、個人的なものあつてこそその物語なのでございます。

物語は此処から一気にシリアスに、死生観を正面からテーマに据えて展開して行きます。生命と物語の夢見るものは同じ、永遠の存在であると存じます。わたくしの言葉も活字の配列も永遠ではありません。だからリラックスして、すべて忘れてあなたの世界について考えて。わたくしの物語は母胎、それを聴くあなたは羊水の中です。その外には何があるのか。外に出ることは何を意味するのか……。

眠っているんだけど、眠いわけではありません。タカネは青い液體の中にいました。羊水の中の記憶。お母さんの匂い。二つの鼓動。

瞼の裏に光が透過して名残惜しさを感じつつも、目を開きました。

タカネは自分が裸であることに気づきました。

正確には、ゴム製のマスク以外何も身につけていないのです。呼吸が出来るのは鼻と口を覆ったそのマスクから空気が送られて来るからでした。灰色のゴムが鼻梁から頬にかけてぴたりと密着しています。後頭部に引っ張って締める式のバンドが回っていました。そして口には蛇腹の水道管みたいなものが突っ込まれていて、その中からドンドン気持ちいい空気が送られて来るのです。

狭い。狭い、円筒形の水槽。曲がった膝を伸ばすことも出来なければ、腕を広げること
も出来ません。

水槽の外はどうやら医務室であるようです——と言うのも、目の前にストレッチが置いてあるから。多分タカネはそれに乗っけられて此処まで連れて来られたのでした。しかし、もし医務室だとしたら尋常じゃなく汚い医務室でした。青い液体と硝子壁の曲面の中からでは何とも言えませんが、壁の隅に蜘蛛の巣が張ってる感じがした。しかも和室です。

人がいます。若い女性が仮そめに急ごしらえされた博士だと思ったのは、愛らしいワンピースの上に大きめの白衣を着て分厚い眼鏡を掛けているからでした。他にもっと若い男女が二人いて、そっちは和服を着ていました。涼しげな羽織袴に、鮮やかな浴衣。けど不思議なことに、女の子には顔がないのでした。男の子の方は普通の人間、小柄だけど一重で精悍って言うか凛々しい感じなのですが、女の子はどうやら精巧に作られたアンドロイドでした。動きも何処かぎこちありません。

男の子と仮そめに急ごしらえされた博士が何か話しています。タカネは水槽の内壁を両手でパンパンやって、やっと気づいて貰いました。博士の方が水槽に近づいて側にあったラップトップで何やら操作すると、タカネの頭上で水槽の蓋が開きました。と同時に、水槽の内容水の水位が下がって行きます。タカネはお尻と両手兩足を使い、蜘蛛のように内壁に張り附いて何とか水槽の上まで這い上がり、そこから和服の男の子が立ててくれたペンキ屋さん風の折り畳みの梯子で外に出ました。

博士と目が合いました。

「どうも」とタカネが頭を下げると、男の子が嗤いました。こともあろうに、客であるタカネは莫迦にされているらしいのです。

浴衣のアンドロイドがバスタオルと着替えを持って来てくれました。近くで見るとたいして精巧に出来たアンドロイドではありませんでした。顔はのっぺら坊だし、皮膚は明らかにシリコン、動かなければきっと高級ダッチ・ワイフの風情だし、硬いナイロン製の栗色の髪は静電気であちこちに撥ねていました。

「じゃあ、着替えて貰うことにしまして」

博士は厳かにそう言って回れ右し、背中に手を回して部屋の隅に移動しました。否、もう十分見たでしょ、遅い、遅いですから。

着替えはパンツもブラジャーもなく鼠色の男物のジャージ、上下だけでした。タカネが着てきた服はどうなったのでしょうか。

「あの、服は……」

ジャージを身に着けたタカネが周りに聲をかけると、振り返った博士は溜息を吐いて露骨に項垂れ、沈黙してしまいました。一重の男の子が代わりに答えました。

「申し訳ありません。お洋服は〈境界〉の中でしょう。残念ながらこちらには取り戻す手立てがありません。それも含めまして」男の子は爽やかに嗤いました。「大変さやかではありますが、今回の事故の償い金を用意してございます」

「お金って——こういうこと、もしかしてしょっちゅうあったりするんですか？」

男の子はそれには答えませんでした。アンドロイドが熨斗袋を持って来ました。文房具屋に売っている熨斗の絵が始めから印刷されている安物です。中には万札が十枚入っていました。

「〈鏡〉も生き物ですからね」

男の子が呟く。博士が咳払いしました。

「申し訳ないことだと思っているのです。このような危険な実験に、あなたのように興味本位の若い方まで供されるなんて」

「実験？」

博士は頷きました。

「私の口からは、それ以上は。何分、囚われの身ですから」

囚われ？ 突然、さっき〈境界〉で消滅した瞬間の記憶がタカネの脳裏にフラッシュバックしました。あのとき、タカネは確かに一度消えたのでした。

「ごめんなさい、どうやって、私、あそこから帰ってきたのかしら。私はあの時、完全に消えました。完全に消えたのでなければ、気體か、少なくとも液體になった。その私を、どうやってそのストレッチに乗せて、この水槽まで運んで来たんですか」

「あなたの、レイによって」

男の子が答えました。

「霊？」

「いえ、〈例〉です」

「人間が、自分の存在と考えているものは、遍く〈例〉に過ぎないのです」博士が後を続けました。「あなたにとってのあなたの世界も、あなたのその體も。元々が〈例〉的存在なのです。根源的な意味や、普遍的なモデルなど、実は現実には存在していないのです。つまり、〈境界〉の、こちらにも、あちらにも。いいですか、さっき消えたあなたと現在のあなたは、〈例〉としては別物です。〈例〉は無數に、可能的には無限にあるからこそ〈例〉なのですから。でも、どちらもあなた自身なのです。だから怖がらないで」

その場ですぐには分からなかったけど、タカネはアンドロイドと男の子に導かれて日に焼けて赤茶けた襖を開き部屋を出ました。アンドロイドは部屋から出て来ませんでした。階段を下りながら、男の子が耳元で囁きました。

「あなたとは、きっと、また何処かでお会いするのではないかと思うんです」
はっとして振り返ると、相変わらずの爽やかな笑顔。

階段を下りた先はタカネが入ってきた〈境界〉の受附がある四階でした。受附の元気なスタッフは俯いたまま、目の前を通り過ぎてても無反応でした。タカネは一人でその先の階段を下りました。さっき〈境界〉で駆け降りた、果てしない非常階段を思い出しました。

——そうです、これは現実じゃない、フィクションなのでした。だからタカネは此処にはいないのです。

何でも、好きなように演技すればいいのです。そうです、タカネは〈例〉に過ぎないのです。「女優の仕事をしていない女優」なる状況の、一〈例〉に過ぎないのです。

中央線の吊り革に揺られ、タカネはダボダボのジャージのポケットに入れた熨斗袋を抑えました。十万円。高校生にとっては大金です。

何でタカネがあいつを殺さなければならないのでしょうか。復讐って、何の？ そもそも復讐は可能なのでしょうか。相手に例えどれだけの危害を与えたところで、自分がある時間、ある場所においてある状況の中で被った危害を相手に経験させることは出来ません。それなら、相手に自分の苦痛に対する関心を持たせることが出来たら、そうするだけの魅力を自分が手に入れたら復讐は成立するのかもしれない、決定的に遅れているのです。復讐は、つねに、すでに、手遅れなのです。どんなにムキになっても、意固地になっても、執着して意識した分だけ相手を喜ばせるだけ。そう言うことに絶望して、ユイは死んだんじゃないかったでしょうか。復讐に限らず、どんなコミュニケーションも言語的なものも、そうでないのも実際のところ不可能なんじゃないのでしょうか。みんな脳に組み込まれた遺伝子の台本を読んでいるだけで、これはコミュニケーションじゃない、それぞれが相手の顔を見ながら実は舞台の外に向かって諸聲を発している演技なのです。そう、これがただのお芝居なら、映画の撮影に過ぎないなら、スクリプトを書き換えて殺人って項目をなかったことにすることも出来るはずですよ。スクリプトを探さなきゃ。スクリプトは何処でしょう。マネージャーは。監督は？ 監督は何処か近くにいますはずですよ、だっ

てこれは映画なんですよ。違う、タカネにとって女優であることは現実なので、監督はいません。役になりきった女優に物語世界の外部が見えるわけじゃないかもしれませんが！ タカネ以外の脇役たち、ミサキやキヨミ達も新しい演出に巻き込む方法を考えるしかないようでした。

家に帰って冷蔵庫から麦茶をコップに注ぎ、自分の部屋に入って点けっ放しのパソコンに向かいます。「境界」をキーワードにググってみると、「境界例」、ボーダーラインって言うのが沢山出てきました。境界例って何だっけ、神経症と精神病の境界のことでしょうか。リョウに貰ったメモのURLを見ました。B A H A R へようこそ。自動翻訳したみたいな変な日本語です。IPアドレスは元々特定の国に管理されないように配慮して細かく分割してばら撒かれているのですが、追跡している人たちが作ったデータ・ベースが回っているので各国語自動対応のウェブ・ページを作るのは意外と簡単なのです。読み難いのでタカネは英語に切替えました。各国製のハンド・ガンからP S GやレミントンM 2 4 A 1などの狙撃ライフルまで一通り揃っているようでした。タカネは扱いが簡単そうな拳銃を探しました。

タカネが選んだのはジェリコ941でした。「これ、使い易そう。ジェリ子って感じ」チェコで開発されたC Z 7 5 がイタリアでT A 9 0 を生み、それがさらにイスラエルでジェリコを生んだと言うことでした。941の由来は、*Gmn Parabellum* と *41AE* の二種類の弾丸が使用できるからとか。タカネは申し込みフォームに住所を記入し、すぐに近所のコンビニに走って「境界」で貰ったばかりの十万円を入金して来て注文確定を送信しました。日本に保管場所があるらしく、拳銃が届いたのは次の日でした。

明細書をメールしたと表示が出たのでアウト・ルックを立ち上げると、新着メール、六通。メールを開けるのは、いつも力が要ります。でも一通も来てなかったらそれもまた、寂しいものですが。メールを見るのが怖いというのは多分、タカネの精神の不健康の証拠でした。

何処からともなくひっきりなしに送られてくるD M 四通、幼稚園の頃の幼友達から一通、最後の一通は……何でしょう。

最近のタカネについて思ったこと。

最近のタカネさあ、ちょっと行き過ぎじゃない？

そりゃ最初にタカネのこと知ったときは、自分が女優かもしれないなんていう可愛い妄想を抱いてる

普通の女の子かもしれないと思ったさ。

逆に言うと普通の女の子だからこそ、興味を持ったんだけどね。

だけど、（笑）。

私を怒らせたなら、知らないよ。

この人誰でしょう。「私」と言うからには女の人なのでしょう。学校の友達のエピソードも思いますが、友達は誰もタカネが女優だって言うことを知らないはずでした。それとももうみんな知ってるんでしょうか。タカネの心の中まで全部監視カメラで見透かされて、晒されて、そう、例えばタカネの知らない闇ブログとかでタカネの私生活が全部晒されていて、それを通じてみんな知ってたのでしょうか。知っているのに知らない振りをして、

嗤いものにしてたのでしょうか。女優であるってこと、妄想だとか何とか言って。本当なのに。本当に女優なのに。悔しい、深刻に悔しいタカネでした。胸のそこからフツフツと込み上げる悔しさは何でしょうか。この人が最後に書いている、「（笑）。私を怒らせたら、知らないよ」って、そのことを仄めかしているようにしか思えないじゃないですか。一度そう思い込むともう本当に、そうとしか思えなくなって来るのでした。

タカネは人生最大のピンチを迎えているのかも知れません。

タカネは寝ることにしました。部屋に一人、何処かに仕掛けられている（ハズの）監視カメラに監視されながら、布団の中に潜り込んだのです。せめて眠りの中までは、誰も侵入して来ないことを信じて。

翌日、起きたときのタカネはそれまでとは違っていました。世の中を生きるときの基本的な前提、初期設定値の一つが書き換えられた感じです。昨日までのタカネはタカネのプライベートのこと、とくにタカネの心の中のこと、周囲の人、例えば、今電車に乗っている、それで回りにいる女子大生やサラリーマンは完全に知らないという前提の下に生きていました。それはそれで一つの仮説に過ぎません。一人の社会人として人混みに紛れて生きていく上では必要となる仮定です。今日からのタカネは周りのみんなが自分のことを知っているとは仮定しています。それも暫定的な仮定に過ぎません。周りの誰もタカネがそういう仮定に立って行動してるなんて知らないし、知ったとしても何も文句は言わないでしょう。でもタカネ本人にしてみれば大きな違い、殆んど時間概念の変容ともいえるくらいの変化だったのです。私は、見られている、ミラレテイル、と言う。

それはタカネが女優という生き方を選んだことによって背負い込んだ業のようなものなのかも知れません。実際タカネが今のこの状況——ミラレテイル——を何故か表面上はごく自然にも受け入れることが出来るのは、女優としての自覚ゆえでした。もしタカネが女優じゃなかったら、こんな状況、単に不条理、理不尽としか感じなかったでしょう。そのフラストレーションを耐えられなかったでしょう。「お願い、もうやめて、私を見ないで！」と叫びだしていたかも知れません。だけど考えてみれば見られることが女優の仕事、見られなくなったなら女優は女優ですらないのです。むしろタカネが今置かれている状況は銀幕上のどの伝説的な女優より、遥かにリアルに女優らしい名誉ある状況なのではないでしょうか。タカネはこの名誉に相應しいかどうか、耐えられるかどうか、運命の女神に試されてるんじゃないでしょうか。そんな気すらするのです。

兎に角、ドキドキする、ワクワクする、奇妙かもしれないけどそんな孤独な極限状態にあって、その得體の知らない興奮がタカネの最高の本音なのでした。

学校に行く途中にミサキと合流しました。さりげなく昨日のことに探りを入れてみました。

「彼氏と『華柄鏡面體』って言う演劇を見に行く約束したんだ。今ね、ブンカムラのシアター・コクーンでやってる」

そのことは隠す気がないようなので、思い切ってもっと深いことを聞いてみました。

「キョウスケ君とミサキって、何処で知り合ったの。やっぱりユイが間にいたわけ？」

「違うよ」ミサキは素っ気なく答えます。「聞かない方がいいと思うよ、私たちのことなんて。——聞かれても絶対言わないけどね」

ミサキの口調はちょっと寂しそうにも響きました。そんな言い方されたら、マジ近親相姦？　と思ってしまう。ちゃんとした情報を掴むまでは何とも言えないけど……タカネには知らないことが多過ぎるのです。知らないことを全部はつきり知らないと認めてしまえば、タカネの友達とか人間関係なんて全部上っ面の社交辞令に過ぎないことが判る、

バレてしまう、誰よりも先に、自分に。兎に角タカネはミサキのことは何も知らない、ミサキがタカネのことを知ってるらしいのに比べたら――。それにしても、上手いものだなと思うのです。本当は全部知ってる癖に素っ惚けて、今まで通りの友達同士として自然に振舞えるなんて。

部屋に帰るともう暗くなっていました。電気を点けないでタカネは寝台の上に転がしっ放しの、バイク便で届いたばかりのジェリコを手に取りました。女優として自分はそれで誰かを殺すのでしょうか。点けっ放しにしていたエアコンから涼しい風が吹きます。またパソコンに変なメールが来ていました。

逃ゲルナラ今ノウチダヨ

タカネのしてること、
もう警察も知ってるみたいだよ？
誰がちくったかは、内緒。

慌てたタカネはジェリコを取り落としそうになり、それを寝台の下の引き出しに隠しました。

次の日の放課後です。

机の中に読みかけの漫画を忘れてしまい、教室に戻るとみんなが帰った後にキヨミとアイリの二人だけがあります。話し声が聞こえます。昨日の今日なので流石に足がすぐみました。だけどドラマの展開を何でもいから求める女優魂がタカネの背中を押すのでした。

近づいて行って側を通り過ぎても二人はタカネを無視して喋り続けています。

「……火曜日は空いてないんだよね？」

「空いてないし、空いてたとしても外に出る気がしない」

「だよね……」

「……でも木曜は私きょうかいに呼ばれてるから、知ってるよね？　じゃあ、水曜日しかないってことか」

タカネが立ち止まりました。境界？　境界に呼ばれてる？

「ちょっと何の話してるの？」

タカネは無表情にそう言って振り返りました。

「何だ、タカネ、いたのか」キヨミが大袈裟に溜息を吐きました。

「何の話、してたの」

タカネはもう一度問いました。

「――飲み会。何時がいいかと思って」とアイリが答えました。この二人は始終近郊の男子高や大学と連絡を取って合コンを企画しているのです。月に一回ペースでやってるのに未だに彼氏が出来ない理由は、神のみぞ知る。

「いや、そうじゃなくて。境界って言わなかった？」

沈黙が流れました。二人とも、無表情。

「ああ、きょうかいのこと」数テンポ遅れてキヨミが反応しました。「何？　私が信仰持ちじゃないの？　思想信条の自由」

でも教会だとしたら、「教会に呼ばれる」とはどういうことでしょう。しかも教会って

木曜日に行くものなのか。またカマを掛けられてるんだ、とタカネは直観しました。この二人は「境界」を知っている！

「何時から教会に行くようになったの？ 私キヨミがクリスチャンだなんて知らなかったよ」

「あれ、言っただけだったわけ？ 子供の頃からきょうかいには行ってるよ。うち、両親ともカトリックなんだ」

「じゃあ、洗礼名もあるわけ」

「それは——」無表情のままキヨミはちょっと口籠りました。「センレイは受けていない。それが両親の方針だったんだ、信仰を子供に押し付けちゃいけないって言う——」

「でもキヨミは習慣的に教会に通ってるわけね」

「そうね、キリスト教、私は嫌いじゃないし」キヨミが頷きました。相変わらず、表情は読めません。「ミサとかすごく綺麗なんだよ。聖書は面白いよ、牧師さんの話も」

カトリックなのに牧師さん？ と、そんな明らかな矛盾は突く気にもなりません。何故か分からないけどタカネは自分から話題を変えたくまりました。

「来週、飲んでしょ？ 私も誘って欲しいな」

「そうだね、時間が合えば……」キヨミがそう肯定しかけたのを、アイリが横から遮りました。

「悪い、来週は、もう、人数揃っちゃってるんだ。また今度、飲もう」

アイリの視線は凝っと冷たくタカネに注がれています。多分そうなのでしょう。二人は来週いつもと同じように合コンをやる、キヨミはカトリックだかプロテスタントだかの教会に行くのです。兎に角、それ以上疑う気になれません。人間の認識はそれを問はず主體の新しい知識への慾求が途絶えれば確定するのです。その層で見出された描像が真理と呼ばれるのであって、客観的な疑わしさとか確からしさなんて関係ないのです。逆に知識への慾求が止まることなく湧き出し続けられ、真理の把持は何時までも繰り延べられ続け、主體は疑念の湖の中を漂うことになるでしょう。タカネは凝っと見据えるアイリの視線から目を逸らしました。もういい。その瞬間、後ろから左手を引っ掴んで裏返されたかと思うと、掌に激痛が走りました。振り向くとキヨミがそこにホッチキスを押し付けています。針は運命線の辺りに沿って掌に根元まで挿入しています。この間二の腕に刺されたときの十倍は痛くて、手掌の真ん中を通っている動脈弓が傷ついたらしく鮮血が迸りました。

「タカネってやっぱり腹が立つ」動物みたいな唸り聲でキヨミが言いました。「あなたが悪いのよ、昨日絶交宣言して上げたのに訳分らないことでそっちから絡んで来て。どうして上げたならあなたが理解するの分からないよ」

苛ついてるのはタカネの方だって同じことです。人間関係は最終的に苛立ちの亢進のみをもたらすのでしょうか。絶対的な苛立ちがあって、それと相対的な慾望の要請やら固定思念やら、社会的な下部構造の打算やらがバランスを取り合って何とか人と人とは関わりあって生きているのです。本来快樂は自己に引き籠った孤独なもので、他者は苛立ちしかもたらしません。

家に帰るとイチドウリョウからメール。バッグを渡したい、また会いたいと言うことでした。自分の家の住所書いて送れって書いてそれで終わりにしようかとも思ったのですが、此処に來られたら面倒なのでやっぱりまた会うことにしました。しかし、人からメールが來るといのは何でこんなにうっとうしいのでしょうか。「バッグを渡す」という口実はあるもののそれは飽く迄口実で、渡す気あるのか怪しいものだし、事務的に連絡事項だけ連絡しないで自分の話とか顔文字とか附いているのがうっとうしいのです。

リヨウ君

逢ってもいいけど怖いことしないでね。

アナタノ、タカネ ヨリ

シオルダー・バッグからジェリコが転がり出しました。可愛い、あいぼう。他に誰も、オマエを構って上げられるやつなんていないから。今、この瞬間にも〈窓〉の外から誰かに見られてたりしたら、警察に捕まってもおかしくないんだから。誰も法律や世間の冷たさからオマエを守ってなんて上げられないんだから。女優の側にいて上げとくれ、ジェリコ、と呟いてタカネは寝台に崩れ落ちました。今、その瞬間のこともその部屋の何処かに仕掛けられた隠しカメラから、リヨウは監視しているのでしょう。気にしないで、最後に頼りになるのは自分の中の、自分が女だって言うこの実感だけだと考えます。タカネの右手と左手が、自分の片っ方の乳首とクリトリスに伸びる、と、左足の小指のペディキュアが剥がれています。タカネは引き出しからキュア・セットとアクリル絵の具を出して、一階のバスルームに入りました。

小さい小指の爪に花を描くのは難しく、花びらを四枚描こうとすると失敗しました。小指だけ花びら三枚。上からラメ入りポリッシュを塗って乾かしました。

「そうだ」

タカネはケンケンで二階の自分の部屋に走り、手に入れたばかりの拳銃を取ってバスルームに戻りました。ネイル・コートから順に塗ろうとしましたが、金属の上にはうまく乗りません。代わりにマゼンダの絵の具を全體に薄く塗ることにしました。

「油絵の具が使えたら、ローズ・マダーがよかったんだけど」

グリップから順番に足の爪のそれより少し大きめの花びらを白で散らすと、タカネは満足して微笑みました。塗り始めると一瓶では足りなくなりそうでしたから、ラメは塗らないほうがいいでしょう。もう寝る前の時間なのにタカネは口紅を塗って鏡を見詰めるのでした。そんな気分だったのです。

タカネは鏡に向かう時間が極端に長くなったっていました。

それは間違いない、〈境界〉の〈鏡〉で自分を見て自分のウツクシサを知ったときからです。だけどそれまでもどちらかというと鏡を見ることの多い自分であったと思うのです。他の女せいとか男性とかが一日にどれくらい鏡を見るのか知らないから比較は出来ない、だからどちらかというと言うのは適当な表現ではないわけですが、それでもタカネは意味もなく毎日平均四時間は鏡を見ます。朝とか、学校から帰ったときとか寝る前とか、全部プラスするとそれくらいになるのです。時間の無駄。時間自體が無駄。

世間の全てのブスにこの真実の鏡を突きつけてやりたい。可愛さが特権だなんて無節操なことを言うつもりは更々ないけれど、少なくとも醜さが罪であることは間違いないのです。

青い小鳥の謎、あれはまさに謎なんだけど、はっきり言って考えるのが面倒臭い。謎はタカネだけで十分なのです。タカネは名探偵役より悪女役のほうが好きでした。地位も金も家庭もあるまともな男を翻弄し、跪かせ、破滅させて平然と去っていくセダ・バラミタいな女です。D・W・グリフィス監督は「映画とは、女と拳銃だ」と言いました。タカネ

は銃をぶっ放したいだけなのです。何かをぶっ壊したいだけなのです。頭を使うのは他の人に任せておきたいのです。そんな自分は古風な女だと思うのですけれど、どうせそうですよ、だから友達もいないしね。元々破滅してる被害者の死體とか社会的に終わってる犯罪者とかを相手にするのはタカネには全然感じるところがないのです。破壊衝動が掻き立てられないのです。

鏡の前で色んな表情を作ってみます。表情を作るとそれに従って心も明るい気分になったり暗い気分になったり妖しげな気分になったりします。

口元は莫迦みたいに緩めたまま、顎を引いて上目遣いに強く鏡の中の自分を睨むと、貴婦人みたいでいて娼婦みたいでいて、男慣れした踊り子でありながら初な生娘。これで、完璧。タカネは完璧でした。

鏡の中のタカネ、その像の中に宿るタカネの心。タカネの自意識が此処にあります。自意識が溶けることなんて、タカネが誰か優しい男の胸の中に安らぐことなんて永遠にないのです。そんな生き方、普通の女の生き方が許されていないとしたら、タカネは生きてないのです。普通が嫌いなわけではないけれど、タカネは普通じゃないし、普通であることを望む気にもならないのです。今にも容認されて甘やかされそうな慾望を思い切って切り捨ててその代償により大きな自由を得るのです。

リョウに会うのも悪くないこの顔なら、媚びて、翻弄して、苦しめて破滅させて去る、それが女優の生き方ってものです。タカネは暗い。確かに暗くて友達もいない、だって、タカネは女優なのですから。

タカネは確かに今風の顔ってわけではありません。演技の勉強もしたことがあります。だけどタカネには怒りがありました。退屈な日常に対する底知れない怒り。自分の一生を全部消費して無に帰しても、まだ尽きないくらいの怒りです。自分が操られていること、演じていることに気づかずにノウノウと生きてる莫迦と一緒にしないでね。タカネはギリギリのところまで生きているのです。

拳銃。

女優と拳銃。バイ・ジョン・カーペンター。

殺すのは怖くないだって刑務所が怖くないのですから。自分の人生なんてこれっぽっちも惜しくないのです。それに犯罪者が警察に捕まって必ず事件が決着するなんて推理小説の中だけの世界で、メディアとモラルが広めた共同幻想です。警察の検挙率なんて三割にも満たないという統計が実際にあるのですから。

タカネが証明してみせるのです。命も、死も、恋愛も職業も芸術も、価値も、文化も宗教も未知との遭遇も、日常も、情熱も、怒りさえも、虚構に過ぎないことを。女優として、女優のプライドにかけて、証明してみせるのです。ユイがああやって自分の命の無意味さを証明したように。

それ以上鏡を見てたら明日の學校に間に合いません。そろそろ學校なんて行く気がしなくなってきたけど。タカネは寢台に入りました。明日もまた學校で変な事件が起こることを期待しつつ。兎に角最近退屈です。

タカネは寢台に入る前に、瞬間、床にしゃがみ込んで嗤いこけてみました。悲しみの表情はあっても幸せの表情はないといったのは誰だったのでしょうか。何もないときに晒ってみるといい、するとそれが嘘だって分かるはずです。演技が感情を生成するのであって、幸福すらもその逆ではありません。

タカネは女優の命、の次に大切な、拳銃が入っているセカンドバックを握り締めました。弾は、出掛けに装填してあります。交差点から左に折れて、すぐの扉。

結局お前はただのブスだった。
ばらして慾しくなかったら、交差点の地下。

タカネはメールでそのメッセージを見たばかりでした。タイキに初めてデートに誘われたとき、教えてくれた場所だったからそれが何処かすぐに見当が付きました。自分をブスとメールで言った、その男が誰なのか、タカネは多分始めから分かっていたのです。

この扉は鍵が壊れていて、壁みたいに厳つい造りだからそれが中々バレないのです。扉を押すと、暗い階段が地下に続いています。

昔ジャズバーか何かだったらしく、壊れたネオンやピアノの破片が散乱したホールを突っ切ると、地下を流れる川に出るはずでした。下水ではなく、元々川だった上に鉄骨を載せて道路にした結果できた、地下の河流です。その水路とホールの間には、ベニヤ板を並べてコンクリートを流し乾かしただけみたいな壁がありました。廃墟となった後、侵入者によって空けられた穴は、今では子供が立って出入り出来るくらいの大きさとなっていました。

タカネは階段を下り切って、ホールの入り口に立ちました。

「あんたなんでしょ、タイキ」

さほど大きな聲を出したわけではないのにワンワンと響きます。その残響が消えると、再び奥から水音が聞こえてくるのでした。

「変なメール出してきてたの。女言葉にすればバレないけども、思ったわけ？ このオカマ男！」

暗がりの中、積み重なったビール箱の陰で、人影が動ききました。

「あなたに教えて欲しいのは、タイキ、あんたと、あの変な組織と、何の繋がりがあるわけ。私が知りたいのはそこだけだよ。何で、あんたが監視された私のデータを知っていた？

私は始めから気づいていたんだよ。私にあんなメールを送るような奴は、タイキ、あんたくらいだって」

人影がゆっくりと、ビール箱から出て来ます。半逆光だけどプロフィールではっきりタイキだと確認できました。タカネはセカンドバックを下ろして拳銃を取り出し、セーフティを外してゆっくりと両手に据えて仁王立ちになりました。

鋭い火花、ガン、という音は両手から肩の関節に突き抜ける激しい反動と殆んど等しい対象と感じられました。続いてもう一発。

人影は奥に向かって翔けました。それを追うようにタカネは撃ちました。オートマティックはスライドの反動で次の弾丸を送り出しました。

激しい動悸と息切れに眩暈がしそうになった頃、ついに弾が尽きました。

今のシーンは？

映像のチェックが出来ないのが悔しいけれど、此処にはタカネ一人しかいないのです。肩で息をしながら、ゆっくりと暗闇に踏み込みました。さっき人影が立った辺りを通り過ぎ、川に近づきます。壁に大きく開いた穴に、ベットリと赤い血が附着していました。タカネが身を乗り出して、暗い川面を見下ろすと、昨日降った雨のせいでしょいか、水路は増水して濁流となっておりました。

「一気に全部消して見せるのが手品の基本、ってこと？」

タカネはそう呟いて、弾が切れてホールド・オープンスライダーが不安定になった状態のジェリコを流水に投げ棄てました。

階段を上って銃聲を隠してくれたに違いない厚い扉を開きますと、そこは眩しい外の世界でした。その扉の表側には顔寫真つきのポスターが貼ってありました。來るとき気づかなかったのは慌てていたからでしょうか、それともタカネが中にいる間に誰か貼ったのでしょうか。それは指名手配のポスターであるようでした。

タカネにはそこに映っていた四十三歳の殺人容疑の女性が自分の顔に見えました。はっきりそう知覚したのでしたが、パニック状態の視覚には在りがちな錯覚かもしれません。その錯覚が不思議と、タカネの脳裏に焼き附いたままになったのです。

此処から逃げ出したいと、タカネは一人ごちました。狂ったゲームを抜け出して、何処か本来の現実を触知できる場所に移り住みたい、静かな場所でいいから。誰にも視線を送って貰わなくて構わないから、ゲームはお開きにして、私を独りにして悠しい。タカネの傍白は続きました。一人でブツブツ囁くのは変です。少なくとも人がいる通りではやめた方がいいでしょうね。でもタカネは続けました。この仕事を始めてから附いた癖ですが、それは女優であり続けるための代償なのでした。

兎に角家に帰ろう、とタカネは呟くのでした。今日は喋りたいことが沢山ある、人通りの中でそれをするのは余りに怪しい。中央線の中でそれをするのも。

鍵を開けると、まだ誰も帰っていません。私は二階の自室に鞆を置きに行き、急いで階段を駆け下りて、洗面台の鏡に向かう、とタカネは呟きました。髪が乱れていました。砂埃が素肌の首元に筋を作っていました。どうやらタイキを撃ったときに知らず相当汗を掻いたようでした。それでも、美しい。健康的な印象、とタカネは囁きました。ブレザーの内ポケットに肌身離さず入れている携帯がタカネを呼びました。

君はまだ知らないだろうけれど、それが若いつてことだよ。
なんて言いたくなるのは、私がもうおじさんだからかな。

小さな画面に映し出されたメール。タカネは鏡に向かって微笑み、自分のことをおじさんだなんて気にしている人は、おじさんじゃないよ、と囁きました。するとまたすぐ携帯が振動しました。

ありがとう。

タカネちゃんは見知らぬ他人にも優しいんだね。不特定の他人にも。まるで熾天使だ。

ところで、さっきから聲が時々聞こえなくなるんだけど、マイクはちゃんと入ってる？

タカネは鏡に向かって髪を掻き上げ、左耳を出しました。鏡の中の右耳が露出し、耳朶の後ろの辺りに、小さな黒いピップ・エレキバンのようなものが附いているのが見えました。大丈夫みたいだけれど。あ、ちょっと俟って、と囁き、タカネは上着の携帯が入っていたのとは反対側の内ポケットから銀色の電子装置を取り出しました。大きさも形もMDプレイヤーにしか見えないそれを裏返して、タカネは囁きました。発信器の方の電池が減ってみたい。後で充電しなきゃ。タカネは再び鏡を見て、自分で確かめながら最上の笑みを作りました。教えてくれてありがとう。タカネが前髪を掻き分けると、そこにもよく見

ると黒い装置が附いているのでした。エクステンションみたいに髪の毛に直接固定されているようです。どう、よく見える？

東中野の自宅アパートでヘッドホンを掛けてパソコンに向かっていたエンドウカシヤはブラウザに映った鏡の中のタカネを見詰めて入力欄に、『よく見える。綺麗だよ。ところでシャワーを浴びた方がいんじゃない？ 汚れたままでいると健康によくない』と打ち込み、人差指で探してリターンを押しました。ブラウザの中のタカネが携帯の画面を確かめるのが見えました。ヘッドホンから『シャワー浴びてる間に、発信器の充電してもいいかしら』とタカネが囁きかけると、エンドウカシヤは、『ああ。ゆっくり汗を流してきて。また明日』とだけ送信して昔の新本格のダンディ刑事のように、フツ、と嗤いました。程なくして画面が途絶え、オフライン中という表示に切り替わりました。画面は150×150ピクセルくらいで、全體が400×300くらいの、ツールバーもステータスバーなしの小〈窓〉に埋め込まれていました。チャットなんかでよく使う、ストリーミング用の埋め込みオブジェクトでした。その画面の右には、*Profile*、*Gallery*、*Point* 購入、*Mail* など、のアイコンが並んでいます。エンドウカシヤが *Profile* をクリックしてみと、もう何度も見たHTMLテーブルが〈窓〉の下半分に表示されました。名前、スズキタカネ。職業、高校生。キャラクタ、不思議ちゃん系。メッセージ、紳士的な人が好きです。私の奥二重を一重と言わないで。(×××)。次に、*Gallery* をクリックしてサムネイルが沢山埋め込まれたページをブランクで立ち上げると、その殆どは高校の制服姿のプリクラ寫真でした。ページのヘッダ・フィールドを埋めるサイト名の「インスタント・インサニティ」というバナナは日本人が作ったホームページ離れした美しい画像でした。

煙草を揉み消しパソコンをシャット・ダウンして、彼は部屋を出るために背広を羽織りました。一ヶ月前まではクリーニングにも出さずに「桜田門」のロッカーに吊るしてあった背広です。彼はアパートの裏の月極め駐車場に廻り、車のエンジンをかけました。エンドウカシヤは現在、現実には警察署の間ではなく無職です。夢を見、希望を持って果たしてきた刑事の職務を離れることになった経緯に附いては彼自身の中でもまだ整理が附いておりません。一つには結婚の問題があったでしょう。結婚を誓って長く交際して来た恋人の親族が犯罪を犯しました。彼には彼女と別れる意志も、謂わゆる内縁の関係を保ち続ける意志もございませんでした。この件で上官と口論になり、公の秩序や法的な正義に深い内的な懷疑を抱くようになったのです。法に反感を持ったわけではなくして、ただ何となく、信じられなくなったのでした。もう一つには今回の事件のことがありました。

エンドウカシヤは警視庁管下、ハイテク犯罪総合対策センターの捜査班を統括する警視でした。センターは謂わば警察制度全體の情報化担当の、啓蒙を目的とした部署であって、具體的な刑事事件に自らの手を下すことは仕事のうちに入っていません。それがある切っ掛けから連続殺人事件の捜査に加わるようになったのです。古色ゆかしい利害慾得や精神異常による連続殺人ではなく、社会良俗と国家秩序を敵に回したテロ組織の存在が背後に伺われる凶悪犯罪でした。

事件は犯行組織の側からの通報によって表面上その幕を落とすことになりました。自首ではございません。組織の経営者からの内部告発でした。管理人、リュ・クル。十歳で日本国籍を取得している現在二十二歳の帰化朝鮮人。組織は公的に届け出を出した非営利法人でした。それが先程エンドウがアクセスしていたウェブサイトの保守業者、インスタント・インサニティなのでした。連続殺人の源がその組織であることは火を見るより明らかでしたが、法的にその立場は完全に正当であったため罪に問われることなく今でもそうしてウェブサイトは稼働中です。

一部では、善良の風俗と清浄な風俗環境の保持と少年の健全な育成に障害を及ぼす行為の防止を唱う風営法の適応が妥当なのではないかという主張もありましたが、組織はイン

ターネットを利用しており、店舗を持たずしかも実益を上げていませんでした。金銭上の射倖心も、性的な好奇心も煽っていないのです。風営法の起草者はこれら二つ以外に、人間を墮落に導く感情を知らないようでした。確かに、刑事犯罪の九割は性か金に関係していました。都会では後者が圧倒的に多いし、田舎に近づくにつれて前者の比率が高くなっているのです。エンドウも経験からそのことをよく認識していましたたが、善惡の基準は果たして、その二つのみに求めるべきものなのでしょうか。民主国家の法律は経験と慣習に基づき善惡の本質などを問うべきではないのです。

警視庁の名刺を持っていた頃は、エンドウもそのような国家の建前に縛られて行動し、思考しなければならなりませんでした。一月を経て、辞めてよかったと思えるようになって来ました。犯罪捜査に於ける警察手帳の特権などたかが知れているし、何より、煙草を吸いながら仕事できるのがよいのです。

彼はタカネが発砲したさっきの廃墟の前に車を停めまして地下の廃墟に下りました。階段の天井には蛍光灯を外した跡が黒く残っていました。数日前により廃墟らしい暗い灯りに付け替えられたようでした。室内も、何者かによってそれらしく見えるように破壊されたことは明らかでした。エンドウは電気を点けました。

奥まったところにぶちまけられた赤い絵の具はすっかり渴いており、もう血糊のようには見えませんでした。戸棚の背後にラジカセが隠されていました。それを部屋中央に持ち出して巻き戻して再生すると、増水した河のような轟音が響き始めました。巨大地下水路なんて現実の新宿には存在しません。崩壊した壁のように見せかけた張りぼての暗がりには転がっていた玩具のピストルをエンドウは拾い上げました。「この玩具にしてあの重量感の表現、まさに迫真の演技だったな」とエンドウは一人ごちました――。

エンドウには恋人がいました。約束したわけではなかったのですが、二人とも、近い将来の結婚を信じていました。彼の頭上で星の巡りが悪化したのは、その恋人の親戚が傷害事件で拘禁されたときでした。

最も彼の心を痛ませたのは、上司との不和や辞職ではありませんでした。彼には腹心の部下とも言うべき相棒がいました。ハイテク犯罪対策総合センターの警部で、センター創設時に外部の民間企業からリクルートされて来たエリートたちの一人がそのミナトという人物でした。ミナト警部とエンドウの間にその時、その後長く続くことになるであろう甚大な誤解が深い溝を刻んでしまったのでした。

前述の恋人はと言えば、彼が一匹狼化したそんな状況を愉しんでさえいるようでした。

「じゃあ早く私立探偵の名刺作らなきゃネ」

エンドウの警察辞職を聞いた彼女の開口一番はそれでした。まったく原因を作ったのは自分であるのに、しぶといと言うかあるいは困ったと言いましようか、エンドウの恋人、――実はこれはわたくしなのですが、私は電話口で落ち込むエンドウに以下のような軽口を叩いたのでした。わたくし自身なので、以後、エンドウの恋人を一人称で語ることにします。私はあの日ホメロスの話をして彼を勇気付けようとした記憶があります。

「怒りを謳え、女神よ……」

「何だよ、それ」

「ホメロスよ。トロイア戦争を題材にした『イリアス』の冒頭。この物語は、ギリシャ軍の総指揮者アガ멤ノンの理不尽な振る舞いに対するアキレウスの義憤の描寫から唐突に始まるの。ギリシャ人のトロイア人に対する怒りではなくね。怒りを謳え、女神よ、んんーのアガ멤ノンに対する、んんーのアキレウスの怒りを」

「んーじゃ分からないよ。冒頭だけなら本屋の立ち読みで覚えられるし」

「長い物語ほど、冒頭が一番いいんだよね。特に『イリアス』の場合、後半は微妙。アキレウスは怒ってギリシャ軍に背を向ける。そのお蔭でギリシャ軍は大変な苦戦を強いられ

ることになるの。アキレウスは、ちょうど今のエンドウ君」

「茶化さないでくれよ。ところで今はどんなシナリオ書いてるの」

「今書いてるのは脚本じゃなくて小説だよ。倒叙推理小説」と言って私は書きかけの原稿のコピーを一部、彼の元に残して約束の時間が迫っていた仕事先に赴きました。中途半端な原稿を読んで貰うのは彼だけでした。それが出来る相手だから彼は私の恋人なのかもしれない。

そうです。その頃私は女優を無期休業してシナリオを書き始めておりました。

私のシナリオが視聴者に受け入れられたのは事故のようなものでありました。私はむしろ、有名になってから自分の才能に奢って脚本家の方に与えられた台詞に文句を附けたりしないよう、自分に文章力がないことを確認して女優として脚本の世界との間に決裂を設けるために、メンデルの教授資格試験と似た失敗を予測して執筆に手を掛けたというのが私の実感なのでございます。私の文筆家への転身は、従って、戦略的に仕事に手を抜くことが出来ない私の過度の謙遜が才能と取り違えられて起こった錯乱の窮屈な持続なのであります。私は間違えているのです、みなさまに詐欺を働いているのでございます。あまりたい、でもそんな場合あやまることは誰の役にもたたず、私は不条理のチャンスを素直に受け入れて結果を出し続けるしかないのです。

内面の光芒に滲む舞台への渴望とは裏腹に目を閉じて、私は血の滲むような真実の言葉を探したのです。あなたに聞かせる言葉を。私たち文学者の仕事は、現実に触れて傷つき、ついには路上に倒れて野垂れ死ぬこととございまして、革命を起こすことではないのだから、目に映る言葉が社会にとって無駄であっても気に病んで苛々する必要はないのです。それにしてもファック・ユーの二音節以外に言い残したいこととてない私でございますのに、何故こうして物語を語っているのございましょう。私の物語は私のためのものではないのかもしれませんが。むしろ私自身が目を閉じて、認識の光を遮蔽し、私はこの時代にもっとも虐げられた観念とその體現者——知と科学者と——に捧げる美しい言葉にならないとして蒼白い鱗粉に透き通った前翅を広げるのでございます。

ブラウザを立ち上げて少女の「調査」を続けていたエンドウは小説を印刷したコピー用紙をめくりました。彼自身の名前が出てくる私のその小説を。

今日も、放課後からオンラインだね。タカネちゃんは最初のセリフだけ決まってて、

（傍白）私にはまだ、自分が犯したのが罪であるのかどうか、判然としていなかった。私は逡巡した。二度目に小鳥の死體が発見されたのは、三日前のことだった。

それが最近はやりの悪戯や虐めではなく、私たちが解決しなければならぬ謎であることが多かれ少なかれ明らかになったのは、その日であったように思う。

これはね、会話じゃなくて、独り言として言えばいいみたい。

〈窓〉の中の〈鏡〉の中でタカネがコックリ頷きました。「ちょっと長いな。忘れそうだから、今のメール、保存しとくね」

リップ・クリームを塗り終えると、鞆を取って家を出ました。

次に私と会ったときにはエンドウは私の書きさしの小説を読み終えていましたが、その感想を聞くどころではありませんでした。かつて見たことがないくらいエンドウは狼狽していました。

「間接的に、僕は人を殺してしまった」と彼は言いました。ネットカフェ「クロム」でホームレスの男性が殺害された報道によって記憶に新しいあの事件の捜査中にうっかり警察が

漏らしてはならない個人情報情報を漏らしてしまい、それが切っ掛けで若い修道女が自殺したというのです。さらに彼女の死體が修道院ではなく民間の経営する霊場に引き取られていることを不審に思いその近辺を洗っているうちに、エンドウは斎場の経営者が自分の失敗につながる情報を得たネットカフェの店員、リュ・クルであると分かったのです。しかもリュ・クルは多数の不可解な死者を出したオンライン・ゲーム、「インスタント・インサニティ」の管理者として嫌疑を受けている最中だというのです。

「一緒に来てくれないか」

彼がそんなことを言うのは初めてでした。捜査は遊びじゃない、と言ってプライヴェートと仕事を区別していた彼ですのに。ちょうど推理小説のネタに困っていたところだったので、私は喜んで引き受けました。

斎場は新宿の東アジアからの外国人が多く住む地区の地下にありました。九一年の都庁移転の際にIT研究の拠点として作られていた地下の空間の一部で、並列推論マシンの研究が行われるはずだったのが何らかの外的な原因から打ち捨てられ、安く払い下げられたのでした。リュ・クルが貧しい機械好きのような風貌の蔭にそんな大金を隠し持っていた、その点にしても、また相互に並列する犯罪の両方に現れるという情報の分布の片よりからしても怪しいというのです。私たちは地下に続く階段を降りました。地下一階にはシャッターが下り、「Japanese Only」とマジックで書いた段ボールが張り付けられていました。

私たちの目的地は地下二階で、「有限会社アレック〈例〉安室」という新しいプレートの横に、九十一年の建設当時の名残でか、檜に浮き彫りの「並列推論分散計算機開発計画新宿拠点」という表札が掛かっていました。中に入ると斎場というよりも何処かのシステム開発会社みたいで、数人の男性がパソコンに向かって仕事をしていました。私たちはエンドウが事前に連絡を取っておいだ男性に案内されてさらに奥の応接室に進みました。

「驚かれたでしょう」と案内人は言いました。「葬儀屋もね、意外とウェーブ関係の仕事があるものなのですよ」彼はwebをウェーブと発音しました。「遺族の方と同業の葬儀屋を結ぶだけでなく、花屋や弁当屋など、当人が公にしたがらないだけで葬儀に関係している人は沢山います。ウェーブ・サイトから彼らに自主的に登録させてインデックスを付けてデータ・ベースを作るだけです。それに沢山の人のサイトをみて貰うためのSEOなんて、意外と奥が深いんですよ。華やかなオンライン・ショップだけがネット・ビジネスではありません」

エンドウが差し出したのが警察手帳でなく私立探偵の名刺だったせいも、その時は大した情報を獲得することが出来ませんでした。勿論、自殺した修道女の死體を見ることが断られました。エンドウがしきりと気にしていたのは、案内人が座るソファの背後に並んだ図書館の書庫の自動書棚みたいなものでした。それらは並列に動くスーパードキュメントだと言うですが、その殆んどすべてに稼働中の赤いランプが点つているところを見ると、現在も何らかのタスクを消化している最中であるようでした。しかし案内人は「前の研究機関の置土産も利用させて戴いています」と答えるだけで、使用目的は教えてくれないのでした。それでも私は小説の何かに役に立つかもしれないと思い、計算速度や冷却装置の構造について説明をうけ、メモを取りました。結局、獲得できたのはリュ・クルがその会社の社長であることの確認だけでしたが、エンドウは彼を重要参考人として監視庁の湊警部に連絡することに決めたようでした。

私たちは諦めて礼を言い、席を立ちました。すると出口まで追いかけてきた案内人が私の腕を引いたのです。

「お嬢さん、ペンをお忘れですよ」

案内人は忘れ物を持って来てくれまではしていなかったもので、彼と二人で応接室に引き返しました。

応接室にペンはありませんでした。

案内人は声を落として、「あなただけにお見せしたいものがある。今夜、十二時以降、此処にいらしてください」と囁きました。

その案内人はその手の過度に殺伐とした男社会で時々見掛ける、女性を無際限に優遇したがるタイプの男性であるようでした。私は好意に甘えることにしました。男性一般が彼らのようでなければならぬと言ふような勘違いさえしなければ、親切を無碍に断らずに、葬儀屋兼業の男性ばかりのコンピュータ会社のような虫酸の走る下半身駆動の同族空間を再訪するというリスクを引き受けて素直に感謝することも悪くはございません。

それにしても私はそこで止まるべきだったのかもしれませんが。しかし、もう少しだけ踏み込めば、世界が悲鳴をあげている現場と申しましょか、本当に痛ましいものに立ち会うことが出来そうな気がしたのです。私の身体は私の物語の登場人物と同等の操り人形に過ぎません。私はそれを操縦して、物語の製作に必要な情報を蒐集するのでございます。高等な意志や慾求をコントロールすることで自分の身体を様々な組織や人間関係の内奥に踏み込む斥候に仕立てることが出来ます。私の経験から申しまして、例え私の職業がシナリオ・ライターであることを明かしても、私の身体が、胃のポリープを切除する遠隔操作の鉄附きのカメラのように、言葉というメスで真理を切り出すスパイとしてそこに現前している事実は不思議と絶対にバレないのでございます。バレたら逃げればいい、大丈夫、何をやってたって平気よね、と考えたのを覚えております。

「私は他人の縄張を荒したかったんじゃない。そうじゃなくて、身を持って謙遜を學びたかったの」私は何時かエンドウにそう言いました。

私にはメルヴィル・コンプレックスと名付けられるような氣質があるのかもしれませんが。プログラマはいうなれば、もっとも下等な労務者が背広を着て名詞を持つこの時代、一隻の捕鯨船のような野蛮状態に陥った日本社会の最下層を支える漕ぎ手たちであり、私はそのような言語無き人間たちと接することで逆説的に自身の哲學を養い詩を彫琢しようとしていたようでありました。労務者。私たちは奴隷や封建制下の百姓について、とかく、自由や解放を求めて武器を手に放棄する健康的なイメージを持ちがちですがそれはむしろ例外であり、彼らの大部分は食い扶持と性交の相手を貪れば他に何も必要とせず一つの思考様式と単純な日課に縛られた唯一の思考パターンに疑問すら持たず無差別に同族男性年長者に媚びへつらう腥い粘菌のような連中であることを私たちは心に留めておくべきなのです。心を病んだ現代のみなさまにとってはお仕着せの娯楽フィクションすら苛立ちの材料でしかなく、そんなものよりも本当に怒しいのは呪詛に盈ちた言葉製の手榴弾に自分を見立てるリスクを賭けた語り手に違いないのですから。

オフィスが電気が落ちていた夜の有限会社アレックへ例へ安室に私が入ると奥から案内人が一人で顔を出しました。時刻は十二時を回って二十二日になったところでした。まるで徒刑囚たちが寝静まったガレー船の中に水先案内人に導かれて進むようでした。スーパー・コンピュータは本物の電動書架のようにスイッチで通り道を作るようになっていて、私たちはその奥へと歩みを進めました。

工學部から農學部に遷ったように感じられたのは、スーパー・コンピュータの背後に開けた空間が弱い緑色の照明に浮かびあがったからでしょう。四方を囲む壁の一つに珊瑚の鉢植えが並んだ棚が取り付けられていました。その中に置かれていた二つの球形の水槽の片方に私は近附きました。それはどうやら入れ子になっているて、球體の中に立方體の水槽が浮かびそのさらに内側に正四面體が、さらにその中に正十二面體、正二十面體、正八面體の順で小さくなっていて、中心には手術で切除された臓器の一部のような肉片が浮かんでいました。もう一つの水槽も同じ構造をしていました。壁に古い羊皮紙に描かれた頭部の解剖図のようなものが額に入れて飾ってありました。脳から三組の同心円が飛び出

しているような絵で、細かいローマ字で書き込まれた説明が判読不能だったのはそれが左右が逆転した競映文字だったからでした。右から左へ向けて解読すると、簡単なラテン語でした。

「ロバート・フラッド作の解剖図です」と案内人が解説しました。「十七世紀初頭のオックスフォードに學んだ鍊金術師で、社長の趣味らしいですが私にはどういう価値があるものか分かりません。何でも、學會にはまだ発表されていない貴重な絵だとか。水槽の中は脳です。大脳右半球、この間ネットカフェで虐殺されたホームレスのものですよ」

「柳田」

「そう、その人のです。損傷が激しいのは『クロム』から持ち去られたときに適切な扱いがなされなかったためですが、明日まで持たないでしょう。すでに半分近くの脳細胞が死滅しています」

「それでも、取り出された脳が生きてるんですね。すごい」

「まあ。私はただの水先案内人で、設計者や研究者ではありませんから」

「研究の目的は」

「御覧の通り、こっちの水槽の右脳とあっちの水層に今培養され始めたもう一人の左脳が人工脳梁で繋がったこの状態が、目的といえれば目的ですがね」

「人工脳梁」

「後ろの壁に設置されている装置です。水冷却なので、静かでしょう」

「この脳はまだ活動しているんですか」

「夢を見ている状態ですね。今、彼はその夢の中、つまり彼の來世で作家になって書き物をしているみたいです。彼は変わった頭のおかしいホームレスで、小銭を恵んでくれた人に食堂の紙ナプキンなどに俳句や短歌を書いて配っていたそうで」

「本当のゴースト・ライターってわけですね。栄養や酸素の供給がどうなってるのかなんて私が聞いても解からないでしょうけど、感覚刺激なしで思考って出来るものなのかしら」

「片目の視神経と右手の神経を外部に接続してあります。その神経接続の手術が実は究めて高度なものでして、片方約十二時間かかりました」

「外部？」

「インターネットです。無数の感覚神経、運動神経の発火パターンをHTTPメッセージに変換するソフトを私たちは開発しました。プログラムの初期状態から試行錯誤で脳が自分で学習して、今ではほぼ失敗なくインターネットから大量の情報を引き出しているようですから、その点では大成功です」

「でも、後一日の命なわけよね」

私はやはり緑の照明に浮かびあがったもう一つの水槽に向かいました。

「こっちの脳にも損傷があるみたいですね」

「それはこの女性の幼い頃の脳腫瘍によるものです。第一側頭回、通称ウェルニッケ中枢が破壊されていますね。しかし私たちは手術に万全の期を尽くしましたので、右脳のような全的な損傷は起こさずに済みました。人工脳梁で右脳と接続した瞬間から元気にやりとりを始めています。さあ、次はこちらへ」

私は水先案内人に導かれて次の部屋に進みました。今度は医学部です。解剖実習室のような空間の中央に手術台のような健康診断の診察台のようなものが設置されていました。

その中に様々な形の鉗子や開創器が綺麗に整列しているステンレスのトレイを二つ載せたコロ附きの卓の麓では、ジュラルミンの関がついた光沢のあるビニールを貼った洪茶色の解剖台を覆うアイ・ソフト・グリーンのごわごわしたシートから垣間見える爪甲に花を散らした柄のペディキュアを塗った素足に無数の銀銭花が咲き乱れておりました。歩みを進めて側面に回ると、シートの反対側からは小さな煉瓦型の硬い枕に載った、大きく開い

たままで魚眼状に無限の解像度で部屋全体を映し出す眼よりも透き通った絹の肌に包まれた少女の頭部の左半球には赤黒い空虚が口を開いておりました。眼が開いたままであることに気づいて慌てて駆け寄った案内人がそっと塞いだその頭蓋の長い睫はまるで千属万種の草木が萌え出づる春の野にて地下水脈の音をじっくり搾った彩に染まり行く柔らかな花弁を護る花罍の外殻のようで、その蕾が開けば咲いた瞬間に気化して泡と消えた華から誕生するらむ女神の羽ばたきは夢の囀りとなって永遠の眠りに就いたばかりの脳にその終の場所を獲るのでありました。

「これが」

「そうです。先ほど御覧に入れました左脳を摘出されたばかりの修道女、自殺された鈴木高音さんの御遺體です。以前高音さんは慈善事業でホームレスの柳田に愛の手をさし延べたことがあるらしい。柳田は今までそれを覚えていたのでしょうね」

案内人は厳かに答えました。

他方、エンドウから連絡を受けたミナト警部は急遽、リュ・クルを警視庁に任意出頭させました。証拠不十分で逮捕状を取ることは出来なかったのです。

「アレックとは、一種の疑似乱数生成器です。インスタント・インサニティのイヴェントの周期を決定するために用いています。この周期的なイヴェントのシークエンスがパターンとなって、刑事さんに人為的な物語の意匠のように感じられたのでしょうか」

クルは取調室に持ち込まれたホワイトボードにアルファベットで表記しました。

Aléa

「ボクが一人で時間を見附けて作ったプログラムだから、小さくてバギーだし、やってることは普通のブログとかわらないですよ。マインド・コントロールだなんて、テレビの見過ぎ」

彼にかけられた最も分かり易い疑惑はオンライン・ゲームに仕掛けをしてプレイヤーたちを操っているのではないかというものだったため、クルは自分のサイトのプログラムを細部まで説明することになったのでした。クルは日本語の不得手をさえも逆手にとって見事に言い逃れ、その日は釈放となりました。しかし翌日には彼は消えていたのです。一人暮らしのアパートからも世を忍ぶ借りの姿だったバイト先からも、「有限会社アレック〈例〉安室」からも、髪の毛一本残さずに。その時点で逮捕礼状が発行され、ミナト警部らが本格的にその追跡にあたることになったのでした。

私はと申しますと、エンドウからようやくその不思議なオンライン・ゲームの話や、女優とも女優を演じる女優とも、女優妄想を持っただの女子高生ともつかない少女の話や、聞かされたのでした。オンライン・ゲームの方は複雑過ぎ、すっかりプロットにまとめられそうになかったので、私はコンピュータ関係の取材で選られた情報の中から使えそうなネタをピックアップすることにしました。

私は彼らの薄汚れた垂直な言葉たちが洗い流すことの出来ない痼となって脳内に蟠るのを感じていました。世界は一つの舞台なのではなかったでしょうか。職業選択の自由は権利であるのみならず普く人間の義務だったのではないのでしょうか。何故自ら奴隷的な仕事を選ぶ人々が絶えないのか。隷属を自己に課せば他者にもそれを要求するようになってしまふ、人間は弱いから。

「全部あなたの妄想じゃないの、タカネさんとか、本当はいないんじゃないの」
私がそんな不快感をエンドウに投げつけると、エンドウは「妄想だと思いたいならそうしたらいいよ」と答えました。

放課後。

「私にはまだ、自分が犯したのが罪であるのかどうか、判然としていなかった」タカネは隣の子が帰るまで机の中を片付けているフリをしました。半径一メートルに誰もいなくなつてから、携帯を出してメールを打つフリをしながら、俯いて呟きました。「私は逡巡した。二度目に小鳥の死體が発見されたのは、そう。三日前。一九八六年四月五日のことだった。それが最近はやりの悪戯や虐めではなく、私たちが解決しなければならぬ謎であることが多かれ少なかれ明らかになったのは、その日であつたように思う」

次に何が起ころのか知らないで、タカネは深呼吸を一度して鞆を手に席を立ちました。いつものことでした。さっさと鞆を抱えて帰ろうとするタカネをアイリが、テレビの話とか天気の話とか（そういえば今日も快晴です）ありきたりな世間話で引きとめて、クラスみんなが帰って教室に彼女らだけになったら本題突入でした。今日は、キヨミが隣のクラスからミサキを連れてきて、総勢四人。三人対一人。

「今朝もニュースチェックしたんだけど」キヨミが他所を見て話し始めます。「まだ出ないね、タカネのニュース。本当に殺す気あるの」

「殺すよ」とタカネ。「あれ、でも、もう殺した、よ。タイキのことでしょ。ほら、新宿の廃墟で」

「は？ タイキはまだ死んでないよ。大丈夫」

横から口を出したアイリの口調は演技しているもののそれのようではありませんでした。「でも……。殺したよ、昨日。それで、帰ったらお部屋の露台に小鳥の死體の寫眞が散らばつてて。今日は、その続きでしょ」

「ちょっと俟って。露台に小鳥の寫眞、って、もしかして大分後の話じゃなかったの。多分まだタイキは生きてるはずだよ。私が間違えてるのかもしれない。タカネ、本当に殺したの、タイキを」と言つて、アイリは鞆を机の上に置き、中からラップトップを取り出しました。

「すごい、アイリ、いつも持ち歩いてるの？ それくらい小さいと鞆、パンパンにならないね。私も買って貰おうかな」と、ミサキが言いました。

「持つてると便利だよ。何時でもチョコチョコッとお喋り出来るし」

「アイリ、中の人と仲いいんだね。羨ましいな」

「私は携帯に転送してるよ」と、タカネ。

「何だ、そんな設定できるのか」

「あれ、もしかしてみんなまだ知らなかったの？ ちゃんとヘルプ読まなきゃ。知ってると便利なことが色々載ってるよ」

「でも、パソコンの方が長時間のやりとりには便利だけだね。打ち込みやすいし」

キヨミはブラウザを立ち上げ、URL欄に直接入力しました。華美なフラッシュが踊るバナーの上のテキスト・インプット・フォームにIDとパスワードを入力してログインし、キヨミのプロフィール編集ページが表れると、キヨミは新規メールのアイコンをクリックしました。

「今、中の人に聞いてみるから。えっと、今日の日程を送って貰えばいいかな。いや、今日は関係ないか。進行状況だよ、大まかな。今、タイキは死んでいるのかどうか」
キヨミが送信ボタンを押すと、すぐにメールが帰ってきました。

こんにちは。

タイキ君が死ぬのは実際には三日後だよ。でも、死んでるといえば死んでいるかもしれない。

タカネちゃんが小鳥の死體を見るのは、合計三回だろ。

編輯で、一回目のすぐ後にタカネちゃんが発砲してタイキを殺すシーンがくる。そこからナレーションがタカネちゃんにかわって、タカネちゃんの回想シーンに入る。

それで、二回目と三回目の小鳥の死體は、タカネちゃんの記憶の中で進行するって言う形になるんだ。

でも、みんなが出て来る學園シーンは基本的に、ストーリーの時系列がそのまま撮影の順番になるから、僕等は気にする必要はない。タカネちゃんが発砲するシーンも、従って、三日後。

これでいいかな？

チャオ☆

「チャオだって、アイリの中の人」ミサキが低く吐き捨てるように呟きました。

「大丈夫、タカネ。タカネはまだタイキを殺してないんだよ。殺しちゃったらお話が終わっちゃうし」と、ラップトップを無造作にハードウェア・シャット・ダウンしながらアイリが言いました。

キヨミがタカネの左耳に口を近付けて言いました。「大丈夫ですかー、タカネの方ー。ピンポーン。ピンポーン」

「ちょっと、やめなさいよ、そういう品のないこと」と、タカネが眉を顰めました。「誰にでも間違いはあるわ。I N し忘れたわけじゃなくて、予定を先回ししちゃったわけだから、問題ないじゃない」

その頃自室のパソコンの前で煙草を啜えたまま固まっていたのはエンドウなのです。手元には今、映像を見ながら慌てて取ったメモが散乱していました。

編輯とは何のことでしょう。撮影？ ストーリーの時系列？

「はい、雑談終わり。キヨミがタカネに話しかけるところから、もう一回いくよ」と、ラップトップを鞆に入れ終わったアイリが手を叩きました。

キヨミがタカネに目で合図して、物語はさっきと同じセリフから再開しました。

「今朝もニュースチェックしたんだけど、まだ出ないな、お前のニュース。本当に殺す気あんのか？」

「でも……」

「でも？」

「だから」タカネは自分の聲がちょっと開き直った調子を帯びるのに気づきました。ということは、キヨミ達はタカネがジェリコであいつを殺した場面を目撃していなかったってことになります。当然ですね、あの場には誰もいなかった、誰も見ているはずのない廃墟だったのだから。当然のことが、何故か、気持ち悪いのです。『どうやったらいいのとか、そんな簡単には』

「どうやったらいいかって、いつもうちらがやってるみたいにやればいいんだよ」とアイリはタカネの横っ面をつねりました。頬っぺたが、熱い。多分赤くなっています。鮮烈なスパンキング。お母さん、S Mはごくシゼンな愛情の一形態なんだって、本当？ お父さ

んがお母さんを虐めてるんじゃないかって？　じゃあ、この人たちが私にやってることも、一種の屈折した愛情表現？

ミサキが腕を組んでちょっと距離を置いて神妙な表情でタカネを見詰めていて、彼女は、彼女だけは現在のところタカネにシンパシーを持っているようでした。人間的、そしてそういうのは素直に嬉しいタカネ。ミサキは実はいい子なのです。

パン、パン。タカネがスカートにマーブル模様を着けた砂埃を払って（ああ！　生地の間）に白いのが食い込んで落ちない！）立ち上がりました。

「殺すこと」とアイリ。判ってる、タカネだって殺して、もっとクリミナルな自分になりたいのです。世間の悪い子たちがやってるらしい万引きとか売春とか、全然微温的だし。でも、自分で殺したいと思ってるだけになおさらそれを他人に命令されるのが癢に障るのです。ほら、今やろうと思ってたところなのにお母さんに「勉強しなさい」って言われたときとかの、あの……。

「トイレ」とキヨミが言って、「じゃあ私も」とアイリ。タカネと二人きりで残されることを恐れたミサキも二人の後を追ひ、タカネもやっぱり附いて行くことにしました。尿意とあくびは伝染する、それは本当でした。

クラスとトイレは直線距離で三十メートルほど離れていて、実際に直線でした。廊下が一直線に続いていて、トイレの前から教室の前まで、真っ直ぐ見通すことが出来るのです。ところで女子高には教員トイレにしか^〇がありません。あなたは女子校って入ったことないでしょう。一般にトイレとは淑女と紳士の二者択一、さらに男子トイレに小用と大用という子供の二者択一が備わっているものですが、女子高のトイレだけは特別で一なるもの善なるもの、絶対者の風格なのでした。さてタカネたちは四人揃って中に入って、それぞれの個室に。

タカネは結構長くかかりました。元々自分からしたくなつて来たわけじゃないし。何回も水を流けれど出ないのです。「節水にご協力を！」前の壁に貼られたプレートと気まずい睨めっこ。

出るとタカネが一番でした。あんなに時間かかったのに、みんな何してるんだらう。

教室の方を見渡すと、左側は〈窓〉、小っちゃいけどそれでも東京の高校としてはあるだけましなグラウンドでした。三つトイレから真っ直ぐ右側に教室が並び、最後の一つがタカネたちのものでした。正面、どん詰まりは非常階段だけど此処は普段、内側と外側から鍵がかかっており、背後にはそちらにも二つ扉、音楽室と事務室が並んでいてその次にやつと階段がありました。立地条件の悪さにも拘らず無理やりグラウンドなんか作ったせいでしょう、学校の校舎は妙に扁平な普通じゃない構造をしているのでした。一番端っこの教室のタカネたちはいい迷惑で、階段を上がって教室に辿り着くまでに横長の校舎を端から端まで七十メートルは歩かなければならないのです。

やっとミサキが出て来ました。そこにタカネしかいないのに気づいて……そんなに気まぐすそうにしないでいいのに！　そして、続いてアイリとキヨミが揃い、教室へ帰還です。着くまでの三つのどの教室にも誰もいませんでした。そしてタカネたちの教室にも。教室の真ん中に見慣れない変な物體がありました。ペットの中でも小動物系くらいしか入りそうにない小型のステール製の檻でしたが、近づいて初めてタカネの机の上にそれがあ

ることに気づいたのでした。
〈窓〉はすべて閉まっていて、全部内側から鍵が下りているのが此処からでも一つ一つ確かめられ、繰り返すことになりましたが教室には四人が入って来るまで誰もいなかったのです。

「何これ、ねえ」とアイリが間抜けな聲を出し、タカネは凝っとその「檻」の中を見詰めていました。表面に光沢があるただの黒い紙かと思ったけれど、違いました。モノクロ寫

眞です。誰も寫っていないそれが檻の中に入っていて（檻と申しますか文鳥とか昔の人が入れそうな鳥籠なのですけど）、檻の小振りな出入り口の扉は、大開きに開いておりました。建物に入れ子になった函の中でその檻だけが密室じゃない、そんな印象をタカネは受けました。

寫眞には確かに人間は誰も寫っていないかったけれど小さい動物が、そこにいました。間違ひなく昨日朝タカネの机の上で死んでた小鳥の死體でした。首に糸が巻かれ、釘が刺さっていて黒い血が滲んでいました。誰かが昨日、タカネの机の上にカメラを向け、今日再び同じ場所に置いたのでしょうか。実物の死體が残した空白に過去の瞬間を切り取った寫眞が置き換わり、事情を再表象しているのでしょうか……。

「何これ誰がおいたの？ タカネ？ と言うか——」キヨミが口籠りました。状況は判っていました。論理的に考えて誰も此処にそれを置ける可能性はないのでした。階段から此処まで往復しようとするやうに三分、ダッシュでも一分かかります。非常口も念のため確かめてみたけれど、言わずもがな内側から鍵がかかっておりました。タカネはトイレに要した時間を逆算しようと思いました。ダッシュで往復してギリギリってところでしょうか。じゃあ、この三人の中の誰かがそれをやった？ 個室に入ったと見せかけてすぐさまトイレを飛び出して、教室まで来て籠を此処に置いて、それでまたダッシュ、個室に戻り、時機を見て手を洗って出て来る。だとしたら、誰でしょう。もしかして三人共謀してってことでしょうか。いや、それはありえない、だって動機がないのですから。こんな不思議な、しかも暗号めかしたメッセージ……。

一番怪しいのはミサキです。ミサキはキヨミとアイリとは独立してしかもキヨミとアイリの目の前で何かをタカネに伝えようとしているのです。早くタイキのことも、こうやって殺せというメッセージなのか、それとも、早くやらないとお前もこうなるぞって言いたいのでしょうか。

急に何の脈絡もなく、背筋が寒くなりました。寫眞の中から死んだ小鳥がタカネを見詰めている、そんな気がして。昨日、実際に小鳥の死體を見たときには、しかも放課後あんなに大量の死體を見たときにも、足元がグラグラする程の不安と戦慄は覚えませんでした。寫眞と言う複製を通して、コピーを通して、機械的光學的な模造を通して初めて、何と言うか、命の重みとそれを奪うことの簡単さみたいなものがタカネに押し掛かってくるのでした。タカネはモノクローム寫眞になった小鳥の體に共感しました。痛い。でも、すでに死んだもののココロに共感するココロってココロとしてはどういう方をしたココロなんでしょう。兎に角、痛い。この痛みがこの小鳥を、この寫眞を美しくしているのです。そういう事情は何となく理解できました。痛い。寫眞を通して小鳥に、そして寫眞に媒介された小鳥を通しておなじ姿勢で死んだユイに、今初めて共感できた気がして涙が溢れました。

「私もこんな風に寫眞の中に入りたい」

ふとまたしても何の脈絡もなく、そんなことを考えました。タカネも被寫體になって誰かに共感されてみたい、共感されて涙を流されてみたいこの空虚で無意味で痛くておなしくて悔しくて悲しくてどうしようもないやりきれない人生を。

違う。

タカネはもう、あなたという観客を前にした（私）と言う名の女優なのです。（鏡）に言われたことをそんなところで思い出すタカネでした。（鏡）を思い出して、過去の小鳥の死んだばかりのそこを時間を超えてモノクロームに映したもう一枚の（鏡）を前にして、フワッと、見当識が歪みました。そう、確か此処は「カメラの中」で——それは知ってる、それはもう知ってるよ——カメラの前ではなくて、カメラの中なのよね、フィルムに巻き取られた、チューリングのあの無限のテープに印字されたような時空間。

不意に、タカネはテレビの外に飛び出そうとしました。脳の中で何者か、多分寫眞の中から憑依してきた死ぬ瞬間の小鳥の怨念が、タカネの體にそう命じるのです。體は、動きません。思い留まった理由は不明のまま、事後に被ることになるかもしれない罪とか責任の予知ではなくして、彼女の失踪を惜しむに違いない誰かへの先行的な共感であると信じる、信じたいのです。

「そうだ」と言って、いきなりアイリが鞆の中からさっき電源を切ったラップトップを取り出しました。「ビデオ、見てみようよ。前回小鳥が死んだときのビデオ。何か分かるかもしれない」

「ビデオって、もしかしてアイリ、ログ取ってたの？」とミサキが尋ねると、アイリは「ずっと全部、最初から。HDに入り切らなくて、DVDRのコレクションになってるらしいよ。いや、私じゃなくて、私の中の人が、ね。私は女の子だから、機械のこととか、よく分からないんだけど。INしてないときもずっとそれ見てるらしいよ。暇人なのよね。ほら、そこ」とアイリが先手を取りました。「引き籠りとか言わない。お金があるから出来ることです」

アイリがブック・マークからテキスト・ベースの地味なサイトに入ると、そこはアイリの中の人のサーバらしいのでした。「インスタント・インサニティlog」というハイパーリンクをクリックしてパスワードを入力するとダウンロード画面に切り替わりました。

「ちょっと俟ってね。ダウンロードするの時間かかるから。何しろ相手はDVDドライブだから、ストリーミングとか無理らしいの。器用な人ならプログラム出来るんだろうけれど、私は女だからそう云う話をされてもよく分からないのよね」

暫くして、アイリ視点での今のシーンが再生され始めました。画面の右上でミリ秒単位の時計が目まぐるしく表示されます。

「分かり難いね。これで見る限り、寫眞を置いた可能性が高いのは最初に教室に帰っているタカネだけど。映像は推理を裏附ける証拠としては使えても、推理はしなきゃいけないのね」

「ねえ、鳥の羽って神経通ってるのかな。抜けるとき痛いのかな」とビデオに退屈したミサキが関係ないことを言い始めます。

「通ってないんじゃない、貝殻と同じで。あんな芸術的な形態が自我に直結しているわけがない。ところで羽毛に非対称性があるのは飛行にそれが必要だかららしいよ。鳥類って機械の歴史で言えば飛行機みたいなもので、進化の歴史の中で幾つもの失敗が繰り返された後かなり新しく、突然出てきた安定して飛ぶことが出来る脊椎動物なんだよね。死體を見ると胸が痛むのは哺乳類と同じ温血性だからかな」とタカネが言いました。

帰る、誰からともなく。今日のタカネは、あんなに軽蔑すべきものと思ってたディレックタントな探偵意識を持たざるをえないのです。怪しいのはミサキだけど三人それぞれに、昨日のことにしても今日のことにしても——そんなことがあると昨日の小鳥の死體事件も何か意味深い、周到に仕組まれたものみたいに見えて来るし、三人のアリバイも工作しようにと思えば簡単に出来る性質のものであるように思えて来る、だけど悲しいことにタカネは昨日のことすら、ほぼまったく思い出すことが出来ないのです。きっと前頭葉の統合野に欠損がある自分は失語症なんだとタカネは思い、半分自分でも信じているのです。——

兎に角何か仕組みうる、あるいは仕組んでいるとしかとりようがない状況にあるのです、だけど一番怪しいのは依然、ミサキでした。彼女は何か伝えようとしている、きっと伝わってもタカネ的には、ハァ？　って感じの意味不明なパラノイアなんでしょうけど、兎に角ミサキはそう言うのに、とくに親友が自殺して彼氏がその兄だったなんて立場に立たされたり取り附かれて当然っぽいような、そういうパーソナリティ。それはきっと普通に想像できるみたいな、タイキを殺せとか、やっぱり殺すなとか、そういうナチュラルなナチュ

ラリスティックなメッセージではないのでありましょう、もっと松果腺が電波を受信してアニメとアニメスを一気に放出しちゃったみたいなそういうメッセージ。列記しないけど、ミサキがタカネに隠れて昨日のと今日のと両方やったってストーリーなら、何パターンも、ほぼ無限に推理することが出来ました。だけど他の可能性も勿論残されているのです。キヨミやアイリはそう言う知的なことを思いついたり実行に移したりしないタイプだと思ふけどそれもタカネの思い込みかも知れないし、だって人間本来に表面に見えてる部分なんて氷山の一角の一角のそのまた一角ってもので、兎に角人間の前頭葉は何でもしかし得るのです。それにユイの家族が他にまったく、ユイの死んだときの姿勢についての情報を外に流してないとはやっぱり考え難いのです。流れてないと当人たちは信じたいでしょう。実は本人たちが認識できてない認識が無意識に流れちゃっているだけでお通夜とか葬式とかでべらべら喋ってるのかも知れないのです。だとしたらそれは誰か、その事実を知った第三者による本来に無意味な、愉快的犯行ってことになりますが、でも無意味だからこそ多分その可能性が一番高いのかもしれない。人間の動機は無意味なのです、そう、ブタみたい……。つまりアイリ、キヨミ、ミサキ以外の誰かなら誰が昨日、小鳥の死體を机の上や下駄箱の中に仕込んで問題ないわけだし（だってエキストラ、不特定多数ですものね、誰も注目しておりません）、タカネのクラスメートじゃなくてもこの学校の人なら、この学校の制服を着ている人なら誰でも昨日の朝、クラスに紛れ込んで人目を忍んで紙袋に包んで持ってきた小鳥の死體——不気味なユイの死體との符号をプロットしてある——をタカネの机の上に置いて立ち去ることも、また今、タカネたちがトイレに行つたとこを見計らってさらにその自分の犯行の証拠寫眞——きつと何処から犯人はタカネたちを監視してて、あの小鳥の死體で彼女らがそれほどショックを受けなかつたみたいなのがショックだったのでしょう、それで執念を燃やして手の込んだ寫眞を籠の中に仕込んでタカネの机の上に再度置き、タカネの教室とトイレの間の何処かの教室の、教卓の下か扉の後ろにでも隠れて彼女らが通り過ぎ、教室に入つたのを見計らってこっそり脱出、階段を下りて、ってことは、端的に可能なのでした。

今日もリョウとの約束でした。

それなりにいいレストランでした。今迄で一番マシ。向かい合って席に座ってもまだ、本当に露骨にリョウがタカネのシオルダー・バッグを意識してるのが判りました。

「タカネちゃん」話かけるリョウの聲もいつもより何故か深刻そうで深い意味を秘めている感じで、無意識にその意味に思いをはせるタカネでした。「タカネちゃん、今一緒に住んでる家族のこと、やっぱり好きだよな」

タカネは不審に思いつつも、途端に頷きました。

「誰でもそうだよな、家族愛って、社会で生きていく上で必要だし。——本当に、本当に家族のこと、好きか？ 愛してるって言うことが、生きてく上で必要だから、そう言うてるだけなんじゃないのか？ タカネちゃん、親の言うこと信じてるのか？ 親は、子供のこと、大切だ、好きだって言う。それが親の義務だから。子供に対する義務を果たさなければ、夫婦愛って言う自分勝手が子供を作り出したって言う罪の意識に苛まれることになるから。だけど子供は分かっているものじゃないか、親が、本当は自分のこと、決して掛け替えない一人の個人として愛してるわけじゃないってこと」

突然何を言い出すのだこの人は。でも、でもタカネには思い当たる節があるのでした。

あの朝の父親とのやり取りです。お父さんは、私が何処に出かけるのかにすら興味を示さず、日曜美術館に没頭していました。あれも、見られていたのかもしれない。そんな考え全部気のせいに決まってるのに、妄想が暴走して止まらないのです。庭に隠れて窓越し

に自分の家庭を監視しているリョウの映像さえ想像できる……「できる」と申しましようか、してしまふ、せざるを得ないので。もうそれは強迫的な幻覚以外の何物でもないようでした。兎に角、自分が見たわけでもない情景なのに頭に浮かぶ映像が余りに自然で、鮮明なのです。タカネは怯えました。狂気に陥っていく自分が怖くて、情けなくて、そして何よりも恥ずかしかったのです。自分の理性にさえ自信が持てない人間に社会生活をする資格は、多分ございません。でも、兎に角リョウの態度がいつもと違う、変であることは事実なのです。「監視してた」なんて大人の男の人がすることとしてはおかしいし、何より犯罪だし、だからはっきり言えないんだ、それで反めかしてるんだ、暗示でタカネに伝えようとしてるんだ、タカネに秘密がないってこと。全部見られてるってこと。弱音を掴まれてるってこと。だから言いなりにならなきゃいけないこと……。

狼狽えつつも、此処に來た目的がこの男を土下座させることだったのをタカネは思い出しました。氣を取り直して、そんな妄想に負けてる場合じゃない、おかしいんだ、タカネは「境界」のせいでおかしくなりかけてる、だけでもうあそこには行かないって決めたし、自分はもう大丈夫なんだ——そういえばあの小鳥が机の上で死んでた朝、あのときから確かにタカネは着実におかしくなっていたのです。あのときのタカネたちはまるで、初めて会った日、タカネのバッグをひったくった動物のような仮りそめに急ごしらえされた人形を相手にした無痛的な暴力を反復したリョウと同じでした。きっとリョウも「境界」に通り過ぎて、「鏡」をやり過ぎておかしくなってるのです。全部「境界」のせいなのです。

「——リョウさんって、もうホストやんないんですか？」

「ホスト？　もう歳だよ」

「そんなことないですよー。何か最近ホストとかって若い十代の男の子ばかりになってるみたいだけど、おかしいよ。そんなの、若い子と飲むのに高いお金払うなんてさ、友達と飲めばいいじゃん。私のホストのイメージは、やっぱりリョウさんみたいな大人びた人だな」などと迂遠に煽ってみるのですが、聲が上摺って今にも消え入りそうでした。狂うのは、怖い。既に狂ってしまった自分の思考、それが自分の意識の流れの中に組み込まれて、タカネの過去の一部になってしまったことがほとんど絶望的に思えるのでした。タカネはモジモジと俯き、小さくなってリョウの視線に耐えました。知ってる、この人は私の生活を部分的に観察してる——新しいリョウの一手一投足がそのことの症候になっている。知っているからあんな眼で見えるのです。知っているから、あんな口調で話すのです。

「家族は君に見せかけの愛って言う餌を与えて閉じ込める、飼い主に過ぎない。いいか、もう分かっているとと思うけど、君は籠の中の青い小鳥なんだ」

ついにリョウがそう言いました。あのこと、机の上と下駄箱に小鳥の死體の惡戯されたところを見てたんじゃなくて、どうして「籠の中の鳥」なんて比喻が出て来ましようか。確率的に見られていたと思う方が論理的にも妥当でしょう。しかも彼は今「青い小鳥」と言いました。色は比喩的意味函數の中で明らかに余計なディテイルです。テクノロジーの発達した現代のこと、監視カメラや小型盗聴器なんてネットできっと簡単に手に入るのです。目的は判っていました。タカネの體が目当てなのです。口説き落としてへこへこ媚びて普通にセックスとかじゃ宥めきれない、きつとタイキがユイをやったみたいに強姦とかでさえ満足できないくらいに慾望をタカネはこの男の視床下部に宿らせてしまったのでありましよう。そうに決まってる、とタカネは思うのでした。リョウの言葉からそれだけのことを読み取って動機にまで結びつけるのは思い込みの違いに違いないって分かってるのですが、そんな動機それ自體には疑問を感じたりしないのでした。きつとこの男は他の人たちよりずっと敏感で、タカネが女優として生まれたってこと、直観的に分かったのじゃないのでしょうか。女優だと明確に特定できなくても何か本物の女優だけが持つオーラみたいなものの、伝わる人には伝わるものなのですから。だとしたら、それなりにモテそうなのも

な男を監視カメラを操作するストーカーにまでしてしまい、結果的に自分本人を斯く状況に追い詰めてしまった責任は全面的にタカネ自身にあることになるのでした。もうちょっと厳密に言うなら女優としてのタカネの美貌に。

「君だけじゃない」リヨウが続けました。「俺も、籠の中の鳥であることには変わりがない。それは認めなきゃいけない。こんなこと、君に言うのも、組織の意思であって俺の意思ではないんだから。だけど言うよ、タカネちゃん。籠を抜け出してみないか？ その、君の家族という籠を。勿論、行く先も籠の中かもしれない。だけど、そこよりはもうちょっと大きな籠だ、それは俺が保証する」

「何が、言いたいのか」

「抜け出さないか。家を、出るんだ。そして俺に附いて来る」

「は」

タカネはフリーズしました。この男は、タカネの私生活の全てを知った上で、こんな暴挙に出ているのでした。暴挙——暴挙としか言えませぬよね。タカネを家族の拘束から救うために、誘拐しようなんて申しますのは。一人の女の子の日常生活をつぶさに観察するという體驗がそれくらい狂気に一人の男を陥れるほどのインパクトを持つであろうことは想像に難くないのです。しかし単なる独占願望に救済なんて名前を与えてしまおうとは、そして誘拐などという暴挙まで思いつかせてしまうとは、恐るべし、愛の力も並大抵のものではないことの証左が此処にございます。タカネは自分が完全に妄想の世界に陥っていることに気づいていましたが、もう怖いなんて感情も起らないのでした。監視カメラを中心とした妄想のシナリオを疑うことすら最早出来ないのです。もう壊れた自己のなすがままです。嗤う気にもなれませぬ。

リヨウは、落ち着かなさそうな気色でした。附いて来てくれなきや困るとでも言いたそうな。でも……タカネは此処から逃げ出したいのです。リヨウが言っていること、偉そうに命令してること、理不尽さ、それに対する苛立ちやそれと同種の感情すら湧いてきません。ただ、狂ってしまった自分がまともな人間と、彼らのための世界とに直面しているという状況が耐えがたく恥ずかしいのでした。

「来てくれ。理由は、今は言えない。組織からの、命令なんだ。俺も拘束されている。来てくれなかつたら、俺の命が危ないんだ。頼む」

「小さい頃から」息が続かず、自分の聲が細かく震えるのをタカネは抑えることが出来ませんでした。「自分の家族に嘘っぽさを感じていた。あなたの言っていることは多分正しいわ、だけど、私は籠の中の小鳥なんかじゃない。そんな気は、正直、あんまりしない。ごめん」

「そうか——」

「ごめんなさい」

タカネはレストランを駆け出しました。

翌日の放課後、タカネは再びアイリとキヨミに引き止められました。

「あいつを殺す計画、ちゃんと進んでるんでしょね」とキヨミ。

もう死んでいる男をもう一度殺せと言われては演技に身が入りません。タカネは心底苛ついて来るのでした。おかしくなったのは、タイキを殺すシーンをやって順番が錯綜し始めてからで、このシーンはタカネが現実には部屋に拳銃を隠し持っていることをキヨミは知らないはずなのに知られているのではないかとタカネが勘ぐってしまうことになるのです。その勘ぐりがピークで精神錯乱に達して、結果タカネはタイキを射殺してしまうのですが、タカネはタイキを殺す場面でジェリコも捨ててしまっただけで現実にはすでに部屋に隠し持って

はいないのです。タカネは頭の中で設定が二重に混乱した現在の状況を整理してみました。タカネはジェリコを持っていて、そのことは絶対に他の人が知ってはいけない、ところがキヨミは知らないフリをしていた、此処がポイントです。キヨミもアイリも実はもうジェリコを入手して部屋に隠し持っていること、知った上でそういうカマの掛け方して来る演技をしていたのですが、実際には——ゲームの進行を「実際」と呼ぶと混乱が増幅するかもしれません——タカネはジェリコを——あの玩具を——捨ててしまったのです。だけどタカネの演技にとって問題なのはむしろ、心の中まで読まれているかどうかなのです。読まれていると思ひ込んでいる演技をするためにはまだジェリコを持っている気持ちに成り切らなければなりません。実際、タイキを殺すかどうかとかそういう目的はまったくなくあれを買ったけれど、使うかもしれないし、使わないかもしれないし、意味なんてないのです。意味も目的もなく手元に銃が一丁。もし心の中まで読まれてないとして部屋にジェリコを隠してるとこまで外的に監視されてるだけなのだとしたら、見ている人は色々そこにもしない意味を読み込みに違ひなくて、心の中まで読まれているとしたらタカネは間断なく内的葛藤の演技を継続しなければならぬわけでした。

「一応、ね」

タカネは語尾の、ね、のところにアンビヴァレントなニュアンスを出したつもりでした。掛けられたカマは掛け返す、先に喰ひ出したほうが負けのゲームです。

アイリが「最近タイキと会ってる」と聞き返しました。

「え」会っていないことを知りつつ、会っているかと聞いて来るその心や如何に。「会ってるって、どういう意味でかな……」タカネはボソボソと自分でももう意味もわからずに言葉を繋げるのでした。「現実についてとか、電話とかメールも含めてなのか、むしろ電話とかメールの方だけのことなのか。例えば、道で摺れ違ったけど聲をかけなかった場合は会ったことに入る？」

アイリとキヨミは哑然としています。

「会うって言う日本語の意味、分かるよね」と言うキヨミの聲はちょっと苛立ってる感じがしました。

「それ、どういうこと？ 会うって言う言葉の辞書に載ってる意味のことを言ってるのか、日本語って言うからには英語のスィーとかドイツ語のゼーエンとかフランス語のヴォワツとの比較において日本語のその言葉がどういう意味特性を持つのかについて知りたいのか」「私の言ってる意味、分かるよね」キヨミは目に角を立てました。「巫山戯ないで、いい加減にしてよ」

「許してよ」タカネは泣きそうになって、「もう赦してよ。私、何が何か分かんないよ。もう解放してよ。私に、女優である私にこんな弱音を吐く権利ないの分かってる。だけど、みんなだって人間なんだからもうちょっと手の届かない人のことみたいに考えないで、私たちのことも同じ人間として、共感して欲しいのよ。それがすべてよ」

「大丈夫」アイリが言いました。

そのときタカネがすでにリョウとともにテレビの外に逃げ出す決意を固めていたのは明らかだとわたくしは推測しています。そうすれば次なる遺憾至極な発言も理解できると存じます。このように虚構がそれを外部から包含する現実よりうんざりするものだとしたら、わたくしどもが一定の時間を経過させる意義はあなたを退屈させることに過ぎないのでしょうか。とにかくタカネは飽きてしまったようでした。

「私が羨ましいんだろうけどそんな羨望はつきり言って迷惑なのよ。私たちが慾しいのはみんなの共感、優しさ。そしてプライベート。判ってるよ、一般の人は私たちがみたいに格好よく銃を握ったり、それで人を殺したり、そんな権利は与えられていない。自分が選ばれた人間であることのデメリットくらい認識してる。でもそれって、私の生まれつきの

美形とか、性格の自然な魅力とか、才能とかが決めたことで私の意思は関係ないの。私は衰れに運命に翻弄されてるだけなのよ。もういいよ。これから言うことにアドリブで合わせてくれなくてもいいからね。今日の分はもう終わってるんだから。それより私の話を聞いて頂戴。みんな、ちゃんと役作りしてる？ 時代考証とか、全然できてない気がするんだけど、こういうのちゃんと買って読んでる？」タカネは机の中から新書と古い雑誌を取り出して、机の上に並べました。新書の方は、大塚英志著『おたくの精神史』（講談社現代新書刊）でした。「この本なんかは参考になるだけじゃなくて、八〇年代風に舞台裏への言及を利用して書き手たる自分の優越を誇示しつつ上手に涙腺を刺激するように書いてあるから読みものとしても楽しめるはずよ、八〇年代人なら。こっちは八〇年代に流行って数々の流行語を生み出した雑誌『ビックリハウス』のバックナンバー。若者言葉って知ってる？ 八〇年代にはうりふたつより似てる人のこと、うりよつつって言ったのよ。知らなかったら、若者同士の会話が出来ないじゃない。服装もおかしいわ。八〇年代の高校生はそんなにスカート短くなかったのよ。それより髪型！ 聖子ちゃんカットにしてるの私だけじゃない！ 美容師さんに説明するの大変だったんだから、このパーマ。どうしたの、みんな。真面目に女優やってるのは私だけじゃん。ミサキ、ちょっと顔を見せて」タカネはミサキの目元を指さしました。「ミサキは私たちの中では目立ちたがり屋の美人役だったよね。設定に合わせて毎日完璧にお化粧して來てる。それはいい。でも、このマスカラは何？ ダマになって、今にもこぼれ落ちそうよ。いい、こういうけばいマスカラが流行るのは二十一世紀初頭の一時期的ことなの。八〇年代にそれをやったら、古いというよりダサいの、宇宙人なの。それからアイリ、あなたは音楽が好きで何時でも最新の流行歌を聴いてるのよね。ちょっとウォークマンを出して見て。ほら、何これ。何で円いの、何でこんなに薄っぺらなの？ 何でカセット・テープが入ったナウでヤングなソニーのウォークマンじゃないの？ CDなんてまだ発明されてないはずよ。しかも、中身はトランス？ トランス？ はあ？ 今流行のディスコでかかってる音楽はYMOとユーロビートでしょ？ マドンナでしょ？ 八〇年代にはまだあんな強面のおっさんじゃなかったボウイ・ジョージのカルチャー・クラブでしょ？ って言うか、全部松田聖子でいいのよ、松田聖子で。髪型も音楽も聖子ちゃん。赤いスイートピー。カセットダビングしときなさいよ。もう疲れたよ。私独りにしないですよ。映画は主演女優だけじゃない、みんなで作るものですよ、力を合わせて。私だって普通の女の子なんだよ、みんな知ってるでしょう。女優になるために無理してるんだよ。家に帰ったら普通の女の子に戻るんだよ。もう疲れたよ。元々私だけが絶世の美女って言うんじゃないくて、みんなで力を合わせて私から美を引き出すのよ」聲が掠れてタカネはもう言葉が出てきませんでした。夢が現実に壊されたその感覚は、「境界」での超常体験なんかよりもずっと激しい、重い、切ない、本質的な現実崩壊の體驗だったはずでした。

しかしタカネは夢見ているのです。「境界」のこと。「鏡」とのセッションのこと。気がついたらボーっとして、魂があのとときの超絶な體驗に飛ぶのです。世の中の人たちは世界を半分しか知らないんじゃないでしょうか。知らないまま、檻の中を世界のすべてだと思ひ込んで自分を世界の王様だと信じたまま死んでいく、井の中の蛙。いい成績をとりたい？ もてたい？ お金が慾しい？ 幸せになりたい？ 本当かな。タカネはみんな、嘘だと思う。嘘は、タカネを、不安にさせるのです。

家に帰り、鞆とカーディガンを寢台に投げ捨てて、その上に體を投げ飛ばすと、頭の中

のモヤモヤが触知できる感覚となって飛翔し、タカネの全身を包み、兩者諸共が空気よりも軽い砂塵となって霧消しました。頭の中で雑音混じりの小さなラジオの音が聞こえるような、そんな錯覚がさっきからずっと続いているのです。

人の聲であるようでした。ひっきりなしに何かを語りかけ続ける、そんな聲。まるでタカネを包むこの世界が仮面になって、耳許でしきりに呪いの言葉を囁き続けている感じ。仮面は感性世界そのものなものであるから、タカネは不気味なそれとその聲から逃れる術がないのです。タカネは身を起こして耳を塞ぎ、頭を強く左右に振りました。枕とクッションを跳ね退け、机の引出しの中も探し、クローゼットを開けて、収納ケースの中の洋服を掻き分け、椅子に登って室内灯の傘の裏を探ると、指先が粉埃で白くなりました。念のため電球を外してソケットの中を覗き、坭箱をひっくりかえしたタカネは散らかった部屋の真ん中に立ち尽くして、荒くなった息を収めました。何処かに聲の根源が存在するはずなのでした。

ない。タカネは制服の上からゆったりとしたロングニットを羽織って、家の外に出ました。それは八〇年代のDCブランド・ショップには絶対に並んでいないような膝まで届くネズミ色のニットだったけれど、タカネにはもう氣にならないのでした。耳許でその聲を聞きながらタカネは虚ろな街に出ました。外国語でしか。あるはずの意味のない、差違がない言葉。へ境界へを初めて訪れたときのへ鏡への聲に間違いないことだけが確かなのでした。

エンドウが本来今日行われるはずだったあのタイキ殺しのシーンを再演させるためにタカネを呼ぼうとしていたせいで、幾度か続けて携帯が震えてメールの到着を告げましたが、タカネは無視して電車に乗りました。目的地はしかし、あの地下の廃墟なのでした。氣が向けば演じ直してもいいかもしれないけれど、氣が向く可能性は限りなく零に近かったしそれに、あのときタイキを殺す演技が出来たのは拳銃という飛び道具を手に入れたからだったのです。素手で首を締めるにせよ、材木か鉄パイプの切れ端のような鈍器で殴りつけるにせよ、いくら暗がりでも被害者役のタイキがいないのを目に映さないままで演じきるのには相当に困難でありましょう。

タカネは地下の空洞を閉ざす鉄の扉を押しました。灯り、しかもそこにはいはずの蛍光灯が点き放しでした。自宅のエンドウはそれを見て頭を抱えました。彼が忍び込んだとき歸りに消し忘れたのです。それが元警視庁操作一課の刑事が犯しているミスでしょうか。タカネが階段を降りて中に進むと、瓦礫だらけの室の真ん中にラジカセが転がっています。これもエンドウが片付け忘れたものでした。さっきから聞こえていたラジオの雑音は、このラジカセから聞こえてくるようでした。

タカネはフワリとしゃがんでラジカセのツマミに触れました。FMのスイッチが入っていました。やっぱりラジオでした。タカネが微調整すると、聲はよりはっきり聞こえ始めました。だけど、FMの周波数ってこんなところまであったっけ。周波数は千九百八十よりちょっと上を指していました。ツマミを弄っていると突然、嘘のように雑音が消えてくつきりと軽快な聲が聞こえ始めました。女の子の聲で、淡々とした優美な日本語でした。

……すると驚いた私は発作的に立ち上がり、着てきた新しいニットの裾の汚れを払ってラジオを見おろした。私は無意識に、「これがへ鏡への話し聲だったのであろうか」と言った。遠藤が消し忘れた階段の蛍光灯が周期的に点滅すると、入口から差し込む逆光が私の横顔に金冠日蝕のようなシルエットを引いた。私が不意に振り返ったのは、誰もいないはずの入口にその瞬間、男の影が浮かびあがったからであった。今の独り言を聞かれてしまったのであろうか。それに、私のこの服装はどうだろう。

私は四方に逃げ出す場所を奪われた節足動物のように……

タカネが振り向くと、彼女を待ち受けるかのように地下室の入口に立っていたのは、あのイチドウリョウなのでした。

「世界と世界の境界、聲と聲の境界ってものがある。勿論閉じてるわけじゃないから、一つ一つが完全に対応する一つの世界を囲い込んでいるってわけじゃないんだけど、でも境界はとても堅い球殻シェルになっている。外敵が侵入できないようにね。その天球殻シェルには一か所だけ、鍵を使って出入り出来る扉がついている。それが即ち君の意識なんだ」

「私の、意志？」

リョウは頷きました。「逃げ出したいんだろう？ この世界から。俺が連れ出して上げるよ。拳銃なんてなくなっちゃって君一人くらい簡単にテレビから出して上げられる。おいで」とリョウが言うと、タカネは操り人形のように一歩一歩彼に近附いた。「なあ、タカネ。死んだら何処にいくか知ってるか？ 知らないんだったら、考えておいて。それが、今度逢うときまでの、宿題だ」

タカネは無言でリョウの胸元に到達し、リョウはそれをギュッと抱きすくめました。ラジオの聲はいや増しに明瞭になり、タカネの意識はそれに浸透され、今にも脱色しそうになるのですた——。

私はリョウの體に凭れる。冷たい體。私はこの人を全然愛してはいない。

十一時を回って、もうお昼前だ。だから、揺れる電車の中にはスーツの姿はすでに疎らだ。

今日帰りには、時間に余裕があったら境界によってみようと思った。一人になれたら。昨晚私が「一度、あの家に帰りたい」と言ったら、「出勤ついでに送る」と、リョウは答えた。私一人じゃ帰れないだろうって、私の家なのに。従って今朝彼は自分の出勤時間も大幅に早めて、私と一緒に部屋を出た。いつもは昼下がりになってから部屋を出て行く彼にしては、お昼近くでも早起きだ。

臙脂の天鵝絨に二人で並んで座った私たちは、まるで二羽の小鳥の死體に見えただろう。だけど私は彼の、彼は私の體温を感じ、正面の〈窓〉から差し込み電車の反対方向に細かく振れる陽の光の中で、同じ振動を臀部から感じている。低い女の聲がした。

「ねえ、イチドウさんかしら？」

何時の間にか、私たちの前に男女の二人連れがいた。女のほうがリョウに聲をかけた。

「やっぱりそうだ。久しぶりじゃない。その後どうしてた？」

年齢はよく分からない。男物っぽいスーツを着ていて、五十を過ぎているようにも、まだ十代であるようにも見えた。スーツと言うより、燕尾服みたいな、珍しい昔の礼服だ。モーニングって言うんだらうか？ 長くて赤い髪を束ね、その上に洋服と同じ色のシルクハットを乗せている。此処では最近、こういう格好がはやっているんだらうか。

「奇遇ね。ラッキーだわ、あなたとはもう一生、死んでも会えないと思っていた」

「真面目に働いているよ」リョウが無愛想に答える。「そっちは？」

「それが、相変わらずなのよう」そう言って女がハリウッド映画のメソッド演技み

たいに肩をすくめると、同伴の男も無言でまったく同じ仕種をした。「ところで、イチドウくん。あなたにペットを飼う甲斐性なんて、あったかしら。しかもサルなんて、本当に珍しい動物。餌とか、躰とか大変なんじゃないの？」

「あ、これ？」リヨウは親指で私を指す。え、私ですか？「自発的に飼い始めたわけじゃないよ。ちょっと、拾いものって言うか」

女は膝に手を突いて腰を落とし、私の顔をまじまじと観察した。

「まあ、可愛いお猿さん」

「おいおい、見え透いたお世辞は逆に失礼だぞ。ほら、高音も怒ってる」

「高音って言うんだ」女は私の頬つぺたを突ついた。「生意気に、人間みたいな名前付けて貰っちゃって。——ってことはメスなの？」

「ああ」リヨウが面倒臭そうに答えて私の體を引き寄せた。

「高音ちゃん、飼って貰えてよかったね。リヨウは、女の子なら、お猿さんにも優しいの？」

「私は猿じゃないよ」私はムツとして言い返した。

「あ、喋った」と、女の連れの男。

「ただの啼き聲よ、猿が喋るわけじゃないじゃない」

「私は人間だよ！」

「ほら、また啼いてる。キイキイ五月蠅い。猿語は私たち人間には理解不能なのよ」
「ひどい、何処が猿語なの？ 私は猿じゃなくて、人だよ、日本人だよ。あんた何言ってるの、日本語分かんないの？」

「変なこというね」女はキョトンとしてさらに顔を近づけ、私の眉間の辺りを見詰めた。鼻と鼻がぶつかりそうだ。「だって日本人って、猿じゃない？」

「え」

「だからそうやって猿語できいきい啼かないでよ。どんなに大きい聲出しても無駄、猿は猿。それは言葉じゃなくて鳴聲でしょ」

「だって、……だって、あんただって日本人じゃない！ やーい、猿ー」

「アーラ、私は日本人ではないと思うわ。英語が話せるから」女が自分の顎に人差し指を当てて小首を傾げる。とうとう私のオデコに鼻の頭がぶつかった。「うん。

絶対違う。英語が話せない人は人間じゃないの猿なの。Homo loquens って英単語を知ってる？ ちょっと、そのうっとうしい猿語をやめてくれない？ 何て言うか、

こう、紛らわしいのがうっとうしいの。猿って人間によく似ているから。小鳥のよう

うに人間とは全然違った生物の鳴き聲なら落ち着いて聞いてられるんだけど、猿はちょっと、ホラ……ネエ」

「何言ってるんのよ。日本語も英語も同じ言葉じゃない。英語に出来ることは何だっ

て日本語にも出来るよ。差別！」

「フゥ」女が溜息を吐く。「これだから、猿は悩みがなくていいわね。私たち人間はただ生きてるわけじゃなくて、歴史ってものを背負ってるの。それが言葉を話す人間に与えられた宿命なの。本当にしんどいわ、疲れるわ。お猿さんも、私たちの身にもなって欲しいわ！ ま、猿には分かんないだろうけどね。例えばほら、あっちの猿」女は私たちの向かいに座って漫画を読んでいる青年を指差した。「猿の癖に偉そうに本なんか広げて、おっかしいわね、嗤えるわね！ これが本当の猿真似って言うのかしら。ふふふ、ふふふふふふふふ、きゃきゃきゃ……く、く、く」

青年にまる聴こえのかい聲で女は、指差したまま、腰を折って猿のように嗤い転げる。青年は気づかない様子で頁を繰っている。

「この人、アタマ、おかしい」私は隣のリヨウを見た。「ねえ、この人狂ってるん

でしょ」

リョウは無言で私の髪を撫でた。この男は優しい。否、よく判らない。

「ふふ、ふ、ふ、まだ、解からないみたいだね」女が代わりに切れ切れに私に答えた。「私が今使っている言葉は、ジャヴァ・ラングって言ってね、英語の一種なんだけど、まあ、英語を継承する一つのタイプね……。ジャヴァ・ラングは英語で出来ていて、日本語では出来ていないの。それが日本語と英語の本質的な違いだよ。その他にも色々共通点や相違点はあるだろうけど、此処では問題にしない。で、結局ジャヴァ・ラングは何をするための言葉かというと、モノと話し合うためのメディアなの。世の中には人間の言葉しかないってわけじゃないんだよ。モノの言葉、人間の言葉、世界の外部からの言葉と少なくとも三つの言葉がある。そしておののが上位に、理念的に吸収される形になっている。ジャヴァ・ラングは機械と話し合うための言葉なの。私たちはジャヴァ・ラングで機械とコミュニケーションしてるの。あら、分かってないみたいね、でも平気だよ。あなたは猿なんだから、そんな難しいこと気にする必要なし。自分と同種族とだけコミュニケーションしてなさい。一生そうやって。でも、そんなのもう古いんだよ。近代なんだよ。そして近代はもう終わったんだよ。だからあなたたち日本人は類人猿なんだよ。私はね、動物化するくらいなら機械になるほうがましだと思うの。そのようにしてしか、生き残るすべはないんだからね。ふ、ふふふふふ」

「降りるよ」リョウが私の手を引いて立ち上がった。電車が止まる。

「え、でも、私はまだ此処じゃ。ところで此処、何処なの」

「いいんだ」

「世界の外部なんて存在するのかしら。もし存在するとしたら、この世界と外在者の関係はモノと私の関係と一致し、三者はそれぞれ、相対者と第三者によって通底することにならないかしら。だとしたら、神、人、自然という呼称は三者において自由に取り換え可能だわ」女の語った謎めいた事柄とその細部についての私の逡巡は電車を下りてホームを歩む間も脳裏を徂徠し続けたのだった。

そうして暫くの間、ラジオからはしぶとく聲が聞こえており、次第にはっきりと、音量も増してくるよう知覚された。それは多分、わたくしの聲だったのだと思う。でなければタカネ自身の聲だろうが、正確なことは私にも分からないのである。いずれにせよ、物語の外部の聲であったことは確か。だから、もしかすると、あなたの聲かもしれないね。そうだ、お腹が空いたでしょう。今、トーストを作ってきますね。お飲物は、アメリカンでいいかしら。

と、私は腰を上げ、奥のカウンターに入った。

「いいんですか？ 勝手に」

あなたは心配そうに附いて来た。私はキッチンの灯りのついでに有線のチャンネルを切替えて、さっきから聞こえ続けている、耳障りなハウリングのせいで何を言っているのか分かりやしない人聲から、クラシックの番組にした。曲の途中から始まったのは何処かで聴いたことがあるような古典派的な室内楽だった。踏台に乗って収納庫から食麺麴を出す。流しの下にシナモンが入っていた。

「バイオリン協奏曲。ハイドンですね」と、音楽に耳を済ましたあなたが呟く。

「違うと思う」と、私が答える。

「すいません」

「いや、私も判らないけど、モーツァルトじゃない？ 普通に。こういうクラシックって

よく知ってる人いるんだよね、演奏家の名前とか、コンサート・ホールやレコード会社まで。全部、ピピピッて当てちゃうの。あ、いいのよ、座って俟ってらして」

あなたは深夜の喫茶店の暗闇に佇んだまま、包丁を入れた麺麴にシナモンを振りかける私の姿を見詰めていた。

「今は、いるんですね」

「んー？」

「だって、さっき、いなかったから。ほら、最初。あなたを見たと思った、それが斜視の女の子だと思ったのは俺の錯覚で、あなたはチェシャ猫みたいに姿を消してしまった。後に残ったのはあなたの聲と物語だけだった」

「ああ」私は温めたトースターに麺麴を並べながら嗤った。「私は語り手だからね。そんなこともあるわ」

「どうして、そんな風に自然體でいられるんですか。見られているのに。語り手は姿を見せちゃ駄目なんじゃないですか」

「もうすぐ退屈だった前半の幕が終わって、休憩時間に入るからじゃないかしら。ねえ」と私が第四の壁に無かって語りかけると、見えない客席は押し殺した嗤い聲と咳払いに波打った。「語り手が姿を見せちゃいけないなんて規則はない。舞台上にいくら姿を現しても見えないことにされてしまうって言う規則は、物語芸術にとって本質的なものだと思うけれど。幽霊みたいなものね。恋人に会いに舞台上の世界にやってきた、だけど手を触れることは出来ない。さあ、出来た。珈琲とシナモン・トースト、さっきの卓に運んでくたさらない？ あら、冷蔵庫の中に茹で卵がこんなに。明日の朝のモーニング用かしら。いや、もう、とっくに今朝ね」

というわけで、私たちは此处で一息ついて、深夜の喫茶店で一服することになったのだった。

「時刻は予定通り、三時二十七分を回ったところ。丑三つ刻って言うのかしら。十分ちょっとの休憩を挟んで後ほど、お目にかかりたいと存じます。わたくしはこれで。じゃあまと」と私は言った。

タカネ

—— 齡五十の坂にさしかからんとする頃、ハードウェアとソフトウェアの両面に互る民間での長い開発歴を評価されて警視庁ハイテク犯罪総合対策センターに警部として抜擢されたという湊は都心に戻る電車の窓際の座席で、礼状を手に捜査に赴いた精神病院で参考資料として譲り受けた少女の手記を読み終えて〈窓〉の外を滑空する明晰な空と街並みを眺め、兩のこめかみをほぐした。湊は眼を閉じた。

ドラマの設定は八六年となっているが、湊警部のプロフィールはインターネットを舞台にした犯罪と闘う刑事と書いてある。私は「戻る」をクリックして次に遠藤警視のプロフィールを読んだ。遠藤は主人公格の一人であり、フォークのコマンドを使うと書いてある。フォークの場面は楽しみだったが、私はずっと年長の湊警部に興味を引かれた。プロフィール画面の寫真うつりがいいだけかもしれない。

彼は賑やかな街が好きだった。彼は沈黙した街が好きだった。人々が暗く俯き亡霊のように太陽光線を避け、夜でも色眼鏡を掛けて走り去る都市は何処に消えてしまったのだろう。それは彼が反復して夢に見て来た都市だった。そこでは人々が早くから天上への登攀を企てて星々に手を伸ばし、己が能力の狭量さと世の無為を知って努力することを辞め、定職を持たず飽きっぽく、祖先も子孫も持たない者の胸だけに宿るあの荒涼を互いに隠し合うと謂った礼節すら怠り始めて最早久しいのである。会社でやるべきことは全てやったと考えていた湊にとって、年金も退職金も十分に約束されるという条件の警視庁からの誘いを断る理由は殆んどなかった。—— 人間は死んだら何処に行くのだろう。最後にそんなことを考えたのは小學校の中學年の頃だったか。若さに溺れた頃、自分はもう若くはないと感じた頃、そしてそれが幻想と偽りであったと気づく頃、彼にそんな疑問が湧くことは絶えてなかった。父親が美術教師で物心附いた頃から家庭にテレビン油と絵の具の匂いが漂っていたからだろうか、彼は画が得意だった。將來の夢の作文ではベレー帽を被って禿げ頭を隠すレオナルド・ダ・ビンチのような白い鬚を蓄えた自分の画を描いて提出したものだ。エンジニアになると夢を見たのは思春期に入ってからだった。それ以前の自分を忘れたかのように、彼は潤滑油の香りとモーターやファンの騒音を愛するようになった。仮令誘いが大學からのものだったら彼は躊躇したように思う。教壇に立つことの責任が税金によって拳銃を支給されることのそれよりも重く思うのは何故だろう。湊警部は未だに、自分の名前の上に紋章は體に悪い紫外線を発しているように感じられる日本国警察の紋章

が入った名刺を正視することが出来なかった――。

私は兩目にまばゆい光を受ける。地下から地上へと視神経が明順応する、戦後間もなく建てられた雑居ビルの地下からコンクリートの毀れた階段はエスカレーターとなって、かの男の手に引かれた私を人々が往來する地上へと運ぶ。私は対蹠地に上り立ったように錯覚する。人々が対蹠人だとしたら、私を俟つのは魔法の瓶の *Dickens* か、或いは煉獄か。私は彼の手に引かれたまま都心から遠く離れていく電車に乗り、名前も知らない駅に降り立った。私たち――湊警部と私、鈴木高音と――は、謂わば、そうして平行線を辿って摺れ違ったのだった。

私のことなら、シナリオ・ライターの二名子さんに聞いていると思う。私が本当はどんな女の子なのか言葉で説明するのはちょっと難しいけど、偽の自己紹介なら簡単に出来る。私はモデルや女優といった職業に憧れる、奥二重の瞼を持った普通の高校三年生だ。それ以上のことは、ドラマの進行にしたがって示されたはずである。兎に角、あなたが観た私の演技を反芻して欲しい。あなたにもきっと共感できる、何処にでもいる素直な寂しがりやの女の子だって判るはずだから、逃げ出した私を攻めないで欲しいのだ。

――外は霞んでいた。電車を降りた私たちは寂れた駅舎を出た。遠くが見えない。雑踏をなす群集には人っ子一人いない。猫は、いるんだろうか？ 多分いないと思う。みんな、亡霊みたいに活気附いて流れていく。

「ねえ、リョウ、ジャヴァ・ラングって何？」

「君は知る必要のないことだよ。むしろ知らない方がいい。君はこの世界にとってはお客さんなんだから」

「リョウは、ジャヴァ・ラングを話せるの？」

細く真直な道が入り組んでいる。道は銀色の金属で出来ていて、踏むとちょっと足の裏がピリピリした。道じゃないところは深緑のリノリウムで、ずっと平坦だった。その道の上を、一直線に頻繁に電気で出来た命が流れていく。遠くに、貯水槽だろうか、でっかい乾電池みたいな建物が幾つか突っ立っているのが見える。私たちはその広大な草原の真ん中に聳える、四角い巨大な、異様な建造物に向かって歩いていった。上の方は霞の中に隠れて見えない。

「これで、もしかすると、全部終わりがもしれない」リョウが呟く。

何、どういうこと？

「これっきりもう会えないかもしれないってことだ」

私たち？

「それでもいいよな？」

それでも、って？

「一人でだって生きて行けるよな？」

「こっちの台詞だよ……そんなの。それに、私たち始めから一人ぼっちだったんだし」

「あの建物まで辿り着いたらお別れだ」

「気持ち悪いよ。私たちは始めから付き合ってすらいないんだから、お別れだの何だのって。私は一人になっても今と全然同じことだよ」

「人生は長く虚しい」

「一人で生きて行くんでしょ？」

「これでもがんばってるんだよ。これでも耐えてるんだよ。気持ち悪いとか言うなよ」

「今更どうでもいいじゃん」

空は深く暗い。自然と、大地や建造物が発光していて、その薄明かりで視界は効いたけ

れど、天候は夜のように暗かった。もう夜になったのかな？　もしかしたら、意外と天井は低いのもかもしれない。手を伸ばせば届くくらい。だけど天井は発光していないから何も見えないのかもしれない。

「さっきから、ずっとひっきりなしに考えてたんだけどさ。宿題を出したでしよう？　私が死んだら何処に行くのかって。降参したら、答えを教えてくれる？　でも、その場所について何となく分かってきたことは一つある。その場所は、きっと私たちがこれから行くところにいるところなんでしょう」と、前を見たままでタカネが言った。「ねえ教えて、リョウ、私たちは死んだら何処へ行くの？」

「きっと天国さ」

「本当に？」

「どうして」

「私は、出来ることなら消えて無くなりしたい」

「それは」

近づくにつれて筈は唸りを大きくした。強い風が建物全體から吹いてくる。光を反射しているらしく、私たちの周囲にも無数の虹が揺らめいていた。リョウの顔が一瞬、虹色の光に包まれて発光した。

「君は死って言うことを解かってない。いや、解かってるんだろうけど、君は今、本物の死を表現するために死って言う言葉は使わなかったね。君が今言った死は何か他のものの象徴としての死だ。多分もっと卑近な……例えば俺との別れとか」

「傲慢なんだね。あなたのことは何とも思っていないって言ってるじゃん」

「怒ってるのか？」

「あなたも嘔うべきだよ。私はそんなに真剣じゃない」

「おかしいよ、君は何時でも嘔っている、氣違いみたいだ」

「差別語よ。氣違いの何が悪いっての？　認識の地平の違いだよ。地球の裏側の人間は歩いてるんじゃないかって逆立ちしてるって言うようなもんだわ」

「違うよ。君も社会に出れば分かる」

「社会になんて出ない」

「いつか、出ることになるさ、君も大人になれば。それとも、女の子だから結婚して専業主婦かな」

「好きな人と出会えたらね」

「好きな人なんて俟ってても一生現れないよ」

「あら、現れるわ。私、可愛いから」

「好きという言葉の意味をどう取るかだろうな」

「好きは好きだよ。愛は一つ、ワン・ラヴ」

「変わっていくよ。君も、五人男の子と付き合えば、好きな人って思ってたのが、私のことが好きな人って意味だって氣がつく。そのとき、好きって言葉の意味が変わる。それで、それからまた五人くらいと付き合うだろ。そうすると、私のことを好きな人って言うのが実は単に私の體に触れたがってる人って意味だって判る。それに氣づいた頃にはもう君もオバサンさ。どんなに年が若くても、女の子としてはもう終わり。人生は一方通行だから」

「キモ。いい大人の男が恋愛語ってるよ。いいじゃん、別に、セックスすればいいじゃん。愛の目的がセックスで何が悪い？」

「それは、君がまだセックスしたことないからそう思うんだろ……憧れてるだけだよ。セックスは現実には、汚くて、退屈で」

「ださ。そういうの、まるでもてない人みたいだよ」

「真実だよ。セックスは汚い。君も何時か氣づく。そして、氣づいたときにはもう手遅れ

なんだ」

「此処って、地面が湿っぽいね」

足元が吸い附くような感じ。ピリピリ痺れる。時々滑りそうになる。

「ああ。ほら、周りを見てご覧」

多量の人影が高速で行きかっている。ゆっくり歩いているのは私たちくらいのものだ。高速で、飛び交っている。

「飛んでるの？ この人たち」

「ああ。何処から盗まれてきて、そして飛んでいる。言葉だからね」

「この人たち、言葉なの？ 人間に見える……あれ？」

そう言えば、人影どもは人間の形を、厳密には、していない。何か、透けてるし、暗いし。

「そうだよ。言葉だから、男性と女性があるだろ？ 見分けるのは難しいけど、過去形とか未来形とか、条件法なんてのもある。規則を覚えたら簡単なんだ」

「男性と、女性？」

「ワカンナイかい？ 顔の辺りをよく見てご覧。泣いてる方が、男性だ」

よく見ると、確かに俯いてジメジメ咽びながら飛び去って行くやつと、それよりちょっと背が高く、明るく胸を張って飛び去って行くやつと二種類いた。泣いてる方が、男性だ。言われてみると確かに。

「ね。あの涙で、此処は地面が湿ってるんだ」

「！ そんなに！」

「時には踝辺りまで来ることもある、水位がね」

「うわ。古今集の世界。何が悲しくて」

「君は男じゃないから一生解かんないだろうな」

「ハハハ。それで、あれが言葉ってことはやっぱり何処かに語り手がいて、そこから何処かにいる聴き手に向かって邁進してるってことかしら」

「語り手、聴き手なる二項対称性は考慮に入れる必要がない。ただ、慣れると意味が読み取れるようになってくるよ」

「この、膨大な群集が、意味を成している……」

私たちの周囲には、見渡す限り、目に見える範囲でもざっと数千人の群衆がいる。それが高速で行きかっている。

「読み取ってみたい。それは、壮大な叙事詩なんでしょうね」

「ああ。簡単だよ、どんな言語でも慣れるまではちょっと骨だけど、毎日努力して勉強していればある日突然スラスラと読めるようになる。語學ってそんなものだよ」

「この人工的な言語、機械語でも？」

言葉たちは、明らかに人影であるように見えた。人だ。言葉を喋る人だ。言葉たちに言葉を喋る能力があったらきつと、新しい次元の発見だろう。

「うん。彼らは元々人間だったんだ。だけどあるとき、大きな津波が来てね。津波って言うか、ほんのちよっとした波だったのかもしれない。ザザーッと。それで跡形なしさ。人間は消えてしまった。で、やつらがその成れの果て」

「人間が消えても、言葉は残ったってこと？」

「哲學的に言うと、そうだね」

「じゃあ、あの言葉たちと話すには？」

「ジャヴァ・ラングを使う」

「それ確か、さっきの人の話によると、機械に話しかけるための言語じゃなかったかしら？ ところであの女の人」

「あいつと俺とは何もないよ」

「そんなこと聞いてないから。名前は」

「シンプリシティ」リヨウはポツリと、そう教えてくれた。

「シンプリシティ？ ……それ本名？ 名前まで英語なわけね」

「多分。でないとしたら、俺は彼女の名前を知らないってことだ」

周囲には相変わらず沢山の人影が漂っている。暗いんだけど、雰囲気は朝の、ちようどサラリーマンの通勤姿が途絶えた頃の八重洲口みたいな、静かで、懐しくて、ちよっと寂しくて、そして無性に虚しくて。

「これらは、人間ではないのよね」

「そう、ただの言葉だ」

「じゃあ人間たちはいったの」

「消えたんだ、すべての形あるものと同様にして」

空、黒い空が綺麗だった。

「誰の目を見ても、私が咎められてるみたいな気分になるの。誰からメールが来ても、私を警察に突き出そうとしてるんじゃないかって」

「どうして？ 何か悪いことしたの」

「ううん。私が悪いとしたら、きっとそれはただ、私がもう子供じゃないから」

「じゃあ、こっちに来て。ほら」

イチドウリヨウが私の肩を抱き、體を引き寄せる。

私たちはすでに大きな建物の中にいた。耳朶がグオングオン鳴る。此处は、建物全體が扇風機みたいだ。しかも熱い。生温いヌルヌルした薄暗がりの中に沢山の人が動き回っているけどもしかしたら、人じゃないかもしれない。でも、植物でないことは確かだった。暗くて兎に角よく分からなかったのだ。

「私は、罪に塗れて、汚れて、いる」

リヨウは私を強く抱きしめた。私はその時ただ、往來の邪魔だ、こんなところで二人して立ち止まるなんて、と感じていた。

「堕ちて、しまった」

「帰るんだ」

「帰れるの？」驚いて私は、顔を埋めていたリヨウの胸から離れた。

リヨウが頷く。「帰れるさ！ どうして疑うんだ？」

「だって。お家に？」

「勿論、君の家にだって。でもその前に、君の家があった、——今でも隠れている、あの世界に帰らなきゃいけない」

「でも、あそこは、此处よりもいいところかしら」

「どうか。それは君が一番よく知っていることなんじゃないかい」

私は目を閉じる。眩しい。此处は陽溜みみたいだ。外は夜なのに。

瞼の裏が真っ白くなった。此处は何処だろう。私は何処にいるんだろう。

「そうだ。知リたがってた宿題の正解を教えて上げる」リヨウが言った。まったく唐突に。

「俺たちは、死んだらテレビの外に出るんだ」

「え？ ごめん、聞こえなかった。何？ 何の外に出るって？ 此处、視覺的にはこんなに綺麗なのに、騒音激しくない？ ところで」

——あんまり急だったから、本を持って来るのも忘れちゃったんだ。

囚われの身のまま、私は十八度目の誕生日を迎え、法律の上では大人になった。リヨウ

が地図に書いてくれた本屋は直線距離で一キロも離れていなかったのだが、久しぶりの雨が降っていたとか間に六十年代郊外じみた畦道があったりで行き着いたときにはいっぱいの水を求める行き倒れの状態だった。兎に角、台無しになったサンダルを何とかして懲しい。東京に雨が降ったのは二ヵ月振りだ、と今朝のニュースが言っていた。観測史上これが初めて最後だろうという晴天の日々、このまま世界が終わるまで雨なんて降らないんじゃないかと思っていたが降ってみれば何のことはない。平凡な雨、あつけないものだった。

やけに広い店内には誰もいなかった。本棚には私の知らない新刊本が並んでいる。小さい頃に好きだったあの本たちは見当たらない。私は結局一冊も買わずに店を出た。

暗い本屋を出ると雨上がりの白い午前の町並み。住宅街。昼下がりには晴れ間も見えるだろう……。

私は「毀傷人」になるために此処に來た。彼好みの嘘を吐くために。彼一人だけのための嘘。虚構世界のための嘘の方は辞めた、諦めた。

スーパ―に寄って買出し。キャベツが二個セットで九十八円と安い。四個買いたいところだが冷蔵庫に入らない。妙に実が詰まったソフトボールのようなキャベツだった。部屋に帰って俎に載せて包丁を立ててみると異様に硬い。まるで木材を削っているみたいだ。意味もなく二玉千切りにしてボールに空け、水に晒した。何故？　ただ、水の流れる音が心地よかったから。止め処なく続く、非日常から始まった私の日常。日常の外部の要素さへも飲み込んでしまう真っ白な日常。誰も、どんなニュースも主義主張もこの日常に勝てはしない。水道水が淡々とキャベツの繊維を洗う。機動隊が来ようがテロリストが来ようがこの日常を明け渡しはしない、それが偽りの、何時まで続くか判らない儚い日常であるとしても、なんて考えると切なくなつて、悲しくなつて自分に酔つて私は掌の付け根で涙を拭う。

私は寢台に座つてその日常を、その静けさを視線で愛でた。オフ・ピンクの枕カバー。昨日飲んだ白葡萄酒の空き瓶。天井。傷だらけの鏡板にはカーテンに透かされた陽光が音もなくクラブ・フロアを滑るミラー・ボールの反射光のようにカラフルな斑点になつて散らばっていた。ふふ、日常って何さ？　幻の郊外。指先がかじかむ。そんなにも日常が脆く簡単に壊れてしまう時代だから、時計の刻む一秒一秒がかくも愛しい、零れ落ちる葡萄酒の一滴々々のように。彼の帰りを俟つ。困われ者の毀傷人。

もう一度繰り返してみる？　オフ・ピンクの枕カバー。昨日飲んだ白ワインの空き瓶。天井。傷だらけの鏡板……。二回やると白けてくる。違う、機械的な繰り返しは経済的ではあつても日常的じゃない。

何時の間にか寝ていた。部屋の隅でリョウが飼つてゐるハムスターがキーキー言つてゐる。コトリと音がして部屋の中を何者かがカサカサ這い回り始めたので私は洪々這い上がつて電気を点け、床の上をすばしっこく移動するその物體を追つた。パソコンのケースの陰で、捕獲。檻に戻す。入り口の鍵が壊れてゐるんだ。私はガタガタ揺れてゐるぞいつを引張つて、苛ついて、檻から引き千切つた。意外と簡単、針金のやつ、なんて思つたら指から血が出ている。ポッケからハンカチを出すと、中に入つた安全ピンも転がり出した。ちようどいい。私は自分の血が滲んだハンカチで、檻の入り口を塞いだ。引き千切れた針金の先っちょに刺し、下んところは安全ピンで留める。

否、むしろ安全ピンあるんなら入り口引き千切らないで壊れた鍵んとこそいつで留めればよかったな。苛ついて泣きそうになる。

流しに行つて水を止めて水を切つてラップして冷蔵庫入れて終了、私は寢台に復帰、放

心再開。リピート。オフ・ピンクの枕カバー。昨日飲んだ白ワインの空き瓶。天井。傷だらけの鏡板。さっきボツケに安全ピンが入ったので思い出したんだけど今履いてるのは高校の制服だ。スカートだけ。上はリヨウに借りたジャージを着てる、流石にね。いや、別にいいんだけど……本当にどうでもいいんだけど、上下制服だどうでもいいってことを誇示してるみたいに見えかねないって事情が妙に引っ掛かってくるくらいどうでもよくて、それでどうでもいいから上下制服姿って言うのはやめた。って言うか、上は洗濯中なんだよ、乾燥機の中。あれ、寝てる間にまた雨が降り出した――。

それで、安全ピンのことを思い出した。それはミサキのだ。そう、それは遠い遠い昔の話、私がまだ普通の高校生らしく毎日學校に通っていた時代のことである。今思えば嘘みたい。脳波四ヘルツの霧の懸かった遠い未来の彼方の過去、桃源郷。私は何かに追われるようにして生活していた。だけど今いる此処のほうが、この「日常」の方が――知ってる、この狭いけど独身男性一人暮らしのためには快適な、ガスも二口あってトイレもセパレートで乾燥機、さらに皿洗い機まであって、一隅を埃を被った邪魔な TECHNICS SL1200 が占領している部屋、こっちのが夢なんだ、いつかそのうち醒める夢の中なんだ。

私は何かに追われるようにして生活していた。

西日が焼け附くみたいに挿した、だけど擦り切れた畳、三畳一間、〈窓〉の下には神田川の所に所帯じみてるわけでもなくどちらかというどと激しく非日常的な西日が焼け附くみたいに挿したあの教室で私がその安全ピンを拾うのを、ミサキは見ていた、嫉妬の炎に燃える少女のように、凝っと。ミサキは下半身裸で、キョウスケの方はパンツだけはズリ上げていたもののその強烈な西日に厭というほどミサキの太腿を流れる精液はキラキラしててキラキラスカイ。そんなの周知の事実だ。男女がセックスするなんて秘密でも何でもない。だけど無視されてる、無視することの上にこの公共圏は成り立ってるんだから秘密は秘密。そういう意味では。私は、ちょっと吃驚した。吃驚したから聲が出なかったんだ、忘れ物を取りに教室に戻ったら西日の中で（青春の逆光！）セックスしてるんだもんしかもセックスしてるのがミサキとキョウスケなんだもん、しかもバッチリ熱いところまで感ジアイ中、終わるまで聲をかけられなかった。三分間、俟っしかなかった。

戻ります。あれは私が此処に来るつい二、三日前、色々ものすごいことになってた時期だ。そんな状況の中、ストレスのやり場に迷った二人はついに教室でのセックスなどに走ったのかと思うのは短絡的に過ぎるかと思うが私はそう信じている。私は頭がおかしい。私の世界は超単純だ。仮象と存在の区別などない。私はどうしても、ミサキにこの安全ピンを返さなきゃいけない。私の彼女に対する、それから多分彼女の方も私に寄せてくれるはずの、信頼に答えるために。それなのに、私はあれっきり、蒸発してしまったのだ。――いつか帰る、帰らなきゃいけない。んでなきゃ、私はこのまま此処で死ぬってことだ。

（リヨウに殺される？）でも帰る日のことは、忘れていたい。こういうの、竜宮城？ 仙境？ 異界って言うのかしら。違う、こっちが本物、こっちが中心、こっちの生活に私のすべてがある。だから本当に、夢を見ているみたいなんだ。私は此処で死ぬんだろうか？ 此処から元の世界に帰るとき、私は何らかの意味で死ぬんだろうか？

私は二人の合體作業が終わった後、すぐに聲をかけたわけではない。気の抜け切った二人がアディとか言いながら弛れた会話をするのをバッチリ聞いてしまった。縁でもない犯罪行為を見せられた代りにその程度の情報搾取は出来るくらい、私は厭味な人間だ。今度は、前の地下鉄のときと違って、音聲環境は良好だった。

「お兄ちゃん」

ミサキは自分を愛しに愛して果てた後の男の髪を撫でながら、愛しげに、気怠げに、そう呼んだ。

「ねえ、おにいちゃん。お兄ちゃん、オニイチャン。お兄ちゃん大好きだよお兄ちゃん」

わざと禁断の言葉を租借するように、警官の前で煙草に見せかけたジョイントを吸ってみせる非行少年のように、セ〇パーセントの確率でテープが入っていない監視カメラの前でコンピニ・コスメを万引きする非行少女のように、ゆったりとミサキはその言葉を繰り返した。

「お兄ちゃん大好き」

「なあ、もういいだろ？　だけど忘れ物したんじゃないかったのか？　一緒に探すから、早く帰ろうぜ」

「もうちょっとダケ。一緒に此処にいて」

「忘れ物は？」

「いいから」

ひたすらキョウスケの髪を撫でて話をそらすミサキの（普段の彼女からは想像も出来ない）ねっとりとした聲はセイレーンの歌のようだ。キョウスケは私服、勿論うちの學校の人ではない（此処はお嬢様が通う女子高等學校）。實際、見つけたのが私じゃなかったら相当の処分が俟っている。相当の。だけどキョウスケって何してる人だっけ、誰か覚えてる？　大學生かな……。つまり要約してしまうと元も子もないが、ミサキは此処でこうなることを計算して、忘れ物だとか何だとか言ってキョウスケを神聖なる乙女の園の内奥、自分が普段勉強してる教室に連れ込んだってことだ。……。忘れ物したのは私だっけの。むしろ二人が気づいて振り返るのもかまわずこのまま廊下を通り過ぎて自分の教室に行ってやろうかって話だ。

「——大好きなの。DNAレヴェルの特殊な変性を起こして私の體の中に溶け込んで私の一部になってお兄ちゃん」
ハイハイ。

「——だけどDNAレヴェルでは私は半分おにちゃんなんだよね——」

「だから、離れていても特殊なぶらずまの力で、私の細胞とお兄ちゃんの細胞が半分だけDNA接続してだから言葉が通じるんだよね、私の綺麗なお兄ちゃん」

DNA接続って何だ？　そしてキョウスケは無言。表情は逆光でよく分からない。煙草を出すがミサキに優しく静止されて引っ込める。

「私は幼なかったわ」

否、どうでもいいからそろそろフトモモを拭おう、パンツを履こう。キミの自慢の白い皮膚を滴る澄んだその粘液は刺りに美しいし、それ、見てるとDNAの話がただのキミの神経病じゃなくなっていくというか、生々しいというか。

「世界で一番、お兄ちゃんが特別だと思ひ込んでた。絶対。だってお兄ちゃんは本当に頭がよくて、それを隠そうともしないから先生にも虐められて友達にも殴られて、そんな風に虐められて育った人は世界を救う救世主になるんだ、そういう運命なんだって。——フフ。おかしいわ。それはお兄ちゃんをお兄ちゃんだと知らなかったから、あのサルみたいな子のお兄ちゃんだと思ひて憧れてたからそんな風に変な誇大妄想が広がったのね、私の頭ン中」

さて、そのサルみたいな子ってユイのことか？　死んで豚と云われたり猿と云われたり、ユイも氣の毒だが私的には彼女は可愛い女の子である。——であった。

「でも、本当に特別だったのは、お兄ちゃんじゃなくてお兄ちゃんと私の関係だった。それを知ったときに、世界が変わったわ。コペルニクスの転回ね。大地は回る。特殊なぶらずまの力で、私にだけ世界の中心みたいに見えていたあの余計者のお兄さんは、ただの私の可愛いお兄ちゃんだった。世界の中心、私を中心に回して回る軌道を絶対に逸脱しない従順な衛星」

それでいいのか、お兄ちゃん？

「だよな、俺も衝撃だった。お袋が死んで、うちのあの秘密を初めて知ったとき、正直俺もミサキにこのこと知らせるべきかどうか迷ったんだ。それくらいミサキは俺にとって特別な存在だった。だけど後悔してない、ああしてよかったと思ってる。それで俺たち、こんな関係になれたんだから」

そうか、お兄ちゃん。

「お家のシキタリが何よ？ 私たちは血で繋がってる、戸籍で繋がってるんだから、ホラ」ミサキが鞆の中をゴソゴソ探る。しかしお家の仕来りとはどんな仕来りか知らない。あの葬式の格から判断するとキョウスケンちは普通の中流プロレタリアートの家庭だ。いや別に差別するわけじゃない。しかし仕来りとは何だ。どんな家族にもそれぞれの妄執、ファミリー・ロマンがある。子供たちはしかし、その両親が押し付ける妄想から社会が押し付ける妄想に鞍替えし、その鞍替えを反抗という形で正当化してシトワイヤンとなる。うちの両親は特別な両親じゃない、王様とお后様じゃない、特別だったのはミサキの表現を借りれば両親と私との関係に過ぎない。だけど関係って何だ？ そしてこの社会と私たちとの関係はどれくらい特別なんだろう——。キョウスケンちの仕来りとやらも、ご両親のちょっとした個人的な都合をキョウスケが世界の法則か何かと勘違いし、しかもその勘違いにミサキがさらに大袈裟に感情移入してるに過ぎない。ミサキの鞆の中から二枚、中に何かの用紙が入ったクリア・ケースが出て来た。

「ほら、さっきお役所で戸籍謄本とって来たの、私のと、お兄ちゃんのと」用意がいい。

「こうやって、重ねて、こうやって、こうやって」

ミサキがクリアケースから一枚ずつ紙を出し、二重にして、鞆に沢山刺してある安全ピンの中から一つ、はずしてそれで二枚の紙を貫き留めた。ちなみにミサキは安全ピン・マニアだ。彼女の耳朵に無数に開いている穴もすべて安全ピン製だ。うち、一つは私が貫通した。下敷きにした消しゴムと感触の違いが分からなかった。別に、趣味として手軽で安上がりな割りに十分で可愛いとは思うが、その自慢の美肌を時々そのピンで刺して遊ぶのは止めて欲しい（私は知っている）。あと、って言うかそれよりブランドの革製品とかには余り刺さないで欲しい。食い合わせが悪い。それにしても、遠くて何が書いてあるかは分からないがそこに二つ並んだ戸籍謄本は、ミサキの太腿の今ではもうカピカピになった體液よりずっと衝撃だった。そんなデータに比べれば、DNAなんて都合いいように呼び出されて使われる道具に過ぎない。効力はあっても何の権力もない。例え戸籍が紙の上のただのフィクションだとしても——。

「ホラ、これで繋がった、私たち」と、満足げに微笑むそのミサキの微笑が怖い。

「この紙が、私。こっちの紙が、お兄ちゃん。二人を鎖している、キヅナ、ピン。——これがそう。紙よりピンの方が強い、分かるわよね？ ルール、その一。チョキはパーに勝ちます。キヅナっていても、これは単に私とおにちゃん繋がってる、ってことじゃないの。そのことはすでにして紙の上に書いてある。これは、逆に、その関係性を隠す、地上から距離を置く、土を掘って中に埋める、『秘め事』、ミステリ、シークレット。クエスチョン・マーク。抑止力。これがある限り、秘密の『根源』に到達してそれを曝してしまわない限り、私たちは互いを求め合い、燃え続ける」

そう言って、ミサキはピンを撫でる。強く、扱く。刺り強く扱き過ぎたものだから弾けて飛んで私の足元に転がった。ア。

拾っちゃっていいんでしょうか、って、ハイ。もう拾っちゃいました。

こうしてミサキとキョウスケの秘密は私のポケットに納まったのだった。

——ご飯を磨いでセット。鰯を焼き魚にしてコンソメ・スープを作ることにする。それにしても何で私は男の家で鰯を焼いているのか？　これで一週間近くになるだろうか、私の謎の監禁生活。逃げようと思えば逃げられる、逃げなきゃいけないのはだけどリヨウの方で、私は彼の毀傷人として此処にいるらしい。

居心地がいいから、私は兎に角生きていくから、細かいことは気にしない。

私が捕獲されたのはミサキの安全ピンの日の翌朝、登校途中のことだった。駅まで歩く途中の裏通りでイチドウリヨウの姿を見たとき、私にはその後どうなるか、想像することが出来た。組織が動いていることは知っていた。だけど私は俯たまま彼が立ってる方に吸い寄せられるように歩いた。足が勝手に動いたのだ。

リヨウがまるで機械のように、私に危害を加えようとする組織の思い通りに動くやつだって判ってたけど気にならなかった。例え捕らえられて再び、今度は容易には外すことの出来ない監視装置を着けられても、人體実験に供されても解剖されても、なるようになれって感じだった。だって、だって誰も私を見ていないのだから。あんなに沢山の視線が街に溢れてて、誰も私の名前を知らない。それなのに存在している自分が赦せなかった。現実を受け入れることが出来なかったのだ。ただただ消え去りたかった。テレビに出てるアイドルの中に私はいない。CD屋に売ってる無数のCD、子供たちが手にとって熱心に眺めているアルバムは全部私じゃない誰かの作品。それでも生きる？　それでも、生きて行ける？　つい昨日まで、私が世界で一番の有名人だったのに。救世主だったのに。女優だったのに。

世界は真っ白で、ただ平坦に何処までも続いて行く。

私は、逃げ出したかった。誰も私の話を聞いてくれないから。言葉が通じない。私は人を殺したりしないし、誰も傷つけたいなんて思っていない。恋もする、失恋もする普通の女の子。目立ちたくもない。何も考えてない。何もしたくない。ただ、あなたを楽しませただけ。あなたを慰めたいだけ。分かるでしょ？　寂しいんだ。ただそれだけなんだ。

お願い、気づいて。私ハ貴方ヲ守リタイ。気づいて。そして、どうしたらいいか教えて。何でもする。

気に入って貰えるなら、何でもする。私の話を聞いてくれるなら。だからセツカチに興味不明とか言わないで。何も求めない。何も持っていないけれど。

リヨウは私が横を摺り抜けようとした瞬間、私の腕を取り、ギュッと引っ張った。私が顔を上げる。

「お前、俺の毀傷人になれ」

そう言う彼は真剣な眼をしていた。

私には何故か彼が言いたいことが全部分かった。無言で、腕を引かれるまま、電車に乗る。学校とは逆の方面、郊外へ——。

「いいか」リヨウは〈窓〉の外を流れるベッド・タウンの景色を見詰めたまま言った。

「この行動は組織の命令じゃない。俺の独断だ。死にたくなかったら俺の毀傷人になれ。

俺の命も危ないんだ」

私は、無言で頷いた。承諾。電車は空の中を無音で疾走する。

私はビクッと體を震わせた。立て続けに二度、三度、突然インターフォンが鳴ったのだ。私は動くことが出来ない。警察？　違う。私は殺してない！　静寂。ゴオゴオと換気扇が焼き網から立ち上る煙を吸い上げている。続いて、携帯が鳴った。此処に連れて来られて、携帯と例のバッグはやっと私の手に帰って来たんだ。恐る恐る携帯を開くと、リヨウからだった。それで、やっと安心して鍵を開けた。

「ゴメン、鍵が出て来なくて。お、魚」

「お帰り」

私は嗤って台所に戻り、火を止めた。

「えっとさ」

「シー？ 何？」

リヨウはネクタイを緩めながら、真顔で台所を覗いた。

「俺さあ、大塚愛と結婚したいんだけど、どうしたらいいと思う。可能性あるかな？」

馬鹿なことを、嫉妬させたいのね、と思いながら私は答える。「ウーン。大塚愛につり合う男になるしかないんじゃない？」

平凡な日常。これが私の大切な日常。私は鰯と冷蔵庫のキャベツを盛り合わせる。何か、食い合わせが悪いなあ。

ジーンズとティーシャツに着替えたリヨウが近寄ってきて、私の肩を抱く。

「ずーっと護ってやるからな、少女よ」

「あなたの言うことは、いつとも、意味がないんだね」

リヨウが嗤い、私も空笑する。

私はこんなとき、嗤うことしか出来ない。大切な、下らない日常の風景を嗤うことしか出来ないんだ。

テレビを点けると夢遊病の街が映し出された。中継、表参道だ。私はあの人たちの人生の目的が理解できない。みんな、どんな構造に規定されて歩いて、何処に向かって生きているのか、まるで糸に引かれた操り人形みたいに。私は苦労した、努力した。みんなと同じように振舞わなきゃいけないと思って。みんなと同じ動きを學ぶために、あらゆる手を尽くして生きてきた。そしたら疲れちゃったんだ、とっても。

ポケットに手突っ込むと、安全ピンが出てきた。ふと、ミサキに電話してみようかと思った。今、十時半、うまくいけばこれから会って、リヨウの前に帰れるかもしれない。もう夏休みが始まっているし、バイトでもしてなけりや会えるはずだ、と、電話することにする。ガタンと音がして足元を何かが這い回り始める。ハムスターだ。リヨウが飼っているハムスター、壊れた入り口を私が安全ピンで留めた檻の網を抜け出してまた部屋の中を走り回っているのだ。コンセントのコードを齧る、脱糞、エトセトラの悪さする前に捕まえないきゃいけないんだけど、早く電話もしたいし、あー、二匹も出てるし！ 私は苛ついて、思わず手にした安全ピンの針でそのうちの一匹を突き刺した。しまった、殺ってしまった、と思って眼を閉じる。

突き刺したはずなんだけど、突き刺さっていない。軟らかい毛皮は裂けているらしい、だけど何だか手応えが、ハムちゃんではなかったのだ。硬いものにぶつかって針先が滑った感じ。しかもまだ動いている。私はそのハムスターを手に持ち上げてみた。お腹のこの毛皮が縦三センチくらいに渡ってパッキリ開いて、中身が覗いていたんだけどその中身って言うのが、金属なのだ。肌色に塗装してカムフラージュしてあるんだけど、どう見ても金属なのだ。そういえば、ハムスターが手や首を動かす度に微かに歯車の音が聞こえる。お腹の中は蓋みたいになってるんだけど微細な螺でとめてある。リヨウのクローゼットの中から道具入れを探し出し、眼鏡用のドライヴァーでその螺を全部取り外すと、ふたは簡単に開いた。中に単三電池が二本入っている。私はハムスターの円な瞳を見詰めて、首元を撫でた。よく見ると瞳は濃い珈琲色のセルロイドで出来ていて、中に光センサーか小型カメラみたいなものが入っているのが透けているのだった。単三電池を一個抜くと、呆気なくハムスターの動きが止まった。

もう電話どころじゃなかった。何、これニセモノ？ 私はウッディ・アレン？ もしかして全部そうじゃない？

もう一匹、部屋の隅に蹲っていたハムスターも捕まえて針で刺してみると、それも中は

機械だった。精密機械。

もしかして、これ全部……。テレビに映ってる表参道の人たちを再びよく見ると、何だかその人たちも動きがギクシャクしてるような気がする。そうか、世界はみんな作り物だったんだ。私はじゃあ、この世界に一人ぼっちってこと？　ねえ、どうやったら出られるの？　どうやったら帰れるの？　懐かしい未だ見ぬ家族と親しい友達たちの所へ。兎に角この世界には人間も、生き物も一人もいない。きつとりヨウもニセモノだ。じゃあ、もしかして。

——私はピンを取り出し、恐る恐る自分の腕に刺そうとした。夢の終わり？　これで終わりに出来る。自己意識を持った私という人間は始めから存在しないか、あるいは私が終わらせるかだ。けどどうしても刺せなかったのである。

頭の中で万華鏡が自転している。此処がテレビの外でないとしたら何処だろう。私はまだ中にいるのだろうか。私はゲームを止めて偽物の世界を抜け出したはずだった。檻の中からもう一匹、ノコノコハムスターが出てきて部屋の外に逃げ出そうとする。立ち上がってそいつを捕まえようとしたら、スルリと手を摺り抜けてヨタヨタ蹣跚めき、「止めろよー」と言った。ハムスターが喋ったのだ。

それから私の眼の前でブルブルと震え出したかと思うと、背中が開いて（なんとチャックになっていたのだ！）中から突んがり帽子が飛び出した。

「あんた誰？」

ハムスターの皮を全部脱いだそいつは熱そうに額を拭った。コビット？

「俺？　グノームだけだよ……」

「ぐのおむ？」

髪もふっさりした口鬚も真っ白なのに、似合わない甲高い聲のそいつは、判るだろ、とても言いた気に眼を背ける。

「ったく。マヂで殺されるかと思ったぜ」

「何ー、何ー、何こいつー。ところで何でお米背負ってないの？」

「いやヤマザキパンじゃないから」

「なあ、俺と一緒に逃げ出さないか？」

「何処に。まさか、御伽噺の世界とか地下帝国とか言うんじゃないでしょうね？」

「そんなんじゃないけどさ」

グノームはモジモジしている。

「えっとさあ。あのさあ」

「何よ、言いたいことがあるならはっきり言いなさいよ」

「俺、あんたがこの部屋に來たときからどんな人か想像してたんだけどよ。ハムスターの中からじゃよく見えないからさ、聲しか聞こえなくて」

「え。聲は聞いてたってこと？」

「寂しいところは……別にないんだけどね。」

「いや、悪気はないんだ。いつかあんたのこと此処から救い出してやろうって思ってた」

「コビットさん何かに助けて貰わなくても私は何時でも帰ろうと思ったら帰れます」

「いや、あいつ、イチドウリヨウは悪いやつなんだぜ」

「知ってます」

「あんた、聲から想像してたよりずっと可愛いな」

「あ、そ」

「流石、あいつが眼を付けて來ただけある」

フーン、と言いながら少し安心した私はドライヴァーその他をクローゼットに片附ける。此処がまた何かの中だとしたら飽きるまで遊んでまた外に出るだけだ。

「あんた、知らなかっただろうけどずっとあんたんちの部屋んなか、盗撮されてたんだぜ」

「ああ、組織でしょ。アレック」

「は？ 組織？」グノームが大きな眼をギョロつかせる。「何言ってるの。あんた、デンバか？」

「ちょっと、女優を莫迦にするもんじゃないわよ」

「違うよ。あいつ、イチドウリョウウって盗撮が趣味でさ。あんたに眼を付けて、始めは通學途中を狙って撮ってたんだけどそのうちエスカレートしちゃって、マニアには在りがちなこと。ついにあんたんちに忍び込んで部屋にカメラ仕掛けちゃったんだ、ほら、最近遠隔操作のやつがあるからさ」

「えー、ちょっとそれ、本当？ あのリョウウが？ 信じられない」

「だったら、机ん中見てみなよ。ほら、左の引き出し」

言われた通りに引き出しを開けてみると、中にウォークマンのような、無線機のような、携帯のようなアンテナの附いた機械が三個ばかり入っていた。Receiver って書いてある。あと、小っちゃい賽子のような、これもアンテナが附いた物體が數個、レンズが附いているから小型カメラなのだろう。

「ウワ」

「な？」グノームがチョコチョコと私の側に寄って来る。慌てて拾い上げて掌に載せたのは彼の立ち位置が刺りにロー・アングルだったからだ、まったく。「でも大丈夫だよ。あいつ一人で楽しんでるだけだったから。裏ビデオ屋に売ったりは、していなかったと思う」

「ありえないよ」

私は謎の巨大組織に附け狙われる逃亡者でもなければ、悲劇のヒロインでもない。ただの盗撮魔の被害者だ。しかも、自分を盗撮してたその挙動不審人物の部屋に、今、私はいる。半分、私の自由意志で。これはどういうこと？ ドウイウコトデスカ？ 一番変態なのは、どうしようもないのは、一番困ったちゃんは、一番平凡なのは、私。

みんな迷惑してるんだよ。私のせいで、不愉快になってるんだ。あんた誰ーって思われてるんだ。私が不器用なせいで。私がチープなせいで。私がわがままなせいで。みんな私のせいだ。才能もない癖に、努力も出来ない癖に女優だなんて思い込んだばかりに、みんなに迷惑ばかりかけて。

テレビの画面が切り替わって始まった料理番組をぼんやりと立ったまま、最後まで見てしまった。筍の土佐煮と木の芽あえ。今夜作ろう。バラエティが始まり、私の嫌いな今風のタレントが出たためテレビを切ろうとしたんだけど、そのときビデオ・ラックに封を切ったDVDを発見。昨日、リョウウが買って来たものだろうか、ケースには何も印刷されていない。暇なときに見てみることにしよう、と思いつつ私は安全ピンのことを思い出す。早くミサキに電話しないと、会えても夜までに帰れないかもしれない。

電話をプッシュし始めたところで、後ろでグノームの唸り聲がした。

「ウゥ。助ケテ」

グノームがまた震えている。頭を垂れ、肩を震わせている。その背中が割れて、中から何かが出て来ようとする。何かが。

「ねえ、どうしたの？ どうしたの？ 何か出て来る。うわ、どうしよう」

「留めてくれないか？ 後ろ」

私は急いで、手に握っていたミサキの安全ピンでグノームの裂けた背中を刺し通した。コビトはまだブルブル震えている。

「ああ。マヂ死ぬかと思った」

「大丈夫？ 何ナノこれ。何ナノあんだ。何ナノこの部屋何ナノこの世界！」

「オイオイ、騒ぐなよ」

「騒ぎますよー！ こんなのあるえないよきもいんですケドー。何これ何こいつ、妖精の国からでも出てきたつもり？ アニメじゃないんだから、何これ。白雪姫、ディズニー、間違った理解をされた宮崎駿？ ごめんなさい、私帰ります。はい、ロケ終了ー。撤収ー。現実に戻る。コスプレは隔離空間ですものよ。私はゲーム中毒でもアニメ・オタクでもないから」

「あんだ、自分だけはまとも人間のつもりか、そう言いたいのか？」グノームが白けた顔をして鬚を捻る。死にそうな顔してもがいてた癖に。安全ピン外してやろうか？ それにしてもこいつの中には一體何が入っているんだろう。「ホラ、あんだの耳。自分の頭、触ってみろよ」

私は頭に手をやる。何か、髪の中でゴソゴソする。ゴワゴワしたものが頭の天辺に二つくっ附いている。慌ててテレビの画面に自分の顔を映すと、私の頭に猫みたいなでっかい耳が附いている。ピクピク動いてるし。

「ちょっと、どういうこと？ 何したの、私の頭に。悪戯やめてよ」

「悪戯とか言うなよ。自分が悪いんだろ？」

「何、また私のせい？」

——質問です。みんな、もう飽きた？ それでも、まだ舞台に立っていたい私をどう思う？ もう、力尽きて足も棒になって、台詞を喋ることも出来そうにないというのに。

「力を抜いて、そのままでもいいんだよ」グノームの甲高い聲が優しく掠れた。「何もしないで、何も考えないで。それが君の仕事。女優だろ？ 君は可愛いよ」なんて言って微笑んだ。本当に、こいつの中には何が入ってるんだろう。

DVDを手にとると、鏡で出来ていたケースに私の顔が寫った。猫耳、結構可愛いと思うんだけど、どうだろう。自分だからそう思うのであって、他人が見たらきもいかな。弱音を吐いちゃいけない、この舞台を守っている私がしっかりしなきゃ。VHS対ベータ戦争に敗れたソニーがその経験を活かして、自社で独自に磁気媒体を開発しないことにより成功したと言われるプレイステーションにDVDをセットし、グノームを膝に抱いてソファに蹲る。

画面にインターネット・サイトのインデックス・ページみたいのに、*play, chapter menu, making, profile*のアイコンが並んだメイン・メニューが出て来て、途中から再生でなかったと言うことはリヨウは封だけ切ってまだそのDVDを見ていないらしい。監督や音楽担当と言った裏方のデータは入っていなかった。

鈴木高音

葛城優悲

遠藤慳哉

泉二名子

湊警部

そんな感じに名前が並んでいたが、役の名前なのか俳優たちの本名なり芸名なのか判然としなかった。私は湊警部、遠藤といった男性陣のプロフィールを一通り読んでから、最初の鈴木高音という名前をクリックしてみた。生年月日や出身地が書いてある。趣味は女優ごっこ。特技は空白。内容もやっぱり役のことなのか本人のことなのか分からない。私はメイン・メニユーに戻って *black* をクリックした。

タイトル画面、スキップ。

爆音。サイバー・トランスだ。何故サイバー？

一瞬、実写かと思った。それくらい丁寧に作られた、アニメーション。

暗い藪の中。泥だらけの女の子がしゃがみ込んで泣いている。それを男の子が立って見守っている、そういうシーン。画面の中央にテキスト枠が出る。「私は愚痴を言わなかった。私は何の文句も言わなかった。それなのに私は辱められた」突然暗転したかと思うと、そこは何処かの體育館みたいな場所だった。すごく広い。沢山人がいる。色んな人が漫画とかセル画風の絵とかを売ってる、そういう場所。画面はその場には余り似合わない感じのホスト風の男をクローズアップする。男は折り畳み机の片隅で本類を売ってた大學生くらの女の子の前の、パイプ椅子に座り、二言三言会話して、お金を払い、鏡のように光るDVDのケースらしきものを受け取って立ち去った。会話は聞こえない。BGMには全然合っていない安っぽいトランスがひたすら流れているわけだけだ。

また暗転。

雑踏。明るい。渋谷、壁ハチだ。女の子が一人、立っている。本当によく作られたアニメーションだ。だからすぐ見て、うちの高校の制服だって判った。

男の子が現れて、手を振る。最初の画面で、立ってたほうの男の子だ。二人は手をつないでショッピングを始める。表参道だ。

暗転。

ちなみに暗転するといちいち自分とコピトの顔が画面に映って気持ち悪い。すごく、二人とも一生懸命観ている。

喫茶店の中。今度はさっきの男の子がいなくて、さっきの女の子と、DVD買ったホスト風の男が向かい合わせに座っている。相変わらず聲は入っていない。で暗転。

「ナンカ、シュールなアニメだね。すごくお金かかってるのに、ストーリーがない、掴めないって言うか、単純にストーリーが存在しない。そのせいで逆に、絵がしっかり作ってあることが不気味に思えてくる」

暗いテレビ画面に映ったグノームが、私の膝の上で無言で頷いた。

唐突に、再度、一番最初の藪に画像が戻る。昼だ。

数人の警察官。背中に監視庁と白く印刷された防弾チョッキに、制帽ではない、作業用の帽子を被った出で立ちで、ニュースでよく見る初動捜査の映像である。しかしカメラの位置は警察官の表情が見えるくらい近く、アニメだから、カメラワークは実際では不可能なくらいダイナミックになっている。「私の首吊り死體とともに、事件が明るみに出た。私の陵辱された現場が捜査されている。この手の犯罪は警察と報道機関の自粛により、特別な理由がない限り公表されないという。私はすでに死んで、この世界の脈絡を失っているのだから、もう関係ないのに。関係ない！」と、ハート模様の装飾のついたテキスト枠が再び現れ、キーボードから一文字ずつ順に打ち込む速度を模してピコピコと文字が流れる。カメラはゆっくりと坂をパンして、土手の上の道路に移る。数台のパトカーが停まり、十名ほどの警官がその周りに屯し、さらにその周囲に数人、野次馬が立ち止まっている。警官たちは特に何もしていない。何もせずにパトカーの周りに立っているのが彼らの仕事なのだろう。

今度は、「八ヶ月前。監視庁、ハイテク犯罪総合対策センター」とテキストが出て、土

手の捜査情景に女聲のナレーションで過去の回想が被さっていく。バック・ストーリーの提示だ。シナリオの教科書にはよく説明的になるからこの手法はあんまり使わないほうがベターであると書いてあるんだけど、そういう違いの判らない私たちのような普通の視聴者には関係ないことだろう。兎に角私の知ったことじゃない。

……遠藤警視がハイテク犯罪総合対策センターに配属されたのは、二〇〇〇年の春のことだ。それまでは、生活安全部生活経済課というところで、マルチ商法とか鼠講の取締りをやっていた。やっていったって言うか、やろうとしていた。配属後半年で、新しく設置されたこっちのセンターに鞍替えになったのだ。回ってきたアンケート用紙にコンピュータ・プログラミングの経験アリって書いたのがその直接の原因らしい。二〇〇〇年初頭には警察内部でインターネット関連の対策が次々と具體化した。二月二五日の、警察庁の來年度予算概算要求は、二千九百五億三千百万のうちハイテク犯罪対策に百五十二億三千六百万円を宛て、また、情報通信局技術対策課にサイバー・テロ対策技術室を新設した。二月十三日にはハッキングの行為そのものを禁ずる不正アクセス禁止法が施行され、同時に各都道府県の警察本部に、ハッキング対策班が設置された。警視庁のハイテク犯罪総合対策センターもその一環というか、東京担当なわけだけど、国境が存在しない「サイバー空間」にそもそも県境なんてあるわけない。全国各地の犯人を追いかけているし、相談窓口にも全国から問い合わせが来る。そこが、従来の縄張りの警察組織とはちょっと異質などこだ。ハッキングと云うのは元々數學が出来ない人が脳味噌を沸騰させものすごい勢いで電子計算機を弄ることを指すので、それを不正アクセスと呼ぶのは適切である。しかしサイバー空間と云う言葉はマトリックスやスペース・カウボーイと云う用語を作ったのと同じSF作家の造語なので、何処かの大學の専攻名ではないが日本中に真似される立場にある官庁で使うのは白痴的である。

異質といえどセンターに勤務する係員の顔ぶれもそうだ。基本的にココはネット関係の技術を駆使した犯罪を摘発する部署なので、捜査員も電腦空間の知識がないと始まらないわけだ。しかるに警察學校ではそういう知識を余り教えていないし、警察官をしている限りそういう経験を積むことは余りないのである。それで、外部から多くの人材を引き抜くことになった。具體的には外資系の企業などでシステム・エンジニアをやった、三十代中盤から四十前後くらいの人たちが大勢來た。そういうことは、今までの警察ではちょっと考えられなかったことである。しかも彼らは、そんな歳で元々エリートな癖に、途中から入ったんだから当然だが警部とか警部補とかそういう身分に甘んじていて、別に嫌がりもせず仕事を楽しんでる雰囲気だ。それと、やたら無口。生え抜きの警察官が明るく朗らかってわけでは全然ないが、それでもやっぱり仕事中雑談くらいはするのである。

そういう彼らの様子を遠藤警視はひたすら観察している。それが、此処の捜査班長としての彼の仕事だ。骨が折れる。そういう新しい所属に敵意を示す向きは警視庁内に歴然としてあって、遠藤警視はキャリアの管理職として板ばさみな立場に立たされがちなわけである。出世も氣になる。普通の配属ならあうすれば昇進、こうすれば左遷みたいな大體の先例はあるわけだが、ハイテク犯罪総合対策センター捜査班長では自分がどういう道を歩むことになるのか見当も附かない。今後インターネットの犯罪的ステータスが予想以上に高まり、映画に出て来るみたいな大規模なサイバー・テロでも起こって業績を出すことになれば、警察庁のトップまで行けるかもしれない。サイバー・テロもメディア的な娯樂以外に存在理由がない伝説だが、何故かメディアを作ったエンジニアほどメディアに振り回され易いという定説通り、センターもその到來を本気で信じている警官が多数だった。出世したい。警察學校を出た頃はひたすら時代遅れな正義感に打ち震えていたものだが、最近はそうでもない。遠藤警視には彼女が出來たのだ。婦警さんでも上司の娘でもない、學生時代から行き着けの喫茶店のウェイトレスだ。可愛い。エッチもした。初めての彼女に

して初めてのエッチ。軽視が二十八歳で彼女は今年二十六。会う度に結婚の話になる。家が慾しい。子供をいい學校に入りたい。彼女は自分以上の男に今後巡り合うことはないだろうとまで言ってくれる。遠藤警視自身もあんまり口では言わないけど、彼女のことが大好きだ。本当に好きだ。彼女が白血病を患って病床に臥したら附きっ切りで看病し、彼女が死んだら自分も自殺するであろうくらい好きだ。警視は仕事中也気がついたらよくそういう妄想をしているのだった。

そういう心境の変化には部下との語らいも原因になっているかもしれない。捜査班員は基本的に無口なため事務的なやり取りしかしないのだが、一人だけ時々連れ立って飲みに行ったり仲がいい部下がいる。湊恭一。警部、四十三歳。この人は元々あるソフトウェア会社に勤めていた。性格がすごく捌けていて、他部署にもすぐに顔馴染を沢山作ってしまった。こういうことは警察関係では中々ないことだ。警察組織もだんだん変わっていく。時代の流れ。複雑だけど、そういうことなんだろう。

そしてみんな、日本の治安のために苦労していた。

ハイテク犯罪総合対策センターは総員六十名、捜査班の他に技術班と対策班がある。対策班は、警察スタンド・アローンでは対処が難しいサイバー犯罪捜査に企業の協力を依頼する係り、営業のような仕事。勿論警察の監視體制に本能的な反発を覚える民間人が多い。昨今、説明と説得の作業も一筋縄ではいかない。民間人の価値観と食い違う正義に正当性があるのかどうか、突き詰めて考えれば疑問なんだけど、そこに疑問を持つ警察官は構造的に存在しない。彼らには国家の安全という大義名分があって、それは民間人の感覚よりワンステージ高い正義である。逆にかつての軍部のように極端な右傾化や国家主義的暴走が起こる可能性はあっても、核分裂を起こすくらいの弱い相互作用が働かない限り警察官が民間人に意識的に回帰することはありえない。それに犯罪者は腐るほどいるから彼らは忙しいのであり、未だ殆んど無法地帯状態に近いサイバー空間ならなおさらのことである。

犯罪者を捕まえるのは面白い。初めて万引き主婦をパトカーに乗せて署に護送する間、遠藤（当時警部補）はずっと、無力なカブトムシを捕獲しに雑木林を彷徨った少年時代を思い出していた。逮捕は愛の行為に似ている。犯罪者に絶対的な権力を突きつける自分、そして平和を愛する全ての市民への慈愛だった。

次に技術班は文字通り、サイバー犯罪捜査の実働部隊である。此処に最も企業からヘッド・ハンティングされた人材が多い。実働部隊とはいえハイテク犯罪総合対策センターの花形的な地位を与えられているのは、警察側が彼らに華を持たせようとした結果だろうか。最後に、捜査班は警察庁の警備企画課みたいなもの、全国のハイテク犯罪対策課の調節と指導をやっている、警察庁の出先機関みたいなものだ。彼らは一応被害相談を電話で受け付けている。それに警視庁のホームページも非常に可愛らしい、子供へのアピールも強そう。デザインになっているが、あれはカムフラージュの性質が強いと信じておくことにしよう。犯罪者が知力と暴力と組織力の限りを尽くして彼らに挑んでくる限り、彼らも知力と暴力とチーム・ワークの限りを尽くして迎え撃つことになる。その為、表向き、指導のみにあたって実働は捜査諸課にあたらせるよう通告を受けているハイテク犯罪対策総合センターではあったが、遠藤警視はさらに元いた生活安全部を通じて事件発生時には自ら部下を率いて動けるよう、ハイテク犯罪の特殊性を強調して上層部にネマワシしていた。犯罪捜査に当たって現場に支持だけ与え、自分はオフィスに留まるというのは、精悍なる若き刑事、遠藤警視のやり方ではなかったのである。

その効果は意外なほど靚面であった。遠藤警視のところに廻ってきた捜査依頼書類のソースは生活安全部保安課の巡査部長だった。呼び出しを受けて霞ヶ関の警視庁に出庁すると、保安課から銃器対策課を中継して彼の元に届いていた書類の表紙には旧縁を偲ぶ生温

かい巡査部長の署名入りのメモが臍脂のクリップで留めてあった。

「中国製トカレフの違法取引……」と遠藤警視が表紙を捲って呟いた。トカレフというのは世の中に出回っている類似の拳銃の中では唯一安全装置が装着されていない危ない拳銃である。勿論空気銃やモデルガンの改造以外の拳銃の売買は行われているのだが捜査の網にかかったことはない。ハイテク犯罪総合対策センターは捜査機関として設置されたわけではないという経緯があって、捜査班の業績は不正アクセスによるパスワードの盗難とか盗撮ポルノとか言った小犯罪ばかりだった。拳銃マニアによる改造モデルガンなら、オークションで年間二桁の検挙がある。しかし刑事ドラマでは黒星とかチャカとかいう名でお馴染みの中国製トカレフは暴力団御用達の本物の拳銃であり、小さな漁船などに隠して税関を通さずに密輸入されるから減多に引っ掛からない。

報告書の内容は短く簡潔だったが幾許か謎めいていた。「オタク狩り」と括弧でくくった単語がまず目に飛び込んで来る。若者が使う俗語であると云うが本当だろうか。遠藤警視本人も勿論若者なのだが、此処でいう若者はもっと若い若者だ。オタク狩りというのはオヤジ狩りとかロレックス狩りとかの最近できたバリエーションである、と説明しても刑事捜査マニアにしか通じないかもしれないが、兎に角、少年は犯行に拳銃を使ったのだ。至近距離から三発撃ち、一発が肩を貫通して被害者は重態となった。

暴力団や暴走族関係のコネクションではなくBAHARというアイテムショップで拳銃を買ったとの供述。その他、取調室で、クライアントからのリクエストが途絶えたなど、怯えた様子で意味不明な供述を繰り返しているという。逮捕後四十八時間の取り調べてこれといった証言が得られず、規定通り検察官に押送となった。珍しくないことなのだが犯行の否認以前に会話が成立しないのである。

被疑者宅のコンピュータとBAHARなるウェブ・サイトを技術的に調べるとの依頼だが、銃器対策課が黙認した理由が分からない。遠藤警視はすぐに内線で技術班に連絡を取り、ハイテク犯罪対策総合センターだけで捜査班と合同の捜査チームを立てることにした。なるべく早く體制を整えて、被疑者が検察から帰って来ると同時に捜査令状を取るのだ。

そこまで一氣に考えて技術班への電話を切って振り返ると、捜査班の半数が注目していた。

「班長、事件ですか？」

誰かの質問が飛ぶ。警視は頷いた。「銃だ。電子機器の操作には慎重を要するため技術班に一任するが、ことは銃刀法絡みだ。マルBが背後にいる可能性もあるが、その場合は勿論組織犯罪課に回すことになる。うちからも俺を含めて二人ばかり初動に駆りす手筈なんだが、どうだろう、誰か」

マルBって言うのは暴力団のことだが、今時そんな恥ずかしい隠語を使うのは刑事である自分の格好よさを疑っていない刑事だけである。だがその言葉が出た瞬間、中途採用の班員たちは一斉に眼を逸らした。だらしがないが、時代の流れてやつだ、と内心警視は舌を打つ。手を挙げたのは、警視と仲のいい湊警部だけだった。

「……お役に立てるなら」

「よし、警部。いいだろう。明日動くつもりだから準備して置くように。これが報告書だから」

警視は頷いて、一回り年上の湊警部のデスクまで歩いて行って、肩を叩いた。仕事で彼と組むのはそれが初めてだった。

「兎に角班長、この辺りでちょっと休まれたらどうですか？　もう三日も徹夜されていますよ。われわれ捜査員も、各自、仮眠はとっていますから」

そう言われた警視がロッカーに戻ると、携帯に留守録が何件か入っていた。
メモ1。

「あの、二名子ですけど……、今夜は慳哉君、『モン・シェリ』来るのかな？ 店長の都合で三時で閉店だから、その後飲めるＹＯ！」

ピー。二名子は遠藤警視の彼女の名前。慳哉は遠藤警視の下の名前。モンシェリは彼女。二名子の働く喫茶店。警察学校時代によく遠藤警視は此処にきて徹夜で勉強していたのだ。その頃から、今でもかわらず二名子は深夜十一時から翌朝五時のホームレスややくざが店を占拠する時間帯、謂わゆる遅番で店に出ていた。二名子はフリー・ライターとして出発した後、無さそうによくあるボウフラのようなチャンスを手掴みで銀幕の世界に飛び込んだ。駆け出しのシナリオ・ライターだったが、遠藤警視のように将来に確固たる描像や夢があったわけでもない。遊んでいたわけでもない。初めに見たときは牛乳瓶の底のような眼鏡を掛けていた。遠藤警視と交際を始めて数ヵ月後にコンタクトに移したが、それでも洋服は未だに洗い晒しのジーンズしか持っていないようだった。都内の僅かな劇場でしか上映されないマニア好みの映画のエンド・ロールから彼女の名前を覚えた数少ないファンの人、年金生活者のお爺さんから貰ったネックレスはいつも身に付けている。私は人間嫌いだからと言っている。そんな女の子もいる。恋愛が嫌いな変わり者の女の子が警察官の卵と恋に落ちた、そんな素敵な物語は如何——五年の月日が流れて現在に至るが、思い返せば二人の関係性は色々な出来事で充滿している。地味な二人だったが、知らずと勝ち組の枠に収まっていたのか、着実に出世はして来たようだった。

メモ2。

「昨日は忙しかったのかな？ 一人で飲んで帰った二名子でした」

ピー。ライターの仕事は勤務時間という規則性がないため、二名子も毎日が日曜日みたいな生活を送っている。都合を合わせるという感覚がないらしい。

メモ3。

「慳哉君、最近忙しいんだね。忙しいのはいいことだ。うん。でも、大丈夫だったら今度事件のお話聞かせてね。お仕事一段落したら連絡ください」

ピー。遠藤警視は「事件のお話を聞かせて」と言うところで、そんなことを言われるのは初めてだったため思わずグツと来た。警察関係者は守秘義務ってのに縛られて身内にも明かせない情報が多いことを二名子もよく知っているからだろうか。習慣がまだ育っていない新しい部署ということがあってハイテク犯罪総合対策センターに配属された当初は暇だったから毎晩電話はしていたが、大川典秀少年事件以来ご無沙汰になっていた。二名子なりに心配してるのだろうか、寂しいわけだろうか。いずれにせよ感涙ものだった。

メモ4。最後の録音。結局全部二名子だった。遠藤警視も、二名子以外友達がいらない。

「何時でもいいから至急連絡くれないかな。伯父さんが傷害事件起こしちゃって、って、伯父さんがいるのね、私。その伯父さんが傷害事件なの。大変なのよ。詳しいことは、後で会ったときに話そう。ではでは」

せつついた暗い口調、日附は今朝だった。

上着を取ってエレベーターに乗り、警視庁を出る。横断歩道を渡って皇居の堀端を歩きながら、電話をかけた。

「ごめん、大きな事件があつて——」とりあえず謝る。「起きてた？ こっちはこれから五時間くらいなら體が開いてるんだけど」

警視は眼を擦る。二名子と会えば眠らないまま、また捜査に戻ることになる。

「本当？ 早く会いたい……あ、じゃあそっちに行こうかな。浅草線の霞ヶ関でいいんですよ」

「うん——いや、霞ヶ関より九段下がいいな」

「解かった。じゃあそっちに。すぐ行くね」

「俟って。何があつたの？ 伯父さんって、お母さんのお姉さんの、旦那さんのこと？」

「いや、お父さんの弟。話してなかったよね。あんまりまともな仕事してない人なんだ。いや、悪い人じゃないんだけどね。昨日の夜、居酒屋で近くで飲んでた大學生を殴っちゃったんだって。言葉遣いが悪かったとか、関西弁が気に障ったとか。私もまだよくわかんないんだけど。まあ、慥哉君のコネで保釈にして慾しいとか、そういうわけじゃないから、安心して。じゃ、またすぐに」

九段下まで皇居周りを歩いてもいいんだけど、流石にちょっと距離がある。地下鉄に入る。遠藤警視は、二名子が言うみたいに安心することはちょっと出来なかった。警視は別に結婚すること、家庭を持って落ち着くことをゴールとみなして二名子と交際しているわけではない。結婚なんてただの足枷だし、子供が出来でもない限り避けて生きて行きたい。それが普通の考えだろう。だけど二名子は自分との結婚を望んでいる。それが警視の躰きの石だった。というのも、身内に前科・前歴があるものは警察手帳を持つことが出来ないというのが国際的に通用している警察官の規格なのである。当然、配偶者も身内と見做される——つまり警察官は身内に前科者がいる女性と結婚することは規則で禁じられていうのである。父親の弟は十分に近い血縁だから、詳しいことは室長に確認しなければならぬが、二名子の伯父の寫眞や指紋のデータが警察に登録されれば彼と二名子との結婚は不可能になるだろう。

二名子は遠藤警視との結婚だけを望んでいたと言っても過言ではない。二人は愛し合っていたのである。内縁関係は二名子のドリームにも遠藤警視のキャリアにも解決を与えてはくれないだろう。消去法で選択肢がすべて消えてしまう。人生のバグってところである。九段下のドトールで二名子の顔を見た遠藤警視はそのことを言い出すことが出来なくなってしまった。代りに今回の事件で浮上してきたネット犯罪捜査の難しさ、問題点に附いて心に思い浮かぶことを話した。彼は当時真面目な刑事だったのである。

「何だかあれみたいだね。その犯人、洗脳されてるんじゃないの？　裏で操る教祖様がいるのよ」

「洗脳か。そこまで夢のある発想も残存してないと思うけどな」

「赤信号も、みんなが渡るようになれば、記号としての様相が変化するでしょう。言語の意味はその使用の束の中にしか存在しない。意味の発酵や腐敗を放置して忘れたまま時間が経てば情報化の波の中でそれが新しい社会規範になるでしょう。裸の王様より、それを指摘した子供の方が正しいなんて、童話の中だけのお話で、現実だったら子供は捕えられてその場でクビチョンバナのよ」

「ナンバー・ワンにならなくていいなんて、誰が言い出したんだろうね。打たれる出る杭の身にもなって慾しいよ。例えば僕みたいな、警視庁のキャリアとか。責任ある仕事をやってるのに、その上僻まれたり悪口言われたりしちゃあ、やり切れないよ」

「ナンバー・ワンにならなくていいって言う論理は悪くないよ。悪いのはナンバー・ワンになっちゃった人も、やっぱり自分と同じオンリー・ワンだってことを、みんなが忘れてしまうこと。私はもう若くない。私は。ねえ、どうしたらあの頃に戻れるのかな。あの頃の私は何処に行ったの。教えて」

それから二名子の伯父さんの話になった。彼女は豪快な伯父のことが自慢らしい。伯父さんの若い頃からの風來坊自慢が長々と続いた。慥哉君も会えばきっと好きになるよ、と二名子は言った。

霞ヶ関に戻ると警視庁は騒然としていた。玄関口を背広の刑事たちがダッシュで出入りしている。エレベーターで乗り合わせた年配の刑事に何があったのか聞いた。

「インターネット絡みの事件だ」と答えたのは遠藤警視の識らない刑事だった。「下手をするとか安が動くだろう。捜査本部は火の車だね」

「失礼ですが」と遠藤警視は鼓を舞して尋ねた。「外部の方では。所属はどちらですか」

刑事は一瞬大袈裟に啞然として「遠藤だよ、ハイテク犯罪総合対策センターの」と答えた。「俺の配属は本庁詰めじゃないからこっちには面識がないやつもいるらしいね。ハイテク犯罪総合対策センターの捜査班班長、遠藤警視。覚えといて下さい、出世したかったら」と一方的に剛胆なことを言い、ニヤリと嗤って相手の名前も聞かずに名刺を渡し廊下に消えた。

眠気が飛んで行った。ハイテク犯罪総合対策センターの捜査班の班長を勤めているのは自分自身、遠藤慥哉であって二人というわけがない。彼は渡された名刺を自分のそれと較べてみた。名前と名字の間のスペースが一ミリちょっと違ったが、それ以外は徽章も紙質も同じ、瓜ふたつの名刺だった。名前が同じ、年格好も職業名も同じであればどちらか一方が本物であった方が座りがいいはずだ。しかも、風采は向こうの方が勝っていた——少なくともあの顔の目鼻立ちに二名子なら遠藤から乗り換えたがりそうな彼女好みの晴れやかさがあった。遠藤が小さい頃から信仰して来たはずの正義というか、自分にとって刑事は格好いい職業であるという信念のようなものを棄教する決心を固めたのはそのときだった。大人になってから遠藤の信仰を支えていたのは国家に選ばれたものとして自分が部下に對し背負っている責任だった。上っ調子で責任を責任とも感じなさそうな身代りが登場してくれたんだから、自分は窮屈な約束事ともダサい配属名とももう関係ない、お別れにしてしまおう。それに遠藤は刑事であることに替わる、彼の生物學的事实に於いてずっと重大な責任を手に入れたところだった。その責任、二名子から寄せられている結婚への期待は、責任崇拜者の彼にとって職責よりずっと責任らしい責任だった。もうハイテク犯罪なんて犯罪捜査の現実も知らない「ポリス・アカデミー」でも観て何かの間違いで警察に入った優等生が名附けた御伽の国の青い鳥を追いかけさせられる必要はないんだ。そんな風に周囲の誤謬を解いてしまえば遠藤は精神的にはすでに自由だった。

センターのオフィスに入っても、誰も挨拶すらしない。閑散としている。仲間との連帯は警視がそれへ責任を感じてきたところの正義という幻想が生み出した錯覚であるようだった。

湊警部が數人の係員を回りに集めてミーティングらしきものをやっていた。近づいても、誰も警視に気づかない。大きな聲を出して、持っていた煙草の箱を床に叩きつけた湊警部だけが警視に気づいて黙礼した。彼らが検討しているのは遠藤が警視庁から資料を貰い受けて来たばかりの少年拳銃発砲事件だった。何故、情報が自分より先に到着したのか、遠藤に答えは明らかだったから誰にも尋ねなかった。

彼はその日のうちに手帳を返却する手続きを済ませたが、二名子にそれを告げるのはそれから數日後のことであった。

そんなわけで以降捜査に当たる遠藤警視はわれわれの主人公である遠藤とは別人の偽者である。

被疑者、大川典秀の家は牛込で、事件現場も被害者の家も同じく牛込、半径五百メートル以内に位置したため第四方面の牛込署の大会議室に帳場が開かれた。遠藤警視らはこの刑事たちの案内でまず被疑者の家に向かった。車内でちょっとした説明を受ける。大川少年は一人っ子で七歳のときに父親を失って以来、母親が百人町のパブに勤めて一人で育てている。地図を見ると牛込から百人町は大久保通りで一繋がりだった。学校の成績などまでは調べられていないが、現在、被疑者の通う高校は地方出身の遠藤慥視や湊警部ですら名前を知っているくらいの名門校だった。女の水商売だけでよくそこまで育てたものだ。一般的に、十歳前後で片親になった子供は道を踏み誤る。そうでなくても非行に走る子供の多いご時勢である。母親はそうとう教育熱心なしっかりした女性であると推測できる。

——だとすれば今回の事件はさぞ無念だっただろう。

家に着く。都営マンションの最上階。旧山の手ではあるが家賃は三、四万といったところ

ろだろうか。インターフォンを押すと、中年の女性が現れる。家宅搜索は事前に連絡してある。

湊警部と技術班の二人、それぞれがペアを組む牛込署の刑事が女性に一礼して室内に進む。遠藤警視と、さっき車の運転手役だった刑事が玄関先に留まる。警視が礼状を見せ名刺を渡して、牛込署の刑事の方は自前のシステム手帳を構えた。

「此の度はさぞ胸をお痛めのことでしょう。お察し致します」

「いえ」母親は流石に取り乱した様子だったが、玄人の女らしく板に就いた笑顔を作って愛想を見せようとする。「あら、刑事さんお若いんですね。もっとおじさんが見えるのかと思ってた」

牛込署の刑事はそんなところから忠実にメモを取る。取調室での供述調書作成のせいで附いた癖だろう。あれは時間と労力の無駄だ。マイク一本用意して音声を圧縮ファイルにしたほうが嵩張らないし、取り調べもスムーズに行こうというもの。今度センターの所長に相談して立案書の一つ書いてみよう、と偽物の遠藤警視は考える。

「さあさあ、こんなところで立ち話もなんですから、お入りになって。汚いところですが」

二人はダイニングに通された。――本当に汚い。掃除は行き届いているのだが、流しも卓も床も相当古くなっている。そして団地には古くなって雰囲気が出てくる日本家屋みたいな趣向はない。卓に急須と湯飲みが用意されていた。女性は擦り切れた椅子用座布団が括りつけられた椅子を二人に勧め、慣れた手付でポットから急須に湯を注いだ。

「じゃあまず、私から。事件当時、お母さんはどちらに？」

「お店におりましたわ」

「えっと、事件は確か四時半前後でしたが、そんなに早くから開くんでしょうか」

「いえ。私は今はあの店を委されておりますので。開店は六時ですが、私は早めに入って仕込みと掃除をします」

「大変ですね、自分の持ち店ってわけでもないのに。従業員にやらせちゃ駄目なんですか？」

「いえ、私はよく云うチイママなんかじゃなくて、何時かお店を買い取る予定でしたから。オーナーともそんな話はしておりました」

「それは。是非その頃に飲みに寄せて戴きたいものですな」

母親の過去形が気になったが、気づかなかったことにしておく。一人息子の犯罪がその真面目そうな女性の人生計画を狂わせてしまったのだろうか？ いや、正確には一人息子の、警察による逮捕が、だ。人間ってのはパーソナルな生き物だ、いくら犯罪を犯罪と規定するのが非人称的な法律だからって、この女性には偽物の遠藤警視が、その事件の警察側の責任者としていま対面している偽物の遠藤警視が息子を奪い、そして自分の人生を闇闇に突き落としたように見えているんだろう。そしてこの女性は年の割りに擦れてなくて美しい。否、遠藤警視のせいじゃない、警視だって犠牲者なんだ。それに警察が存在しない時代でも、例えばムラであんな事件が起きたらその家族は須く破滅するだろう、警察のせいじゃない。

「それは、真にお受けしていいのかしら？ あら厭だ。社交辞令ですよ、刑事さんですもの。私ったら。では、こちらもお名刺を」母親は微笑み、ハンドバッグから模様の入った真鍮色の名刺入れを取り、二人の刑事に差し出した。「源氏名の、玩具みたいなお名刺で、刑事さんに戴いたみたいなの立派なものじゃないですけど」

遠藤警視はそれを受け取って咳払いした。

「息子さんと最後に会われたのは何時ですか？ それから、最近変わった様子など、なかったですか？」

「朝ですわ。私は典秀が起きて、学校に出かけるのを見届けてから眠ることにしていまし

た。それはあの子が小さい頃からずっと。ですが……。最近はおの子、学校に行かないことが増えて。あの朝は久し振りに明るいう顔で元気に制服を着て出かけて行きましたので、ああ、これであの子が昔みたいない子に戻ってくれたら、って嬉しくなったのを覚えています」

「学校に行かなく、って云うとどういうことですか？ 詳しくお聞かせ願えないでしょうかね」

「そうですね。あの子は小さい頃は、明るくて、サッカーが好きで。大きくなったらサッカー選手になるんだ、なんて。普通の男の子でした。いえ、それだけでもよかったです、私としては。変な影響が出ないかと心配しておりましたから、あの、父親が早く亡くなりまして」

「それは存じています」

遠藤警視が軽く頭を下げる。

「様子が変わったのは中學三年生の頃でしたでしょうか。中學に入った年に、パソコンを買ったんです。我が家にも一台とのつもりだったんですが、私の仕事ではパソコンを使うこともあんまりなくて。事実上、息子一人のものになりました。最初はサッカー選手の情報を集めたホームページを作ったりしてたんですけど、そのうちにいろんな部品や何かを取り寄せて自分でパソコンを改造するようになったんです。そういうことに興味を持つのはこれからの時代いいことなんじゃないかと思って、私ちょっと高いものでも買い与えていました。学校の勉強が疎かになることもありませんでしたし。——あの子は誰に似たのか、勉強だけはよく出来ました。たまにパソコンを弄っているとところを除いても、大抵英語の文字ばかりで私には何をやっているのかさっぱりわかりませんでした。高校に上がった頃から子供らしくゲームに熱中し始めて、私としてはむしろ安心したくらいですわ」

「じゃあ、最近の息子さんはゲームに熱中されてたんですね」

遠藤警視が念を押す。母親の話は手際よくまとまっていて有難い。知的な印象。しかし生活保安課が作った報告書には「被疑者は被害者と同じく不正アクセス者風の少年」とあった。快活なサッカー少年がコンピュータへの熱中を経て、不正アクセス少年へ。どんな内面の変遷があったのだろう。

「そうです。学校も、サボりがちになるくらいに」

「はあ。息子さんがやっていたのがどんなゲームだったか、ご記憶ですか？」

「いえ、——ただ、ゲームとしか。もしかしたらゲームじゃなかったのかもしれない。私にはそういうことはよく存じませんし」

否、ゲームだったのだろうか、と遠藤警視は内心推測した。それも大規模MMOに違いない。学校や仕事を辞めさせるほどの強い依存性を発揮するメディアといえば今のところ、MMORPGくらいしか考えられない、と偽物の警視は記憶していた。

「最後に、犯行に使用された拳銃ですが。奥さんは拳銃を息子さんが入手したのを認知しておられましたか？」

「いえ。まったく知りませんでした。知ってたらそれこそ、こちらから警察に連絡していいかもしれません」

「息子さんにモデルガンなどの趣味は？」

「それとも思い当たりませんか」

警視は立ち上がり、礼を述べて牛込署の刑事をそこに残し、技術班の操作が進む被疑者の自室に向かった。

——犯罪者は迷惑だ。犯罪者は凶悪だ。みんなやつらが嫌いだ。「みんな」は、やつらが嫌いだ。やつらは「みんな」と同じ人間じゃない。警察の努力は社会の役に立っている。警察は「みんな」のかわりに凶悪な犯罪者を連れて行く、スーパーマンなんだ。警察はみ

んなの人気者。

牛込署の鑑識が慣れた手つきで本棚などを調べている。それに比べて、電子機器に向かう技術班の挙動はいかにもぎこちない。何故なら、彼らは数ヶ月前まで企業に勤める一般のエンジニアだったのである。

部屋は少年自らによって完膚なきまでに破壊されていた。しかし、パソコンはラップトップと自作のデスクトップが二台あって巨大なハブで連結され、そのためのツイスト・ペア・ケーブルが部屋中を旋回していたが二台とも、ディスプレイやキーボードを除いた筐体は金属バットで粉々に壊されていた。

「集中的に壊されているのはやはりハード・ディスクです」と鑑識が報告する。「こんな壊し方をしては情報殲滅が目的であると自ら言っているようなものです。やはり少年ですね」

「了解。ハード・ディスクの修復は警察内部でなるべく速やかに始末したい。プロフェッショナルな業者に外注した方が確実なんだろうが、それでは警察の威信が問われてしまうからな」と偽物の遠藤警視が旨を聳らせて答える。「全部本庁に持ち帰ったほうがよさそうだな。ダンボール要員、呼べるか？」

牛込署の鑑識が頷き、無線を取り出した。他方、少年の勉強机に歩み寄った遠藤警視は、そこに文庫本が一冊だけ附箋代りに頁を開いたまま伏せてあるのに気づいた。背表紙には岩波文庫の青版、梶田啓三郎訳によるキルケゴールの「反復」とあった。遠藤警視はその本を手にとった。開かれていた頁に、

……現実が反復になるのであるのに、彼にとっては、意識の自乗が反復になるからです。

という一節に鉛筆で傍線が引かれており、さらに「自乗」の部分に丸が附いていた。全體をバラバラと捲ってみても、書き込みがあるのはその部分だけだった。警視は溜息を吐き、「いや、君、少年自身が意図してわざと注意を曳くために破壊の濃度を調節したということもありうる。兎に角ハード・ディスクの修復を俟とう」と言ったのだった。

帳場は牛込署だが、数億の予算をかけた捜査機器がハイテク犯罪総合対策センターにある。だから、ダンボールは全部センターに運んだ。未成年者を「代用監獄」に置くのは人権団体に情報が漏れでもしたら問題になるが、そのような重要な犯罪の場合やむを得ないし、被疑者の身柄の安全を確保するという意味もあった。それから数日は、徹夜になるだろう。元エリート・エンジニアの湊警部は技術班に混じって、率先してコンピュータに向かっている。

その夜、幾つかの所轄から不正アクセスの通報があったという連絡があった。立て続けに合計三箇所、うち一つは警察署のホームページを載せたサーバだったのである。警察の捜査より先に、新聞社から電話が入った。犯人はマスコミに犯行現場の情報を流したのだ。続いて、SECOMからの通報。すでにそれは起こってしまったのである。場所は秋葉原の雑居ビル、ゲーム・センター「クロム」だった。五階で二十四時間営業しているオンライン・ゲーム・フロアに犯人は立て籠り、防火壁で客及び従業員を監禁した上、籠城している模様。一連の事件対処の指示のために徹夜で警視庁に詰めていた刑事部長は、敵が戦闘訓練を受けたテロリスト集団かもしれない事態を重く見て、警備部にSATの出勤

を依頼した。

遠藤警視も数人の部下を連れて、刑事警察の列ねた覆面パトカーの最後尾の車に乗り込んだ。現場にはすでに複数のテレビ局・新聞社が陣取っており、遅れて着いた警察はまず彼らの交通整理に当たらねばならなかった。幸い、近年若者文化の中心地に成長したと云われる秋葉原は渋谷、新宿、池袋のような夜の街としての様相は持っていないために一般の野次馬は余りいなかった。捜査一課の刑事が遠藤警視らに駆け寄り、先に来ていたSECOMの警備員を連れて来た。

「『ハイテク捜査員』の方ですか？」

遠藤警視は目礼し、無言で名刺を出す。

「兎に角、こっちに來てください。現場の映像が映ってます。早く。マスコミに洩れると面倒ですから」

警備員は小聲でそう言い、ビル一階の管理ブースに遠藤警視を案内した。そこにあと二人、警備員がいた。

「SECOM側のコンピュータ管制を不正アクセスされたらしく、防火壁を開けることは出来ません。われわれとしてもこういう事態は初めてで。失態ですね。セキュリティ・システムが犯罪に悪用されるとは。ただ、犯人は監視カメラの回線を切断してはいないようです」

遠藤警視は「あるいは意図的にか」と逡巡した。部屋には四つモニタがあり、そのすべてに五階の様子が映っていた。

五十坪くらいだろうか、意外と広いようだった。流線型に切った複雑な形の立板で仕切られた卓に大きめのデスクトップが並んでいる。深夜だが客足は多かったらしく、その間に幾人もの被害者が転がっていた。見たところ、全員男性だったのに対し二人の店員は若い女の子で、店の制服であるメイド服を着ていた。オタク文化も日本文化の御多分に漏れず、自称知識人の中途半端なりリーダーシップの取り方のせいで文化として成熟する前に、ただのセックス・シンボルに墮してしまった。アニメで育った世代の、とりわけ無知な層がパソコンとインターネットに食中りを起こして線蟲のように湧いて出たあのモエ記号とやらに関心を寄せているのは今年に至っては性慾を持て余した文化系のもてない女の子たちだけという惨状だ。しかも、性慾を持て余し、かつ、もてない状態を維持する女の子の人口は何時の時代もかなり少ないものである。あの頃騒いでいた批評家連にマトモに文芸かテクノロジーか、いずれかの知識だけでも持っている人物がいたら別の展開もあったかもしれない——否、まだ遅くない、有志よホラ立ち上げれ——。一人は挙動不審気味にオロオロと徘徊していてもう一人は流血して仰向けに倒れて事切れていた。

「犯人は何奴なんだ」と中腰になってモニタを睨む遠藤警視に、最初から此処にいた警備員が彷徨いている方を指差した。「どうやら、あの娘らしくて」

「……女の子か」

「パソコンを捜査しているのをさっき目撃しましたものですから。カウンターのところに映ってるやつですが」

「こっただけか、死體の方は違うんだな？ 凶器は」

「ピストルじゃないでしょうか。でもあれ、本物ですかね」

右下のモニタの卓の片隅に拳銃のようなものが抛り出してある。さっき警備員を案内してきた捜査課の刑事は何時の間にか附いて來ていてモニタに眼を凝らして「チャカだな。距離が近ければ型番まで分かるんだが」と呟いた。

「あ、こっち」

警備員がズームして彷徨っている少女が手に対人型ナイフらしい刃物を持っているのを映し出すと、捜査課の刑事がモニタに喰らい附いた。

「戦闘仕様だ。S A Tはまだか？ S A Tはまだ着かないのか？」

徐にメイドさんが足元に転がっている被害者の一人に馬乗りになり、頭部にナイフを髷した。監視カメラの映像では表情までは判断できないが、躊躇すらしていないようだった。被害者男性の頭蓋骨を、娘は魚をおろす感じでサクサクと切開した。しかし流石の軍隊用ナイフも、本来の解剖では鋸を使って切断するその骨には刃が掛かり難いらしく、仕方なく汚そうに片足で抑えて切り落とした。手にはカリフラワーのようなものが残っており、娘は吃驚したみたいにナイフを投げ出して立ち上がる。

「このアマ、脳を切ったぞ」と捜査課の警部が思わず汚い言葉を漏らしたのだが、誰もそれを聞いてすらいない。

遠藤警視は眼の前で展開する光景にリアリティが持てなかったのだから、映像の力というのは恐ろしいものである。今現にリアルタイムで、自分の真上で起こっている凶事だというのに、ホラー映画にしか見えないのだった。「S A Tは！ S A Tは！」を繰り返している彼はS A Tの実物を見たことがないばかりか、実は何をする人々なのかも知らなかった。

そうこうするうちに娘はカウンタに戻り、ロッカーのカーテンの中から自分のハンドバッグを出しそこからチャッカマンを取り出した。カウンターのパソコンを操作すると、エスカレーターの入り口を封鎖していた防火壁がゆっくりと開いた。捜査課の刑事は喰い千切るように「警備部は何してるんだ」と叫んで飛び出していった。程なくしてモニタに拳銃を構えた数人の刑事が現れたが、すでに遅かったのである。フロアにはガソリンが撒かれていたらしく、炎は数十秒で店内を火の海にして行った。

店員は炎の中、中国製トカレフを片手に、銃を構える刑事たちの前に立ちはだかっていた。相手が少女であることに躊躇してか、刑事たちはすぐに射殺しようとしなかった。店員は刑事たちに向けて堂々と何か話している。と、不意に肩を揺すって空笑し、両手でトカレフを構えて撃った。刑事たちのうちの一人が倒れた。仲間の刑事たちが思い出したように犯人を射殺しようとしたが、遅かった。メイド姿の少女は被害者男性の脳の一部とともに消え去っていたのである。炎が次々と屍體を包み、赤黒い全景を可及的速やかに茶毘に伏した。

少女がその大脳左半球と共に消えた被害者男性は「柳田」と名字だけで入店していたのだが、捜査によって近所の公園に寝起きするホームレスであることが明らかになった。焼け爛れたその顔は埴輪か土偶のようで、身元を調べる術もなかった。

「クロム」のハード・ディスクに残っていたデータと監視カメラの映像記録はまずハイテク犯罪総合対策センター捜査班に回された。被疑者の従業員、板橋区の専門学校で商業写真デザインを学ぶ故橋爪優子さん（18）は、漫画の同人誌を製作するなどの内向的な趣味があり、ヤフー・ジャパン・ドメインの彼女の個人サイトには学校やアルバイト先の知人である男性の画像付きの詳細な不細工度ランキングを綴ったHTMLファイルが保存されていたが、先頭文字のドットだけで簡単に隠したディレクトリに遺書とも犯行聲明ともつかない文書が発見されたため遺族とサーバ管理者の了解を得て別媒體に保存の上削除された。大川典秀の名と彼の逮捕への報復が宣言されている部分と、自分がこの星に生まれた理由は銀河系諸惑星の住み心地審査のフィールドワークに過ぎない、地球の等級は星1・5個（五つ星が最高）であり最低レヴェルだ、など、意味不明な内容が書き連ねられている部分の文體の異様な齟齬が注意を引いた。

湊警部は一言、「遺憾です」と言った。「われわれの指導能力に落ち度があったかもしれない。技術班や捜査班の係員はみな優秀だ。ただ、まだ刑事職務に慣れていなかったのです」

遠藤警視はセンターを彷徨いては、時々捜査員の操作する端末のディスプレイを覗き込

んでいる室長を見やった。

「いえ」湊警部は首を振る。「兎に角、今回の事件はわれわれにとって貴重な教訓です。代価は大きかったです。そう考えることにしましょう」

湊警部が、スローモーションで振り返る。不意に溶明する。

「君ももうすぐ十八だね」

警部は猫なで聲を出して微笑みかけた。屈託のない、だけど大人の、だから油断のならない笑顔だ。私は無言で頷く。

「十八といえば、もうレッキとした大人だ。そうだね？」警部が手招きする。私は一步前に進み出た。「じゃあ、君もそろそろ自分のジンセイの行く末を考えなきゃいけない。君も見ていただろう？　これが大人の世界だ。警察官だからって特別なわけじゃない、社会人ならみんな似たようなものだと思えばいい。どうだい、テレビに映るアイドルや芸能人の世界とは随分違うだろう？　いいか、こっちが現実だ。君が今まで見せられてきたテレビの中の世界は偽物、ツクリモノの世界だ。どっちの方が価値があるか、なんて私には決める権利がない。世界中のどの大人にも、多分ないだろう。どうだい？　おじさんは格好いいかい？　ジャーニーズの、何とかクンと比べてどうだい？　格好わるいだろう。ダサいだろう。いいか、これだけは覚えて置くように。大人は格好よくない。子供の世界は現実じゃない。ああ、可愛そうだな、本当に。君たちはみんな、どちらかを選ばなきゃいけないだ」

俯いていた湊警部が顔を上げてメランコリックな表情を作る。私は再び機械的に頷いたが、本心からでは決してなかった。それまで観てきたところ、現実の警視庁の様子も昼のドラマで見るのと大して変わらないようだ。正直言って、湊警部も遠藤警視も想像していた警察官の姿よりずっと格好いい。

「いいかい？」湊警部は続ける。「君の前には二つの選択肢がある。クライアントと、サーバがそれだ。初めに仮想の接続があり、これはコネクションと呼ばれ、それによってメッセージが可能になる。メッセージはリクエストとレスポンスの対となって現象化する。リクエストを裏打する対象がクライアント、レスポンスの対象がサーバだ。いいかい、現実のジンセイにはこれら二つのありかた以外に選択肢なんてないんだ。サーバは受動性なのだがお休みして俟ってると思っちゃいけない。受動的であるために常に稼働している。そのサーバの見返りとしてサーバはお金を受け取る。お金って言うのはそういうものだ。別にお金持ちが偉いわけでもないし、お金を受け取る側が主體なわけでもない。それに対して、クライアントって言うのはお客様なわけだ。能動性を持つクライアントは好きな時にだけクライアントになればいい。お客様は何を受け取るだろう？　金じゃないね、それを受け取るのはサーバだった。クライアントが受け取るのは名前だ。名前、ネーム。女優さんとかモデルさんなんていうのは、まあ、クライアントの典型なわけだ。クライアントって言うのは、テレビの中の、子供の世界と謂わば地続きの生き方なんだ。分かるかい？　いや、分かんなくていいんだ、おじさんの説明が悪いから。おじさん達みたいな警察官の生き方って言うのは、サーバの典型だな。公共サービスって言葉、習ったか？　国民の生活を守るためのサービスを提供する無名の存在。正確には国民との間に国家って言うややこしい概念が挟まるんだけど、それは君にはまだ難し過ぎるだろう。ところで世の中にはサーバとクライアントを両方こなせるバイセクシャルな奴がいる。常時サーバとして稼働しているんだけど、同時にクライアントも演じられるんだ。艶語みたいな奴だな。こいつのせいで意味は無限の連鎖を引き起こしうる。無限に多義的な意味は無意味に等しい」

湊警部は窓格子に腰掛けている、ブラインド越しに、夕焼け空が見え、部屋は暗く、だ

から私の表情が警部に読み取れているかどうかちょっと判断できない。

「どうやら君は女優になりたいようだ。それ以外の未来は考えることも出来ないわけだ。そうだね？　男の子とかより、芸能界の女優さんの方が好き、そしてどの女優さんより、自分が一番好き。そうだね？　じゃあ、決まりだ。君は病的なまでに典型的なクライアントだ。だけどそれでいいのか？　世の中には君のまだ知らない要素が沢山あるとお見受けするよ。例えば、セックスだ。君はまだ処女だね？　未経験者に説明するのはすごく難しいんだけど、それは君が今見ているテレビより楽しいことだってことはおじさんが保証する。高音ちゃんもいつかその虜になるだろう。そのときになって、初めて、子供のままでは自分の慾望を経済的に叶えることが出来ないことに気づくだろう。セックスするためには、君は『女の子』という役を演じて、『男の子』という役を演じている対象と交渉しなければならぬ。子供の世界はたった一つだけの主體が存在するが、大人の世界は複数の客體が機能し合う、役割作業の世界だ。その役割作業の筆頭が、今言ったセックスなんだ。セックスのことを俗に性交渉なんて言い方をするの、聞いたことがあるだろう？　アレは皮肉でもなんでもない。セックスの第一の意義は、役割的交渉なんだ。君はまだ分からないだろう、信じたくないだろうけど……。

だけど皮肉なのはむしろ、君がその大人の役割作業を極度に嫌悪して忌避した結果に持った妄想が、女優という、演技に最もよく纏わるものだったことだね。つまりこういうことだ、君は大人の世界に対してノンと言う、だけどノンと言いつつも、ある仮想的なレヴェルでは大人の世界を積極的に認めてしまっているんだ。こういうパラドクシカルな事態が精神の世界にはよく起こる。このことを、ある前世紀のエゴイストは主體のフェアナイミングと呼んだ」

私はだんだん苛々してきた。

「だから何が言いたいの？　私には意味分かんないよ。ちょっと不愉快だよ、おじさん」
「はは、怒ったね」と、警部は窓枠の上から大上段に構える。「自分の理解できない、あるいはもっと正確には自分に不都合な話題を振られると気分を曲げてしまう、君も典型的な女の子、ジャスト・ライク・ア・ウーマンだ。要するにアレだろ、君も十人並みの女と同じようにセックスしたいんだろ、男を見て最初に想像するのはそのことなんだろ？　今怒ったのが、その何よりの証拠だ」

「はあ？　何言ってるんの？　ちょっと、本当に理解できないし、すごくやな感じだよ。失礼にもほどがあるよ。セックスのことしか考えてないのは、あんたの方じゃん」

「おやおや。これだから、お子様ランチは……。いいかい、私はセックスになんてこれっぽっちも興味はない。君のために、大人として、『男の人』、あるいは『おじさん』という役割を無理やり演じて上げているだけだ。セックスをすることは、『男の人』に与えられた至上命令、デフォールト・プロシージャなんだ。これはサービスなんだ。ISPが最初に行うサービスも、物理的で仮想的な接続だろ？　他の全てのサービスはこの『コネクション』って言うサービスの上に成立っている。これが出来ない、あるいは慾望できない主體は、『男の人』としての役割を剥奪され、大人の世界の外部に追放される」

「なら、それでいいじゃん、じゃあ子供に帰りなよ！」

プチッ！

私はリモコンでテレビの電源を切った。テレビの中に映っていた、湊警部をリアルに抹殺しちゃったみたいなやな余韻が残った。だけど、テレビの中から「現実を見ろ！」なんて説教を聞かされるとは、何か、変な感じだ。溜息を吐く。膝の上のグノームと視線が衝突する。

「ねえ小人さん、私は夢見てるだけだなんて、本当かな？　夢見ることはそんなにきらいなこと？」

グノームは大袈裟に肩をすくめた。

「じゃあ、お前、一生処女でいるつもりか？」

「それでも別にいいじゃん。何か、いけないって言う法律でも出来たの？　むしろ聖母マリア信仰みたいな、処女を有難がる文化も現に存在するのよ」

「じゃあ、逆にお前は、無職童貞三十歳みたいな男性をカッコイイと思うか？」

「いいんじゃない？　別に」

「うーん……。じゃあ」グノームはピョコンと私の膝から飛び降りてテレビの前に立ちはだかった。「もうちょっと正確な質問を換えてみよう。お前は、無職童貞三十歳の、俺を、カッコイイと思うか？」

「え。何だ自分のことだったの」

「三十歳は、ちょっと前に越えているがな、それはまあ、同じことだ……」

「格好いいって言ったら何かくれる？」

グノームの濃い眉が、ピクピクッと動く。ピクピクッと動く眉毛を生で見たのはこれが初めてだ。

「あなたの格好よさと、無職童貞って言う肩書きと、何か関係あるの？」

グノームの眼が今度は大きくなった。吸い込まれそうな、薄茶色の瞳。

「もういいよ。処女とか童貞とか、セックスとか、そんな話ばっか、退屈過ぎ」

プチ！

私は衝動的に再びテレビのスイッチを押した——。まるでそれが、この世界の電源を切るスイッチでもあるかのように。願いを込めてか、込めずにか。

さっき切ったテレビがまた点いた。さっきのDVDはまだ回りっ放しだ。シーンはちょっと進んでいて、だから掴むのに時間が掛かった。

画面中央にいるのは、二名子さんだ。遠藤の恋人の、二名子。さっきと同じ、九段下の喫茶店。眼の前に二名子のと、自分のものと思しき珈琲カップが二つ並んでいる。ということは、この画面設定は遠藤の一人称視点なわけだ。もしかしたらそれはDVDじゃなくてゲーム・ソフトで、専用のコントローラに繋がと一人称視点と三人称視点を切り替えてプレイしたりとかも出来るのかもしれない——まあ、それはないだろうけど。ゲームにしては画面がリアル過ぎる。

二名子の表情は暗く歪んでいる。話が何か挟れているみたいだ。不意に、パン、と卓に手を突いて立ち上がった。そのまま、奥のほうのカウンターを通り過ぎて、硝子戸を開けて外へ、スコープアウト。扉が開いた一瞬、車道の喧騒がフェイドイン・アウトした。遠藤警視は動こうとしない。何がどうしたんだろう。私は思い余って二名子を追いかけて喫茶店を飛び出した。

この道は記憶している。小さい頃、お母さんに手を引かれてやってきた、外国。その頃私の家族はまだ東京に住んではいなくて、確かあれは私が生まれてから初めての東京観光だったはずである。クラシックのコンサートか歌舞伎か、そういった子供には退屈なモノを見せられた翌日、地下鉄に乗って、お父さんの学生時代の何とかって言う友達に一家で会いに行った。その人はネパール絵画の研究者とかで有名になったらしく、すでにうちの家族とは別世界の人だった。地下鉄の階段口を上って外気に晒された、初めて見る景色、初めて出会う人々、初めて吸収する情報……。その瞬間と、その後に経験した一連のシーンを、何故か私は「外国」として記憶しているのだった。

あの時は確か、人形を買って貰ったんだ。私の部屋の本棚の上で埃を被ってる、あのお人形。もしかしたら、記憶が混線してごっちゃになってるのかもしれない。二名子の後姿を視認したのがその、初めての「外国」の現場となった地下鉄口に下りて行こうとすると、この後姿だったのも、やっぱり遠い記憶に在りがちな混同、混乱かもしれないのだった。

私は二名子に必死で追いつき、殆んど抱き附くみたいにしてぜえぜえ息をつきながらその前に回り込んだ。

「何？」

二名子はしゃがんみ込んだ私の背中を撫でて屈んだ。

「そうだ、あなた高音ちゃんでしょう？ まだ、出番じゃないはずよね。あなたは確かもうちょっと先のシーンから……。熱心に、見學に來たのかしら？ 行く末は大女優のお嬢さん」

「……知らないわ、そんなこと……」

ゼエゼエゼエ。

「ごめんなさい、今日は実はちょっとこれから用事があって、急いでるんだけど……ほら、プライベートの、ネ。今度いらしたらまた聲かけてよ。さっきの喫茶店ででも、そうだ。遠藤さんにご紹介するわ」

「ちょっと俟って」

私は切符売り場の方に立ち去ろうとする二名子を呼び止めた。

「何の御用かしら？ 本当に時間がないから、手短にね」

「あの、あの」そういえば、私は何を聞こうとしていたんだ？ 「私、あなたに何を聞きに來たんでしたっけ？」

二名子は一瞬キョトンとした。

「莫迦ねえ、カメラ今回ってないんだから、台詞なんてないし、自由に聞きたいことを聞けばいいのよ」

「本当ですか？ 本当、カメラ回ってないって、あなたを信じていいんですか？」

「私を信じられない？ じゃあ、私以外に」その瞬間、画像が歪んだ。砂嵐、壊れかけの初代ファミコンみたいな、昔のテレビみたいな、そういう風合い。よく出来ている。「誰の、言葉を、信じればいいの？」

分からない、分からない。

「ワカラナイ……」

「じゃあ教えて上げる。あなたは私と遠藤さんのカンケイについてお聞きになりたいんでしょう？ その、――性関係について」

私は必死に首を振る。違う、違う！ だけどそのジェスチュアが伝わらない。当たり前だ、相手はテレビの中の仮想存在なんだから。

「彼、遠藤君はああ見えて、寝台では本当に普通の男の子だよ。浮気もきつとしてたんじゃないかしら、もててみたいだし。私だってそりゃあ、二十歳そこその小娘だった頃は、それなりにね。でも遠藤君は気づいてないんじゃないかな？ 俺以外、男を知らない、俺だけのオンナ、とか、本気で思ってるみたい。ああ、ごめんなさいね、そういうのは週三回も一緒に寝てると判るものなのよね、ほら、あなたも分かるでしょう、仕種とか、言葉の端々、ネ。でもね、女も二五を過ぎると目尻の小皺や肌の力サ力サが気になり出すものなのですよ、そりゃあ私もね。あの頃は若かったな、とか、街歩く十代の女子高生とか摺れ違うといちいち、いちいち、そう思えてくるわけなのよう！ って言うか、そう思えてくるって言う役なのね、今演じてる『二名子』って言うのは。そういうことが日常的に、自然に思えてくるまでとことん役作りする、それが楽しいと思えるかどうか、その辺りであなたが女優に向いてるかどうか、決まってくるんじゃないかな？」

分からない。この人が何を言っているのか、私には全然分からない。兎に角、何か言って、話の流れを変えないと。

「ところで此処は何処ですか？」

「ウーン、ええとね。そう。大人の世界は役割世界なわけよ。男の人同士とか、女同士だ

と色々大変だよ、役割を見付け合うって言うか、探り出しあうのが。男女だと取り合えず物理的接触を維持できてるみたいな錯覚を得ることが出来る。いや、実際に接触してるのかな、あれは……同じ時間、同じ密閉された空間で一つの粘膜同士の接触というイヴェントを通して非常に共通点の多い大量のデータを受け取る。だけどそれは単に似てるってだけで、その、似てるって表情とか言葉とか、そういう偽りのメディアを通して補充し合った結果そう思い込んでるだけで、実際には同じ神経組織を共有しているわけじゃないんだよね。親子きょうだいってのも、そんなに特別な繋がりがあってリアルティ、感じないでしょ、本音。遺伝子に共通点があるって言ってもねえ。ソフトとかアプリケーションの実際の使用は、作った人とか、その人が使ったプログラミング環境とか、全然関係なしじゃない？ あなたのパソコンのデスクトップにも様々な会社で作ったソフトが同等に並んでるでしょ？ 知ってるわよ。突き詰めていえば、人間関係なんて全部虚構なんだよ。あなたと私は何処が共通している？ ヒト・ゲノム？ 日本人としての、あるいは日本人女性としての、あるいは若い女性としての社会的・法的な属性？ 形？ 動き方？ 言語？ 何を根拠にこのコミュニケーションは成り立っている？ 私一人きりしかいないのかもしれない、ね。そうですよ。そういう考え方もあるし、そういう考え方を一部基にして、個対個のコミュニケーションは進行する。だけど、じゃあだとしたら、今私が話しかけている、この言葉を聞いているのは誰？ ね、そんな莫迦莫迦しい話はないでしょう。だから主體はたった一つってわけじゃない。少なくとも、二つある。じゃあ、この二つ、一と不定の二って言っても、あるいは1と0って言っても同じことだけど、この二つのコミュニケーション、共通項は何処に見出されるのか？ 共通項って言っても、第三項って言っても、あるいはメディアムとかメディアって言っても、同じこと。あなた、三つて言う数字に思いをはせたこと、ある？ 私は一、あなたも一。曰く、一十一・三。二十二・五。二十世紀の形式論理學は、オートマトン、サイバネティクスという二つの哲學と手を結び、半導體と呼ばれる物質を自分の領土にするときにこの三つて言う数字を切り捨てたの。半導體の物質性とともに。三は、非論理あるいはエゾテリスムの數字。私も、あなたも、メディアの中が存在だって自覺してしまっているわよね？ そうなんですよ？ あなたも女優でしょ？ メディアって、メディアムの複數形なんだけど、元々中心とか社会とか公安とかいう意味だったこの言葉、その後に西欧思想の傍流、魔術とか錬金術と呼ばれるやつに取り込まれて、いろんな意味を帯びるようになったの。たかが言葉の意味だと思う？ ものに形を与えるのは言葉なんだよ？ 歯車とか、蒸気機関とか、ビルとか電飾とか、自然物が勝手に生み出したわけじゃないでしょ？ 先に、人間の脳髓の中の言葉があったの、形があったの。言葉の意味を信じていないってのは、それを信じていないこと。いい？ それで、現代ドイツ語の辞書で *Medium* って引いて御覧なさい。二番目の意味に、載ってるはずだよ。『靈媒』って」

彼女が囁いた言葉のその最後の、「レイバイッテ」って言う部分が頭の中に残って反響した。私は再びしゃがみ込んだ、地下鉄口の階段の暗がりに。

「分かってるでしょ？ あなたの事態はただのバイナリ・データなの。あなたに一つのまとまりを与えてるのは、それがどっかのツリーの最末尾の、一つのターミナルにストックされてるって言う事実だけ。何時でも移動できるし、コピーできるし、分解できるし、消去できる。きっとそのターミナルには仮りにタカネって名前が附いてるんでしょね。ところであなたは誰に口寄せしてる靈媒さんなのかしら。気になるところだわ。私が口寄せしてるのはねえ、あなたが——」

再び、テレビのスウィッチを切る。もう厭だ。

再び。

私は今、仕組まれたループの中にいる。

これはユーザーが強制終了でもしない限り止らない無限ループなんだろうか。それとも変数がある値に達すれば抜けることが出来るんだろうか。

そして抜けた先には何があるんだろうか。
何もない。きっと。

再びテレビが点いた。何のことはない、スイッチはオフだったのだ。画面上は相変わらずさっきのDVD、警視庁でのひとコマだ。膝の上で小人が蠢く。何か言いたそうだ。

……。

「何よ？」

「あんた、本当に根っからのコドモなのか？」

「ああそうよ」私が適当に相槌を打ったのは、すでにDVDの世界に引き込まれていたからだ。スナックでも出してきて、落着いて鑑賞したい。

「そう言い切れる？　だとしたらすごいけど。やっぱり、演じてるんじゃないのか？　頭に附いたその猫耳がその証拠なんじゃないのか？　男の子にもてたいとかじゃなけりゃ、そんなきもいもん附けないだろう」

「私はきもくなんてない」

……。

画面の中では湊警部が資料室でファイルを探している。それにしても、実際の刑事はあいう紙の資料を今でも使ってるんだろうか。まあデスクトップの操作じゃアクション性低いし、何やってるか理解できない視聴者も多いだろうし、絵的には資料室のファイルの方が妥当な演出なんだろうな。

……。

「知ってるぞ、あんた、ネカマだろ」

……。

「ネット上で性別は関係ないって言うし、ネカマのネタばらしはマナー違反かもしれないけど、あんたの場合バレバレだから。気づいてないのはあんただけ。むしろ誰も読んでないし、アワレミの眼ですら見られている」

……。

「土偶って言う自称シナリオ・ライターだろ？　土偶って言う土塊みたいに無意味とか、操り人形とか、皇帝という絶対者への奉納品とか、そういうメッセーj性が読み取れそうな気もするけど、実は単に昔使ってた『どぐまちいる』って言うハンドルネームの略なんだったな。ペンネームを考えるのが面倒臭かったって、在りがちだけど、そんなでちゃんと小説書けるのか？　小説書くのはもっと面倒臭くないか？」

……。

「ネタバレしても暴走するネカマを作家って呼ぶ。世の中そんなに甘くないんじゃないか？　だいたい今時ネットもののメタフィクションなんて誰が読むんだよ。電撃文庫にでも投稿するのか？　それにしてもラノベテイストでもないし。あ、自称小説家先生だから投稿とかはする必要がないわけか」

……。

「おい、聞いてんのか、どぐまちいる。ドグマチールって、心療内科で処方されてる薬の名前なんだってな。しかも別に心科に通う必要とかない癖に、学校の保健センターでただでカウンセリング受けられるからって、美人の先生とあいたってだけのために毎回予約してるうちに、完全に感情転移しちゃって、今じゃその先生が勤務する病院に入院してるそうじゃないか。そうじゃないか。そういうの、システムの悪用って言わないか？　少なくとも引き籠りのやり方としては姑息過ぎて可愛げがない」

「うるさいな、今いいとこなんだからちよっと黙っててよ。しかもよく考えたら部分的に

相当出鱈目だし、その情報、何処で仕入れてきたのよ」

「私小説物のミステリなんて今時流行らないよ。主人公の性別反転させてごまかしても無駄。そんなの、フィクションの歴史始まって以来みんなが使ってるテクニクだからな。大體『2ちゃんねら』が小説偉そうに書いてんじゃねえよ」

「小人さんさあ、さっきから一人でごちゃごちゃ言ってるけど、何が言いたいのか？ どういう演技を期待されてるのかわかんないと、私も演じようがないんだだけだな。何、私の名前が分かった？ あ、そう。じゃあ、あなたは誰なのよ。小人さん」

「あんだ、コビトコビトって呼ばないでくれよ、ちゃんと名前あるし、それ、サベツ語だよ、確か」

湊警部は見つけた資料のコピーを撮ってセンターに戻る。五十人近い捜査員たちが端末に向かって仕事している。緊急会議はとっくに開けたらしい。捜査に進展はあったのだろうか？ 遠藤は私生活の困難をどう乗り切って見せてくれるのだろうか。二人は結婚できるのか、連続殺人の謎は解明されるのか。物語のお約束として最終的な答えは予め分かっているわけだけど、ハラハラさせられるところだ。無心に画面を見守る私。

「アルペジオだっけ」

「違う。アルペジオはあんだが殺した方のやつだ」コビトがぼそりと呟いた。「教えといてやるよ。俺の名前は、ピーポってんだ」

ビデオを見ている間にコビトの姿は何時の間にか頭に青い縞模様のある栗鼠のような形に変化しているのだった。何処からどう見てももうグノームではない。

やっぱ、スナック探してこよう。

あとチューハイも。

事件の捜査は難航を極めた。

ただの連続殺人や模倣犯罪ではない。実行犯はそれぞれ特定されているのだ。だがそれぞれの脈絡が掴めないし、ないようでもある。あるようでない。実生活上でのコンタクトはまったく存在しないように見えた。それは確実に。しかし犯行上の、あるいは、ネットワーク上の連鎖としての脈絡は確実に存在するのであり、それは当初から前提としてあった事実である。

事件が警察がそれ进行处理できないことも含めて社会問題化したのは、夏のコミケット会場での銃乱射が大量の死傷者を出してからだった。死者74名、負傷者128名。数字がマスコミを動かした。犯人は十八歳と二十一歳の男性二名。二人はナップサックの中に大量の銃弾とマシンガン三丁を忍ばせてコミケット会場東B3エリアに潜入した。そしてエリアのほぼ中心に立つや昼食後の混雑が始まる一時十五分前後、ナップサックからその大型銃器を取り出してそれぞれ百八十度、周囲三百六十度に向けてほぼ五分間に渡り乱射したのだ。二人はほぼそのままの立ち位置で、銃弾が切れて呆然としていたところを警備員に取り押さえられ、駆けつけた所轄のパトカーで護送された。東B3エリアには革命の女神が残した荒涼とした血の海が広がっていた。ある少女は一冊も売ることが出来なかったボーイズ・ラブ・コミックの上に覆い被さるようになって息絶えていた。当該事件の捜査には直接関係ないような事実も浮上してくる。最初に事件を起こした牛込の少年の母親が勤めているスナックの背後に非合法売春組織らしきものがあると、その数鑑にあたっていた刑事から報告があったのだ。公安が動き始めたと内部からの風聞があった。公安にホシを上げられでもしたら、それこそ偽物の遠藤警視のキャリア・レヴェルの問題ではなくなってしまう。遠藤警視はその刑事の案内で大久保の裏路地にある雑居ビルに向かった。事情の捜査に当たっていたのは牛込署捜査第一課の所轄刑事だった。

非合法売春、と言ってもそもそも売春行為自體がこの国では非合法なのである。それでも警察のお仕事を増やさないために、風営法というやつで大部分はお眼こぼしになっているわけだがそれでも、警察が察知し次第即座に動かなきゃいけないようになるようなタイプの売春というのはある。未成年者が絡む場合がそれだ。未成年者が絡むと、風営法の領域だけにことは収まらなくなる。今回の組織は、ところでそれをやっているらしいのだ。所轄刑事は例の母親が勤めるスナックのオーナーが経営している他の風俗店を洗っているうちに、妙な事実気づいた。風俗店はデリヘルから店舗型のイメクラなど、幾つかあったのだがそのどれも会員制であり、しかも会員登録の窓口が設けられていないのだ。同様に従業員の子の募集も行った形跡がない。所轄刑事は方々を当たって漸く一人、登録会員なる男性を探し出し、その男性から風俗店は中學生や高校生を使っていることを聞きだした。しかしその男性はこちらが警察関係者と気づいてしまい、結局姿を眩ました。遠藤警視達に来た雑居ビルは、そのオーナーの島田なる人物の持ちビルだった。遠藤警視は牛込署の刑事に案内されて安普請のエレベーターで三階に上がった。エレベーターの出口がそのま、店の入り口になっていた。PC房って言う紫色と緑色の電飾が眼を引く、薄暗い店内。カウンターの案内も全部ハングルだった。受附の女性は二人の背広姿を眼にすると韓国語でなにやら（あにょん……）囁き、カーテンの奥に消えた。ほどなくして店主らしき男が現れた。

二十代後半だろうか。ヨレヨレのネル・シャツに、眼鏡。長く伸びて根元の黒い部分が全體の四分の一を占めた茶色い髪。軽そうな感じの韓国人の青年だった。日本語は不慣れな印象だったが、正確な敬語を話すところにちゃんとした語學教育を受けた痕跡が感じられた。もしかすると、本当は幼少時から日本で育った男なのかもしれない。韓国語鈍りは偽りのものなのかもしれないとすら、遠藤警視は考えた。日本人である可能性もある。

二人は彼に伴われて店の奥の管理室に入った。通り抜けた店内は、よくあるネットカフェのそれだった。遍くネットカフェは漫画喫茶と兼業しているものだが、此処の棚に並んでいるのは日本のコミックじゃなくて、韓国語の漫画とか雑誌類だった。でもよく見ると多くは日本製の翻訳版だったりする。

「今、島田さん呼びましたから。ムサクルシイところですが」

二人は薄汚いソファを進められた。一応、ポトスがあったり卓があったりポットがあったりして、応接セットにはなっている室である。

「警察には登録してなかったですが、まだ新しい店なので。全部、自作のPCなんですよ。この辺りにはこんな、外国人向けのインターネットカフェがまだ沢山あります」

中国人や韓国人向けのネットカフェまでは、ハイテク犯罪対策センターもリスト・アップしていない。この店にしても、だから遠藤警視は初めてその存在を知った。

「利用者の記録は採ってますか？」

「はい、じゃあすぐデータ・ディスクを作ります」青年はそう言って、すぐ側のデスクトップに向かった。

「多分、何も新しいことはありませんよ」

普通の日本人向けのネットカフェでも、利用者のログの任意提出には反発する管理人が多い。この韓国人の青年は突然現れた、多分初めて対面する刑事の姿に面喰らっているようだった。数分後に手渡されたMOを遠藤警視はパソコンの上に忘れて帰ってしまうのだが、それから島田が現れるまでの三十分程度はひたすら無言だった。

無言。無音ではない。エアコンの音だろうか、コンピュータの音だろうか、雑居ビルに在りがちな雑音。雑音が小鳥の鳴き聲に聞こえる……。

島田はアロハシャツ姿だったが、丁寧にまず名詞を差し出した。目線を合わそうとしないうちに、神経質そうな初老の男である。元々は地方出身の普通の若者だったのだろう。それが

歓楽街のネオンに魅せられそうだった世界に飛び込み、怖い客相手の接客や暴力団との取引やらに揉みくちゃにされて、仕事が拮めてきた頃にはそういう吃りがちな小粒のパーソナリティが出来あがる。その男はもう五十過ぎているだろう。人生は短い。反面、ヤクザではない、ビジネスマンらしい、そういう世界の経営者によくあるワンマンな風貌も垣間見えたが、遠藤警視らの前では低姿勢を強いて作っているようだった。

「うちの女の子が『本番』でもさせてたって云うんでしょう？よくある話だ。女の子と客とのやり取りは密室関係だからね、そこまで管理できませんよ。働きたがっている女の子に客を案内する、そこまでがうちの仕事です」

「いや、今日伺ったのは飽く迄参考として、幾つか質問がありました」所轄刑事が名刺を差し出す。「フダも出ていません。飽く迄任意です」

偽物の遠藤警視も名刺を出した。

「へ、本庁の刑事さんが、何でまた。『ハイテク犯罪対策総合センター』？聞いたことないな」

「最近は、ニュースにもよく出ますよ。俗に、『連続オタク殺し事件』ってマスコミが呼んでるやつ、あれを担当しています」

「知りませんね。テレビ見ないから」

島田は子供の玩具でも弄ぶみたいに遠藤警視の名刺を弄くっている。へっ、ハイテクねえとでもいいたげだった。

静かである。

「みんな、誰でも知ってますよ、テレビ見てる人なら」

自分の職業に誇りを持って何がいけない？

「テレビなんて、どうして日本人はあんなものを見るんでしょうね？画面の中に、人が映っている。それだけだ。何処からどう見ても普通の人間だ。人間が喋っている。人間が動いている。ときに、台本やカンニングペーパーに合わせて。どうなんでしょうね、刑事さん、人間は人間にそんなに興味があるものなんですかね」

時間が過ぎていく。遠藤警視は自分が何のために此処にいるのか考える。仕事のためだ。仕事をしなければならぬ。

「こうして風俗営業をやってもね、一番不思議なのはこの業界に客が来ることだ。私らが儲かることだ。客は、一定の時間密室でうちの子と接するためだけにやってくる。うちの女の子はみんなただの人間ですよ、宇宙人なんて一人もいない。そりゃ時々考えちゃいますよ、われわれもね」

この男は何を喋っているんだろう？遠藤警視は次の言葉を探す。自分は何のために此処にいるんだ？そう、仕事のためだ。自分は誰だ？刑事だ。そのことを眼の前の男に知らしめねばならない。

「多分、彼らにとって風俗店の密室はテレビの筈の象徴なんです。私はそう思うことにしました。何にか、理窟を附けとかなきゃ仕事できないですからね。そうだ、彼らは普段テレビの中に見ている、手には触れられない存在に触れるために、高い金を出して店にくるんだ、ってね。箱の中に捕らわれた世界に一時身を溶け込ませるために。だからね、刑事さん、買春違反を減らしたいたら、彼らにテレビを見せないようにするしかないんです。刑事さんもテレビに出てるって言いましたよね？」

「それでも」遠藤警視は口籠る。「テレビは大勢の人が同時に見ているものだ。日本中の人間が。あんたがやってるフウゾクとは、違うだろう」

「違うって言いましたね？今、違うって言いましたね？何処がどうちがうんですか？われわれが今いるこの世界がテレビの中の世界と違うと？何処にそんな保障があるんです？誰が証明するんですか、此処がテレビの中じゃないなんて」

プチ。私はリモコンの早送りのスイッチを押した。

「このおじさん、退屈。だって明らかにテレビの中にいる人に『此処はテレビの中なんですよ！ 気づいてください！』なんて言っても意味ないじゃん。何か、言葉としてそれは意味をなしていない。って言うか見てる側としては白けると言わざるをえない」
プチ。

刑事ら二人はめばしいことを聞き出せないまま礼を言って帰ることになった。時間が無いのだ。刑事には仕事がある。刑事はいつも仕事をしている。いつも、時間に追われている。

ネットカフェの管理人の青年が奥から現れて三人をエレベーターまで導いた。

「島田さんはコンピュータ関係の仕事もなさってるわけですか？」

「彼ですか？ あれは、クルって言うんですよ。いや、地縁です。この辺り、大久保だけじゃなくて歌舞伎町でもっとそうなんだが、この辺で仕事をするとしても東アジア系の知り合いが多くなりますからね。これも国際親善ってやつですよ。知り合いの血縁に好きなことをやって貰う場所を提供する、するとこっちはビルを借りやすくなる、仕事もしやすくなるという」

「クル、『空』って言う意味です」青年が振り返らずに言った。

「彼はテレビも見えないし女遊びもしない。その替わりああして機械ばかり弄っている。此処のパソコンはすべて彼の手作りです。変わった男だ。世の中ああいう男ばかりだったら、お互い仕事がなくなるでしょうね、へへ」

マイクロソフトとインテルが一大帝国を築いた86プロセス以降のパソコンの世界は部品の規格が過敏に統一される傾向があるので、実は自作パソコンはプラモデルよりも簡単に組み立てられる。しかもレディ・メイドより筐体もファンの騒音も一回り大きくなるし、費用もかかるのである。部品を組み立てるのは簡単だが、それぞれの部品はその分高度に複雑化していて、それらがパフォーマンス、あるいは速度という唯一の数値を担保にし、月末の売上げ収益決算のみによって部所同士が信頼し合う会社のように結び附いているのである。だから時々、プロセス設計者の先読みとプログラマの職人芸が干渉しあって逆にパフォーマンスが落ちるなどのディスコミュニケーションが発生する。競争原理が自由競争に勝ち抜く体力を附けるとは限らないというわけである。そんな話をしながらエレベーターを降り、そこで島田と別れた。

「どうなんでしょう、刑事さん。私は時々、自分がテレビの中にいるみたいな気分になります。奇装させられて、ピエロみたいに、台本の言いなりになって。時々頭が可笑しくなりそうになる。どうなんでしょう、刑事さん。私はもう気が狂っているんでしょうか？」
「少なくともわれわれには職務上、それを判断する義務はないですね」

一つ、溜息を吐いてから遠藤警視はサクッとそう言って背を向け、牛込署の刑事の後を歩いてパトカーに乗り込んだ。

走り去るパトカーを見送って一部始終を見守っていたジャージ姿の遠藤が物陰から現れたのはそのときだった。尾行していたのである。本当の遠藤は入れ替わりにネットカフェに入店した。その界限では中国人向けのネットカフェと、日本人向けの、韓国人向けのとの住みわけがある。中国のネットカフェは網とか高速口巴とか、韓国のはPC房。今時、自宅にパソコンを持っていない人なんていない。ネットカフェは見た目には違いがない住民が自分のアイデンティティを確認するための空間として機能しているのであろうか。昔

の竹下通りみたいだに誰もがヘナチョコ・アイドルのプロマイドを売っている。韓国人は日本人と同様の田舎者だが、中国人は英語も日本語も完全に喋れる場合が多いし、阿片戦争と毛沢東を経てなほ一度は世界最高度の文明を築いた民族の誇りと気品を懷中に秘めて生存しているようである。中国人に特別勉強家が多いというわけではなく、言語が文化であるということなのである。さらにこの通りでは外国人の影響を受けて日本人も少し訛っているせいでスクランブル状態の東アジアの三界は見た目では全く区別が附かないから、特定の人物と懇意になってみて初めて違いに驚かされる。洋服を着て携帯を身に着けても歴史から逃れることは出来ないのである。

暗い店内に入って一般客として手続きを済ました。韓国人に日本語で対応される。何故日本人だと分かったのだろうか、遠藤はそれを残念に思った。客席に案内された遠藤は、リュ・クルが作業している席の隣を選択した。パソコンの筐體の上に偽物の方の遠藤警視が忘れていったデータ・ディスクが裸で放置されている。遠藤はクルが席を立った隙に天井に監視カメラがないのを確かめ、それをくすねてジャージのポケットに入れ、何事もなかったかのように悠然と煙草に火を点けた。数十秒してクルが帰って来ないものだから、遠藤はグイッと體を横に伸ばしてキーボードに触れた。ウィンドウズ2000。これはXPとは系統が違うウィンドウズで、ウェブ・サーバやデータ・ベースが入っているからプロ向きのOSだと言う人もいるが、好き者はマイクロソフトを嫌ってマックカリナックスに住み分けるのが普通だから2000を使っている人は分かっていない場合が多いかもしれない。遠藤がDOS(窓)を開いてnetstatと打ち込むと、八十番ポートが開いている。

ようだった。クルがそのパソコンでウェブ・サーバを運営しているのだとしたらこのパソコンがPC房全體のルーター兼DHCPサーバであるに違いない。ランのパソコン全部に固定IPを買うようなことはしないし、枝の末端に位置するマシンに固定IPを渡すのは相当トリッキーな配置なのである。ダイナミックDNSだとさらに難しいだろう。案の定、Cドライブ直下にトムキャットが眠っていた。ウィンドウズでウェブ・サーバをやるならマイクロソフトのサーバを使って拡張子ASPを出すのがお洒落な選択だろうが、オープンじゃないから金が掛かるしメンテナンスの情報も少ない。安く抑えるならオープン系の本家アパッチか、ジャヴァのトムキャット、ジェイ・ボスなどの選択肢がある。ソフトウェア工學の聖地の一つであるカリフォルニア大學バークレー校の學生だった人物が手がけ、世界中のプログラミング好きが勉強や仕事の合間にパッチを提供し合って出来たアパッチはハッカー文化のシンボルの存在で、万人に入り込みやすいパブリックな雰囲気がある。

パールとかルビーとかPHPとかの軽量スクリプティング言語やオープン系のデータ・ベースが使いたいならアパッチ以外にないだろうが、アパッチだとジャヴァのJSPが使える。JSPは名前も中身もASPに酷似している、それはジャヴァの開発企業サンが九〇年代以降取っている反ビル・ゲイツの姿勢の一貫であり、一種の自己諧謔である。アメリカ人は法律をよく知っているから、そう言うあからさまな嫌がらせの仕方が分かるのである。ジャヴァを使うならトムキャットで行くのが普通だが、ジャヴァの製品はバイト・コードの解読や、マイクロソフトのコード隠しを脱構築するサン企業カラーに附いていく位の知能がないと逆に窮屈な印象を受ける。サンはマイクロソフトよりもマイクロソフト的に洗練された隙のない企業だからである。アパッチとトムキャットを連結するモジュールも存在しているが、PHPで作ったページをJSPの方に張り付けたりしたくなったりとき困るし、頭が混乱する上に電気代も無駄になるだろうから趣味でやったり人以外は止めた方がいい。それに趣味でやっているのならコンピュータの世界にはPHPとJSPを両方覚えるよりずっと面白いことが沢山ある。

どの道、グーグルの検索設定を英語にしない人にウェブ・プログラミングの醍醐味を味わうことは出来ない。コンピュータは楽しい上に金になるから、絵や音楽の世界みた

いに認められず殺伐としている人がさほどいないし、ハッカーは究めて社会主義的でない奴らなのだが、外国語を勉強したことがないから彼らの謂わゆる「自然言語アプローチ」を解読するのに英語圏以外の人間がどれだけ苦労しているか理解できないのである。本当に優しい人になりたかったら専門じゃない分野にも首を突っ込んで苦労しなきゃ駄目なのだろうか。遠藤は考えた。

クルはトムキャットのデフォルトのログ以外に器用に韓国語のコンパクトなアクセス・ログを取っていた。遠藤は `move` と打ち込んでその内容を〈窓〉に流した。ウィンドウズは使い難い。本来正常な自由競争の中では流行るべきではないものが急速に競争相手を駆逐して基準化してしまう、そんな現象は電子複製メディアの誕生以前にはありえなかったものであり、この時代の人々が一から考えていかなければならない問題ではある。それはルールの中での競争ではなく、ルール自體の開発や流通なのであり、そこに個人主義や競争原理を持ち出すのは原爆時代の戦争を三十年戦争とのアナロジーで捉えるようなものである。手製のログ・ファイルは韓国語ではあったが、HTTPの文法を理解した上で整然とした二次元テーブルにまとめてあって内容は即座に理解できた。何処かからやってきたクライアントのリクエスト内容及び時間と、それに対してこちらのサーバがレスポンスしたヘッダ・フィールドの一行目。普通、`HTTP/1.1 200 OK` となる部分で、この後にデータ内容のタイプや文字のエンコード、データ内容のサイズ、時間、サーバのサインが続いて、最後が普通はHTMLで記述された、インターネット・エクスプローラーだと〈窓〉上を右クリックして「ソースを見る (V)」をクリックすると表示されるデータ内容である。よくあるノット・ファウンドは、例えば間違えて要求したページの相対パスが

`index.htm` だつた。 `HTTP/1.1 404 index.htm` となる。ステータス・コードの規定は実装者の判断に任されている部分が多い。黒幕のバーナーズ・リーはヨーロッパ人らしく、ウェブの仮想世界がまるで実社会のような振る舞いをするように、巫山戯た実装が駆逐され頭のいい実装が生き残るといった競争が観測される程度の余白を遊びとして意図的に残しているわけだ、と遠藤は想像していた。レスポンスの先頭に位置付けられるステータス・コードのレンジは百以上六百未満の五百個だが、百桁は純粹情報的、二百桁はリクエストを読んで意味の理解に成功したという身振りで、三百桁競争中で続行せよ、四百桁と五百桁はそれぞれクライアント側とサーバ自身のエラーとの判断であるだけ決まっていて、最低限クライアント・プログラムはこの五つは区別できなければならない。バーナーズ・リーは本当は十進法ではなく素数を使いたかったのではないかと思う。遠藤はログの最後の数十行が全て同じ日附なのを発見した。現在を基準として二分以内に記録されていて、クライアント側のIPアドレスはすべて同じだった。遠藤は咄嗟に手帳を出してそのIPをメモした。何しろ、それらのログはステータス・コードが異常だったのである。順に四百九十九から一ずつ減っていつているようなのだった。一番新しいものが四百三十二だった。すべて四百桁だったが、HTTPの仕様書では四百から四百七十七までしか定義されていないことを遠藤は思い出していた。

彼はネットカフェを出ると、警察手帳を持っていた頃に取った杵柄でハイテク犯罪総合対策センターに忍び込んだ。彼にはISP経営業者の知り合いが一人だけいて、その人物に問い合わせると偶然にもメモして帰ったIPアドレスの主を突き止めることが出来た。それは単なるウェブ・ブラウザではなく、プロクシ・サーバであるようだった。遠藤は早速センターの端末を使ってそこにアクセスした。

それは不意打ちだった。刑事を辞めてから鈍って心の隙が出来ていたのだろうか。かつての遠藤ならそんな迂闊なアクセスの仕方はしなかっただろう。彼は `curl` と言う多機能な、しかし一般に流布しているネットワーキング・ソフトを使ったのだが、コンソールが数秒、数十秒沈黙し、プロクシらしいレスポンスが一つもなく替わりにURLを一つ表示して復

帰するのを見て、遠藤はしまった、と呻いたのだった。

そのURLにブラウザからアクセスすると、白の背景にウェブ・サイトらしからぬ大きなサイズの明朝體が〈窓〉一面に拡がった。遠藤には日本警察門外不出の犯歴データの一部であることがすぐに分かった。幼少時に精神に錯乱を来して実の妹を殺害した若い女性のデータだった。さらに、顔のJPEG画像。美しい少女だったが、その服装と背景から修道女であると判断できた。

プロクシに見せ掛けられていた、警察の調べで二〇〇一年に流行したWindaの改良版であることが分かったソフトはバック・ドアを仕掛けるウィルスだった。curiの脆弱性を突いてSQLワームを送り込み、データ・ベースを叩いてログイン・パスワードを短期間のうちに割り出した上、ウェブ上の予めバック・ドアを開いてある他のサーバに送る——そんな高性能なウィルスの製作は究めて難しく、遠藤も前例を知らなかった。しかしどんな暗号も解くことが不可能と決まっているわけではないのである。

検索エンジンでキャッシュを見ると、遠藤のせいで少女の犯歴が晒されているところのURLは実際にある修道院のサイトであるらしかった。メリディエス修道院、プロテストメントだった。そして遠藤が証拠隠滅してそそくさとセンターを抜け出してから数時間後、メリディエス修道院からの通報でセンターの電話が鳴ったのだった。

偽物の遠藤警視は通報を重く受けず、部下に担当させることにした。その数分前に大川少年の部屋のハード・ディスクから部分的に復元されたデータが届いたからであった。

フラッシュ・メモリーで資料を持って来た刑事はそれを遠藤警視のパソコンに挿入した。「ハード・ディスクから見附かったのは、こういうテキスト・ファイルの一部です」

$$\sqrt{2} = \frac{t}{D}$$

「何だこれは」と遠藤警視が尋ねる。

「テフのソースの一部でしょうね。テフというのはもっとも古い電子計算機用の組板ソフトでして、TeXって書いて、ドナルド・カヌスと言う数學教授が作った重要なソフトウェアなのです。カヌスは七〇年代にコンピュータ関係者にもっとも必要なのは職業倫理であると見抜いた」と捜査官は手短に説明する。

「で、どう言う意味なんだ」

「見たままです。sqrtはスクウェア・ルート。fracはフラクションです。出力はこういう感じになると言います」と言いながら、捜査官はメモ帳に汚い字で數式を書いた。

$$\sqrt{2} = \frac{t}{D}$$

「教科書の何処かで見たことがある數式ですね、警視。では、これで」

時間が刻々と私たちの體を切り刻んでいる。

私はこんな風にDVDを見ていいのだろうか？ と、DVDを回していたはずのプレイステーションが消えて、ビデオ・デッキを平たく押し潰したような機械に変貌していた。私も小さい頃友達の家で見たことがある、LDプレイヤーだった。そんな風にして私を包む時間が逆行を始めていたのだった。

「もう暗くなってきたね」

「ああ」小人……ピーポちゃんって言うんだ、が私の膝の中で頷く。「何時の間にな。日が暮れる。今日は色々あったな、そう言えば。色々あった充実した日は、何故か日暮れが切ないよな」

「もうすぐリョウが帰って来るよ」

「んだな。俺も行かなきゃ」

「行くって、何処に？ まさか、またハムスターの中？」

「いや、あんたのことであつと気になることがあつてな、何か分かるかもしれない……帰って来るよ、すべて謎が解けたらね。心配すんな、あんたのためだ。帰って来るって。

寂しそうな顔するなよ」

「寂しくなんて、ない」

「んじゃな」

小人はヒョイツと膝から飛び降りて床に脱ぎ捨ててあつたハムスターの毛皮を素早く着込んだ。

「やっぱりハムスターの中なんじゃん」

「いや、これは安全のためだ。ちよつとチャック閉めてくれないか。背中に、手が」

「何、自分で着れないの？ お前は今までどうやってそれを着脱していたんだ？」といいつつ私はDVDを一時停止して手伝ってやる。小人は何度も振り返り、何か言い足りなそうに部屋を出た。私は玄関まで送ってやった。

送って上げたんだ。何も言えなかつたけど。何も言って上げられなかつたけど、君とい

だけどうせ言葉にしても伝わらないから。

伝わりっこないから。

雑音の彼方に遠くトランスが聴こえる。

制服姿の女の子は電車を降りる。自動改札で立ち止まる。ぎこちなく流れていた朝の人の混みが滞留する。女の子は精算機に向かう。今日は定期が切れていたから、切符を買ったのである。そしたら馴れてなかつたから買い間違えたのだ。帰ったらお母さんに伝えて定期代を貰わなきゃいけない。人混み。

何も言わない、真っ黒な人混みは思い思いに、それでも気紛れな散歩をしているわけじゃなくて、何処かそれぞれの行く宛に向かっていて、そしてそこにはそれぞれの居場所があつて。

「高音、おはよ」誰だろう、同じ制服を着た少女が後ろから女の子の肩を叩く。

「あ、おはよ。今日は早いんだね」

二人は並んで改札を出た。駅から学校までは一本太い車道が突っ切っている。その車道の両脇にマロニエが整然と並んで、その木陰の歩道を制服が三々五々、列を成している。列と車道は、駅舎の高みから見渡すと霧の中に消えるまで続いていた。今日は早朝細かい雨が降ったんだ。それで、道は所々水溜りになってぬかるんでいた。

空はどんよりと曇っている。人生に興味なんてないんだ。二人は校門を潜った。

教室に入る。女の子の机の上に黒い霧々が乗っかっている。

幸福という名の、黒い霧々。

「ねえ美咲、……何これ」

「ひどい、動物虐待だよ」美咲は指先でツンツンとその黒い靄を突ついた。

同じ教室。虚空から音もなく浴衣を着た人形が現れる。〈窓〉の外は霧雨に濡れており、まだ薄暗い。人形の手には黒い靄がぶら下がっていた。人形はゆっくり進み、高音の机の上にその靄を乗せて凝っとそのまま立ち止まり、それを見詰めた。そのままの姿勢で、何時の間にか人形の姿は消えていた。

遠くで人聲が聞こえた。用務員さんか早起きの先生か、それとも生徒か、朝一番の人影が校舎に入ってきて来る。

「誰が小鳥を殺したの？」

遠い記憶。水平線。

「動機は？」

青い珊瑚礁。

「きっとお母さんのおっぱいが恋しくなっちゃったんでしょ」

「それで小鳥を？」

「高音、この小鳥の死體を見て、何か思い出すことはない？ 気がつくことは？」

「うーん」少女は気持ち悪そうに机の上の屍を見やった。「幼稚園の頃ね、近所に私と妹にすごく仲良くしてくれてた男の子がいたの。幼稚園の前だったかな、妹がまだいたから。男の子のほうはもう小學校に上がっていた。だからすぐお兄ちゃんに見えた。私たち二人は小鳥を飼ってたの、公民館の裏の雑木林で。小鳥って言っても、小っちゃい成鳥のことじゃなくて、鳥の仔のことね。多分、鳥か鳶だった。お兄ちゃんは『捕まえて来た』って得意になってたけど、あれはきっと倉庫の屋根の裏とか電柱とかにあった鳥の巢を落として、親鳥から横取りして来たのよ。それで、二人して魚釣り用の餌とかミルキーとかヤクルトとか色々買ってきて試してみたんだけど、全然食べてくれなくて。悲しそうに啼くんだよね。親鳥を求めて。ピーピーピー。あるときその小鳥たちが育ててたダンボールの中からいなくなっちゃったの。お兄ちゃんに聞いたら、『飛べるようになったから巢立って飛んで行ったんだ』って言ったけど、あれはきっと死んじゃったんだよ。幼い私は自然にお兄ちゃんの嘘を信じた。今でも何故か、信じている。不思議だね、幼い頃の記憶って。でもきっと死んだんだよ、お腹を空かせて、私たちのせいで」

「紙屑みたいに？」

「そう、紙屑みたいに」

「それだけ？ 思いつくことは。夢は幼い頃の心的外傷の痕跡と、ごく最近の記憶の混成物だって言うじゃない。その、後者の方に関して思い当たることはない？」

「そうだなあ、最近って、此処二三日のこと？」

女の子はコクリと頷いた。「一ヶ月くらい前まで、含めてもいい。だけど出来れば昨日のこと。昨日布団に入る前のこと。あるいは、いま布団の中で寝ているあなた自身のこと」
「今、寝ている、ワタシジシン？」少女は嗤った。「莫迦だな、美咲何言ってるの？ 私は起きてるよ。私は、今起きて、此処にいるよ」

「そう」女の子の桃色の唇がゆっくりと動く。「これは現実。夢みたいに軽い現実。そして、私たちは、此処に、存在しない」

「昨日のことなんて覚えていない、何一つ。私だから。ふふふ。私本当に莫迦なんだよ。昨日の晩御飯のメニューすら覚えてないな。不思議だね、小さい頃の記憶はあんなに鮮明なのに」

「あなたは小さい頃のあなたなんだよ。高音は今、お母さんの子守唄を聞いて、眠りに就いたところなの。きっとまだおっぱいが恋しい年頃で、お母さんのおっぱいを弄って愚図

るんだけど、駄目ですよって言われて渋々眠りに就いたの。そして、十數年後の自分の夢を見ているの」

「夢なんかじゃない。私は此処にいる。そして」

「夢でもいいじゃない？ そう思わない？ おしろ、こんな世界」

「美咲はこの小鳥の死體をみて何を思い出したの？」

「覺まして上げようか？ 今、私が高音を、この夢から」

「だってさっき、この死體を見たとき明らかに驚いてたでしょ？ 尋常じゃない引き攣りかたしてたよ？ 教えてよ、美咲は何を思い出したの？」

「消えちゃえばいいって思うでしょ、こんな現実なんて。こんな自分なんて。これがみんな夢だったらいって、みんな心の何処かで思ってるでしょ。私とその夢を叶えて上げるよ。高音はもうすぐ、目を覺ます。こんな現実、すべて消えて無くなる。空気より軽い夢になって、滅亡するんだよ」

「もうすぐ？ もうすぐって、何時のこと？」

「それは私にも分からないわ。だけど解放されるんだよ。誰もそれを経験した人はいない。何故なら経験した人はすでにこの（夢の）世界の外にいるわけだから。そこから帰ってきた人はいないんだよ。だけど、誰もが確実にいつかそれを経験する、そういう経験。絶対的な不可能性の可能性。生きとし生けるものは遍く死ぬ定めにある。それがわれわれに与えられた唯一の救いである」

「恩寵、ってこと」

颯が吹いて教室の窓硝子がガタピシ震えた。教室中が一斉にみんな、沈黙して外を見る。程なくしてまた教室は雜然とする。喧騒。

「恩寵——こうなっちゃうことが？」女の子は指先で冷たくなった机の上の小動物を突ついた。

「小鳥さんには分からないわ、自分がこうなってること」

「自分が分からなければそれでオッケイってこと？」

「分かんとか、分からないとか、恥ずかしいとか、恥ずかしくないとかいう差異、コトワリが小鳥さんの世界からは消えてしまったの。だから、私たちの持っているそういう区別を小鳥さんに押し附けるのは、今となっては最早馬鹿々々しいって言うか、おしろ不敬に当たるんじゃないかしら。ねえ」少女の唇が動く。一人で動く。人間って気持ち悪い。一人で動くから。「死んでしまいたいって思わない？ 私たちは生きている限り、先に進まなきゃいけない。先に進まなきゃ読者に飽きられてしまう。なるべく素早く、先に進まなきゃいけない。まだ語らなきゃいけないことは山ほど残ってるわ。謎は一つも解決していない。おしろ、私たちはもう疲れちゃったんじゃない？ それを隠すことは出来ないんじゃない？ どうせ私たちの人生なんて誰も真面目に読んでいない。私が今此処で死んでも、気に留めたり、ちょっとでも涙を流してくれる人なんてきつと一人もいないわ。初めから解決している謎をわざわざ言葉にしてスペクタクキュレアに解決して見せて、ステージの手品師みたいにさ。そんなの莫迦々々しいよ。読者に伝えて何の意味があるの？ 初めから分かっている終わりを。私たちは、終わりから、結末の大団円から緻密に設計して作られている。そのタイム・テーブル通りに動くパペッツなのよ。私たちが動かなくなれば、全部終わる。読者だってそれでそれなりに喜んでくれるはずだわ、錯乱的な終わり方がいい味出してる、謎めいてるだとか適当な理窟を付けて。始めから完成している世界の終わりまでことをわざわざ進めるのは、単に語り手の自己満足ってもんだよ。きつと謎が解決してしまった方が読者は退屈するんだよ。がっかりするんだよ、その瞬間まで読み進めてしまったことに。此処で終わりにしちゃおうよ。止めちゃおうよ。遊び溝を切って、ビートルズの『サージェント・ペッパーズ』の最後みたいに。ねえ、私が何を言ってるか判

る？」

教室の後ろの扉がガラリと開いたのはそのときだった。

「よう！」

小人。さっきまで私の膝の上に乗っていたピーポ君だった。「何これ、ちょっと俟って」と私は思わず叫んだが、テレビの中には聞こえない。ところで小人がああ伸長で扉を開く瞬間を私は見落としてしまった。案外、黒子が陰にいるのかもしれない。

「演技を続けたいと思ってるやつらも、そろそろゲームを抜け出したいなんて横柄なことを考えてるやつらもよく聞くように。これからおいらが事件のヒントを出してやる。ところで、久し振りだな、太樹くん！」と、ピーポ君が愛梨の肩を叩いた。

「私は……」愛梨が言い返そうとする。

「いや、あんたじゃない。俺はあんたの『中』に話しかけてんだ」とピーポ君が言った。

「ゲームを辞めたがってるやつら、どうだ、こいつの『中』にいるやつはみんなの先輩だぞ。そうだ、高音の彼氏役で出演してた大樹だ。兼ねてから、性別が男のアヴァターじゃプレイヤーが付きにくかった上に、由悲のレイプ事件で人気はガタ落ち、ネットで叩かれまくったのがこいつがゲームを辞めた理由だ。しかも大樹は辞めただけじゃなく、プレイヤーとして高音を虐めるグルーブにこうして参加してるわけだ。そうだよな、匿名のプレイヤーの方が気楽だよな、いつもカメラで見られているアヴァターより！あああ、言っちゃった。またネットにアンチ・ブログが乱立しそうだな、卑怯者のサディスト君！」

果然として反論しようとしないうちに愛梨に代わって美咲が口を出す。「あなた何処の誰よ？公共電波のテレビで個人情報晒して、ただで済むと思ってるわけ？　こんな荒し方、最低だよ。愛梨が可哀想！」

「そう言う君は、こちらもお久し振り」ピーポ君がピョコンとジャンプして美咲の肩に飛び移り、その顔の側でニヤリと口を歪めた。「すでに自殺して不在の癖に変態マニアの間で人氣急上昇中の優悲ちゃんだね、薄幸の妹キャラとして！　まさか本物のお兄ちゃん大好きっ娘だったとは驚きだ。設定上自殺して役がなくなったら今度は実の兄である京介君の恋人役の『中』に収まっちゃうとは！」

今度は美咲が狼狽して言葉を失う番だった。音もなく頬に涙が一筋流れた次の瞬間に美咲は両手で顔を覆って肩を震わせ始めた。ピーポ君は机の一つに飛び降りた。

「何だ何だ、このゲームは、何時の間にかアヴァターもプレイヤーも友達同士の慣れ合いになっていたなんて。マッシヴ・マルチューザーの名前が聞いて呆れるよ！　この事態。

芸術作品なんかじゃない。どうやら二次創作を宛てにしてキャラクタ・グッズで儲けようつてのが経営会社の魂胆だったらしいな！　どうだ、見捨てられた正統キャンに出演中のみなさん。

騙されてるのは君たちの方じゃないかい。安全管理も杜撰になってるからおいらみたいな愉快犯に簡単に乗っ取られちゃうのさ。じゃあな」

震撼する教室とテレビの前の一堂を残し、青い小鳥の死體を背負って悠然と去ろうとした小人が振り返って一言、勝ち誇ったように付け加えた。「そうだ、高音ちゃん。そう言えば君は確か刑事さんに変身してたんじゃないかな。でも、相変わらず君のことは『土偶君』と呼んでおこう。そう呼んで間違いはない。この意味が分かれば、こいつの『中』、つまり君たちが知りたい『誰が殺されたのか』の問いに答えることも出来るだろうよ。君は確か、夭折した妹の代わりに女優になるために育てられたって設定だったな。俺はその設定、間違ってるんじゃないかと思うんで、これからそれを調べにいくことにする。理由は、ゲームの設定にしてはリアル過ぎるってことだ。夭折した兄弟の代りとして育てられた人間が天才になるってのは、現実には例があるんだよ。例えば、画家のゴッホとか。おいらはそういう過度にリアルな設定は気に入らないんだ。最後にもう一つ、ヒントを与えよ

う。部分集合の定義を思いだそう。高校生だからもう習っただろ」そう言って小人は小鳥をみんなの方に抛り投げた。

「何これ。最近流行りのテロ？ サイバーテロ？ って言うか、あいつ、さっきまで此処にいた、あいつよね」テレビの前で私は片手に摘んだままになっていたスナックを漸く口に運んだ。「まあ、こういうこともあるか。ドラマやってるのも私たちと同じ人間なわけだし」

もう、外は真っ暗だった。生まれて何度目の夜だろう。背後でゴソゴソと何かが動いた。私は振り向く。暗くてよく見えない。

鳥だ。

何処から入って来たのか。青い小鳥。〈窓〉は閉まって、鍵が掛かっているはずなのに。青い鳥は、パサパサと羽ばたいて、壁にぶつからずに上手に部屋を三周ばかり旋回した。出して上げなければならぬ。私は腰を上げる。そういえば、私は何て小さいんだろう。今頃気づく。そうか、リョウがこの部屋で立って歩いているところ、見慣れているからだ。私は冗談が苦手な喜劇女優だ。歌を忘れたカナリヤは、歌になる。歌を忘れたカナリヤは、歌に出てくることが出来る。お客さんにウケないコメディエンヌは、どうしたらいいんだろう。ウケないから、悲しくて、ドンドン悲しい顔になってしまふ、そんな悪循環。

〈窓〉を開くと涼風が舞い込んだ。もう秋だった。生まれてから、何度目の秋……。

何故、女優は一生懸命女優をやらなければならぬのだろう。何故、女優としての成功を必死で追い駆けねばならぬのだろう。必死で、しかも、笑顔で。私は一體誰だ。莫迦莫迦しくてやってられない。プロダクションの人も、両親も、私自身も、どうでもいい。違う、此処は私の居場所じゃない！ 私の舞台じゃない！

ついに鳥が外に出て、露台をチョン、チョンと歩き回り、いつしか音もなく夜空に飛び去った。鈍い青が、黒に溶けた。

背後から聲が聞こえた。また、あの聲だ。リョウに出会った日の帰りに聞いた聲。私自身のと摺れ違ったときの聲。鏡の聲？ 似てるかもしれない。違うかもしれない。

「そこで何をしているの」

私は振り返る。テレビの中、泉二名子。

「私はあなたをそんな人間には書かなかった。女優はどんな舞台に立っても毅然としていなきゃ。例え、場末の見世物小屋でも」

「だってね、こんなの無茶だよ。一人ぼっちで、抛り出されて。見世物小屋だって、舞台は舞台でしょ。此処は誰も見ていない、ただの意味不明な仮そめに急ごしらえされた独身男の部屋だよ。観客とって、その男ただ一人。しかも今は誰もいない。ねえ、もう眠っていいでしょ。疲れたよ。本当にごめんなさい。疲れたよ」

「がんばりなさいよ。あなたが可愛らしく、シャン、シャンとしてくれないと、恥を搔くのは私なんだよ！ あなたはすでに女優なんだから、シャン、シャンと、することを予め自ら意思してしまっているんだから。どんなに大声で『疲れたー』って叫んでも、誰も信じてくれないよ。疲れた演技をしていると思われる。そこで何してるのよ、ほら、がんばりなさい、何か喋りなさい。あなたがあなたの存在を気に病む必要はないんだよ。あなたは私の物語の中の登場人物なんだから、それは、私の問題」

「演技なんてしたくないよ！ これは演技じゃないよ！ 信じてよ。私は女優じゃないよ。この舞台から逃してよ。たーすーけーてー」

「『演技をしたくない女優の演技』をする女優さんの演技をしている女優なのね。パンクっぽく、チープでいい味出して来てるじゃない。その調子でがんばって」

「出ーしーてー」

「諦めなさい、私の主演女優さん」

「あなたが替わりに主演になればいいじゃない。あなたはこの世界のことをよく知っている、この世界の作者なんだから。テレビから出て来てよ。出て来れるんでしょ？ ひどいよ」

「出て行こうと思えば出て行けるけど、それは無理な相談ね。システムが壊れてしまう、——って言うか、だって、どうやって自分の領域を守ればいいの？ 重力があるからこそ、逆上がりが出る、駆けっこが出る。無重力状態では、地面に自分を縛り付けることから出来ない。いい、あなたがいる世界は競争原理で出来ているの。そうした社会においては競争に走る必然性を持たない者ほど、グロテスクで惨めなものはない。ルールがあるからこそ、自由があるの。さらに、ルールに服従することが出来るのはそれが他人が作ったルールだからなの。あなた以外の、あなたには絶対に手の届かない他人が……」

「変な議論は止めて。さっきみたいに迫真の演技をしてよ、さっき、警視の恋人と結婚するって言う将来が実現できないかもしれないと知らされて、呆然と恋人を見詰めたまま大粒の涙をこぼしたときみたいに。あれ、上手だったよ、私以外にも、見てた人はみんな引き込まれたはずだよ」

「私？ ありえない！ 私はそんな演技してないよ」

「あなたは演技の本質を語ってくれたじゃない。あのとき。話半分って言うか、私は信じなかったけど、それなりに納得できる話だったよ。演劇人だけじゃない、気づいてないだけで人間はみんな演技してるんだって。社会という台本を渡されて、人生という舞台に乗って。女優って謂う仕事は、その真実を正面から受け止めた尊厳ある生き方だって。だから、ただ台本とカメラだけを信じて余裕を持って演じ続ければよい。自分はシナリオの勉強もしているけど、女優の仕事を辞めるつもりはないって。ほら、あなただって演じている。全部あなたの自作自演という疑いすら持ち上がってるのよ、一部では。面白いこと言ってたよね、確か、『大人の世界は役割世界なの！』とか、『私と遠藤くんの関係が知りたいんでしょ？ その、性関係が』とか。『街を歩いてるギャルとか見ると、私もあの頃は若かったな、って思えてくるのよう。そんな風に、キュウウ、って自然に思えて来るくらいのところまで、役作りするのよう』」

「何それ。私だったら小さい『う』を語尾に附けたり、そんな蓮っ葉なこと言ったりしないわぁ。別人じゃん？ でも、その警視の恋人だったって言う設定は私のことみたいね、まるで。何処かの誰かが勝手に私を演じてたんじゃないの。私は何も演じてない、何も表象してない、根源としての記号なの、脚本家なの、絶対的な律法者なの。私が、私までもが何か他のものの表象だったとしたら、演技してるとしたら、その律法の絶対性が失われてしまう。よい演技と悪い演技。罪ある人と清らかな人。ルールの絶対性が失われたら、誰も罪人になれなくなってしまう。あなた、罪ある女になりたいんでしょ、悪女になりたかったんでしょ、女優を目指したって言うことは。律法がなくなれば、罪も消える。もし、私の立場が傍観者みたいで嫌味だって言うのなら、ごめんね。私はあなたが悪女であり続けられるために、厭々こういう立場を取らされてるの」

「屁理窟！ 本当は、自分の姿を描きたくないだけでしょ？ 自分を見せたくないんでしょ。そうして上から見てるのが気持ちいいんでしょ！ どうでもいいから、この世界をもっと単純に、もっと私に都合よく創りかえてよ。もっとこの世界を美的にしてよ！ 二名子さん、シナリオ・ライターでしょ、クリエイターでしょ。台本ちよっと書き換えてもいいじゃん。アドリブ交えてもいいじゃん」

「ドラマに生半可な美々しいものばかり出てくるのを面白がらない人もいるわね。小気味よいことばかり起こる物語より、リアルな日常がテレビに映ったほうが視聴者の息抜きに

なるし、それに、最終的には現実を肯定するのが虚構の役目でしょう。少なくとも私の主義はそうよ」

「それはそうかもしれないけれど……私の身にもなってよ。退屈過ぎるよ。恥ずかし過ぎるよ。眠たくて、頭がボーッとする。ボーッとした自分の姿を、私は此処に晒している。

私が喋ってること、演じていること、今、ほら、ただの雑音ノイズじゃない？ みんな、飽きてるはずだよ！ 恥ずかしいよ。もっとドキドキするような台詞を頂戴。もっとスピーディなプロットを頂戴。私にお姫様の配役を頂戴。頂戴、頂戴、頂戴！」

二名子はテレビの中で吹き出した。

「一つだけ教えるって上げるけど、あなたがいるその世界を造ってるのは私じゃないわ。だって、私は私なんですもの。ところで教えて上げるけど、オリジナルを書いた人物の可能性は三つあるの。まず、私を語り手に立てた人、柳田土偶君。私はあなたが登場する彼の作品を語り聞かせているだけで、著作者は土偶君なのね。でも彼だって、剽窃や模倣をしていないという保証はないよね。そこで第二の被疑者なんだけど、高音ちゃん、この物語のモデルであるあなたよ。あなたにとってはあなた自身なんだから納得がいかないかもしれないけれど、客観的には有力な説なの。あなたは現に今もこうして見られているわけだしね。最後は、この世界の中にいない誰か、不在の他者。——そうすると此岸の根源の問題を彼岸で解決することになっちゃうから、まあ、モダンな解答とは言えないわね。一番落ち着きはいんだけど」

「私じゃないわ。その可能性は消去して」と、私が言った。

「ほら、御覧なさい。さっきまで私を一方的に責めて人が、自分に疑いがかかると逃げるわけよね、そうやって」と、二名子はテレビの中から論う。「でも、消去法で決まりそうね。犯人は不在の土偶君。だってこの世界の出来がそんなに悪いんだとしたら、いない人に罪を被って貰うしかないんでない？ ね」という二名子の判決に、私も首を縦に振る。土偶君というのはおそらく私の中の人のことだろうけど、そうと決まったわけではないし、今彼が――Nして見ていたとしても、此処に不在であることには違いがないのだ。

「……パルナッソスに行きましよう。俟ってるわ。何時かまた」

彼女は最後にそう囁いて立ち上がった。USBのフラッシュ・メモリに華柄鏡面體の原稿を今書いたところまでコピーして、ハンドバックを取り、部屋の電気を消す。今日が最終稿の締め切りで、最後のミーティングがある。二名子は、編輯者と会うのは本音を言う、と、頭が痛い。自分の作品を流通させてくれる人たちなのに、何故か、彼らに会うということも自分の存在理由を見失ってしまうのである。

電車はきつと間に合うだろう。

時間ギリギリに家を出るのは、いつものことだった。出版社に行く朝はいつもタクシードを擦ってしまう。そんな性格では、会社勤めなんて永遠に出来やしない。

久し振りに外に出て電車に乗ると、此処が自分の作った虚構世界でないのが二名子にはすごく不思議に感じられる。あの人も、あの人も、二名子の人物たちじゃない、法律で定められる一定の権利を持った、ちゃんとした個人なんだよね。そして二名子はたった一人の二名子、泉二名子なんだよね。シナリオ・ライターというたった一つの仕事でご飯を食べている、たった一人の女性なんだよね。それが、現実世界の規則。例えどんなに居心地が悪くても。

隣に座ってた女の子、ずっと携帯を弄っていた。誰にメールを打ってるの？ 二名子は肩越しに、画面を覗き込んだ。横から見ると反射して見えなくなるやつだった。まさか、編輯プロダクションじゃないよね。二名子もシナリオなんて書かずに、ああしてメールを打つことに熱中して青春を送ればよかった。そしたらあんな風に、可愛らしくて爽やかな

女の子になれたかもしれない。あの子はああして、綺麗に着飾って、甘い恋をして、誠実な男と結婚して、元気に歳老いていくのだろう――。

いつもの喫茶店、『辻褄』。

派手な服を着た川本菊は、すでにそこにいたのである。トーストを頬張って古いジャンプを読んでいる。玄田はまだのようだった。二名子もモーニングセットAを注文した。

「今日は」菊が二名子に気づいて無表情のまま丁寧に頭を下げる。「拝読しました、先生
の原稿」

「どうも。どうでした？ あなたの名前で発表されるんだから、気に入らないところとか、あったら、言っていんだよ。今のうちだから」

「そうですね。『オタク連続殺人事件』って言うアイデアは凄かったな。吃驚しました。でも、先生ご自身の意見がサブカルチャー・バッシングってわけじゃ、勿論、ないですよ。作者の心情は、むしろ、メディアや情報のネットワークに翻弄されて、簡単に操られてしまう、オタクたちに同情している印象を受けました」

「そうか。……ちょっと、暴力的過ぎたかな」

「いえ、そんなことありません。私なら、絶対あんな風には書けないから、すごいなあって。あと、捜査に当たっている遠藤警視の恋人、二名子って、もしかして先生ご自身がモデルだったりして。同姓同名の登場人物」

「あ、そこは土偶君が……名前換えとくの忘れたなあ」

「え」

「あ、いやね。作者自身が、自分を作品に書き込むなんて、ありえないじゃない。そういうタイプのカムフラージュ。ほら、『盗まれた手紙』だよ。一番目立つところに隠したものが、一番見つかり難い」

「そういうの、よく読みますよ。私が書いているBは作者の分身が登場すること多いですし、純文学でも、英文学とかだと。そこに文彩とフィクションの区分を認める人もいて、文学用語ではメタレプス転説と言います」川本菊は大学の講義を思い出すようにそう言った。

「そうか、川本さんは英文だったね。じゃあ、川本さん自身の名前に書き換えとくといいかもね。正規表現マッチで一発だから」

「でも、いいです」川本菊は、ちょっと意地悪な微笑を浮かべた。「私的には、今のままの状態のほうが気に入ってるんです。むしろ、先生が書かれたって言う痕跡がありありと残っているほうがいいな。だって」

マスターが無言でティーセットを持ってきた。二名子は手拭を取る。

「あれ、ミルクがない。ごめんなさい、店長！」

「いいです、私の、使ってください」

「いいの？」

「ミルク、入れない派なんです。――だって、さっきの続きですけど。私、今回の企画、悪いことしてるなって感じつつも、大歓迎なんです。ねえ、先生、私と先生のうち、騙されてるのはどっちだと思えますか？」

「騙されてる、と言え、私たち二人とも騙されてるし、私たち二人ともが騙している側であるとも言えるし。――どうして」

「お金は、私も先生も戴いてますよね。でも、お金のことじゃないんです。作家として、芸術家として、騙されてるのは、どっちだとお考えですか。先生が書かれた作品で、私がデビューするんです。私は自分の手を汚さなかった。私は、自分の作品を売らなかった」

「何で。人の作品の責任だけ取るのが、そんなに嬉しいの」

「私は先生みたいになりたかっただけなんです。先生の実態を、私の名前の下に、スリッ

プさせたかった。ほら。私は騙されてない。私がみんなを騙している」

「そんな莫迦な！　あなたも騙されてるんだよ。だって、玄田から依頼が来たんでしょ」

「玄田さんのことは忘れて、私の、意志と、慾求だけに焦点を据えて、状況を把握してみてください。玄田さんが私たちに優越しているのは、お金と、編輯プロダクションの社長という立場だけ。それが事態を見難くしているんです。多分これが小説だとしたら、私って、一番目立たない脇役ですよ。テレビ・アニメのキャラをパクって絡ませるような小説しか書けない、何の資格も持っていない自称小説家。惨めな妄想。でも、先生ほどの作家なら、分かるはず。私が何を考えているのか」

「私にだって分からないよ、本物の人間が考えてることなんて」

「分かっている癖に。現実だって、フィクションだって、中身は殆んど同じですよ。私は分からないな、外から私がどう見えているか。私は、物心附いた頃から、ほら、こんなキャラだったんです。不思議ちゃん」

「自分で不思議ちゃんって名乗る人はいないけどね。あんまり」

「友達がいないから、確かめようがないし。ねえ、先生的に、不思議ちゃん、ってどうですか」

「うーん」

「迷惑？」

「いや、迷惑ではないよ。キャラクタ系って言うのは、それはそれでありだから。現実世界でも」

「私がいなかったら、私以外に私みたいなやつが他にいたら、おかつくだろうな」

「自分がもう一人いたらそりゃやでしょう。私だって厭だ」

「本当ですか？」

「うん」二名子は首肯した。「仕事半分取られちゃうだろうしね」

「私みたいな、キュートな分身でも、慾しくない？」

「え」

私は二袋目のスナックを一人で開けた。テレビを見ると無償に虚しくなることがある。

私が脱ぎ捨てた「女優」の仮面が何処に行ったのか、少し胸が痛んだ。きっと今ごろは私と同じように、テレビの外の何処かを亡霊のように漂っているのに違いない。そして私の中のあの人にしても、此処から近い場所か、遠い場所か、いずれかで途方に暮れていることなのだろう。

土偶

おれは犯人じゃない。第一まだ形の定まっていないう孤独の中にいたおれは意識して感動的な物語を書きたいと思ったことなど一度もなかったはずなのだ。少なくともおれは主犯ではない。絶筆なり筆力なり筆圧なり戦筆なり、摺筆宣言なりで人を出し抜きたいと願望したことなんてない。おれは競争には参加していかない。確言できるのはしかしそこまでだ。おれが誰かの教唆で実行犯になった可能性は否定できない。しかし法廷にいないというだけの理由で有罪判決を下されては困る。おれにも陳述の権利があるはずだ。おれは事態の進行を把握せずに生きていたし、ことの真相についてときたら、今に至るまでほぼ何も知らないのである。

おれが何をしているか教えてやろう。明るい部屋でテレビを見ているんだ。おれの部屋は暗い部屋で、此処はマンション三階の明るい部屋。新人小説家の川本菊とベテラン・シナリオ・ライターの泉二名子の対談番組で、おれの目当ては泉二名子の方だった。もう一人は何者なのかよく知らない。おれは彼女が書いたドラマのファンだったのだ……。

「私、知ってるんですよ。先生、本当はもうご存知なんですよ。玄田さんが今日、こちらにお見えにならないこと。そのことを、先ほどから私に伝えようとなさって、口を噤んでおられた。お答えにならなくてよろしいんですよ。私が仕儀なく計りますから」やんわりと対談相手の女が微笑んだ。「虚構の新人賞だけ私に押し付けて、偽編輯長殺害容疑で起訴されるのが先生の方だなんて、狡いですよ。そっちも悠しいー」

「そんなこと。知らないよ、何で玄田さんが遅刻してるのかとか、私は。え、殺害。それで、菊さんは逮捕されたいんですか。偽の証言をしてまで。おかしいよ。私は信じられない」

「だ、か、ら。わざとやってるんですよ！ 全部、わざと、わざと、で通すのが、完全犯罪のジョーシキ」

そんな風に、昔の漫画みたいに、「なんちゃって」と嗤った。この女は昔の漫画だ。表面上もの静かだったから、気づかなかったけれど。この喫茶店と同じ。そうか、現代のオタク少女達の頭の中は、八〇年代のままか。それは大変だ。

「私が先生の犯罪の、絶対に解けない暗号になります。大丈夫。会社の公式資料には、私

の名前と私のスケジュールしか載ってないですから。えっと、殺害推定日時は先週の金曜日、場所は守衛室、と」

「見てたのか」

重そうな服装の女は、邪気なくコクリと頷いた。

「すべて首尾良く計らいますから。私に任せてください。警察機構の力関係は自白による罪状を疑うようには出来ていないんです」

「だってそれはあなたの小説の中の話で。捜査はするだろう。嘘を吐ききれの」

「大丈夫ですよ。守衛室には窓が二つあるでしょう。二項対立は対象の離散的な相似性を維持するには打ってつけなんですよ。離散的な曖昧性が増せば増すほど言語は美しくなる。警察での尋問や法廷での証言のことを考えると今からドキドキしてきます。大丈夫です。窓が二つあってそれより多くも少なくもないという事実への注意を強制的に持続させればいいんです。それだけで、事件全体の意味の體系が細部に互るまで完膚なきまでに粉砕されるんです。無理だって思いますか。それが出来るんだな。私は世界の真理を知っているから。この世界を統御する本当の規則の束。言語の意味はその使用の束の中にしか存在しない。あの計画はすでに完成されてるんです。つねに、すでに」

「計画って」

「天使の結婚ですよ。儀式なんです。先生、人間がかつて両性具有の球體だったって御存じですか」

「プラトンの『饗宴』に出てくるやつね。あの物語は私は最初、『夢判断』で読んだな」

「私は笠井潔の『薔薇の女』でした。一度読んだら忘れないですよ、ね、あれ」

「両性具有って言うのと、ボールみたいな人間のイメージね。でもあの球體って言うモチーフはプラトンの天文学というか、宇宙論の方から理解しなきゃいけないだろうけど。例えば『ティマイオス』には、似ているものは似ていないものよりも美しい、従って宇宙は自己自身に相似な形態、球體でなければならぬ。フロウレスな宇宙は外部を持たないから感覚器官も運動器官も必要なく、それに相応しい運動は同じ場所での回転であると神は考えた、とあるよ」

川本菊は頷いた。「つまり、人間にとって結婚とはその宇宙論的な完全性を夢見た行動ってことかな。でも『饗宴』だけ読んだときに何で特別あの物語が印象に残るかというところ、その球體の人間というイメージが大脳を思わせるからだと思うんです。左の脳は男性、右の脳は女性。脳は両性具有。従って、宇宙は一個の脳髓でなければならない」

「どうして」

「そう仮定するのが一番美しいからに決まってるじゃないですか。しかもそう仮定すれば、世界の全ての事物のみならず、全ての言語の意味とその文脈を決定することが可能になるんです。科学はいつでも仮定ですよ。一番効果的で美的な仮定が真理と呼ばれるんです。ところで、大脳の右半球と左半球との結婚の計画は完成されました。それが、私たちの存在する理由です」

「この世界が一個の脳髓だってことか。或は、この世界とは一個の脳髓のシナプス結合の配列が映し出す表象である。私たち一人一人も含め。それは科学でなく、川本さんの個人的な信念だね」

「信じるも信じないも聴き手次第なんです。私は信頼できる人に聞いたから」

「誰」

「エージェントのイチドウ君です。イチドウリョウ。私は長い間彼のペイシエントでした」

川本菊が帰った後、一人で「辻褄」に残った泉二名子は来たときに菊が読んでいた古い少年ジャンプの頁を何の気なしに捲ってみた。「ドラゴンボール」を描いていた鳥山明が疲れを訴え始めたあの時期の実録だ。思えば勢いだけじゃなくて物語作者として成熟した

パースペクティヴを持っていたのは鳥山明だけだったのではないだろうか。それだけに彼は、精神年齢が相当低かったと思われる当時のジャンプの編集部と折り合いをつけられずに苦しんだのだろう。そして巻頭は始まったばかりの頃の「シティハンター」だった。主人公のサエバリヨウを見ているうちに、二名子は川本菊が最後に出して帰ったイチドウリヨウと言う男性名を思い出した。そうだ、あの名前はサエバリヨウに似ていたようだ。さらに頁を捲ると、「ハイスクール奇面組」もその時期に連載されていた。——主人公はイチドウ。

——あの名前は、すると、川本菊が少年ジャンプから即興でっちあげた架空の人物だったのだろうか。そんな風に邪推し始めると二名子には、他の話も全て川本菊の虚言症に過ぎないように思えてくるのだった。

CMに変わっておれはテレビを切った。俟てよ、この二人もおれを犯罪者扱いにして批判してみたいだが。酷いな、女の論理ってやつだ。女が二人集まったときにその場にいる男を庇う女など聞いたことがない。男の論理といってもいい。同じことだ。おれはそういう意味で男であったことはこれまできっと断言できる。おれはゲイじゃない。そういう簡単な理窟で満足できるような男だと思われるのは困る。違う、おれは二丁目なんて行ったことがない。薔薇色の囚人服についての小説を読んだときは魅せられたがあれは作者が女でも参議院の速記係でも同様に感動的だっただろう。おれが男の論理を憎むのはおれが男性であるからであって、女性に生まれていたら女の論理を蔑視していただろう。女が女であることを望むことなど出来ない。おれは男のおれが嫌い。簡潔な代数学だ。もしくはユークリッド幾何学のマルバツ・ゲーム。性だけじゃない。法律についても同じ見識しかない。まず、それを禁じる条文がない場合がある。一度条文が書かれれば、それを破るか守るかの選言命題が派生する。答えは三だ。一十二。予め法律を知らない人間の罪を問うことは出来ない。法律にそう書いてある。誰も法律を読まない國にも犯罪が起こるのは何故だろう。兎に角おれは知らなかった。おまえはおれが知らなかったことを知らねばならない。それが刑を執行するものの義務だろう。話を聞けば分かる。

まず、年代記的な事実確認から行おう。今は二〇〇四年。かろうじて一九八六年にもおれは存在したが、日本語をまだ知らなかった、従って法律を読むことも物語を書くことも出来なかった。三段論法だ。アリストテレスだ。パウロでもいい、お望みなら。もしおまえが言うその物語が一九八六年のものとしたら、おれは関与しない。判るか、おれは関与していない。

人間が言葉を話すとき、選択肢は二つ、真実か虚偽だ。泉二名子先生は人間だ。人はいつか死ぬ。簡単だ。鉛筆を転がして決めよう。半か丁か。おれは嘘を言っていないと言っておこう。そうすればおまえは答えを間違える心配がない。次に二名子先生だ。彼女に初めて会ったときおれはまだシナリオを書いた経験がなかった。おれは嘘を言っていない。「これからシナリオ・ライターを目指すんですか」彼女は開口一番にそう言った。「グッド・タイミングね。じゃあ、物語作者の条件を教えて上げる。それは、第一に、おばさんを傷つけないことよ。言葉遣いに気を付けなさい」

彼女はすでに自分の年齢を意識してそんな発言が出来るくらいには熟していた。言っただろう、おれは嘘を吐いていない。今朝起きたとき顔を洗い忘れた。洗い損ねたと言った方がいい。おれは時間に追われている。物語を書き進めねばならないのだ。彼女は原宿の専門学校で講師をしていた。紅一点。背の低い色気のある女だった。おれはそんな彼女の綽名をミニマル・テクノと名附けることによって、今引用した叱咤を受けたのだった。おれは地図を片手に表参道口に出た。悪いが、竹の子族なんて見たことがない。櫛並木の右

側では改修工事が進んでいた。そこにかつて何があったのかわからない。重要なのはこれから何が出来るかだ、そうだろう。人生は短い。死んだらテレビから出て視聴者に戻るだけ。テレビの中に戻りたくなったら？ 簡単だ、テレビを消せばいい。消すだけいい。

あの日おれは受附で次期の入學案内の請求用紙を貰って帰った。彼女のドラマは好きだった。おれは肩書が慾しかった。本物の仕事じゃない、着脱可能な肩書が。それとあの日彼女に聞いた話が余りに印象的だったせいもあるかもしれない。受講料は思ったより安く、おれのバイト代だけで賄えそうだった。彼女に会いに行つたのは次のような事実を確認するためだった。

「悪いけど、私の言うことは全部嘘よ」と彼女は言った。「ノンフィクションって本当にあったことを書くものなんでしょう。私はプロのシナリオ・ライターで、シナリオはフィクションだから、当然よね。偽の偽は真。『華柄鏡面體』はシナリオが先に出来ていたの。小説版を書いたのも基本的には私だった。あれは本質的に私の作品よ。ついでに、玄田編輯長の死體という作品もね」

彼女は言った、「私は嘘を吐いている」と。信じるにしても信じないにしても、おれは間違えることになる。おれは嘘を吐いていない。

「法の執行者があるがままの世界を触知することは難しいでしょうね。人間の意志によって歪めることの出来ない事実なんて存在しない。意志とは嘘を吐くことのそれであり、法の前の平等とは自由意志を持つことなわけ。菊さんは罪を望み、私は望まなかった」

しかし彼女はおれの罪を望んだのではなかっただろうか。

「あ、あれ？ あの時点では、私はあなたのことを知らなかったから。あなたはいつか私の共犯者になるべきだわ——」

二名子先生が十八年前に死んだ許婚者がいたことを話してくれたのも同じ日であったと記憶する。許婚者は刑事で、警視庁捜査一課のキャリア組だった。二名子先生の親戚が刑事犯罪を起こし、警察手帳を保持したのであれば結婚は諦めねばならぬと上司に告げられて、彼は仕事よりも二名子先生との結婚を優先させた。暫く後に二人の間には女の子が出来たが、不慮の事故によって三つになる前に死んでしまった。結婚したばかりの先生の配偶者はその直後に失踪したらしい。そしてその実話が『華柄鏡面體』のメインのモチーフになっていると言う。「ね。ああいうメディア・ミックスの作品の原作者が誰かとかを問うのは愚かなんでしょうけど、私にはその権利を主張する理由があるわけ」

元許婚者の刑事の逸話がそのとき、おれの胸に強く印象附けられたのは嫉妬の裏返しであったと今なら告白できる。二名子先生はまるで十八年の時間の経過がなかったかのように、刑事を遠藤君と呼んだ。先生の網膜には今でも彼の姿が生き生きと現前しているのに違ひなかった。きっとそれが、先生がその後現在に至るまで二十年近く、シナリオ・ライターとして一線でフィクションを生み出し続けてきたという事態の背後に潜む意味であったのだろう。

先生の仕事部屋という誰もいない砂浜の月夜の地上界には今なお、風いだ鏡面のような海水の淵に三角座りで「遠藤君」が大きな円形の衛星を眺め、月下界から月上界へと空想の翼を広げているのに違ひなかった。毎晩のように、煙草と時々ワインを携えて二名子先生は仕事着のまま海と恋人に会いに来るのである。コルクのサンダルでガサガサと砂を踏んで背後から近付き、紺鼠のベロアのボレロを上から羽織った、黒にシアンの水玉を散らしたキャミソールと無造作に合わせたボトムのジーンズに湿った砂が貼りつくのも氣にしないで、恋人の背後に膝から崩れ落ちて肩を抱きすくめ、首筋に鼻を埋める。

「今日は手がかりが見附かった？ 事件は解決しそう？」

夜空に開いた光の穴に見入ったまま恋人は答える。「謎は深まるばかりだ。今夜も迷宮

入りだな」と、先生が期待していた通りに。

「ねえ、遠藤君。今の事件、永遠に解決しなければいいのにね」

恋人がコクリと頷いたのを先生はその喉の近くに押し当てた鼻梁と頬と唇で触知した。「あなたが今気づかなきゃいけないのは、男と女の間に正義なんて存在しないこと。あなたの許婚者のようなボヘミエンヌには犯罪者を検挙して市民の市民的な日常風景を保持するお仕事にあなたが打ち込むのは、苦痛になるの」

「しかし僕は刑事だ。刑事が僕の全部だ。彼女もよく知っているように」

「会話での言葉を信じちゃ駄目。彼女が書いているシナリオを読んだでしょう」

「虚構と現実の社会は違う」

「そうね。あなたはいつもそう言って」先生は腕の力を強めて、顔と胸を恋人の背中に擦り附けるのだった。「彼女を囚われの殻の中に追いやったのよ。十八年間」

月夜の砂浜。

先生は十八年間彼と離れて一人で生きてきた。

彼は遠くへ。

芸術は社会への最大のアンチテーゼだと言ったのは誰だったか。しかし此処は、先生が彼と別れた理由、彼の失踪を誘発し、先生を言葉だけの世界に密閉した何かについて語る場所ではない。それについて語り始めたら、長い本が一冊書けてしまうだろう。作者の死を持って未完成のうちに幕を閉じるしかないくらいに長い本が。

不意に訪れた静寂が地に退いて今まで鼓膜を領していた啜り泣く波音や海鳥の鳴き聲を浮き彫りにした。スローモーションで無言の先生が立ち上がり短く揃えた髪に顔を隠したまま膝頭の砂を払った。暫く砂を攫いながら周囲を歩き回り、何かを握りしめて帰ってきた。

「はい。これが私の十八年間」小指の爪くらの大きさしかない名前もない巻き貝の貝殻だった。それは先生の手で濡れて黒ずんだ砂の中に半分埋まっていた。

おれなら、芸術は継続する悪戯に過ぎないと言うだろう。社会から身を引いて殻の中に閉じ籠った子供達が自分の存在を証明してみたくなくなって気紛れにおれ達の記憶に刻みつける作品。記憶はおれ達と共にあるものではない。貝殻に閉じ込められた子供達が気紛れに悪戯心を得て送り附けてくるのだ。

手渡された貝を親指と人差指に挟んで振り返った遠藤の背後にはすでに、叢と灌木林の辺りまで月光に透かされた暗闇が広がり、それ以外には何もなかった。

「私の？」遠藤はハッとして呟き、自分がいつもの夢の中にいることを悟った。

遠藤は此処一ヶ月、毎晩のように同じ夢を見ていた。満月の砂浜。海面に碎ける白い線条を眺める遠藤に、十八年後の恋人、泉二名子が語りかける。最初からその女が二名子であると分かっているわけではない。何しろ我が恋人とはいえ、十八年の歳月の作用は閾値を越える。夢の中で会話を交わすうちに、何となくそうに違いないという印象を得るようになってきたのである。夢がそう謂うものであるように。それはどの夜のことであったろう。

夢の時間や空間の記憶がいつも曖昧なものであるように、遠藤が問わず語り自身の上話を語り始めたのか、二名子が事件の進展を尋ねたのが先か定かではない。だが彼女が自分の職務と私生活に起こった出来事を比較的よく知っているのを遠藤は知っていた。

あるとき彼はその海岸で語ったことがあるように思う、「一番大切なのは綺麗なものを美しいと感じることなんだ。それ以外の感受性は本来なくても生きていけるし、極力持たない方がいいはず」

「美しいものは永続しないわよ。彼女も」と、その夜は隣に並んで三角座りで海水を眺めていた女が応じた。

「未来は思考できないものだと思はう。少なくとも現在より悪くなることはないだろう」
「今はどん底なの」

「二名子の親戚にあんな奴がいなければ。それに仕事も。あれはハイジャックでも無差別テロでもない、ただの時代遅れな内ゲバ事件だ。四ツ谷署だけで解決する能力があるし、その方が効率的で経済的でもあったはずなのに、犯人が通信手段に最新のパソコン通信を使っているって言うだけで、警視庁のキャリア組刑事がお出ましさ。奴らが来れば僕等はただの提灯持ち、運転手兼案内係で、犯人が拳がっても出世するのは奴らだけ。俺だって警察学校で無線の講習を受けたし、精密機械の知識も奴らと大して変わらないはずなんだ」

「私は、機械は苦手ですけどね。女だから」

「死んだ母がよく言っていた、幸せを感じるのには眠りにつく瞬間だけだって。その言葉の意味が分かる。毎晩同じ夢を見るなんてちょっと気持ち悪いけど、夢の女はいつも、二名子に聞かせたら負担を懸けてしまいそうな愚痴や弱音を聞いてくれる」

「今も、その夢の中にいるんじゃないかって。――じゃあ、夢の女って言うのは私のことね」
と言って女は頬を緩ませた。「ところであなたの二名子ちゃんにはもう、辞職することを打ち明けたんだっけ。確か、神田川を見下ろすあの並木道で」

遠藤は頷いた。

「ああ。昨日の夕暮れだった。でも何故知ってるんだろう、その、神田川沿いだったって」
「あなたは彼女の好物であるモンブランを持って行ったわね」

「そうだ。見たのか。――いや、そんなわけがない」

怪訝そうな遠藤に答える女はすでに嗤っていなかった。「私が夢の女だからじゃないかしら。正確には、夢じゃなくて、未来の女なんだけど、そういう細部は気にしないことね。夢も未来も、手が届かないものであるのは同じ。私は二十一世紀から来たの。いや、あなたがこっちに来ているとも言えるし、そのどちらでもないとも言えるし、どちらでもあるとも言える」

「未来」と遠藤は、悲しみを噛みしめたような表情で月光が銀波になって碎ける大洋の表面を望む女に応えた。「二十一世紀ってどんな感じだ。労働は全部ロボットがやるようになって、人間は毎日が日曜日なんじゃないかな。動物園に遺伝子操作で生き返った恐竜がいるんだろ。新婚旅行のトップは月か、火星か、どっちだ。タイム・マシンが出来てるか、なんて聞いたら嗤われるんだろうな。四次元ポケットも、どこでもドアも、あんなのはフィクションだ、二十一世紀でも実現しないだろう。でもテレビは三次元になってるんじゃないかな」

「月面新婚旅行も労働の機械化も実現するのは人類の滅亡か太陽の超新星爆発より先のことになりそう、って言うのが私たちの常識よ。二十年後の日本人がどう考えているかは分からないけどね。未来は時代と共に変わるものみたいだから。ホログラムの三次元テレビか。テレビは視聴率競争とかのせいで活力を失ってしまったわ。ニュースのやらせとか、バラエティのマンネリズム。誰も熱中して見てなんていない。NHKは今にも倒産しそう。でもパソコン通信の一種がテレビみたいに流行ってるわよ。タイム・バーナーズIIリーって言う物理学者がヨーロッパで、HTTPと呼ばれる、状態を保持しないデータの転送用プロトコルを作ったね。状態を保持しないって言うのは、例えば、あなたから私への問いかけと、それに対する私の答えの間に基本的な関連性を認めない、具體的には特別な係数をかけないって言うことね。私たちの時代にも思想なんて呼べるものがあるとするれば、その無状態性ってやつがそれ。HTTP上の個とは、無重力の無抵抗状態で回転する捻子のようなものの。みんなバラバラになってしまった」

「パソコン通信？ あんなマニアックなものが。ところで機械は苦手って言わなかったっけ」

「苦手よ。コンピュータのこととか、よく分かんない」

「でも面白そうだな、二十一世紀って。行ってみたい」

「本当に。月面旅行もホログラムもなしだよ」

「その、H T T Pをやってみたいんだ」と遠藤は力強く頷いた。「そこがどんなに退屈な未来でも、未来人がそのことを恥ずかしがる必要はないよ、未来は未来なんだから。そうだ、俺たちは——俺と二名子はその後どうなるんだ。結婚して、家を建てて。警察を辞職した後、俺はちゃんと定職に就いてるんだろうか」

女の體が小刻みに震えた。夕風がサンダルの爪先を冷却していた。遠藤が自分の上着を取ってその肩に掛けると、彼女はその膝に凭れ掛かって眼を閉じた。「足が冷たい。でも温かい」

渚の音調に、そのとりわけ高周波数の音域に時折掻き消される小聲で、独り言のように女は話すのだった。「二人の間には女の赤ちゃんが産まれる。二人はその愛の結晶に高音と名を付ける。コウオンって書いて、タカネね。此処までがいいお話。ハッピーエンドがいいなら、此処で私を寝かし付けて」女の聲が掠れる。

「続きが、聞きたい」と、遠藤が言った。

「本当にいいの。未来は薔薇色の夢の中にあるからこそ未来なんだよ。もし未来が過去のようになったら、完全に予測されてしまったら、あなたの存在理由そのものが失われてしまう。いいのね。私は選択肢を与えたからね」女の一語々が、潮の雑音から立ち上がるように遠藤の耳に届く。きつと聴覚が潮の音に適合したのだろう。「あなたたちの——私たちの赤ちゃんは生後二年いなくなるの。消えて、壊れて。頭から大きなテレビが落ちてきて。タカネはテレビが好きな子だった。あなたは警察に辞表を出した後、単独で捜査を続けると言い張って日雇いの肉體労働をしていたし、私は女優の仕事の他に雑貨屋の店員をやっていた。余暇はなるべく、初めて書くシナリオの執筆作業に回したかった。タカネはテレビの前に座らせておけば何時間も泣かなかったのよ。両親に責任はないって、保健所の方も。ただ、テレビ台が少し高過ぎたかも知れない、離れて見るように習慣附けるべきだったかもしれないって。でも、生活習慣とか躰とかはまだ少し先のことだって思ってたから、私」遠藤は無言で聞いている。「お互い忙しかったんだよ。忙しくて、寝る場所も別々だったところにあんなことが起こったものだから、私もついすっかりノイローゼな人かにもなっちゃったわけだ」女は淡々と語り続ける。「残酷な話しちゃってごめんね。だってあなたが聞きたいって言うから。その後ね、あなたが今捜査している事件の首謀者をあなたは割出すの」

「これは夢だ」

「どうして夢だって言い切れるの、夢じゃないかもしれないのに。そっちが夢でこっちが現実かもしれないのに。夢は夢であることに甘んじているわけじゃない、つねにそういう危うい譲歩が附いて始めて、夢は夢でいられるの。それで事件の首謀者をあなたは射殺しちゃうの。私が體調を崩したせいであなとも疲れてたのかしら。それとも、ノイローゼは私だけじゃなかったのかもしれないね」

「その後は」

「知らない。幸い籍も入れてなかったし、私が結婚したいと思ったのは将来の生活を安定させてくれそうな警察官よ。無職の殺人犯じゃなかったわ。そんな人生の有為転変を込めて書いたシナリオは大ヒット、舞台女優としてはそろそろ糖の立つ年頃だった私は見事にその後裏方に転身してヒット・メーカーとして今に至るわけ。どう、聞いてよかったこの話」

水平線の右半分にびったり重なった防波堤の先端で赤い信号灯が回転している。ゆっくりと。

「あの頃に帰るなんて絶対厭だわ。思い出しただけでも涙が止まらない。あなたも帰りたくなかったんじゃない」

「でも僕は帰らなきゃいけない。これがもし正夢だとしたら、あなたが今語った運命の中に。眼が醒めたら僕は四ツ谷署の寄宿室か、俺か二名子かの部屋の、布団の中だ」

「信じられない。私にとってはそっちが、あなたの1984年の方が夢の中なのに。いっそのこと、そっちの夢から覚めちゃうって言うのはどう、こっちじゃなくて。タイム・マシンみたいだ」

「現実世界は一つしかないから現実世界じゃないのか。僕は一人しかいないから僕じゃないのか。第一、僕は二十一世紀に附いていけるだろうか。言葉遣いとか、髪型とか」

「そういう発想自體が八〇年代なんだな。さっき言ったでしょ、私達は無状態的に生きてるの。六〇年代も八〇年代もつい昨日のことも、古いといえど古いし、古いと指摘するところがむしろ古い。こっちに來れば、記憶が全部入れ替わるから大丈夫だよ、慣れれば。此処で普通に育った二十八歳になるの」

「そっちでも、また刑事になれるんだろうか。二名子は」

「彼女なんて置いて來ればいいじゃない。女の子一人のために四ツ谷署に辞表を出すのなんて辞めて。そうだよ、そんなの、若気の至りってヤツだよ自分でも分かってんでしょ。じゃあ、こうしましょう。あなたはこっちでは警視庁のキャリア刑事です。配属はハイテク犯罪総合対策センターの、捜査課。あなたがトップ。だから彼女との結婚も辞職なんてしなくたって捻伏せられるはずよ、内縁とかって形で。私たちの時代にはね、そういうの結構自由なの、入籍とか、未婚の母とか。ただ、その自由を望む女性はあなたの時代と比べてずっと少なくなってるみたいだけど。何でかな」

「ハイテク犯罪、総合対策センター？」

「あ、それはね、まだ知らなくていい。ミレニアムの年に設立された新品だけど、ちゃんとした警視庁の所属だから。あなたの例のパソコン通信みたいなのが、犯罪に出てきたら、全国何処の所轄にも駆けつけてヤマを横取り出來ちゃうわけ。上から命令で、パーツとね。だから警視庁なんだけど、何しろセンモンテキな分野だから、センモンテキなデータを傘に着て警察庁とか公安にも幅を効かせていたり、そういう所属。どうよ。そこであなたは今、『オタク連続殺人事件』という大きなヤマを一人で扱っているの」

「おたく？」

「おたくじゃなくて、オタク。まあ、ゆってしまえば内ゲバみたいなものかな」

「おたくって、漫画とかSFのちょっと行き過ぎたマニアのことだろ」

「それが名祖だけど、その後政治思想的というか、文化社会學的な發展を見せたんだ。今の日本で圧力団體と言えるのは彼らくらいのものじゃないかな」

「連合赤軍が善意と理想の果てに行き着いた山岳ベースみたいなものかな。何時の時代も、文科系の學生のやることは裏目に出てばかりだ。そんなことより」と遠藤が尋ねる。「そこで、僕は幸せに暮らして行けるんだろうか」

「未來のことは私にも判んないわね。月並だけど、自分で切り開いていくしかないってことかしら」

「一日、考えさせて貰えませんか」

「じゃあ、待ち合わせね。明日、今日と同じ時間に、大江戸線、つてのはそうか、今の都知事が作ったんだ、都営なんか号線のね、都庁前駅で俟ってるから。後で地図メール送るから見といて。じゃあね」

上着を返し、背中を叩いて立ち去ろうとする女を遠藤が呼び止めた。「都庁前に駅なんてないですよ。えっと、丸の内ですよね」

「は。丸ノ内線はそもそも新宿は通ってないよ。そうか、でも、都庁前駅を作るのも確か今の都知事だからあなたは知らないはずだね。JRの、あれ、国鉄でしたっけ、兎に角山手線とかの新宿駅の近くだから歩いて行けよって言う距離なんだけど、新宿の人混みからじゃ多分辿り着けないと思う。従って、営団丸ノ内線の西新宿駅の方からエスカレーターで来るといい。あ、エスカレーターはどういうやつか知ってるよね。うん。階段みたいなのが自動で動くの。慣れてないと逆方向に乗って転んだり全速力でダッシュしなきゃいけなくなるやつ。じゃあね」

女が最後にそう言い残した瞬間に潮騒と浜の香りが掻き消えて、遠藤は四畳半の下宿で煎餅布団に包まれていた。天井の木目に見覚えがある。舞台女優をやっている恋人の二名子の寮だった。體の右半分が熱を持っているのは、一晚そっちの腕が、あっちを向いて眠る恋人の背中に触れていたからだだった。遠藤は後ろからその黒い髪を撫で、上體を起こしてスリーピング・ビューティの唇に唇を重ねた。朝だ。朝ということは、また「窓」からフェンスを振降りて脱出しなければならない。この寮は夜間外出届け出制なのだが、届け出がないときには早々と守衛さんが帰宅してしまつたため、予め連絡を取っておけば中から二名子に開けて貰える。鍵は共同の、謂わゆる対象鍵だった。朝になるとまた守衛さんが帰って来るので、一日この部屋で隠れて無断欠勤したくなければ泥棒よろしく「窓」から脱出するしかないわけである。

二名子が先週買って寮の黒電話と着け替えたばかりのファックスが電話台の上で動作している。遠藤は恋人を起こさないようにそつと煎餅掛け布団を払い除けて、ファックスの前に立った。

遠藤クンへ、先ほどの件で、私です。

記憶に間違いがなければ私、たしか東京メトロ丸ノ内線西新宿って言ったケド、正確には帝都高速度交通営団、荻窪線です。その駅に辿り着くまでは私の知ったことじゃないノデ適当に地下鉄に乗ってきてください。丸ノ内線で行けると思うよ、正直。西新宿なんて運賃表には載ってないと思うけど、駅名から何処にあるかは想像つくよね。新宿と中野坂上の間です。大目に切符買って来てもいいし、こっちに来ちゃえば乗り越し精算とかも簡単だから。そっちの地下鉄はまだ車掌さんがいたりするのかな、どうでもいいけど。

駅を出た後は右手、光の見える方に進んでください。

迷いそうだったらこの地図を持ってきてください。以上。

(地図省略)

それで遠藤が今いる世界が夢の中か夢の中の夢の中であることが確定となったわけであった。二名子を起こさないように煎餅敷布団の下から昨日の背広とワイシャツを引っ張りだし、身に着けてポケットに破り取ったファックス用紙を捻じ込んだ。

窓枠に足を掛けていざ四ツ谷署へとフェンスに飛び移らん前に、遠藤は二名子の寝顔をもう一度見詰めた。もう一度キスしたくなつたが止めて部屋を出た。今夜会うときまで取っておきたくなるような寝顔だったからだ。痛いと言ふなかれ、恋愛関係なら誰でもそんな風に思ったことがあるうし、その上遠藤の恋人のは、普段買ひものに行くときすら完璧にメイクしている女優の取って置きすっぴん寝顔なんだから。

二十時半、四ツ谷の待ち合わせ場所に指定した電話ボックスの前には、昔の洋服を着て

背中に巨大なリュックサックを背負った二名子が立っていた。遠藤は、出会った頃の、まだ十代の彼女がそこで手を降っているんだと信じた。近附くに連れて、現在、1984年の外灯の下に、今の二名子が浮かびあがる。思えばあれからずっと二名子と生きて来たんだ。遠藤は警察学校を見事卒業して、夢だった刑事になった。地方回りのアングラ劇団から出発して、二名子は三度劇団を移籍した。

「じゃん。未来に連れてってくれるって言うもんだから」

「それ、昔の服じゃん。そんな幅の広いジーンパン、女の子は今時穿いてないよ。それにそのリュックは。何を持ってきたの」

「未来には過去がリバイバルしてるのよ。きっと」と言って二名子は頷いた。「八〇年代がダサくなって、あたしたちの七〇年代が逆にナウくなってるとのよ」遠藤は心なしか彼女がはしゃいでいるように感じた。いつも通りの快活な彼女も遠藤と同じように、現在と現実の自分に対してフラストレーションを持っていたのだろうか。それは遠藤にも分からなかった。七〇年代に附けられた所有代名詞も、特に気にならなかった。二人で手を繋いで地下鉄に乗った。運賃表に西新宿なんて駅はなかったが、新宿も中野坂上も同じ値段だったからそれを買った。

四ツ谷三丁目も新宿御苑前も変わらない風景だった。もしかすると新宿御苑前の方はいつもより汚れていたかもしれない。電灯が古くなって点滅していたかもしれない。だがそれも駅の前を通り過ぎるほんの数秒の出来事だった。

新宿駅で満員の乗客がホームに吐き出され、ついで聞き慣れない嫌に爽やかなチャイムに乗って電子的に合成された構内放送が聞こえてくると、地下鉄駅特有の生温い風を伴って新しい乗客が乗ってきた。予測していたよりずっと多いサラリーマンのスーツは変わらなかったが、紛れ込んだ高校生か大学生くらいの子たちのグループは、穴の空いたジーンズやカナビス柄のバッグを附けた鞆など。

「ほら、七〇年代だ」と遠藤の頭を引っ張って耳許に囁いた二名子ではあったが、彼らの髪の色は気になってはいた。顔は相変わらずの水墨画みたいな日本人顔なのに、髪の毛だけ妙にカラフルだ。髪染の技術が進化している。「あの頭はどうなんだろう」と、遠藤に囁く二名子自身の記憶の回路がタイム・トリップして、「スーパーサイヤ人みたいだよ。あ、遊戯王もいる」と知らないはずのボキャブラリを比喻に使い始めた頃には、営団地下鉄、東京メトロは赤地に白帯からステンレス・ボディに赤帯のシンブルかつ機能的なO2型車両に変わり、ないはずのある駅、西新宿、東京医大病院前到着のアナウンスが入ったのだった。握った切符の裏が焦茶色に変化していた。

「何だか僕たち、昔の日本人みたいじゃないか」ファックスに書いてあった通り自動改札を出て右手の光の方向に進みつつ、遠藤はそう言った。もしかしたら、左の闇の方向に進めば、その未来か夢か夢の中の夢の中への旅行は振り出しに戻せるのかもしれないと脳裏を過りもするのだが、戻ったところでまた旅立ってしまうのは明らかでもあるのだった。

あるいは遠藤が殺人を犯すときに。あるいは、娘が死んで妻が精神を病むときに。あるいは、明日、飲物の味だとかカラスの鳴き聲だとかいった日常茶飯の理由で口論したときに。

「どうして。私はもう脳の随まで二十一世紀って気がするけど」

「こうしてさ、男の僕が自分が男であるということのみを根拠に一方的に手を引いて、君に行く先の相談すらしないで」

「そんな男性もいるんじゃない。絶滅危惧種になってるだろうけれど」二名子は妙に深刻げに聲を潜めるのだった。「きつというはずよ。私やあなた以外にも、こうして在りがちなSF小説のプロットに騙されて八〇年代からうっかり迷い込んで来ている人が。帰りがなくなったら、ウェルズに騙されたってハインラインに泣きつけばいいんじゃない。その次は、ハインラインに騙されたってディックに泣きつけばいいんじゃない。その次以降はきつ

と日本の作家に頼めるかも。何なら日本らしく、小説はやめて漫画家さんに頼みましょうか」

プラスチック製のオール・デコみたいな変な柱廊の前に硝子窓が並んでいるところで、二人は右に降りる階段に進んだ。

「あっちにもいっぱいエスカレーター、あったわよ」と、二名子。二人の眼下には長く延びる一直線の地下通路が広がっていた。天井の高さと白い平凡な蛍光灯の灯りが寒々しい。右側に延々と動く歩道が設置されているが、鎖で閉ざされていて動いていない。「あれ、乗りたかったな」

「万博に行ったとき乗ったじゃないか」

「万博って、つくば博のこと。覚えてないわ、二十年前のことじゃない」

「僕はよく覚えてるよ。去年のことみたいに」

長い動く歩道がさらに二つあって、その次に出会った曲り角を九十度右に曲がると、今度は左に向かって洞窟みたいな通路が延びていた。黒い円筒形の御影石の柱が等間隔に並び、天井からUFOが出現したような変な円形の鏡面の下に短い白い御影石の円柱が十二本、それもオール・デコ調の黒い正方形の中に並んでいる横を通り過ぎて左側の細い通路を進む。その辺りまで来ると人は殆んどいなくて、本当に人工の洞窟を領する静寂の中を歩いているようだった。設計者は此処に人が集まらないところまで予測していたのだろう。右手に再度開けた空間には、斜方十二面體に一八十度の捻りを加えたような、岩石を模したオブジェがあったが、それは遠くから見ると本当に白いポリ袋を投げ込まれて垢捨て場と化した洞窟のような慎ましさだった。二名子は、慎ましい芸術作品とはかつては考えられなかった発想だと感じる。地底に向かって単純下降に坂をジワジワと降りて行くような、胸を締め付けられるような寂寥感は何だろう。二名子は何処に向かおうとしているのだろう。

人工の洞窟は突き当たって、再び左右に通路が開いた。遠藤はまた右に進んだ。

「ねえ、あなたが言ってたエスカレーターってこれのことかな。何か、短いね」踊り場を挟んで八段の階段が二つ連結した短い上りのエスカレーターに乗り込んでそう言った。上った先には朱色に塗られた太い円筒形の柱が鈍く輝いていた。「いや、もう一つ向こうだ」と遠藤。

そこが地下ではなく海底だったとしたら海底山脈の峠にあたるような高みからまた、正面に下降の階段が口を開いていた。相変わらず、誰もいない。誰も利用していない地下通路がこんなに美々しく広々としていることが二名子には嬉しかった。「だって、コレ、私たちが飛び越した時期の都税で造ったんでしょ」とはしゃぐ二名子に遠藤は右手を示した。再び、右だったのである。急な階段とそれに附設された細いエスカレーターの、同形的なシグモイダルの整然とした反復が霞んで見えなくなるまで下に延びているようであったのは所々の踊り場が障害物になって下まで見通せなかったからで、それくらい、白い階段状態で一定の間隔で蛍光灯が取り付けられた天井は低いのだった。「此処だ」遠藤が言った。

「この下で俟ってるって」

「誰が」

「多分、二名子、君だと思うんだ。ただ、夢の中だったから記憶の輪郭がぼやけていて」「兎に角行きましょう」と、今度は二名子が先に立って遠藤の手を引き、エスカレーターに足を乗せ、灰色の欄に掴まった。

幻聴でよく耳にするあの電話の呼び出し音に似た、ポーン、ポーンという視覚障害者用の発信音が規則的だった。足元のモーター音も規則的だった。欄の下を滑り抜けていくステンレスの側板の繋ぎ目も規則的だった。頭上を流れて行く天井も、同じ意匠で照明が取り付けられた壁も。ただ、欄の傷や手垢の位置と足元の黄色い線に隈取られた縦に鋼鉄が

並んだステップだけが安定して、二人をユニバーサルな大地へと関連付けていた。

「ねえ、エスカレーターの階段って何でこんな剣山みたいな形してるんだろぅね」と二名子が言う。

「歯車に歯があるのと同じ理由じゃないか」

「でも、靴に踏まれるとこまで全面的に歯である必要はないじゃない」

「うーん。その方が速そうだからじゃないか。何となく」

「それが刑事で二十八歳で私の彼氏である遠藤樫哉先生の答えなのでしょぅか」

「耐久性と軽量性を追求したらこうなったんじゃないか。判んないけど」

「にやる」二名子はサンダルで踵で、コンコンとステップを叩いた。「ねえねえ、私たちが下降してるのかな、それとも地球が上昇してるのかな。ほら」二名子は階段の方を上を向いて佇んでいる少年を指さした。「あの子が持っているあの赤い風船、空に浮かんで行ってるみたいに見えない。あの子を連れて、天高く。坊や、バイバイ」

「錯覚だよ」

「そうかしら。その根拠は」

「根拠。階段は石で出来てて、エスカレーターより重そうだからかな」

「まあ、そんなとこよね。相対的な前提に過ぎない。自分の體とか足の位置とかを原点にした方が、私はすっきりするな。それも相対的な仮定だけだね。でも、ほらよく見て。私たちの足が乗っているこのしっかりした鉄の部分や欄と、ステンレスの側板と。率直に言って動いているのはどっち」

「僕たちの方だよ」

「嘘だぁ」

踊り場で一度エスカレーターが途切れ、二人は二つ目のエスカレーターに乗り換えた。

今度はエスカレーターが二本に増えて、縦に並行している。ところが両方下りなのである。カスケードのように流れ落ちるステップの移動速度を目算すると、右手の方が左手の倍の速度で降りているらしかった。二名子は遠藤の手を引き、左手の階段に近い方に乗った。

「今度はどう。私たちが止まっかけていて階段が上昇して行き、こっちの右のエスカレーターはそれと同じ速度で下降して行く。ね」と言って二名子は階段に立っていた女の子を指さした。その子は青い風船を持っている。その風船と摺れ違う瞬間、右手を黄色い風船を持った男の子が二人の倍の速度で滑り落ちて行った。「さあ、青の女の子と、黄色の男の子と、それから私たち。止まっかけているのは誰。三者の運動は飽くまでも相対的なものなんだから、重心の極限に一番近い位置を選ぶのがこの場合適当ね。誰」

「重心にるのは僕たちだ。僕たちを原点にとれば、世界は完全に対称になる。だが完全なその対称性が僕に不安を引き起こすとしたら何故だろう」

「それは——」と二名子が答える。「コペルニクスがエカントを排除する必要を感じたのそれと同じ不安じゃないかしら。私たちが原点になれば——私たちが（神の）視点になれば私たちの眼に見える範囲のもの、現象世界、生活世界なら効率よく認識することが出来る。だけどそれは眼に見えないもの、不在の他者、私たちが予感することしか出来ない何かを切り捨てる態度なのではないかってこと。不在のより大きなものに場所を残しておくために私たちは敢えて現象世界の秩序に対称性の破れを温存しておかなければならないのではないかと思うの」

「表面的な規則の裏側を調べること、か。君は今、神として語っていたね。一登場人物の二名子としてではなく」と遠藤が冷静に指摘した。

その時、右のエスカレーターをまた奇抜な銀銭花柄のエスカルゴ・スカートをはためかせた女が下りて行った。「あの人を原点にしましょぅよ」と、二名子。「何か、可愛そう

だけど。あの子を勝手に原点にして、そこからの相対位置で私たちの状態遷移を推測するの。名前があった方がいいかな。神様にする。それとも、太陽。ほら、耳小骨が無重力みたいな感じになって、足元がグラグラしてきた。当然よね。私たちは上りのエスカレーターに下向きに乗ってるんだから」と言って、二名子は闌の下側の側板を指さす。それは何時の間にか下方に向かって一定のリズムで流れているのだった。二人は百八十度回転して、上に體の向きを換えた。

「ね、いいね。下りのエスカレーターより、上りのエスカレーターの方が。明るい気持ちになるんだもん。私たちは明るい未来に向かっていている」二名子がそう言った。「ところで未来に向かって生きて行くとき、一番しちやいけないのは何だと思う」

「絶望、かな」と答える遠藤の胸も、何故かさっき下降していたときよりずっと高鳴っているのだった。明るい未来の予感に。

「私は、子供心を忘れること、だと思ふ」と二名子が言った。

「金慾の追求」と遠藤が言った。

「お年寄の介護の拒否」と二名子が言った。

「泥酔」と遠藤が言った。

「それを禁止したら明るい未来の人口がゼロになっちゃうよ」と二名子が言った。

「無銭飲食」と遠藤が言った。

「寝てる恋人の悪口を言う」と二名子が言った。

「二股」と遠藤が言った。

「寝てる恋人にお別れのキスをしない」と二名子が言った。

「寝てるフリをしてる恋人を触りまくる」と遠藤が言った。

「屍姦」と二名子が言った。

踊り場で一度エスカレーターが途切れ、二人は三つ目のエスカレーターに乗り換えた。

繰り返すが、犯人はおれじゃない。おれは嘘を吐いていない。おれがエスカレーターの描寫を創作したなんて、冗談言っちゃいけない。確かに今の部分には女性問題への言及があるが、それはおれの性同一性障害とはなんら関係がない。おれは女性だけに特別な関心を寄せたことはかつてないんだ。ベロアの衣料業者に知合いもない。勿論、松田聖子の回し者でもない。これからおれはダンス・パーティーに附いて語るはずだが、特定のDJやましてダンス・ミュージック一般を諸氏に勧めているわけではないから安心して慾しい。兎に角おれは無罪なんだ。

おれは二名子先生の専門學校で貰ってきた入學案内書の請求用紙に住所と略歴を記入した。學歴にはおれも名前を聞いたことがない短期大學を記入する。実際にはこの短大は女子大らしいのだが、年齢的に短大卒だとちょうどいいし、高校を出た後にブラブラしていた期間をカムフラージュするのにちょうどいいのだ。おれは高卒だった。机の袖斗には偽の履歷書のテンプレートが入っている。

この間バイト先の上司と喧嘩してからおれは次の仕事を探していた。東京に出てきてからずっとオープン系のプログラマをやっている。最初はスーツを着て会社に出勤していたが、内職と謂うのだろうか、自宅作業のS O H Oで稼ぐ道があることが分かって、謂わゆるベンチャー企業を二、三社掛持ちでやるようになった。コンピュータ関係の仕事というのは集まって来る人間にしても仕事の内容にしても、道路工事か、よく言って差物細工と同列である。現代社会の最末端の労働力なのだ。そういう労働者に毎朝顔を洗ってスーツを着て出勤させるなんてどうかしている。渋谷辺りにオフィスを構えるベンチャー企業にしても、知的水準の低さで言えば変わらない。道路工事の日雇い労働者が集まって何とか

組とか名乗っている状態だと思えばいい。勿論、コンピュータを発明した人やハードウェアを設計している人、プログラミング言語や開発環境を設計している人はそれなりに頭がいいわけだが、そのコンピュータを使ってちまちまウェブ・サイトのCGIだとか会計ソフトだとかを組んでいる輩も同様に頭がいいと思ったら、おまえはパラノイアだ。SE業者のSEや営業氏にコンピュータを上回る使用価値があるとすれば、からかうと楽しめることくらいだろう。機械は知的劣等感を持ってもしなければ嫉妬心に駆られて怒り出すような芸当も出来ない。勿論プログラマの中にはまともに大卒でまかり間違ってもそんな世界に飛び込んできた奴らもいるが、頭の悪さは高卒のおれとどっこいだと思う。そもそも學歷やテストの点数で頭のよさが計れると思うような経営者達の怠慢がなくならない限りこの国は不況を脱出することなどないだろう。金は金のことばかり考えてるやつらには溜らない。点数や偏差値のチェックに時間を使ってるようなやつらはその競争には勝てない。おれが言ってもリァリティないかも知れないけど。例えば一昨日行ったネットカフェの面接は酷かった。店長はもとアセンブリのプログラマで、プログラマに在りがちの頭と同じくらい目附の悪い中国人だった。おれは基本的に、韓国人や日本人より中国人の方を尊敬する。国の歴史が古いからだ。だがそいつばかりは例外だった。そいつは中国語訛りを自分の言葉遣いから除去する技術を持っていた。それで、自分が中国人であることも隠せているつもりなのだろうが、駝鳥の隠れかただ。おれは予め店長の名前を調べてあったから、彼が中国人であることは知っていたのだ。その話はまあいい。おれは人種差別に加担するつもりはない。今の話は飽く迄自分のアイデンティティを隠しているやつのだ。おれはいつもの偽履歴書を手渡した。おれはネットカフェ業界の相場や集客状態、おもな客層についての知識を問われるつもりだったのだが、そいつは三十分時間一杯、おれのアゴ鬚について愚痴々と嫌味を言ったのだ。

「この店は、ホテルみたいにしたい。コンビニみたいなヨソを向いてありがとうございましてーとかいわれても嬉しくない。ホテルやファミリー・レストランみたいなサービスがしたい。だから鬚は駄目だ」

おれは吹き出すのをこらえるのに懸命だった。何処からファミリー・レストランが出てきたのだろう。きつと、このおっさんがまともに人間として歓待されたのが、ビジネスホテルとファミリー・レストランだけだったのだろう。これまで四十年か五十年日本社会で生きてきて。哀れな男だ。ソーブランドでしかセックスしたことがない人間がソーブ嬢がこの世に存在する最高の女だと思うのに近い。マニユアル社会はそういう勘違いを生む。しかもネットカフェの店員がジョナサンやデニーズみたいな応対をしたら気持ち悪いではないか。おれならそんな肩の凝るネットカフェには二度と行かないだろう。こういう小規模な店で常連を掴もうと思ったら、まず従業員は全員2ちゃんねる用語に堪能でなければならぬし、ゲームの流行や漫画の歴史についても博識であるべきだ。毎日鬚を剃って整髪料やアイロンを使っているような店員がいる店にオタクは寄りつかない。

「アルター・エゴって知ってます？」とはおれに話しかけた。

青山大學の並びにある風が吹けば倒れそうな平べったい古びたビルが一番奥が「蜂」という名前のクラブだった。パーティに来るのは久し振りだった。まだ始まったばかりでフロアには誰もいない。フロアと言ってもスツールを蹴飛ばさずに踊り得るスペースは殆んどなく、必然的に此処でのイヴェントは體を揺する程度のまったりムードが主導的になる。おれたちは二人で大學生くらいの普段着の無口な女がバーテンのバーに座っていた。

「ろいのこと？」

「アーティスト。今掛かってるやつ」

ヒップホップなら二、三人挙げられるが、おれはテクノの作曲家の名前など一人も知らなかった。

「アルテル・エゴ——alter ego、——って直訳すると『異なる我』だけど、普通、親友のことを指す。今此処にある独りの私でもなく、抽象された私一般でもない、他の私。ピタゴラス曰く、友とはもう一人の私のようなものである。220と284がそうであるように。でもそこで意味が固定してるわけじゃなくて、ブルーストは自分と同名の一人称の語り手をアルテル・エゴって呼んでいる。そう言えばアルテルはオルタナ・ロックのオルタナティブと同語源だ」

「ふうん」

ヌメツとした絹のようなテクスチャを持った今風のハウスだった。昔のハウスを知ってるわけじゃないけど。

「最近どうっすか。世間の冷たさが身に浸みましたか。そうっすか」^⑧は一方的に、一人で会話を進める。半年前に彼らのパーティに來たときには、^⑨がいた。^⑩は通常ろい君とかろいさんとかろいとか呼ばれていて、彼らの「主催者」のような位置附けの人物でありおれも元々は彼だけの知己だった。彼が死んだのは数週間前のことである。今時日本の何処で手に入れたのか、コカインの過剰摂取でほぼ即死だった。ドナルド・バーセルミのスノウ・ホワイト。おれの知る限り、コークと紙は東京には流通していない。死ぬつもりだったのだろう。彼は昔その手の薬の売人をやっていたことがあり、初心者みたいに分量を間違えるはずはなかったのである。トランスが流行っていた時期には東京在住の若者でクラブに行かない人間はいなくらいに盛り上がっていたのに、薬物の取り締まりが厳しくなるに伴ってめっきりフロアの人口密度も低下した。九〇年代の終わりには代々木公園、ついで百人町のラブホテル街でマリファナと覚醒剤くらいは誰でも手に入れられたのだがどちらも今では廃れていて、辛うじて生き残っているセンター街の中東系ブッシュャーも消えるのは時間の問題となってきた。合法にしても、二〇〇二年六月に幻覚キノコが禁止されたのを皮切りに次第に手に入るものが少なくなり、來年 *neo-tib* に規制がかければ全滅と言っても大袈裟ではないだろう。おれはたまたまDJの友達がいるから、そういう状況は悲しいと思うと書く。政府や文盲の警官や毎日地上波を見る良識ある市民が憎いとか、まして間違っているとかは思わない。個人的に、ただ寂しいのである。案の定、というか、彼は死んだ。力なきものの純心が弾圧されたのはおれたちが初めてではない。踏み絵は時と場所を超えて遍在している。革命前夜のフランスではプロテスタントの人々が凌辱され、ヒットラー時代には逆にドイツ人が同じことをした。警察官が——算数が出来ないゆえにか——揃って嘔吐きなのは現在の東京に始まったことではない。ところでおれは偶然にか、嘘を吐いたり弱者を辱めたりする暴力団員には会ったことがないのだが、それは暴力団學校みたいな制度がないせいだろうか。職人技術と異なっただけの慈愛の學び方には徒弟に教えられるような法則性がない。いずれにせよ、おれからすればヤクザも警察官も同じ穴の貉である。できれば文盲とは係わり合いにならないところで生きて行きたい。

^⑪の一人語りが続く。——東京は酷いっすね。自分の地元も酷いが、東京は酷い。みんな自己中。自分のことしか考えてなくて。「で、今何してるんすか」

「無職」

「いい御身分じゃないっすか」

昔みたいに家が裕福であることを自慢する人はいなくなっただが、代りにそうして貧乏していることを自慢する人が増えた日本をマルサスに見せたらなんと言うだろう。ビールが一杯空になる頃、振り返るとすでに十人くらいの仲間が集まっていた。おれは中に^⑫の彼女を見附けた。仮にキララちゃんと呼んでおこう。何だかAV女優の源氏名みたいだけど、おれのセンスを責めないで欲しい。この人は年より十歳若く見えるあどけない感じのお茶目さんで、普段は明るくちょっとした美人なのだが今夜は流石に元気がなく、やつれていた。數十分後におれは彼女が一人ソファに蹲って眼を赤く泣き腫らしているのに気づいた

……。空気は香しく、四辺は静かに眠っていた。彼女は物理學とか神経外科とかその手のコアな理科系の専攻で大學を出ているはずだった。おれには理系の女に対する偏愛がある。卑しくも佳人と呼ばれることを志すなら、ものぐさせずに學問と化粧術の兩方を修めねばなるまい。おれだって高校は理系志望で進學校を受験したのだが、入學して一週間足らずのうちに担任と喧嘩して退學してしまった。授業中の雑談とやらで奥さんや子供の話をされたのが耐えられなかったのである。おれはあの頃から喧嘩ばかりしている。そうだ、従っておれの最終學歴は中卒だ。最初高卒と言ったが履歷書に嘘を書くおれにはお前一人を騙す程度で罪惡感はこちららないのである。本名だって明かす気はないね。例えそれがいつか暴かれる運命にあるものでも、人間は匿名性の中でしか自由ではられない。おれがキラちゃんに距離を置いてきたのは彼女が親友の彼女であるからだけではない。口説いたところで果たすべき目的がないからだ。おれは未だ女性に触れたことがない。死ぬまで触れることはないだろう。今の嘘はばれてしまったろうか。触れたことがないってのが大袈裟だとしたら、少なくとも女の見ているところでおれの第三仙骨神経を火花にしたことがないとは断言できる。異種同士の特異な交接によって生まれた個體は稔性がまったくないか生殖能力が著しく低いと言うが、おれもそれだと思う。両親は犬と猿のように喧嘩ばかりしていた。異種交雑だったのだ。おれは神の慰み物として愛玩用か觀賞用かに無理矢理造られた変種の道化であり、實際の使用目的は与えられておらず、そのせいで子孫を残す能力を持たない。そんなおれが男の顔をして女の子に優しくしたりすれば、詐欺じゃないか。おれは連日のパソコン作業による肩の凝りをほぐすために古いスピーカーに凭れ、凝つと床を見詰めて、そこに無数の光芒をミラー・ボールが蒔き散らすのをぼんやりと眺めていた。一見、それらはシャボン玉である。光たちとしては何かの華の蕾を装っているつもりなのかもしれないし、案外の斑紋は光たちの瞳なのかもしれない。三つの回転軸を持つ三重の光斑は露台からカーテンを透かして孤独な鏡板に転がり落ちた太陽光線のようにもあった。安上がりのリバーブが掛かり続けた即席テクノを聴くと、寂しくなるのは何故だろう。音量がでかければでかいほど、ビートが明瞭であればあるほど、作曲者の作業量とどうか、正味の情報量の少なさが身に浸みるのだ。

きつとそういうことなのだろう。時も。若さも。真理も。

ブレイク・ビーツは鏡像のように正確に反復し続ける。あらゆる時点において未来と過去が完全に対称的である、あるいはリバーシブルであるのはサンプラーとループ・シーケンサで作られたダンス・ミュージックのような反復音楽だけなのだろうか、それとも音楽一般がそうなのだろうか。始まりも、中間も、終わりもない、弁証法がまったく働かない、置き換え可能な時点の集積によるイデア的な直線。地質學においても、年代記においても、時間軸は普通、与えられた瞬間が常に過ぎ去った時間の全経過の系列の函數となつて条件付けられているため縦軸になるが、音楽では統計データのグラフでよくあるみたいに横軸になる。要するに、ブレイク・ビーツは与えられた現在に関して条件としての過去は未来からアプリアリに区別されねばならないはずの時間を、空間のように並列する部分の集合として扱っているのである。それがこの愚にも附かない音楽の至福つてやつの源泉になっているような気がしてならない。しかしクラブ・ミュージックはこれからどうなっていくのだろう。

ソファのキラちゃんは明け方になる頃、誰かに掛けて貰った革製のコートにくるまって眠っていた。おれはそのしなやかな髪を撫でようと思ったが、彼女のエーテル的な天使性を汚してしまいうで、無言のまま空が白み始める戸外に出た。おれたちには殆んど楽しみらしい何かが残されていなかった。

八〇年代に荒廃したシカゴで生まれたハウスと、デトロイトにおけるその進化バージョンであるテクノを九〇年代のイギリスが蕩尽してしまつて、今ではその残り糟しか聴くこ

とが出来ない。二十世紀に入ってからのエレクトロニカはパソコンで曲が作れるソフト・シンセとインターネットの3C流通を背景にしたもので、表面上は似ていても、クラブ・サウンドのフロアというトポスに宿命的に根ざした體感性とは無関係である気がする。それは例えば、日本で言うなら庵野秀明や今敏辺りが蕩尽した本来のおたくフィクション、ガンダムやうる星やつらと現在インターネットで検索できるヘンタイだとかモエだとかが完全に無関係であるのと同じだ。それにしても、クラブとオタクを較べるとおれ達の圧倒的なダサさと言うか、日本人を十二歳の餓鬼と宣告したマッカーサーじゃないが、悪い意味での幼稚さにあらためてはっとさせられる。しかも今、記号に振り回され消費を繰り返す動物的なオタクなんて、批評家やAVのプロデューサーや風俗店経営者や風俗嬢の頭の中にしか存在しないんじゃないかって気がする。受容の側が空洞化して過剰供給に陥っているのである。一時エエジャナイカの如く流行ったギャルゲーなんて今じゃ誰も見向きもしないし。コミケで作り手と受け手の境界が崩れて、その崩壊の速度が2ちゃんねるなんかで秒刻みになれば、誰も他人が作ったものをわざわざ買おうとはしなくなる。おれたちの一部は逆に日本のインターネットで流れる言説にまだ過剰反応している状態だ。ああいう感じで言語や画像が無制限に流れることは歴史上経験がないものだから、それらをテレビや書籍による強いバイアスがかかった言説とのアナロジーで知覚しているのだろうがおれに言わせればパラノイアだし、雑誌なんかでアキバ・カルチャーの特集を組んだりしているのに至っては自分で調べ物をせずに2ちゃんねるで情報を稼ごうとしている怠慢の痕跡だと思う。しかも次世代の言説空間を担うであろうパブリック・ドメインたる広大なインターネットの本当の舞台は英語圏と、よくしてスペイン語圏くらいであり、日本語ではまともなニュースすら検索できない始末なのである。

だから、いい歳して未だにアニメやゲームのキャラクタに熱中してるやつらには素直に可愛いですぬって言って上げよう、と実感したのは蜂から帰ってインスタント・インサニティというMMORPGにログインしたときだった。インスタント・インサニティは八〇年代の女子高を舞台にしたクソ面白くないローテクな大規模オンライン・ゲームである。2ちゃんねる程ではないがどれ位ローテクかと言うと、なんとHTMで記述できる部分以外は、実寫のストリーミングなのである。アヴァターもその女子高に通う本物の人間である。全部で五人前後だけど、CGで作るのよりももしかしたら人件費がかかっているかもしれない。プレイヤーの方も五人前後では採算が合わないってことだろう、このゲームはROMを無制限に許可している上、女子高でやってるやつをキャンソンとして、ファノンと呼ばれるそれこそ無制限な参加を経営会社の側で募っている。ピッチの発信器と小型カメラを組み合わせた充電式のアヴァター・セットを有志に配給して全面的に素人だけでゲームを運営させているのだ。このファノンの方で大人数の死者が出て新聞沙汰になったのをお前はまだ記憶していたんじゃないか。「オタク連続殺人事件」なんて、宮部みゆきのよく出来た推理小説みたいなシュールな名前をメディアに附けられて。あの事件もアヴァター達が付けていたカメラによる多角度の映像が残っていて、それを編輯したものがDVDRになってマニアの間で何種類か流通している。噂によるとあのDVDはどうして、並の映画やドラマよりも泣けるらしい。そうだ、おれがやっているのはあのインスタント・インサニティなのである。おれはゲーム好きではない。殊にそのゲームは最低に露悪的だと思う。プログラマとして義務的に興味を持っているだけだ。高校生や大學生にもなってポルノグラフィにかくも興味が集中させている人々が目立つのは本当に面白いもの、熱中できるものを提供できないおれたち大人に責任があるわけだから。

いつものように放課後の教室にアヴァター役の面々が揃っている。愛梨に美咲、紀代美と、今日は京介もいる。最初はブラウザに女子高の教室が映し出されるだけで禁忌を犯しているようなスリルが味わえたものだが、そろそろ見慣れた光景だ。

「高音のことなんだけど」と切り出したのは愛梨だった。「中の人から連絡があったの。あの子、もう帰って来ないから死んでいたことにして続けて慾しいんだって」

「死んだの。何で」と紀代美が言った。

「死んだって言うか、死んでいたらしいの。高音、小さい頃に死んだ妹がいるって言う設定だったじゃない。実は妹なんていなくて、死んでいたのはタカネ自身だったんだって」状況を把握した一同が頷いた。劇の設定なんて途中で幾らでも変えられるし、今更やめた人間を追いかけても仕方ないのである。

「逃げた人を追いかけても仕方ないよね。私たちは問題を、誰が小鳥を殺したのか、から、誰が境界を壊したのか、に書き換えるべきだと思うんだけど、どうかしら」と言ったのは美咲だった。

「その前に」溜息混じりに反論したのは愛梨だった。「誰は誰なのか、って問題があるんじゃないか。今日も此処にこうして小鳥の死體が発見されるわけだけど」と示したのは不在の高音の机で、そこには盛り土がしてあり、土の中から青い小鳥の嘴の先が覗いていた。「この死體は明らかに、『奇跡の鳥を見た』という謎の言葉を残して自殺した優悲の屍を暗示していると思われる。まあ、優悲は実は此処にいるわけだけど」愛梨が視線を投げた先で美咲が俯いた。

「止めようよ、壊れた系のカサブタをさらに引っ搔くような言動は」と後ろから京介の聲がかかった。

「ほら、分かっているんだからね」発作的に紀代美が叫ぶ。「京介くん、あなたも中の人を暴かれたくないんですよ。みんな、自分のことばかり。あなたは誰なのよ!」

「前回乱入した小人が残して行ったヒントを私なりに考えてみた」紀代美を横目で無視して愛梨が話を続けた。「集合論って、集合とその要素の連鎖カンケイのことでしょ。集合の要素がたった一つの事物である場合はむしろ特別な。私たちの状況も同様で、一人のアヴァターに二人以上のプレイヤーが同時に1Nすることはシステム上不可能だけど、一人のプレイヤーが二つ以上1Dを登録して二人以上のアヴァターを操作することなら可能ね。プラウザを多重起動してそれぞれ別個のクッキーを食わせればいい訳だから。要するに、プレイヤーとは私たちという事物を要素とする集合なわけよ。私たちにとっては私たちのそれぞれが舞台の外で持つ自己同一性、要するに中の人の名前や職業だけど、それらは極論、どうでもいい。舞台の上は舞台の上だけの完結した世界を構成しているんだから。でも一人のプレイヤーが私たちのうちの二人以上を同時に操作していたらどうだろう。その二人以上のアヴァターは舞台の上でも本質的に同一人物として扱う必要が出てくる」

一同が頷いた。

「何故、かつて同じ名前と呼ばれていた制度や場所や人が、かつて果たしていた機能をまったく果たしていないというようなことが起こりうるのか。その答えがこれで漸く分かった気がするわ。中の人が別人だったんだよ。そこに働いているのは歴史の陰の力だとか神の意志じゃなくて、具體的な中の人たち自身のアイデンティティなんだよ」と感慨深げに言ったのは紀代美だった。

「つまり、誰は誰なのかって、さっきの愛梨の言い方ではトートロジーになっちゃってて意味がないけど、誰と誰が同一なのかと言い替えれば、私たちにとても意味のある問いになるわけね」と美咲が言った。

愛梨が続ける。「それに附随して、此処に本当にいるのは何人なのかって問いも考察しなきゃいけない。まず、一人もいない場合は、全員がNPCという特殊な人物であるということにして、一人しかいない場合に含める。そこで、究極の場合は一人しかいないということになるけれど、可能性から外すことは出来ない。最大の場合は私たちの人数、五人ってことね。逃げ出した高音を含めて」

「組合せは全部で五十二通りだね」と京介が指折り数えて確かめたとき、高音の机の上から合唱の歌声が聞こえ始めた。

籠目囲め。

籠の中の鳥は、何時々々出遣る。

夜明けの晩に、鶴と亀が滑った。

後ろの正面誰。

「何なの何なの、この演出は。鳥の死體が歌ってるみたいだけど」と美咲が言った。

「あれだ、優悲が言ってた『人間の言葉を話す奇跡の鳥』。ついに出たわけね。……それにしても、変な歌ね。夜明けの晩って言うのは、夜明けのことなのだろうか、晩のことなのだろうか」と愛梨が自問した。

「むしろ、番なんじゃない。籠を見張る当番」と京介。

「そっか」

「こんな凝った演出されても」と言って美咲が京介と視線を交換した。「真面目に演技する気、もう失せてるんだよね、私たち。大體、籠の中に鳥の寫眞が見附かったのは前回だし。ずれてるじゃん」

「それに今回は高音がいないし」と愛梨。「いない人を苛めてどうする気なんだろうね。それにしても高音は何処に行っちゃったんだろう」

「聞いてみる？ 高音の中の人、確か、刑事って言ってたっけ、あの小人」と美咲。「刑事さんか何か知らないけど、中の人ー。聞こえますかー。今も誰かの中に隠れてROMってるんでしょー。おーい」

「違う違う、刑事じゃなくて土偶って言ってたよ、小人のやつ」と愛梨が訂正する。「でも、どっちでもよさそうな感じだったね。確かそれが謎を解き明かすヒントだとか。よく分からない」

因みにこの時、遠藤がROMっていたのは優悲が操作する美咲当人であった。ポケットの中には、かつてファックス用紙だった茶色く変色した紙屑と、十八年の時を経ても変化のない貝殻が入っていた。それらを彼に贈った未來の二名子が言ったように、警視庁のハitek犯罪総合対策センターの管理職をその記憶ごと与えられた。部下の信任も厚く、彼は休日もそうしてインターネットで事件の捜査を続けているのだった。八〇年代から連れてきた方の二名子とはその後会っていないが、彼女の方はそれなりにキャリアのあるシナリオ・ライターになって、ある編輯プロダクションと出版の交渉をしたりなどしてそれなりに充実しているらしい。

遠藤警視は自分の頭部に、髪の毛に隠すようにして小型カメラのようなものが装着されているのに気づいていた。耳の後ろにはマイクのような装置も。未來の二名子には説明されなかったが、二十一世紀の生活に何か重要な役割を演じる技術に違いないと考えてそのままにしていた。——そんなわけでこの刑事さんが見聞きすることはおれに筒抜けになっていたわけだ。おれを責めちゃいけない。だってそうだろ、そうして現に美咲のプライバシーを侵害している刑事さんのプライバシーをおれが侵害して何が悪い。情報化社会の護身術ってやつだ。警察がやるからみんな真似するんだよ、そうだろ？ 違うか。おれはずっとプレイしてたアヴァターの鈴木高音が辞めちまって退屈してたところなんだ。バブリーな胸の悪くなるゲームだと思ってたところだけど、警察が絡んでから減法面白くなってきたんだ。そんなわけでおれは彼のマイクを通して美咲のマイクに拾われた音声を録音していたっ

てわけだ。

ヘッドフォンの中から聞こえてくる、美咲のマイクを通して聞いたカゴメは次第にフェイドアウトして、今度は小型レコーダーで拾った会議の記録のような雑音混じりの話し聲が聞こえ始めた。

——誰が小鳥を殺したのか、から、誰が境界を壊したのか、に書き換えるべきだと思っただけ、どうかしら。——その前に、誰は誰なのか、って問題があるんじゃないか。今日も此処にこうして小鳥の死體が発見されるわけだが。この死體は明らかに、『奇跡の鳥を見た』という謎の言葉を残して自殺した優悲の屍を暗示していると思われる。まあ、優悲は実は此処に——

「私たちの聲じゃん、これ」と言った美咲の聲はマイクが近いため、遠藤のヘッドフォンには耳を塞いで発聲した自分の聲のようにワンワンと響いて聞こえている。

愛梨が高音の机の上の土を掘り返した。突き出していた嘴の附近から下は腐って白骨化した小鳥の屍の中に、円筒状の金属が埋まっていた。キャップは捻子式になっていて捻ると中から単五電池と一緒に小型のマイクとスピーカーらしきものが出てきた。

「完全な悪戯だ」さっきの自分の聲をスピーカーから聞きながら愛梨が呟いた。「愉快犯だね。このゲームもう終わってるんじゃない？　ちゃんと管理されてないよ、明らかに。もう辞めようよ。最低」

「別に目的が金儲けとかでもいいからさ、個人情報管理くらいはきちんとして欲しいよね」と紀代美が応じた。

「あのさあ」と、何時の間にか荷物をまとめて京介と並んで立っていたミサキがそろそろ後ずさりながら言った。「わたしたち、落ちるね。用事があるって」

「渋谷に演劇を観に行くんだ。前から美咲と約束だったから」と京介が言い、二人は教室を飛び出した。あんなことを暴かれてしまった二人のことだ、それきり戻って来ないつもりだろう。替わりに噂の「華柄鏡面體」を観に行くのだ。悪くない、舞台上の人数がまた減ってしまったが。

不意にブツリと音聲が途切れて、違う会話が聞こえ始めた。

全部土偶の自作自演なんだよ。

土偶が蔭で操ってるんだよ。

遠藤がヘッドフォン越しに自室のインターフォンを聞いたのはそのスピーカーを二重に通した音声に耳を澄まそうとしたときだった時だった。継いで、慌ただしいノックとともに所轄の警察署の名前が告げられた。

「警視庁ハイテク犯罪対策センター捜査班長の警視、遠藤慥哉……ですね」扉を開けた彼を俟っていた制服の巡査が最後に思わず付け加えた敬語表現が警視庁の刑事という肩書の重みを物語った。彼が頷くと背景の方に控えていた二人の私服刑事が三つ折りになった状面を差し出して歩み寄った。

「泉二名子という人に心当たりがありますな」遠藤が頷くのを俟たずに刑事は鷹揚さを強いた口調で後を継いだ。「札が出た。ストーリーカー禁止法だ」

「ストーカー？」彼は空笑した。「莫迦な」

「ポケットに入っているものを出して貰いましょうか」
彼はズボンのポケットを探った。エスカレーターに乗ってこっちの世界に來た日の衣類だった。丸まったコンビニのレシートに混ざってあの月夜の浜辺で二名子に貰った小さな巻き貝が掌に転がり出した。

「あ、それ、それ。物証出たよ」と刑事が巡査に合図すると、服を着替えることも許されずに即座に彼はパトカーに連行された。インターネットに接続されてストリーミング状態のまま部屋に残されたパソコンのヘッドフォンからは蟲が鈴を鳴らすような雑音混じりの音声が續いていた。

でも土偶って誰よ。

自称小説家らしいよ。

今時よくやるよね、小説なんて。

違う、シナリオのセンモン通ってるんだって。

結局どういうことだったけ。

土偶が悪いんでしょ。そうだ、兎に角全部。

土偶が悪い。

おれはその葉書が届いた蜘蛛が巣を張る牛小屋のように暗い部屋とコンビニを往復する蟄居人だった。家畜小屋が明る過ぎると牝牛は神経衰弱にかかりいい乳を出さないと言うのを想起した。二名子先生の學校の入學案内請求を投函して二日、無職になって二ヶ月経つ。おめでとうございます、ウン百人の中から選ばれた三人に見事あなたが入選されました式のゴースト・ライター求人の葉書だった。おれがフィクションの書き手を目指していることを知っているやつなんているはずがない。何だって、活動を開始したのだけでなく、そんな抱負を思い描いたのが二日前のことなのだからあの學校の事務に情報を売るようなアルバイトがいたのだろうか。しかも消印は八六年となっていた。ハは掠れて無限の數學記号みたいだったからゴム印が古くなっているだけとも考えられたが、六は明らかに六だった。いずれにせよ二千六年では近未來である。郵便局にも巫山戯たアルバイトがいるらしい。おれも年賀状の配達のアルバイトをやったことがあるし、きつとラッパークパックスの伝記でも読んで感化された青春真っ盛りの高校生だろう、公共のバイト先でこういう惡戯をするのは。八六年はそういえば、インスタント・インサニティの世界設定の年号だ。おれのことを知っているやつのは仕事だろうか。恐喝。まさか。

選ばれた三人を順繰りに明るいうちの部屋に招いたとき、彼女は既におれに眼をつけていたのかもしれない。他の二人に対する処遇もおれとまったく同じにしていると彼女は言うがおれたちを分散させて引き合わせないようにしているのは意図あつてのことに違いないのだ。剩えおれはもう、他の二人が現実に、彼女の頭腦の外に存在しているとは思っていない。重要なのは、彼女の外部に確固たる思考の中心や真理の基準を求めることではない。例えば如何に不安定であろうと、彼女の中の世界に留まること、彼女の羨ましくなってしまう程一貫して薔薇色の射倖心を信じることが、おれの陥った無限の反復から抜け出す唯一の回

路だろうとおれは考える。とまれ、これは彼女が望んだことであっておれの理性が命じたところではない。

来れば分かるだけ電話で告げられた世田谷のマンションには、彼女が一人で俟っていた。それが意外だったのは、おれはてっきりマネージャー氏に応対されると思っていたからだ。最悪、彼女本人には会えないとさえ思っていた。しかしながら、エレベーターで三階に上がってその部屋を訪れると、インターフォンに答えて入口の鍵を開けたのは彼女、鈴木高音さんだった。何処かで聞いた名前だが名前はどうでもいい、名前なんて。

高音さんは想像していたより若かった。まだ、高校生なんじゃないだろうか。だが、側で見て胸が高鳴る程の女ではなかった。特別不器量でもない、普通の女の子。この子が、仕事前のゴースト・ライターに即金で五十万円も、おれの口座に振り込んだ一流女優なのか。

高音さんが正面からおれと眼を合わせないようにしたのは、初対面のおれの顔やヒトトナリを値踏みしていると思われるからだった。でも、背中を向けることはなかった。おれが存分に彼女の貌を嘆賞できるように、常に斜め四十五度の横顔が見えるように體の向きを調節した。全體的に取り立てる程のない顔だったが、暫くしておれはその目元の美しさに気づいた。目頭から目尻まで平行線を描いた理想的な二重だった。しかし、どうやら強い斜視があるようだった。彼女が次のように注意を促すより先に、おれはその眼に魅かれていた。

「この部屋に一枚、あなたを映している鏡があります。二十秒以内に捜し出してください。はい、ゲームです！」

部屋はLDKでかなり広かったが、引越しの前か、引越しの後かのように伽藍としていた。姿見は勿論、手鏡すら見当たらない。高音さんは露台の窓硝子のことを言っているのだろうか。カーテンを引いていない大きな硝子戸一面からキセノン・フラッシュのような閃光が在るものすべての輪郭を滲む程強烈に焼き出していた。高音さんが、パン、パン、と手を叩いた。

「終わり！ やっぱり見附けられなかったね。でも、他の二人も駄目だったから気にすること、ありませんよ。正解は、あ、ちょっと俟って」

彼女はクローゼットを開けて、中からこる附の木製事務机を引き出した。慌ておれも手伝う。彼女はそれを部屋の中央に移動し、床に貼ってあった赤いビニールテープの目印にピッタリ合わせ、自身は露台とクローゼットの角、玄関から見て丁度対角の位置に立った。

「はい、座って、こっちを見てください。今日は私のパソコン、お貸ししますけど、来週からは使い慣れたラップトップを持参してください。はい、こっちを見てください」

高音さんは再び、斜め四十五度を作った。そうすると、他のパーツの人間並な造型はスコープ・アウトして、目元の美しさだけが際立つことを彼女はよく知っていた。しかも、片目を逸せることによって藪隈みがカムフラージュされる。

「ほら」と、彼女はその瞳を指さした。「鏡。ダーリン専用。あなたの顔が映っているでしょう」

彼女の立ち位置まではたっぷり二メートルほどある。その瞳孔におれの顔が映っていたとしても、それを確認するには狩猟民族の視力が必要である。

「私の名前は、〈鏡〉。あなたは毎週金曜日に此処に来て、一時間だけ、私を見ながら〈鏡〉の小説を書くのです。そういえば、お名前を聞いてなかったね。あ、いいの、言わないで。私が附けるから」彼女はそう言って、斜めを向いたまま片目だけで上手に、おれを観察した。「名字は、柳田」

「柳田？」おれはギョツとした。

「そう。で、下の名前は、そうだな、土偶」

「埴輪のことですか？ 土偶……」

「あなたのコードネームは今日から柳田土偶です。柳田土偶！ 柳田土偶！」白痴のように彼女は叫んだ。「あなたが土偶で、私が（鏡）。いいじゃん？ 太古のロマンって感じ。そうか、他の人にも古墳系の名前付ければよかったかな。——ほら、書かないの？ 時間はきっかり一時間よ」

「そう話し続けられると」おれはPCのスイッチを入れた。それにしても何を書けばいいのだろう。彼女は文章を書くというのを、写真や絵画と取り違えているのではなかっただろうか。そんなおれの内心を見透かして彼女は説明した。

「あなたは此处で、私の瞳の印象を忠実に小説で再現するんです。此处にいる間は、時間を惜しんでこの瞳をよく見てください。瞳孔の透明度や虹彩の色合いを描寫することはありません。私が望んでいるのは具體的な描寫じゃなくて、何て言うかな。もっと深いレヴェルでの再現なわけよ。一読、全然似ていなくてもいい。土偶君が行こうとしてる学校の先生が書いてるみたいなの、ああいうサスペンスで構わない。ただ、私の瞳を見詰めながら、陶酔しながら、思いを込めながら、書いて欲しいの。それだけ。勿論、一時間じゃ書き上げられないだろうから残りは持って帰って、ね」

「この、目印の位置は、何か意味があるんですか」おれは赤いテープの目貼について質問した。

「それはね、平等を期するため。他の二人とピッタリ同じだけ、私の瞳を見て貰うために。最初の方にはあそこから書いて貰ったのよ」彼女は玄関の方を示した。上がり框のすぐ手前に赤い目印が貼ってある。「二番目の人も、あそこから。何故なら、土偶君ともう一人の人と、同じだけ私の瞳を見る権利がその人にはあったわけだけど、土偶君はその時点でまだ私を見ていない、零だったから、単純にもう一人の人の分と等量になる。土偶君の場合は、前の二人を足した分だから、一足す一は二でしょう。時間は、二時間半で固定ね。つまり、情報量を二にするには、私の瞳の面積を倍にするしかないよね。だから近附いて貰ったの。正確に、こっちの目印の距離はあっちの目印の二の平方根の逆数倍になってるはずよ。計算、できるでしょう？ 面積だから、距離に還元するには平方根をとればいいの。まだ次の人の番になってないけど、予測できるよね。次は最初に來てくれた人で、二番目の人と土偶君との二人分の情報量を与えればいい。簡単ね。一番最初の距離を単位として三の平方根の逆数の位置に近附いて貰えばいい。そんな風にしてドンドン進んでいくの。誰かが私の位置に辿り着いたら、ゲーム終了。編輯の人に來て貰って具體的に印税の話とか、決めようと思います」

終了まで具體的に何日くらいかかるのだろう。數學は苦手だったから咄嗟に概算できなかったが、彼女の方で考えあつてのことであろうと思い、質問はしなかった。「でも、おれたち三人がバラバラで書いて行って最終的にどうするんですか。一番いいやつを選ぶのか、辻褄をあわせて全部合體させるのか」

「打ち合わせしたわけじゃないんだけど、偶然にも今のところみんなほぼ同じ設定と進行になってるから。土偶君の原稿もそうなることを私、信じている。でもね、微妙にズレてるとこもあんだよね。気合いが足らなかったんだよ、きっと。私の瞳を見詰めるときの。ねえ、土偶君」

「はい」

「彼女はいるの？ いない？ じゃあ、私のことを恋人だと思って、強く見詰めて。一心に私を想って、我慢できなくなつて、『綺麗だ！ 愛している！』って叫んじゃうくらい。言っついいいんだよー。我慢しないで」

「はあ」

おれが真剣に小説を書き始めたのは、彼女の言葉に相手するのが面倒臭くなってきた頃だった。そんな感じに突然時間を決めて追い詰められたとき、物書きはどうするか。どんなに短い作品であっても、設定や粗筋を決めて下調べするだけで少なくとも二ヶ月はかかる。自分の身近にいる人、最近遭遇した事件をそのまま描寫するのである。描寫には創作の能力は必要ないし、実體驗が題材なら結末まで予め把握しているわけだから、筆が乱れる心配もない。というわけで、おれの書き出しはこうだ。

私は、泉二名子。職業、シナリオ・ライター。年齢、X。三十五以上、四十五未満としておこう。けっこういってますね。でも気持ちは、まだ、若いと思う。今、シナリオ・ライターって言ったけど、現在は都内のシナリオの専門學校みたいな組織で、専任講師として教鞭をとっている。専任になるために、随分、本職の仕事を削った。正式には學校ではないのだけれど、ちゃんとした良心的な組織である。

「正式」に學校とか、株式会社とか名乗るのは、毎朝七時に起きる才能だけあれば、誰にでも可能なのではないだろうか。従って以下、私が勤めるこの組織を「學校」と表記するが、氣に入らなければ適宜読みかえて欲しい。

最初に言ったように泉二名子先生というのは、おれが今通いたいと思っている學校の先生だ。本当に、こういう喋りかたをする。シナリオを書き始める前は女優をやっていたそうだ。クリエイティブな仕事をしている女性は、しばしば、年齢を超越しているような部分を持っている。

おれがシナリオ・ライターを目指したのは、彼女が最近書いた、『華柄鏡面體』という作品をテレビで見てからだだった。原作は小説で、それがまず映画化され、最終的にドラマになったのだが、映画の方は見そびれてしまったため、誰が脚本を書いたのかよく分からない。原作は、川元菊という女子大生の新人章受賞作だったが、そっちははっきり言ってイマイチだった。キャラクタ小説に毛が生えた様な感じで、そういうものが好きな人なら絶賛するかもしれないが、という作品だった。むしろ、泉二名子先生のシナリオの方を手に入れたかった。今度學校に入ったら、先生本人に頼むことが出来るだろうか。

二枚目に入った辺りから泉二名子先生がおれの中で俄然自由に語り始める。この瞬間が堪らないんだ。

ところで、私はこの物語の最初のところを書いたのが誰だったのか、思い出すことが出来ない。今、この原稿をこうして書いてるのは、私、二名子なんだよね。タカネちゃんを操っている、物語のナレーター。でも、本当はこの話には、作者が別にいるらしいんだ。名前は、柳田土偶。変な名前。彼は一年前の研修科の教え子で、今はとある精神病院に入院している。「とある」って言う修飾句がくつつくのは、本当の名前や所在地を出すわけにはいかないからだと思って欲しい。學校に出てこなくなっただけ、と思っていたら、律義にも携帯に、収監中であるとの由の連絡があった。数週間前に久し振りで面会に行ったとき、「書き溜めた研究成果（ただの雑然とした手書き原稿、シナリオの下書きみたいなもの）」を渡された。なんとそれは、彼が最後に學校にきた日、私が出した課題だったのである。

私の學校では、毎週、學生に三十枚前後の原稿を提出させて添削を行っている。

成功への近道は「よく書くこと」であるというのが創立者のモットーであったらしいが、特に私としては別言があるわけではない。書きたい慾求を持っている学生たちにとっては、書くことを義務付けられるという経験は少なくとも、カタルシスではあるだろう。

土偶君の原稿はSFとファンタジーの中間のような話で、私の出した「二十年の時間経過を情感豊かに表現する」という課題の意味をどうやら完全に履き違えているようだったし、入院中に三十枚どころか、三百枚くらいに膨らんでいた。彼は一年に渡って宿題に取り組み続けていたのだ。これは——、精神病院とはそういう場所、と言って片付けてしまっただけのよいようなものなのだろうか。

近い未来のおれ自身を登場させてみる。三百枚の原稿を先生に見せる教え子の行為は迷惑以外の何物でもないわけだが、そこはフィクションの気楽なところ。実際には出来ないことを実際に起こった出来事のバックグラウンドに無理矢理埋め込むのだ。さらに、しかも二名子先生はおれの手書き原稿をわざわざパソコンで清書してくれることにしよう。そんな時間、現実の彼女にあるはずがないわけだが。

家に帰ってから、私はそれを、細かいところを自分好みに勝手に校正しながら、ウィンドウズに打ち込み始めた。兎に角手書きじゃどうしようもないし、打ち込んでみて面白そうだったら、自分の仕事に拝借させて貰おうと。何せ、精神病院にいる彼よりは私の方が信頼も知名度もあるし、もし仮に土偶君が、自分で言ってるみたいに自殺したら、やっぱりその時は土偶君本人の名前で出版社を探すことになるんだらうけど、（死後出版？ 友情出版？ 名前がよく分らないわ）どっちにしても私がやるときゃ手間が省けるのだ。

私は土偶君の原稿通りに、さらにそこに自分のインスピレーションを込めながら自由に、これを打ち込んでいる。基本的に、私のほうが彼より文章うまいし、別にお金貰って事務的にタイピングしているわけじゃないからだ。例えばどういう変更を加えたか、あなたは知りたがるだろう。土偶君の原稿では冒頭、自分がその作品に用いた技法、メタフィクションについての長い蘊蓄があった。テレビの仕事で原稿を切り詰める癖がついているせいか、個人的に私は蘊蓄小説が大嫌いなものだから、それを削除した。私が最初に書いたことはよく覚えてないけど、土偶君の原稿の始まりは覚えている。精神病院の、四階ロビーでこれを渡されたときに、彼本人が指差して説明してくれた部分だから。よく覚えている。あの時彼はいつもより元氣そうで、意識がしっかりしてる感じだった。

『この話は、女聲の観客への語り掛けで始まるんだ。——今日は何があったの？ いいだろ。今日は何があったの、私に出来るなら癒して上げるよ。画期的じゃん。二人称のデイクシスによる傍白から唐突に観客は劇世界に投げ込まれる』

『画期的、かなあ。何かで読んだことあるよ、こういうの。カルデロンだったかな』彼の原稿には表紙がなくて、バインダーで留めたA4版の最初の一枚から、シナリオがぎっしり書かれていた。罫線なしの紙で、隅から隅まで文字が詰め込まれている。

『カルデロンじゃなくてさ、これを今のテレビでやるの。民報のゴールドデンとかでさ。スペインのバロックと日本のポストモダンじゃ、全然違うよ、環境材料が』『そういうことは、病氣治してテレビの仕事貰えるようになってから言いなさい。』

私でも無理だよ、突然こっちからの持込で民報のゴールデンは』

私の知る限りこの言葉遣いに問題がある土偶君はテレビが大好きで、教室での最初の自己紹介でもドラマ制作がやりたい、夢だって言っていた。それから彼はテレビカメラの回し方とか編輯とかそっちのコースに進んで、授業でシナリオを持っている私とは顔を合わせることも少なかった。

土偶君、この物語の語り手、私をモデルに書いたって言ってた。だから、今喋っているのは、私。だから、私がこうして喋っている部分は、土偶君のオリジナルをそのまま使っている。だけど私の語るストーリーは、下手とは言わないまでも余りにも設定が陳腐だったから、ちょっとだけ書き換えた。具體的に言うと、タカネという登場人物は土偶君の作品にはいなかったものだ。少なからずファンタジックな設定。私はプロのシナリオ・ライターであり、本能的に現代の視聴者の感情をよく知っている。彼らはテレビに現実を押し付けられるのはまっぴらなのである。現実はこの、あなたの周りにあるこの現実だけで十分だ。それだけでも重いくらいなのだ。カメラにまでこれ以上冷たい現実を押し付けられたくはない。私はテレビが嫌いだった。可愛い女の子や、手の届くわけもない格好いい男の子が出てくるドラマが嫌いだった。家にいれば何時でも、テレビが点いていた。狭いアパートで、私の勉強部屋とテレビがあるリビングの間は玉暖簾だけ隔てて、筒抜けだった。学校から帰れば、母がサスペンスの再放送を見ていた。ついで、部活から帰った兄。バラエティやニュースを見ながら、ご飯。深夜はお父さん。私はテレビの音を聞きながら好きな本を読むことに慣れてしまった。だからきっと、私には言語中枢が二つある。本といっても子供向けの本だ。随分大きくなるまで、私は子供向けのファンタジーばかり繰り返し読んでいた。私が自分で物語を書き始めたのも、努力してテレビ・ドラマのシナリオを書けるようになったのも、基調としてはあの後ろから聞こえてくるテレビの話し聲に対する防衛反応だったのである。書くことは、解毒剤。だから、私には子供達がファンフィクションを書く理由がよく理解できる。「ファン」だなんて、ご都合主義のネーミングに騙されてはいけない。あれは「仮想性」という概念でカムフラージュされ、電波とか同時性とかいう暴力を伴って押し付けられた偽のオリジナル리티に対抗する、巧妙な防衛技術である。「二次創作」ではない。メディアが一級の現実となった今、ファンフィクションは権利上、メディアをフレームレスにモデルにしたオリジナルのフィクションである。そしてフィクションの原点は、人類学者たちの述べるように、私たちの運命を左右する圧倒的な外部世界から身を守るための技術なのである。プロの作家でもファンフィクションで使えない技法は、今のところ避けて書くのがモラルだと、個人的に思う。あなたが本当の自信を持った作家であり、あなたが物語る目的が、ただの自己実現じゃなくて、一人々々の読者の救済であるとしたら。（この段落の最後二文は、後で消すこと――）

土偶君のシナリオ、『華柄鏡面體』は、その圧倒的な三面記事的チープさによって私に、母が草加煎餅を食べながら無心に見ていたサスペンスを思い出させた。流行作家の推理小説から名前だけ借りて即席に作られた台本、子供だった私にも分かるくらい下手糞な演技。安っぽいプロップ。血糊と大人の女の人の、汚い裸。私はサスペンスが嫌いだ。正直な人は思ったことはすぐ行動にすべきだし、作家は考えたことをそのまま書くべきである。私のシナリオはアンチ・サスペンスだ。タカネは私のメアリ・スーだ。嫌われ者の、メアリ・スーだ……。メアリ・スーって知ってますか、ところで。タカネみたいな、取ってつけたような素人くさいキャラのことだよ。でも、サスペンス・ドラマのアマチュアっぽさは、これがまたちょっと

文脈が違うんだ。止めよう、話し始めると長い。説明するのに飽きてきたし、この後聴き続けてくれたら、何となく、分かる。

話を戻すけれど、本当に私の物語は誰の物語なんだろう。分からない。思い出せない。きつとさっき珈琲に混ぜて飲んだ、冷蔵庫のチルドルームに眠っていた古い*****のせいだ。早く全部飲んで始末しちゃわないと、捕まるかもしれないし、シナリオ・ライターとして、永遠に、社会生命を絶たれることになる。土偶君のシナリオも、発表して上げられなくなる。それにしても、誰が何のためにチルドルームに*****を隠したのか思い出せない（自分の部屋なのに！）のは、これも*****のせいだろうか。私じゃない。

私は頭をキュ、キュと二回振って卓袱台に広げたノート・パソコンに向き直り、マウスを、コン、と動かしてスクリーン・セーバーを消す。私たちシナリオ・ライターは仕事がないときでも、何時でもこうやって何か書いているのだ。物書きになる前からいつも何か書いていたし、兎に角そういうもの。テレビでニュースをやっている。東京に出てきたときに買った、もう十年くらい使ってる古いやつ。もうすぐ八時かもしれない、と思って時計を見たら、もう八時を十分ばかり回っていた。

『華柄鏡面體』が始まっている。私のドラマ。映画になって、DVDが出る時期と合わせるように、テレビ・ドラマ化された。私はチャンネルを替える。やってる、やってる。今、ちょうどタカネが二度目に〈境界〉に行ったところだ。この場で、タカネは〈鏡〉の故障で〈境界〉の向こう側に行ってしまう、クミコ博士らに組織やリョウの真相を知らされることになる。やっぱり映画と較べると造りがちゃちゃだけど、よし、よし。これを今、日本中の人が見ているのだ。私のドラマ。私のタカネ。シナリオ・ライター冥利だよ。ドラマの方は映画とは趣向を替えてバック・ストーリーを思い切って削除し、タカネをメイン・キャラに持ってきてその高校生活の風景に焦点を当てることにした。推理の要素は全くなしで、メロドラマ風の切ないサスペンスに加工した。同じだったら映画を見た人が逃げてしまうし、そうするとメディア・ミックスとして成立しなくなるからだ。視聴率はぶっ千切りに決まっている。だって、あんな事件があった直後なんだから。いや、この話は、可愛そうだから、話さない。

ところでこのドラマは、エンドロールの脚本のところに泉二名子、私の名前が出て、原作のところに違う人の名前、『華柄鏡面體』（コスモ出版局刊）川元菊著、と表示されるのだが、それについてちょっと説明しておきたい。だけど企業秘密だから、秘密の守れない人は次のパラグラフまで読み飛ばすこと。

実は、この『華柄鏡面體』の原作小説を書いたのは、私なのだ。もう気づいてると思うけど、あなたが今読んでいるコレ、コノ小説が実はそれである。川元菊さんはあとがきと謝辞しか書いていない。情報書房という私たちがお世話になった編輯プロダクションの企業戦略が絡んできて、ちょっとややこしい話なのだ。玄田慶司という人が社長で、編輯業社としては下の中くらい……いや、中の中くらい、中の下くらいかな。ホームページの企業紹介には出資金八千万円、社員四十八名、創立一九九二年、と書いてあるけど本当は社員たったの三人で、創立も一昨年くらいで、最初は貸しオフィスを借りる資金しかなくしかもその半分は借金だった、そういう会社である。アルバイトの人が多いときで五人位いる。この会社、最初はコンビニ流通用の書籍（雑誌とか漫画じゃなくて、前の小さい籠に入っている、「ブランド辞典」とか「ウィンドウズ・ショートカット・キー辞典」とか、「トイレで読む豆知識」とか、あの手の本）を専門に扱っていた。でもそれではシェアが中々伸びなかったせいとか、玄田社長は思い切って、「やはり活字メディアは名前だろう、硬い

仕事で実績を伸ばさなきゃ駄目だろう」と企業方針を改めることにして、企業イメージを新しく打ち出すために文藝系の新人賞を企画した。普通の文庫本発刊どころか、文芸書の製作さえ手がけたことがない編輯プロダクションが、である。当然、成功させるためには相当のトリックが必要だ。社長は頭を捻りに捻ったようである。

「それで、だ」港区のオフィス所在地、新アジアビルの斜向かいの狭い喫茶店「辻褃」で特大のアメリカンを啜りながら、玄田社長は元氣よく私の前にノートを広げたのだが、ちなみにこのときまだ私はその人を、社長じゃなくてただの編輯者だと思っていた。小さい会社だから、社長も自ら実務をやっているのだ。出版社というのは、ある程度名の売れた会社でも、社員は五人もない場合が多い。そういうところでは社長や編輯長って言うのは名誉職じゃなくて、基本的にディスジャンクティヴで掛け持ち可能な役割に過ぎない。「うちが売りにするのは、書籍という、或いは、活字や美しい日本語による文體という形態ではなく、物語そのものの力なんだ。いいですか、うちは小説の新人賞を公募しようとしている。だけど、うちの新人賞を取った作品は、すべては無理かもしれないが、多くが映画化やドラマ化されていく。うまくいけばゲーム化なんて線も狙うつもりだけど、少なくとも、映画、そしてテレビだ。何故か。小説固有の価値ではなく物語の本質的な力を基準にして判断する、マルチメディア時代を見通した、そんな信頼できる企業色を持った社だからだ」玄田社長は青色のボール・ペンでノートに薄く、価値、と書き、その横にその三倍位の筆圧で（次の頁はケロイドみたいな凸凹が出来て使い物にならないはずだ）、力、と書いて丸をつけた。「小説固有の価値って、どういうものか、言ってみて下さい、遠藤さん」

「ええと、そうですね。文章の清涼感とか、少ない言葉で情景を生き活きと思いつかべさせるとか。あと、人物の思考や行動の速度、勢い……あ、それは、シナリオも同じか。じゃあ、何だろう」

「うーん」社長がニヤリと嗤う。「違いますね」と言いつつ、否定する理窟が出てきそうに出てこない。「小説の価値って言うのはね、これだ」諦めた。社長はノートに大きく、

$$\frac{1}{\log(\text{意味})}$$

と書いた。

「小説は意味の対数に反比例して価値を増す。つまり、意味不明な小説ほどいいってことだ。そして、意味不明さの指標は、ハッキリしている。非常用漢字の量と、頻度」

「……なるほど」

「本当にそうなんだから。遠藤さんみたいにシナリオの世界でお仕事している人はピンと来ないかもしれないけれどね。嘘だと思ったら活躍している人の小説と、駄目小説家の作品を読み比べてみて下さいよ。いい小説は変な漢字が沢山、頻繁に出てくる。さっきみたいなロガリズムを使った数式で表示することが簡単に出来るし、編輯業界では裏で、そうした数式を元に製作されたコンピュータ・ソフトが出

回っている。本当だよ。本当だから。＊＊社なんて、毎回下読みにそのソフト配ってらって言うんだから、此処だけの話」

玄田は息を接いで、お手拭きで額を拭った。今時、そういう仕草を女の前で堂々とする男は、ポールドで悪くない。今度のシナリオで使おう。それにしても喫茶店は本当に狭かった。その時気づいたのだが、カウンターではないフロア席は私たちのこの二人がけの卓のみである。あらゆる調度が長年の煙草の脂で琥珀色になっている。店が古新聞と古雑誌で占拠されている。しかもその殆どが、博物館級の古さだ。最盛期の少年ジャンプ。風と樹の歌。ベルサイユの薔薇。

「そんなやり方ではこれからのマルチメディア時代を生き抜けない、分かりますね。しかし同時に、わが社は活字プロパーで足場を固めようとする、そんな会社でありたい。表向き、ね」

二度目に出てきた、マルチメディアという言葉が頭の芯まで届かずに、聴覚神経の何処かで瘤になって止まった。マルチってなんだ。

「――まあ、そんなわけで、若く有能なシナリオ・ライターとして定評のある泉さんに、小説の執筆をお願いすることになったわけです」

玄田は卓の上で手を組み合わせ、私の眼を凝っと見据えた。ちょっと、眼の奥がオドオドしている。今気づいたのだが、この社長は余り女慣れていないらしい。社長ってのはそんなものか。大きなビジネスがかかった勝負に出るやり手営業マンを演じる映画俳優、の真似を演じるただの編輯者にしか見えないけれど。

「若い、は余計です。もう、そんなに若くありません。え、でも、新人賞、なんですよね。私で大丈夫なんですか」

「あー、やー、そこは大丈夫、遠藤さんは気にしないでいいから。代役、見つけてありますし」

「だい、やく」

なるほど、そういう仕掛けか。一流企業への昇格のオブセッションに捉われた新興の編プロが、ゴースト・ライターを使って狂言新人賞をでっちあげる。予期せぬ様々なドラマが待ち受けていそうだ。いや、分かり安過ぎる。私のシナリオだったら、こんなにあけすけにからくりを私に明かしはしないだろう。ストレートに全部隠さず打ち明けることで、無理やり私を共犯関係に巻き込もうとしているのかもしれない。なら、ビジネスのやり方としては簡潔かつ頭を使わなくてよくて楽だし、現実の仕事の仕方としてはベストなんだろう。現実では。でも、もし仮にこれがフィクションのプロットだったら、作者が段取りを考える手間を惜しんでいるように受け取られかねない。それはレヴェル一の注意事項だ。後でメモっとなきゃ。メモすることは、それと、お絞りで顔を拭く男性。

「川元さん、って言う人。川元菊さん。慶応大学の三年生だって、頭がいいんだね。純文学系の、小説家志望。何が何でも、大学を出るまでに賞を取って小説家になりたいんだって。代役がバレれば彼女にとっても夢はぶち壊しで、大変な不名誉となるし、口を割ることはないだろう。金も積んである」

「なるほど、はい、判りました」私は飲み込みよく頷いた。

面白い。現実世界を舞台にしたシナリオを書くのなんて、これが初めてだ。土偶君から貰った（借りた）原稿、今パソコンに起こしている、あれがちょうどいい。あれに手を加えて使うことにしよう。そのとき私は思わず、シナリオ・ライター魂に火を点けられてしまったのだが、もしかするとそこまで玄田の計略の一部だったのかもしれないなんて考えるのは、妄想だろうか。「今度、何時でしたっけ。その時までに梗概を作ってきます」

「じゃあ、来週にミーティングと行きますか」玄田は安心したのか、ホッ、と表情を崩した。「内容の方は百パーセント、泉さんを信頼してるけど、だ、プランというか、あれ、で、こっちからの注文を聞いて貰うことになるかもしれない」吃っている。相当量のアドレナリンが玄田の頭脳に分泌されたらしい。

「この件は、俺と西島が担当なので、俺がいなかったら、あっちにね」

西島さんとは、あの眼鏡の人だろうか、それとも、あの眼鏡の人だろうか。この喫茶店に来る前にオフィスに顔を出して挨拶し、社員の自己紹介を聞いた。社長以外の二人は眼鏡を掛けておられた。どっちがどっちかよく覚えていない。

と、そんな風に、おれは頭がおかしい（としか思えない）自称女優少女の瞳を見るフリをしながらまったく関係ない才能溢れる女性シナリオ・ライターについての妄想を書き殴り続けたのだった、それから数週間に亘って。その中の一部分だけど、次に掲載してみようと思う。順番は途中からよく判らなくなってしまったから、どっちを書いたのが先だったか覚えていない。まず、どのファイルか分からないけど何故か既にPDFになってたやつを先に見て欲しい。ウィンドウズ・ユーザにも読めるように他のやつもエクスポートしておこう。兎に角こいつから――。

家に帰り、早速それから一週間、徹夜でこの小説を書いた。小説を書くのは中学生時代以来だったけど、うまく出来たと思う。玄田さんの提案通りまずシナリオを書き、それを元に同時進行で小説を書いた。でも土偶君の原稿を起こしている最中、つまり、あなたが読んでいるコレを書いている最中は、そんな展開になるなんて予想だにしていなかったのだし、まったく運命は不思議なもの、未来はどうなるか分からないものなのだという教訓。ついだが、私はその時まだ気がついていなかったのである。執筆を私が担当し、川本さんという文学少女が当選者の役を演じる、と始めから決まった状態で、玄田は新人賞の公募を打とうとしていたことの実際的な意味を。当然、何も知らない人たちの応募があった。

でもそれらはみんな、遠い未来の御伽の国の話で、今は物語を進めることに専念している私なのである。読んでいるあなたに楽しんで貰わなきゃいけない。それ以外、物語作者の存在理由なんて何処にもないわけだから。面白いですか？ 私は小説は慣れていないし、右も左もって感じで、拙い語りだけど、無理やり乱暴にでも面白いところを探してくれたら、嬉しい。例えば、ほら、映画なんかだと、好きな人は、製作者が失敗して硝子に映ったカメラさんがフィルムに残っちゃったりしてるシーンを見つけて喜んだりしてるじゃないですか。ああいう風に粗探しをしながら、私の恥ずかしい部分を探して読んでくれると一番、嬉しい。お客さんがどんな顔をして読んでいるのか、色々考えちゃいつつも、私。兎に角、土偶君の原稿は次のようにドンドン続いていくんだから、私は打ち込み続けるしかない。土偶君らしい安っぽいパルプなシーンが続いていく。どっちにしろ、書いている私は気持ちいい。脳が頭蓋骨の中で浮かんている。それもこれも、私の口が悪くてヒップホップみたいになってるのも、*****のせいだって言いたいんでしょ？ 私が変なのは元からだよ、*****飲んでるときのが普通なんだよ！

二名子

ロビーで雑談したり、御手洗に列をなしていた観客が少しずつホールに帰り、パンフレットに挟んで渡された他の劇団のチラシを読んだりアンケートに記入したりし始める。

ブザーが鳴り、幕が上がったままになっていた舞台に再び照明が灯る。

休憩中念入りにお化粧をチェックした私は最後に前半ナレーションに立ったときと同じ朝露草柄ジーンズのエスカルゴ・スカートを整えて楽屋の鏡を離れ、帷幕の蔭に立ち台本を手に次の幕の進行を反芻してスポット・ライトの呼び出しを俟つ。

「さて、時計の針が予定の三時四十分になったところで劇の再開です」と、私は切り出した。「この辺りで、物語を盛り上げてくれる主要メンバの紹介をすることにしましょう。まず、作者のヤナギダドウ君。ドウ君が最大の重要人物です。わたくしは彼の原稿を読んでいるナレーターに過ぎません。じゃん。よれよれの地味な服を来ているのは、原作者としての立場をアピールするためです。正装するとこれが、名前に似合わず男前の好青年です。与えられた仕事は必ずメ切までにこなす、誠実で仕事熱心な若き脚本家の卵。前途有望なドウ君に盛大な拍手を。」

次は主演女優のタカネちゃん、なんですが、タカネちゃん？ おかしいですね。お化粧直しがまだ済んでいないんでしょうか。彼女の紹介は最初に済ませてあるから、もうお馴染みですよ。不幸な生い立ち故の、生まれながらの真の女優、スズキタカネちゃんです。最初にも言いましたが、タカネちゃんは大の羞しがりやだから。もうすぐ会えると思います。

次に、エンドウ君。下の名前は余り出てこないけど、カシヤ君といいます。元、警視庁のキャリア刑事。現在は、職権を抛棄して、良心の命ずるまま、势力的に犯罪の捜査に取り組んでおります。彼も、仕事が顔に出る年頃に近附いてきたということでしょうか、ドウ君に劣らず男前です。警察にいいイメージを持っている方なんて少数派かもしれませんが、応援して上げてください。

そしてエンドウ君の許婚者、ナレーターを勤めますわたくしは泉二名子と申します。短い時間ですが、どうぞゆっくり最後までお楽しみください！

今入ったニュースです。主演のタカネちゃんなのですが、予てからもう舞台には立ちたくないと言っていたところを、エキストラの一人としてこの劇に紛れ込んでいた自称二枚目男優の男に唆されてなんと本当に失踪してしまったそうです！拍手が足らなかったのでしょうか。もっと、可愛い可愛いって騒いで上げるべきだったのでしょうか。

役者というものは、脇役が全員いなくても、最悪の場合、主演一人で舞台を持たせることが出来ます。でも、当の主演女優がいないと物語を進行することが出来ません。タカネちゃんはわたくしどもの物語の最終目的、存在理由そのものでした。舞台に彼女が不在になって始めて、わたくしどもはその事実を苦くも咀嚼させられているのではないでしようか。何卒、静粛にお願いします――。

どうやら時間が空いてしまったようです。では、タカネちゃんが帰って来るまで、皆さんにそのことを話し合って貰おうと思います。彼女が帰って来なければ、残念ですがタカネちゃんなしで舞台を進行するしかありません。わたくしどもはどうするべきだったのか。そもそも、わたくしどもの態度に落度があったのか。どうすれば、彼女は帰って来てくれるのでしょうか。意見のある方は、遠慮なく挙手願います。どなたか。

おられませんようでしたら、わたくしの方からこの物語の來歴を御紹介することにします。わたくしからの話の中で主演女優失踪問題のヒントが見附かるかもしれません。話の途中でも、質問やコメントがありましたら挙手ください。タカネちゃんの居場所についての情報も同時に受け附けます。なお、皆さんの中にスズキタカネちゃんに該当する方がおられましたら、帰ってきてください！自分が本人である確信がなくても、構いません。物語の進行のために、帰ってきてください。宜しく願います。

ええと、あの、此処にこうして舞台上に一人立って皆様の注目を集めておりますわたくしは物語の語り手でございます。わたくしの言葉は仮令それがクライアントからサーバに送信されるリクエスト・メソッドの匿名のPOSTデータであったとしても特別人目を引く光輝を持たねばならないのです。わたくしは外出しない日も欠かさず化粧に毎朝三十分は掛けております。自分が象徴が織りなす物語という配列を書き出すチューリングのオートマトンであると感じるほど、わたくしは完全に定められた法律と不文の人倫とに従っており、物語の中と外との誰にも不快感を与えないように気を配っております。客席の皆様、どうか穏やかに静謐になさってください。わたくしは將來の家族旅行の資金を捻出するために子供騙しの論文を提出して税金をくすねるような真似がどうしても出来なかったのでございます。あなた様がその意志自由に基づいた観劇で心からわたくしの物語を享しんで戴けないのであれば、路頭に迷い恐怖と狂気とによって喰い死ぬか、さもなければゲリラになってテロ集団に加盟するしかないのでございます。然も、日本語は漢字と片仮名とによって兩つの方向に底の抜けた言語であるために、習熟が究めて難しく、日本語に固有の美質があると申しますれば、それは謙遜と謙讓の通牒の内にはしか見出せないものなのでございます。台本の進行が困難となれば、わたくしと致しましてはこの言葉をアド・リブという不断の改鑄に供するしか方策がないのです。

この物語のタイトルは、パンフレットを御覧になった皆さんは御存じだと思えます。意味深ですけど、漠然としたタイトルです。莫迦にした話ですけど、わたくしの名字が泉つてところから來てるんです。編輯長のクロダさん、きつと寝不足だったんですね。最初はずばり、『鏡花』と附けられそうになり、わたくしは慌てて抗議しました。まあ、『ピン子』じゃないだけよかったのかなあ。次の候補が確か、『華柄の魂』だったでしょうか。これは余りに純文學的過ぎるというか、観客の女心を露骨に意識し過ぎているということ。『華柄の少女』が『華柄の鏡』になり、鏡に柄とはナンセンスでいいんじゃないかと言うことで、最終的に『華柄鏡面體』に落ち着かせたのは學生運動やアングラ演劇の過去を知っている世代の社員の方でした。あ、受けてない……。情報性のない話題で引き摺っ

てしまつて申し訳ありません。一人芝居の役者さんなどはともかく、わたくしのような舞台女優上がりの語り手はアドリブとか慣れないものなのでございます。それでは、ついでですから、『華柄鏡面體』というタイトルが附いた経緯の辺りからお話することにしましょうか。

最初に編集部にお邪魔してから一週間後のことです。わたくしはシナリオ版と小説版の二揃えの原稿に『ラグ・タイム』と仮題を附けまして、編輯人のクロダさんに直接提出いたしました。SFともファンタジーともつかない全體にナンセンスなこの物語に、ラグ・タイム——切れ切れの時間というタイトルは、マトマリとコンセプトを添えてくれそうな気がしたからでした。そんな風な自己参照的なタイトルで先回りしておかないと、ラフで衝動的なこの物語の構成の乱雑さが技巧的未成熟の印象ばかり与えることになり、評価を落とし兼ねないという配慮もあったのです。

校閲部のニシジマ氏が再校で即座に指摘したように、この物語のプロブレマティックは、そのモチーフを警視庁を飛び出した逸れ者の一匹狼と、急速に下火になりつつある共産主義の過激派の學生グループとの対決に買っていることでした。物語を全體としてみた場合、視点は明らかに刑事の側にあるのですが、個々の部分を切り出してみればパースペクティヴはどちらかの立場に焦点を当て続けるわけではなく、常に揺らいでいました。要するに、二者の葛藤そのものがテーマなのです。そしてその主題は、つい半年前、実際に新聞を騒がせたある事件を彷彿させるところがあったようです。物語はその事件を、政治的な要素を脱色してただのスリラーとして描いています。政治的な要素なら主流文學の作家たちがこぞって書き尽くしてしまっておりまして、今さらわたくしの立場から新しい切口が提示できるとも思えませんでした。わたくしはただ、茶化したかったのかもしれない。茶化してはいけないはずの何かを。わたくしはすでに込み入った黒幕の仕事を依頼される程度の足場は築いていたとはいえ、『小説くろすわーど』は三流娛樂誌だし、しかもクロダさんにとっては情報書房で手がける初めての仕事でありました。わたくしにはそうした、政治問題のマッチョイズムに反発するというお約束をモチベーションの選択で演じて見せねばならない程度に自信がなかったのです。

クロダさんはまだ若い方でした。わたくしと同世代か、少なくとも三十になっていないでしょう。ニシジマさんにいたっては、まだ大學在學中というから年下ということになります。校正部と言いましたが、校正者はニシジマさんただ一人で、しかも『小説くろすわーど』の編輯者は実質、クロダさんと彼のたった二人でした。

編集部は極端に多忙でした。ニシジマさんには學業の残りがあったし、クロダさんは入社したばかりの情報書房で彼自身に対するニシジマさんにあたるような仕事を複数掛け持っていました。情報書房の従業員数はわたくしの識る範囲で十人前後であり、会社全部が四ツ谷四丁目の貸しビル一間に収まっていました。クロダさんの机は入口と、『別室』と呼ばれている、社長が社員を一人だけ連れ込んで仕事の疲れとヒステリーを吐露するために衝立で仕切られた空間に面した位置にありました。ヒステリーは良くも悪くも場のデイスコミュニケーション、言語水準の低さの表徴であります。表向は——少なくとも自社内では——情報書房が同人誌を編輯してそれなりの実績を上げていたクロダさんを見出し同社に吸収したということになっていましたが、実際にはそんな甲斐性のある会社ではないはずでした。このリクルートは全面的に社長、カワゴエチカコの性的願望充足のためのものであるというのが社内の暗黙の了解であるようでした。わたくしだって同じ働く女性の悪口を言いたくないんですが、社長は可愛い女ってタイプではありませんでした。男だったら、きっと、銀座資本にせっせと捧げ物をしていただろうタイプでした。別に、仕事が出

来る女が必ず可愛らしくなければならぬという規則はないと言われるかもしれませんが。どちらか一方しかない人がいたって構わないですよ、社長。

対するクロダさんにしても、さしたるいい男ではありませんでした。オールド・ミスが惹かれるに足る、何と言いましようか、天性の明るさのようなものはありましたが、わたくしから見ればその明るさも底が透ける性質のものではありませんでした。しかしながら、わたくしにオフィスまで原稿を届けさせたクロダさんの行動も、案外、カワゴエ社長に対する逆説的なアピールが動機であつたらしい、なんて指摘したら嫌われてしまうでしょうか。

さてこのシーンで皆様に覺えて戴きたいのは、とんでもなく不細工なカワゴエ社長と、そのオフィスに居候している形の、そんなに目立った不細工でもないクロダ編輯長との対照です。わたくしはクロダさんの方は口で言うほど嫌ってはおりませんでした。そのように記憶しております。

わたくしの鞆には原稿マスのA4ノートが入っていました。クロダさんと何度も二人で読み返して赤や附箋を入れた來月分のノートでした。作文の経験なんて全然ない舞台女優が持ち込んだ読み難い原稿を最初に読んで下さったのも、表記や原稿用紙の使いかたから御親切に指導下さったのもクロダさんでした。ポルノ雑誌の隣に並ぶ様な『小説くろすわど』に、現役刑事の愛人が書くなどと触れ込みつつもわたくしの政治色の強い小説の連載を組んでしまったクロダさん。カワゴエ社長の眼を気にしてその後は毎回喫茶店『辻褃』で待ち合わせることにしていたそのクロダさんは今日の別れ際にも、『社長に誘われててね』と愚痴をこぼされました。『あの人も悪い人じゃないんだけど。俺としては仕事とその手の人間関係は別にしておきたい。普通そうだろ。社内恋愛推進派なんて、普段モテない連中だぜ、きつと』

『そうやって、困ってるうちが華ですよ』とわたくしは答えました。『今におばさん方すら相手にしてくれなくなりますから』

ほのぼのと気弱そうに嗤うクロダさんでしたが、編輯業界に伝手もなくオフィスを間借りしている手前苦しい立場ではあったのでございましょう。十数年後にはありふれているであろう編輯プロダクションを起こして独立なんて選択肢も当時のクロダさんには与えられていなかったのですから。

わたくしは一人『辻褃』に残って、擦り切れた少年漫画誌に囲まれて原稿を読み直していました。読者カードを読んでいるのはわたくしじゃないけれど、クロダさんを通して伝わってくる反応は上々で、結婚して子供が出来る頃にはわたくしは小説家かシナリオ・ライターになって、例え舞台で誰も見向きもしてくれなくなっても言葉の世界で第二の人生を歩んでいることなのだろう。その頃には遠藤くんも警視庁に配属ガエになって、部下も増えて、お給料も増えて。わたくしは取調室の描寫にちよつと不確かなところを発見して、公衆電話に立ってその遠藤くんのいる四ツ谷署捜査一課に電話いたしました。刑事の恋人だとそういう便利なことがあるのです。

『何処にいたの』と尋ねてきたのは遠藤くんでした。

『「辻褃」だよ。探してたの』

『何処にいたんだよ』と遠藤くんは再尋しました。『察に何度か電話したんだけど、いないからさ』

『作家業の方でね』とわたくしは答えました。『私も忙しくなってきたってわけよ』

『ニーナ』と遠藤くんはわたくしを呼びました。因みにこの呼び名は遠藤くんの専売特許ってわけじゃなくて、客席の皆さんもよかったら使ってくださいなのでございます。

『ニーナ。今の人生に満足しているか』

『え』

『だから今のジンセイ。生活。将来』

『別に、私は満足だけど。新しい仕事にも馴染めそうだし、それに、もうすぐ結婚してくれるんでしょ。不満なんて何もないよ。ねえ何でそんなこと聞くの。遠藤くん、変な宗教にでも引っかけたってない？』

『未来は、見えないからこそ未来なのかもしれない』と電話口の遠藤くんは呟きました。

『未知の世界に生まれたばかりの新生児も、最後の呼び出しを俟つ死刑囚も、未来が見えないからこそ一秒ごと、一呼吸ごとを生き延びることが出来るんだ』

『私は未来が見えるよ』とわたくしは言い返しました。『あなたがいて。芝生つきの新しいお家があって。私たちの子供がいて。子供より大きなゴールデンがいて。早く未来が来ないか、待ち遠しい位だわ。違うの』

『じゃあ、今夜行かないか、未来に』と遠藤くんが言いました。『但し、君が言ってるのよりさらに十年くらい後だ。二〇〇四年』

『んー？ 別にいいけど、そってどれくらいで帰ってこれるの。二日以上は無理かな、私』

『日帰りだよ。じゃあ、八時半に四谷駅の電話ボックスのところで』

『じゃあ』

わたくしは電話を切って会計を済ませ、寮に帰ることにしました。取調室のことは今夜、落ち着いてから聞けばよいではないか、と。わたくしも舞台女優時代に日本全国いろんなところにお邪魔して来ましたが、二〇〇四年は初めてだったので衣装に悩みました。イメージはスター・ウォーズのレイア姫。自前で一着持っていたオードリーみたいな白いドレス（冠みたいな髪飾り付き）を身に着けて鏡の前に立って領いたものの、万が一、行ったら先がスター・ウォーズとは違ったら、と思い直してドレスは畳んでリュックにしまい、結局、家出して最初の劇団の門を叩いたときに着ていたジーンズの上下を着ることにしました。ジーンズなら例え周囲が宇宙服だろうとダースベダーがいようと、溶け込むことが出来るだろうし、何、安全を確かめてからトイレでリュックからドレスを出して着替えればよいではないか、と。

そんなわけでわたくしはわけも分からず、迂闊にもリュックサックにはドレスだけ詰めて未来行きの地下鉄に乗せられ、ついで人生のように長いあのエスカレーターに乗ったのでした。

地上に出たかと思うと四号線中央通り地下にまた入り込む複雑な経路は山と谷が多い東京の地形ならではの、朝九時から夜六時まで運転する動く歩道に逆行して歩き、わたくしは新宿ビルディングとサンクスの前のS2出口から最後の階段を上って新宿の中央郵便局前の銀杏並木に出ました。左手にはエステック情報ビルと工學院大学の背後に京王プラザホテルと新宿住友が聳えていましたが、すぐ側にあるはずの都庁の庁舎は隠れていました。背後は三井や損保ジャパンの隙間にヒルトンや野村証券が林立しています。副都心が大都会に見えるのはその辺りからだけで、五分も歩くと空が見遙かせるようになるのですが：今日は、今夜はクロダさんとの打ち合わせで、だから新宿じゃないのです。地下鉄を乗り過ぎてしまったようで、カードで改札を通ったから気が附かなかったものの随分わたくしは寝過ごしてしまったようで、寝ている間見ていた夢のことすらはっきりと思い出せて、夢の中、わたくしは遠藤くんと地下鉄に乗って、でもその頃の地下鉄はまだ荻窪線が丸ノ内線に合併してなくてだから、わたくしは夢の中でもクロダさんという人と文筆で仕事していただけどそんなことあるわけないからやっぱり夢は夢。頭を数度左右に振って眠気を覚まし、わたくしは再度地下道への階段を下りたのでした。

クロダ社長は仕事の虫でございました。御本人の御存じである職業、編集プロダクション経営が人間のなし得る唯一最高の存在形式であると信じて疑っていない風がございました。その思い込みは、物書きとして依頼を受けたわたくしすら編プロの会社を起こす夢を

持って仕事を覚えるためにだけにそこに潜入しているという前提が彼の中で勝手に成立している程だったのです。会えば二言目には、その様にしてアルバイトやフリーライターから出発してヴェンチャー企業を起こした人物の噂話を聞かされました。それも、わたくしを自分の机の前に呼びつけて、自分は椅子に座り出来る限りのけぞって話されるのでした。椅子に座るのはわたくしより低い伸長を、のけぞるのは頭頂の薄毛を隠すためでした。

この手の中小有限会社を経営する社長が皆さんこの様にワンマンなのは、キャバクラでしかモチないのは、不細工で貧相なのは誰の陰謀なのでしょうか。少なくともわたくしには責任がございません。と、そのような物語がわたくしの知らないところで作られて、その中の配役が一つ、二〇〇四年のわたくしに与えられていたのです。

『ニナコさん、でしたっけ』とわたくしに聲をかけたのは、そのオフィスに間借りしてウェブ・デザインの会社を構えていたカワゴエチカコさん推定四十五歳でした。デザイン会社と編輯プロダクションでは全く畑違いである上に、家賃を一度も払ったことがないらしいカワゴエさんの机が何故このオフィスにあるのか、謎といえば謎ですが社内では公然の謎だったようです。クロダさんは十歳も年上でしかも旦那様とお子様を地元大阪に残して單身赴任中の、しかも伸長も数センチ上回っているカワゴエさんをこともあろうに『チカリン』と呼んでいました。チカリン！ 社員の前で！ 社員といっても三人ですが。チカリン、お昼どう？ チカリン、飲みに行こうよ！ チカリン！ ……公然の謎です。社員の方一人一人にその辺りの事情、心中をインタヴューしたいところでしたが、流石に日本のサラリーマン、表情一つ変えずに電話の応対や帳簿の整理を続けておられるのでありました。チカリン！

『お住いはどちらでしたっけ。もしよかったら駅まで』と仰ったチカリン、基、カワゴエさんと連れ立ってわたくしは、『お疲れさまです』と一通り聲をかけてオフィスの重たい鉄の扉を押して、古いビルのエレベーターに乗りました。俯いて黙っているわたくしを横目にカワゴエさんが独り言のように、『クロダさんもね、あれで昔はむっつりした男だったのよ。活字関係の男性に在りがちな。でも彼は気づいたわね、彼は』と仰いました。

『だから今はああいう感じに明るいでしょ。本当は暗いのよあいつ』

気づいた、の口調が印象的でした。恰も、私が気づかせた、と行為の真の主語を雄弁に語るかのような。私が気づかせたのよ。口約束ではいつかって言っているけど、オフィスの家賃なんて持っても払うつもりがないのよ。あんなキャバ嬢の話ばかりしてる独身若禿三十男と不倫なんてするわけないじゃないするんだったら相手は社員のニシジマくん辺りね。若いし。綺麗だし。しっかりしてそうだから、後腐れなさそうだし。そもそも不倫のようなアホなことしないけど。編プロとウェブ関係では畑が違うから住所がカブッてても問題ないのよ。住所さえ確保できたら後は電話とメールだけで仕事できるのよデザイン会社なんて従業員全員S O H Oだし。どう、楽勝でしょ？ ……素晴らしい。まったく、印象的ですよ、あなたたちは。

『ところで、ニナコさん、あなたはどんな仕事で来られたの』と好奇心いっぱいにわたしの顔を覗き込んだその瞳は栗鼠の様に愛らしくて、山口小夜子みたいに長く伸ばしたサラサラの黒髪共々、まったく四十五歳とは思えません。本当の歳は知らないけれど。どうやらそのようにしてクロダさんの方にやって来るライターたちを偵察するのがカワゴエさんの道楽であるようでした。

『私はですね、新人賞の当選作を書くように頼まれてまして』

『ふんふん。賞の当選作なんて、普通、ライターさんに依頼してこないわよね。面白そう。ところでこの辺りはよく来るの？ お洒落なバーがあるんだけど、これから教えて上げようかと思って。ちょっと高級なところだけど、お金払ってくれる男性、いるんですよ。今日は私が。まあまあ』

わたくしの話に興味を持ったカワゴエさんの巧みな誘導によってか、あるいは興味を持たせる様な話し方を意図してしたのはわたくしだったのか、わたくしはワイン一本ウン十万円しそうな居酒屋に連れ込まれたのでした。『お寿司の方がよかったかしら。食べたいものあったら言ってね』

普段飲まないカクテルじゃないお酒が回ったせいか、イキイキと輝くカワゴエさんの瞳に吸い込まれてか、わたくしに秘密に関する貞操観念のようなものが欠けていたせいか、あるいは欠けているのは外部に対する社会的な善意一般であったのか、わたくしはさっきクロダさんに喫茶店『辻褃』で聞いた今回の仕事の内容を問わず語りに語り始めました。

『何かですね、文学賞を立ち上げたいらしいんです、クロダさん。学生時代にそういう、新人賞とか、応募したりしていた方らしくって、やっぱり夢があるらしいんです。本物のブンガクとか、そういう方面に』

『ふんふん。グラスが空だよ、次は』とこちらも頬を赤くさせたカワゴエさんが體を擦り寄せてきました。

『あ、同じやつ。いいんですか。ごめんなさい。それでですね、ブンガク方面はなんて言うか、既得権益の横行する世界らしくて、いや、逆にブンガク的な権威なるものが既得権益というか、永劫不変性の仮象を要求するのか。兎に角無名の編輯プロダクションが割り込める椅子はないらしいんです。その無い椅子を無理矢理創出するようなクリエイティブな計画らしくて、そのクロダさんがなさっているのは。それで、どうしてもその、第一回の受賞作を成功させたいと。成功って言うのはクロダさんの話し方だと、映画化とかゲーム化とか、そういうメディア・ミックスの方面のことらしく。要するに、活字プロパーではないとこに評価の土俵を設定して勝負しよう。でも近年の大手文学賞の受賞作を調査しても、必ずしも全部が全部映画化されているわけではない。それは良質な作品が集められなかったただけじゃなくて、映像向きじゃない作品を選んでるからもあるだろうと。そんな感じですよ』

『ナルホド。確かに私が才能ある無名の小説家だったら、クロダさんのところには送らないわね。でも募集してみないと分からない？ 小説家なんてみんな変人だから、評価の固まってる大企業より小さい編輯社を好みだりするものなんじゃない。お金を使ってライターに書かせた作品の方が確実なのかしら』

『クロダさんはそう思ってるらしくて。ブンガク青年だった自分の経験から、やっぱりそうらしくて。私みたいな映画関係のシナリオを書いている人間をゴースト・ライターに仕立てなきゃ、少なくとも映像化に向けた作品は出て来ないだろうと』

『ナルホドね。クロダさんには彼なりの考えがあるんだろうね。よしやあいいのに、って私なら言いたいけれど。今のまま、エロ本とか本当にあった恐い話の本とか作ってたらいいのにね。そっちの方がずっとブンガク的な生き方って気がしない、ブンガク作品を売り出すのより。そんで、じゃあ、あなたはゴースト・ライターなわけだ。まさか、あなたが受賞者として発表されるわけじゃないでしょ』

『鋭いですね。実は、今日「辻褃」でお会いしたんです。私がゴーストになる本體の方に。慶應大學の學生さんで、カワモトさんって言う女の子』と言いながら、わたくしは鞆から資料のコピーが入ったクリアケースを取り出してカウンターに広げた。『カワモトキクさんって言う、英文科の。彼女の方が先に「辻褃」で俟っておられたんですけれど、それが凄いですよ、全身ピンク・ハウスだったんです。で、私も小説を書いているって言って見せて戴いたんですけれど、何て言うか、思ったより上手なんだけど、内容が、男性と男性が絡むやつなんですね』

『ああ』と言い、カワゴエさんは肘を突いた片手にグラスを揺らしたまま少し遅れて何度か頷かれました。

『御存じですか？』

『私が若かった頃もそう言うの、好きな子いた。キャプテン翼のパロディとかでね。私は分かんなかったけどね』

『それで、クロダさんに関係がある商業誌でそういう小説を書いてたらしいんですね。それで、その作品を読んだんですけど、凄く上手なんです。何ていうか、真っ当な日本語で。そこいらの知られている純文学なんかより文章力があると思いました。私には判断する能力、本来ありませんけど。それで率直にいいですね、上手いですね、って言うのと、その、ピンクハウスで丁寧に礼をなさるんです。「光栄です。イズミナコ先生に褒めて戴けるなんて、舞い上がってしまいますわ」って。……私、ピンク・ハウスには文句ないんですよ、そう言う風に聞こえてるかもしれないですけど』

『分かってる、分かってる』

『お洋服に顔が負けてるってタイプじゃなくて、すらっとした美少女だったし。クロダさんは顔でこの子に眼を附けたんじゃないかって思えるくらい』

『微妙なとこだね、ゴースト・ライターさんとしては』

『私には分かんないな、そうまでして受賞者になりたい気持ち。世代ですかね』

『金だよ、金』と言ってカワゴエさんは親指と人差指でマルを作りました。『原稿は書いてるの、それで』

わたくしは頷いて話を続けました。『倒叙推理モノにしようと思って。現代の、インターネットを舞台にした。倒叙推理小説というとクロフツの「クロイドン発」って言うのが有名なんですけど、知ってますか』

『うん、うん』

『本当ですか。じゃあ、クロフツの代表作は』

『「樽」ってやつね』

『おお。そのクロフツは黄金期の推理小説の中では異色で、嫌味なディレックス探偵も出てこないし、読者を煙に巻くようなプロットも立てないんですね。本人が元々土木関係の技師だったらしくて、そういう推理小説のお約束を脱色して中の精密な機械を露出させるような作品を書いた。で、倒叙推理小説って言うのは推理小説なんだけど、視点が犯人なんです。つまり推理小説の舞台裏を暴露するような小説で、さっき言ったようにクロフツの「クロイドン」が有名なんですけど、この小説は法定をチェスのボードに、イギリスの法律をチェスのルールに準えた見立て小説なんです。しかも「チェス」という言葉は一度も出てこないのに、そうなるのが解かるように書いてあるんです。チェスって言うのは主流文学のキャロルとかボルヘスが好んだテーマです。しかも余り指摘されない事実なんですけど、推理小説が飽きられた後の戦後フランスの、カミュの「異邦人」とかロブリグリエの「覗く人」なんかも一種の倒叙推理小説なんです。それで私も今回はその線で行こうと。それからモデルなんですけど、デニス・ニルセンって知ってますか。1979年から82年位にかけて二十人近く殺したシリアル・キラーです。この人』と言ってわたくしは資料を並べた。

『人を殺しそうな感じじゃないね、寫真を見ると。なにに、「階下に住んでいたビビアン・マックスティとモニーク・バン・ラッテは、ニルセンを、『素敵な人』『鎧に身を固めたナイト』と形容した。マックスティは『あの人の話す言葉に、私たちは夢中になりました』と語っている」、か』

『そう、心優しい殺人鬼。「子どもからキャンディを取り上げるよりも簡単でした。私は、むしろ彼に親切を施してやっているのだと思っていました。何故なら彼の人生は苦しみ以外の何ものでもないと思えたからでした」、バイ、デニス・ニルセン』とわたくしはニルセンの証言の部分を読み上げました。『「私が犯した殺人は、倒錯した交友のようなもの


```
#####java/util/Stack
#####
#.#-
#.#-
#.#-
#.#0###Fibb###java/lang/Object###java/lang/Integer###valueOf###(1)Ljava/lang/Integer;###size###(1)###intValue###push##&(Ljava/lang/Object;)Ljava/lang/Object;#i
#
#?#*?##*?##?#
#?#
```

でした。英語みたい、暗号でしょうか。ジャヴァ・ユースタック？ ジャヴァ・ラング・オブジェクト、つまり対象ジャワ語？ じゃあ次のジャヴァ・ラング・インテゲルは、素直に読むと、ジャワ語は神聖にして不可触なりと言ったところでしょうか。不可触のジャワ語の価値はイントな価値のサイズで（ジャワ語なる対象）ジャワ語なる対象を押すのであった！ お前は一體、何者だ！ 確かにミステリアスだけど、わたくしが求めているぬかるみの足跡とか吸い取り紙に残った走り書きの痕跡みたいなミステリーとは違う気がするのです。パソコン時代の物語作者に読者を唸らせる推理小説を書けとは何を意味するのか。わたくしは少し憂鬱で暴力的な気分になりました。

わたくしが例の『新人賞』の応募封書を見たのは次にオフィスを訪れた日のことであります。講評のゲラ刷も同時に。応募総数はざっと見て零が一つ多いようでした。

『大丈夫だって。個人情報保護を傘に着れば、バレようがないじゃん』とオフィスから出掛けにクロダさんは仰るのですが、わたくしがそのとき感じていたのは大量虐殺が行われたガス室の跡を訪れたような耳鳴りがするような痛覺でした。昼休みどきで、室内にはわたくしと校閲担当の黒ブチ眼鏡に短い髪を丹念に逆立てた時々見掛けるインテリ派サラリーマンのニシジマさんだけでした。わたくしは封を切られていない封書を見詰めてそれが訴えかける聲なき聲に耳を済ませるのです。

しかし奇妙なことに、その中でもっとも不幸であるのは一番であるとされる、何か機械的で厳密な手続きによって最高位に座らされたわたくしの作品なのではないかという感覺でした。うまく説明できません。誰にも出来ないでしょう。しかしながらそういう、わたくしと申しましては率直に言って不快な確信があったのです。不快感の源は、出来ることならそれら応募者の連絡先を全て控えて帰って謝罪の葉書を送りつけたいくらの罪惡感よりも、一人の人間に、まして一人の芸術家に許されるべきではない程度の矜持がわたくしの胸に蟠る紛れもない事実の方であるようでした。わたくしは丁寧に宛名書きされた封書の一つ一つを手に取りました。

『開けていいですか』ニシジマさんが頷いたので、わたくしは中の一つを開封しました。読み易いように左肩を丁寧に紐で閉じたコピー用紙。美しい、よそ行きの日本語。表紙にクリップで以下のような文面の便箋が留めてありました。

私の小説は明らかにこちらの期待するような要素を満たしていませんが、投稿した限り、私も心の何処かで受賞を期待していることを白状せねばなりません。他力的に平凡な日常を突き破る天啓を。しかし、もし偶然にも編輯部様、審査員様に気に入って戴けましたとしても、作者は「賞抜き」での出版を希望することを此処に書き添えさせて下さい。自分の信念に反して再び「賞」の匿名性を信じて投稿して

しまった自分への憤りの表現です。ただ、皆様の発行されます文學賞にはコンセプトと、それと現状のギャップとに多大な共感を持ったということがあり（自分が現代の編輯者であったとしたら同じような夢を見たと思う）、名前と制度の枠だけの残滓となった伝統的な文學賞を自ら望むことは私の場合、今後も決してありません。自分の能力に自信がありません。本当に作品に自信があれば、京極夏彦氏のように直接電話を掛けて自分の名前を告げるでしょう。

謝罪の葉書の文面が脳裏に過りました。そうじゃないんじゃないですか。何処か違うんじゃないですか。他の投稿作より少しでも読み易いように紐で綴じたり、思いを込めて筆で宛名を書いたり。あなたのブンガクはこういうレールに乗って競争することなんですか。こんな下手に回った言い訳する位なら、叫びなさいよ、あなたの錯語の限りを。意味なんてなくても気にしないで。ブンガクとは意味に満ちた天啓ではなくその絶望的な日常の回復の方のことじゃないの。例えば他者を蹴落として受賞作に勝ち残ったとして、あなたとブンガクにとって何か意味があるの？ 料理したり散歩したり、デートに誘ったり誘われたりすること以上の積極的な意味が。ねえ、聞いてる？ 本物のブンガクが新人賞の受賞者と落選者との間に価値の序列を認めると思う？ わたくしが間違ってるのかな？ 然しながら、本当に彼らに送りつけるべくそんなダイレクトメールを作って全てぶち壊しにするだけの狂気はわたくしにもございませんでした。そんな狂気を万人が持っていたら、もしかすると、世の中のためにはよいのかもしれない。世の中には。いや、分からない。わたくしにはハッキリしたことは何も分かりません。分からないのです。

『おれのこと莫迦だっと思ってるでしょ』と唐突にニシジマ氏が言いました。『こんな莫迦げた会社で、社長の狂言の後始末をさせられて、文句も言わずに』

『仕事に莫迦も慥巧もありませんよ』少し考えてわたくしは返答しました。『あなたの仕事はあなたにしか出来ない、特別な難しい仕事ですよ』

『社長は認めてくれませんがね』

『私じゃ駄目ですか』

そう言ってわたくしはニシジマ氏の丁寧に整髪料で固められた頭を両腕で胸に押しつけました。

『女の人に抱きしめられるのは初めてだな』とニシジマ氏は仰いました。

『眼を閉じて、好きな人のことを思い出してください』とわたくしが申しますと、ニシジマ氏は、『イズミさんかな』と仰いました。わたくしは『じゃあ、私のことを思い出して』と申しました。わたくしはニシジマ氏の眼鏡の氾濫縁の輪郭を胸に感じながら、彼の頭を撫で付けました。わたくしの嫌いなワックスでツンツン逆立てた髪を。平になるまで、何度何度も。そのときのことでした。わたくしの脳裏に、『クロダさんは死んでもよいのではないだろうか』という考えが過ったのは。言い替えれば、クロダ社長はテレビの中にいるべき人ではないのではないか、袖から仮想的な外部に退場して戴いて構わないのではないか、と考えたのでございます。

計画が失敗したら、わたくし自身がテレビの外に出ればいい。

その日も帰宅間際のカワゴエさんに聲をかけられました。

『ニナコちゃん、コンピュータをテーマにした倒叙推理小説を書いてるんだったよね。なら、グループで「第五世代」って検索してみるといいわ。八〇年代に日本で行われた最大の開発プロジェクトについての資料が出てくるから』

『どんな資料なんですか。ーＴって言っても私のは社会的視点から書いてますから』

『そうね。例えば、印籠も助さんも角さんも出てこず、延々、幕府から米俵をせしめよう

としている悪代官一味の会話が続く水戸黄門を想像してみて。あれを調べると、赤川次郎や浅田彰を読み返しても分からない本当の八〇年代の姿が見えて来そうだわ。日本の好景気を支えたと言われる当時のＩＴ産業の絶望的に御粗末な現実が。まあ、一言で言うとう自殺しそうな人には絶対読ませちゃいけない資料ってとこね。ただ、ソフトやハードの開発に附いての知識が少し必要だけど、社会的視点から書くにしてもあの手の資料を読みこなせる程度の勉強はした方がいいんじゃないかしら』

クロダ社長の女に不慣れなのにつけ入って甘い蜜をすって居られるカワゴエさんにそんなことは言えた義理がないとわたくしは思いましたが、口には出しませんでした。

『そうだ、私ちょっと戻ります』

『大丈夫？　クロダさんが一人で残業中よ。誘われても軽々しくついていっちゃ駄目よ。フリー・ライターなんて幾らでも首の挿げ替えが効く人材なんだから。一生その仕事続けるわけじゃないでしょ、あなたも』

日本を此処まで不況にしている当の実業家の一人にそんなことを言われる謂れはない、最高學府の不振は意外と社会に生きる庶民の科學への無理解を反映しているのではないかと言い返したい心持ちではございましたが、わたくしの圧倒的な立場の弱さを思い直して、『結婚する予定があるんです。だから』と申しますと、カワゴエさんは、そう、と納得の面持ちをされて手を振ってエレベーターに乗られたのでした。結婚の予定。その言葉は必ずしも嘘ではございませんでした。

わたくしは物書きでございまして、物書きとして、言語については自分なりに哲學的な所見を持っております。『鞆語仮説』と自分では呼んでおりますが、説明のために譬え話をしても許して戴けるでしょうか。想像してください。ミニスカートを穿いた女子高生が鞆で脚の間を隠して階段を上っています。この場合、彼女は隠すことを意思しているのでしょうか、それとも見られることを意思しているのでしょうか。わたくしは女だから分かるんですけれど、これはどちらの選択肢を選んでも不正解なんです。女は魔物にして生まれながらの俳優。すべての女はそうなのでございます。むしろ、二つの意味はそもそも排他的に対立してはいないのです。周囲の小父様方の視線はきつと釘付けですが、それは彼らがミニスカートと鞆なる二つの事物から独立に二つの意味を読み取り、女子高生という主體を基底としてそれらの間に対立が存在することを必然と考えたからです。同様にして日常的な、あるいは文學的な言語というのは、契約書や説明書の言語と違って何らかの観点で意味が曖昧であるのが普通だと存じますが、その場合併存する全ての意味は同等にその言語の意味であると考えなければならぬ、併存によって対立を読ませることこそが言語主體がその言語に込めた最も本質的な意味である、というのがわたくしの言語における『鞆語仮説』と申すものです。

そんな『鞆語仮説』がそのときわたくしの胸懷に去来しましたのは、その仮説が帰結として『発話者の理性の自由に基づく嘘は絶対にバレない』という命題を内包していたからでした。そしてまた、そもそも嘘は理性の自由に基づくかなければ不可能なのです。狼少年は『狼』という語に継起する存在と非存在という相異なる意味を与えました。村人たちはこの二つの意味に矛盾を見出し、非存在の方を選択することによって謬見に陥りましたが、この場合例え逆に存在を選択していたとしても、同じく謬見に陥っていたと思うのです。とすれば、村人たちが言語主體、狼少年が嘘を吐いたという事実の真意を見出すことは、彼らが主體自身ではないという限りにおいて不可能なのではないでしょうか。狼少年は不幸にして喰い殺されてしまいますが、それにしましても、嘘を附く、真意と事実を隠すという目的は達成した後の附随的な出来事です。少年は目的を達したのです。と申しますのも、狼の到来と不在は相互に置き換え可能な事象であるからです。

ある人物が一人の人物に自分は部屋の中にいると声明し、他の人物に部屋の外にいると

言明した場合、どちらに對して嘘を言っているのかという排除の関連で答えを出そうとすると、言葉の真意を捉え損ねてしまうということです。

翌朝、わたくしは昨夜の忘れ物を取りに会社に向きました。何を忘れたのか定かではありませんでした。忘れ物があるはずだ、そう思ったのでございます。ビルの前に数台のパトカーを見附けて、わたくしは立ち止まりました。事情を説明してくれたのはビルの守衛さんでした。

『今朝のことですよ。宿直室に入ると、クロダの社長さんが寝台の上に横たわってるじゃないませんか。いつものように残業で終電に間に合わなかったのかな、と思って肩を揺さぶってみました。すると肌が随分冷たいし、體がマネキンみたいに堅いじゃないですか。ははあん、これは死んでるな、と直感して警察に電話したんですよ』

わたくしに思い出せたのは、彼が帰ろうとしていたことだけでした。深更でビルにはわたくしと彼以外誰もいませんでした。わたくしが殺したとしか考えられません。かと言って自分では彼の首を締めた覚えがありませんでした。わたくしはただ茫然として、『そう、お気の毒にね』と申しました。

部屋に帰ると、エンドウ君からの留守電が入っていました。警察に捕まった、身元引き受けに来て欲しいということで、連絡先の警察署の電話番号が吹き込まれていました。元刑事が警察の御世話になっていては手がかからない、と言ったところでしょうか。大方、単独『捜査』中に警察手帳を持っていた頃の癖が出て法を踏み越えてしまったのだらうと予測して電話を掛けてみますと、意外にも罪状はストーリーカー規制法違反ということでした。物証は彼のポケットに入っていた巻き貝の貝殻だと説明されても意味が分からず、電話口の警察官に頼み込んで取調室に拘禁中のエンドウ君に変わって貰いました。そうだ、取調室の間取りについて確かめたいことがあったんだ、と随分昔のことを思い出しつつ、電話に出たエンドウ君の説明によると、こっちの世界にわたくしを連れてきたことが『彼女』にバレ、その『彼女』に逆怨みされているらしい、ということなのでした。逆怨みなら疑惑を晴らすことが出来るのではないのか、と申しまして、物証が貝殻である限りそれは不可能だということです。

わたくしは手早く身支度を整えて警察署に向かいました。途中、やはり億劫になって本屋により、普段は足を踏み入れないコンピュータ・コーナーの棚を漁ると、背表紙に『Jaws』と書いた派手な色の本を幾つも見附けることが出来ました。ジャワ語じゃなくて、どうやらジャヴァ言語と読むらしく、それはオブジェクト指向プログラミングなるジャンルの人言語であるということなのでした。どれも似たり寄ったりの教則本で、最初の章がHello Worldとか、階乗の数列とかを表示するプログラムの例で、最後の章はGUIとかデータ・ベースを駆使してCDや本の分類目録を作ると言ったものであるようでした。例の暗号文を解読する鍵が見附かるかもしれないと思い、その中の一番簡単そうな一冊に斜めに眼を通しました。

コード例は皆、じっくり読めば何となく意味が分かるように出来ていて、エンドウ君から送られてきたような奇怪なものは見当たりませんでした。數學の教科書みたいに章末には幾つかの練習問題が附いていたのですが立ち読みでは全て頭に入りそうになかったので、値段を確かめるために頁を最後まで繰ろうとした瞬間、本の中ほどに最後に練習問題が附いていない章があったような気がしたのです。その章の文體は他とは違って霧煙る六月の新緑のような瑞々しさではち切れているようでした。

その章とはある劇場の舞台の上で進行する物語で、語りは一人称の私でした。わたくしは思わず引き込まれて咄嗟にその章の最後まで読み始めました。語り手の私は一人で舞台

に立って観客の気を持たせるべくアドリブで身の上話をしていると言うのです。主演女優が休憩時間中に蒸発してしまい、劇の続行が中断してしまったのです。私は言葉を切って暗闇に押し黙る観客を見回しました」

手元の時計の針は五時四十分になっており、私はきっかり二時間喋り通したことになる。後二十分で幕は閉じる。ついに主演女優抜きで芝居を終えねばならないことになりそうなのだった。舞台上は高校の教室、放課後だった。それはそれまで何度か繰り返されたセツトではあったが、登場人物は二人切り、アイリとキヨミのみだった。もとより主人公のタカネはいない。それにしても私たちは去らずに残ってくれていたこの二人に感謝すべきなのである。さもなくば私の語りの非視覚的な記憶だけを持って観客を帰らせるところだったのである。

「おさらいしてみよう」と切り出したアイリの口調はすでに棒読そのものだった。「ユイが自殺し、タカネに対する執拗なイジメ行為が始まった。最初、タカネの机に置かれていたのは死んだばかりの小鳥の屍だった。私たちは戦慄した。次は白黒の寫真だった。その次には小鳥は死に蝕まれ半分土に還っていた。さて、今日は何が置かれているのだろう、予測できるかな」

「骨か、灰かな」とキヨミ。

「では確かめてみよう。おう、これは」と驚いて見せるアイリは始めからタカネの机の前に立っていたのだった。

キヨミが解説した。「アイリ、これは何の変哲もない旧式のテレビだね。壁掛式でもデジタルでもない。電源を入れてみよう」

テレビの中は、満員の客席だった。暗がりの中、膝にパンフレットとチラシの束を載せた人々の顔が、舞台からの光で照り輝いている。カメラはじわじわと一階後部座席にフォーカスして行く。画面の真ん中に若いカップルの観客が浮かび上がり、二人の顔がズームになったところでストップすると、肘掛の下で二人の手が握り合わされているのが見えた。

「ミサキだ」と、アイリ。「ミサキと、隣の彼はキョウスケさんじゃない。何でテレビの中にいるの」

「舞台の外に出ちゃったからじゃない、二人」とキヨミが答えた。「舞台の外は、テレビの中なんだよ」

「大変。私たちもテレビの中に戻らなきゃ。みんなあそこで俟ってるはずだから」

「じゃあ、テレビのスイッチを切ってみる？」

「俟って。その前に、タカネの様子が分かるかもしれない」と言っただけでアイリがテレビのチャンネルを回した。

「何言ってるんの。タカネは十八年前に死んでるんじゃない。亡霊を追いかけるのはやめましょう——あ」

大きく揺れながら早回しで出入口から劇場の外に抜けたカメラは勢い余ってテレビの外に飛び出した。突然映像が途切れて暗転したテレビの画面には、ソファに座った少女が映っていた。「タカネだ、でしょ」というキヨミの説明を俟つまでもなく、その少女は私たちの蒸発した主演女優に違いなかった。

「そこで何言ってるんのよ。タカネ」とアイリ。

「聞こえないって。テレビの中なんだから」

タカネはもともと腰を上げてヴィデオ・テープ、しかもソニーのベータ方式に変化していたドラマの映像媒体を停止し、暫く放心してから思い出したように巻戻しを押した。再生装置は轟音を立てた。そのけたたましい雑音が次第に一定のリズムを刻み始め、瞬きした次の刹那にはタカネは懐かしい車両の臙脂色のシートに座っていた。隣にはリョウが

いて、電車は山間の鉄橋を越えたところだった。眼を開いているだけで涙がこぼれそうになるのは別れの予感のせいなのだろうか。期は熟した。兎に角、タカネに明らかなのはその一事のみなのであった。

「君はこれからシンプリシティのところに行くんだ」とリョウが言った。「偽名かもしれない、筆名か何かかもしれないけど、シンプリシティなんて。君になら本当の名前を教えてくれるかもしれないな」

「本当は名前なんてないのかもね」

「どうして」

「ついさっき、刑事さんに聞いたんだ。人間はサーバとクライアントの二種類に分かれる、そして名前を持っているのはクライアントだけなんだって……」

「彼女はサーバタイプじゃないかもしれないな」

「いや、意外とああいふプライドの高いタイプが根はサーバだったりするのよ」

「プライドかぁ。シンプリシティが聞いたら、『実際にあらゆる角度から客観的に検証して私のほうが優等であると思われる人物を見下すことがプライドかしら？ それはプライドというより理性よ』とか、言い返されそう……」

「さようなら」

リョウが何処かで囁いた。

さよならって、どういう意味。本当に、消えちゃうの。違うでしょ。タカネは汚れてないよ。タカネはとても健全だよ。みんなが幸せになればいいと思うもの。社会が善くなれば。それだけが、タカネの。それなのに、何でタカネだけ、こんな目に遭わなきゃいけないの。

タカネは座席を立ち上がり、車内をズンズン歩いた。電車が揺れて、〈窓〉の外を光が、白けるみたいな所帯染みた朝の光が後ろに流れていく。車両間の扉はずっと遠くまで開放たれている。タカネは、空席を探してるみたいな振りをして、ドンドン前に進んだ。空席だらけなのに。

列車がプラットフォームに着いたところだった。タカネは飛び降りた、屋根のない、地面のコンクリートが酸性雨か何か凸凹になったどでかい椿の植木が等間隔に並んだ、アスファルトがひび割れ寂び附いたプラットフォーム。

単線の駅。数時間に一本の電車が着くと、ラジオを点けて一人でヌクヌクしていた駅員さんが出てきて、切符を回収する。タカネがまだ小さかった頃には、自動改札なんておもしろ珍しかったのに、そんな手作業の改札も東京ではお目に懸かることもなくなってしまった。駅前に出ても「駅前」はない。数年前に市の予算を傾けて造った半径十メートル程度のロータリーにも旅館の名前が行書でプリントされたライトバンが一台停車しているだけだ。眼の前に、漁協の宿泊施設が建っているが、そこも伽藍としている。懐かしい。何故だろう、タカネは心の中でそう呟いたのだ。

コンビニを探して道路を進む。財布に千円しか入っていなかったのである。それらしき店は何処まで歩いても見えてこない。サラ金のATMなら幾つも通りかかったが、それはまずい。国道の青い道路標識にはどれも、日本語の地名の下にロシア語が表示してあった。ついに次の駅まで歩いてしまった。線路はその駅で途切れていた。タカネはその駅員さんに、銀行のATMの在処を教えて貰った。渡された見辛い観光用の地図を頼りに、国道を十分ばかり逆戻りする。駅員さんはデパートといったが、外から一見したところそれは牛舎だった。日本で導入された初代のATMをそのまま使っているのではないかという、手垢で真っ黒になった画面の中で、受付嬢がお辞儀した。

お金を出して、さあ、今夜の宿泊先を探そうかと思ったとき、タカネは漸く思い出したのである。ホテルなんて探す必要はない。此処にはタカネの落ち着ける家がある。気がつ

いて、いろんなことを思い出して、涙がこぼれた。この町で経験したこと。東京に引越してからのこと。幼い頃のことと最近のこと。何故、電車を降りたときに気がつかなかったのだろう。思えば、プラットホームも、駅舎も、もしかしたら駅員さんも、当時とまったく変わっていなかったのに。

そこは、十八年前にタカネが生まれた町だった。

猫の影すら現れない、冷たい光で満ちた町を歩く。沢山のお店、小規模な個人経営の商店とか、スーパー化した酒店とか。人通りなら、ちらほらとあった。

山の方に近づいていく。なだらかな丘陵だが、標高が上がるにつれて唐松の灌木が多くなる。そうか、ずっと思い出さないようにしていたけど、タカネはこんな山の中で、こんな太陽が燦々と降り注ぐ山麓で生まれ育ったんだ。タカネは都会のお洒落な女の子だからそんなことは忘れていなければならない。でも本当は、タカネは自然の中で生まれたの。タカネは大自然の落とし子。

大型トラックが切り出したばかりの香ばしい材木を積んで危うく谷底に落ちそうな急カーブをゆっくり曲がって降りて行った。新しい塗炭、錆びて穴が開いた塗炭、一面の鱗、數十種類の羊歯、木の匂い、そして何処からともなく絶えず聞こえる清水のせせらぎ。何百年前に、誰が何のために並べたのか、嗤ったままでコケに埋もれ、朽ち果てた小さなお地藏さん達。時折、汗に湿った髪の中を、脇の間をヒンヤリした空気が流れていく。その道具小屋の陰から今にも、四、五歳のタカネが飛び出して来そうだった。

集落というのだろうか、数百メートル上った辺りで急に道幅が広くなり、アスファルトで舗装されていた。コンクリートの階段に鉄の欄が附いた細い路地に入ると、眼の前に遠く、波立つ海が霞んでいた。家屋の多くは戦前に建てられた別荘みたいで、人はいなかったが、その中に一軒だけ、生活の匂いのする民家があった。

天にも届くほどの塔ではないが、仕事をするには十分な広さの建物だし、この素晴らしい平野の景観を見渡すには高さも十分だった。

小さな畑の畦を踏んで裏手に回ると物置小屋と、樹皮のきしんで擦れ合う木の葉の囁きを透かして平野と遠い海に燐くレモン色に燦んだ光塵の明滅が網膜に焦点を結んだ。空様からの視線を背後に感じて振り向くと、家屋の二階、縁側のちようと真上で雲の紋様を反射した硝子戸の中から小さな女の子の顔が凝っとこちらを窺っていた。私は再度表に回った。重たい玄関の引戸を引くとそれは、ギィッ、と鳴いた。暗い土間に光が差し込み、眼を凝らしたが誰も見出せない。

否、誰かいる。奥の座敷から、足音が近づいて来て、「どなた？　こんな時間に來訪者だなんて」

「あなただったの」タカネは息を飲んだ。「じゃあ、あなたが私のお母さん」

相手も呆然としている。台所でもしていたのか、エプロンで濡れた手を拭きながら。それは、ゲームを逃れてリョウと電車に乗ってたときに出会ったあの人、シンプリシティだった。

「どうして、そう思うの」

「だって私の家にいるから。そうやって、私の家で家事をしているから」

奥からもう一つ、小さな足音が階段を駆け下りてきた。「ママー」

幼女だった。小さい女の子。それは……そのこも、さっきのシンプリシティだった！

だけど小さいから、でも未だに……シンプリシティがシンプリシティの足元に絡みついた。

「ママ、この人誰？」

「シンプリシティ、ちゃん？」タカネが呟く。

「うん。あれ、何でこの人私の名前を知ってるの？」

電車の中で見たあの厭味な女の人の子供時代とは思えないくらい、素直で無邪気な笑顔だった。タカネは過去を彷徨っているらしい。此処は何処？

「今はまだ、知らなくていいことよ」お母さんシンプリシティが穏やかに女の子の髪を撫でた。そういえばこっちはあの電車の中ときに比べてずっと歳を取っている。もう、八十近いかもしれない。何で最初に気づかなかったんだろう。そして、何でそれなのに、シンプリシティだと分かったんだろう。あのときの彼女とは全然違う、優しそうな、達観したおばちゃんだった。「あっちで遊んでらっしゃい」

「えー、またファミコン？ もう飽きちゃったよ。もう百回はクリアしたよ」

「他のゲームがあるでしょ」

「ツインビーしかないよ。一人でやっても面白くないし」

「じゃあ、ツインビーで違う遊び方を開発しなさい。クリアするだけがゲームの目的ではないわ」

少女は、はい、と言い、トン、トン、と、渋々ながら二階に上がって行った。

「随分お久し振りですのね」

「覚えてらっしゃるんですか？」

「勿論ですとも。それにしてもあれから、此処で幾つの冬を越したかしら。そ、の、せ、つ、は」

「こちらこそ、本当にお久し振りです」

「私は随分、おばあさんになってしまったんじゃないかもしれませんこと」

「私だって、いつか、そうなります。いつか、きつと。ところで此処は」

「メリディエスの修道院です。そして私は——あなたをシスターと呼びたいかしら——シスターの母親です」

「メリディエス。お母さん」

タカネは逡巡した。すると此処が物心ついた頃に何度も繰り返し読んだあの童話に出てくる一年中が白夜で一日中が正午だと謂う、太陽が沈まない常世の国なのだろうか。子供の頃から何故かイギリスの北部にあると信じていたのだけれど。シャワーの変わりに虹を浴びるためのステンド・グラスで知られる花崗岩と大理石で建築された大聖堂だと信じていたのだけれど。外界が不意に暗くなる。山の天気は変わりやすい。細かい雨が降ってきた。遠くで雷が騒いでいる。木々がさざめく。

「今でも、英語はお得意なんですか」

「いいええ、減相もありますですよ。ただ、欠かさず英字新聞は取っておりますわ。でも残念なことに、こんな田舎では、英語の使い道もありません。そうだ、最近では英語より、ジャヴァ・ラングを話しておりますわ。日本語を忘れそうなほど」

「何で」

「ほら、山奥では人間の話し相手がありませんでしょ？ あの子も、あんな風に一人ぼっちで育って性格が歪んでしまわないかと気がかりなのですが、近所に同じ年頃の子供がいないんだから仕方がありません。だから、替わりに一緒に植物や天空と会話する練習をしています」

「通じるんですか？ 自然にも」

「勿論です。ジャヴァは健全な言語ですから。下に、スクリプトが附くと駄目かもしれないけどね。自然はブラクラに利用できるような安っぽい言葉が嫌いだから」

「まあ、サーカスティックなところは相変わらず……」

「高齢者の頑固くらい、黙って見逃してくださいよ。私たち年寄りや、もう先が短いんですから」シンプリシティは穏やかに、やつれた様子で微笑んだ。「シスターもジャヴァ・

ラングを覚えてたらしいのに。楽しいですよ、ものと会話するのは。人間との会話は……人間との会話については、言うことは、もう何も」

「自然は平等？」

シンプリシティは首肯した。

「自然は、可愛い女の子と犯罪者とを差別したりしない？」

シンプリシティは、コックリと頷いた。

「ものの言葉を覚えれば、私もものになれるかな」

「シスターはすでにものですよ」

「違うよう。人間だよ」

シンプリシティは優しく微笑んで、静かに言った。

「人間も、ものですよ」

雨脚がドンドン強まり、濡れる。木も、道も、ぜんぶ。

タカネは雨になりたい。空からフワッと降って、空気抵抗で分裂して、張力でくっ附いて、浮かんで、漂って、豊饒の地面に降り立った瞬間碎けて死ぬ、雨粒の球體になりたい。そんな風にタカネの耳の中で。

悲しくなんかない。

「あの、私、もう行かなきゃ。帰らなきゃいけないんです」

「もう忘れたの？ 此処はシスターの家ですよ」

宇宙が平面上の同心円のように単純なものでないなら、人間は、〈私〉だけが大宇宙に包まれた小宇宙であるわけではなく、雨粒も、枯葉もお母さんも同等に小宇宙なのだ。その中の一つでも欠ければ世界は存在しないと同時に私一人がいなくても世界は存在する。そのことを忘れさせるような言語なんてあってはならない。

「私はキモくなんてない」

タカネは口の中でモゴモゴと言った。

シンプリシティは不思議そうな顔をした。無理もない。けれど、その言葉だけがタカネの胸のうちから真正面に突き出した、変わり映えのない真実だったのだ。

シンプリシティは台所に戻り手持ち不沙汰になったタカネは二階への階段を上った。階段のすぐ右の硝子障子戸が子供部屋で、他の部屋は使われている形跡がない。物置になっているようだった。テレビ画面は砂嵐だった。少女のシンプリシティが胡座を掻いて、ツインビーのカセットと、白に臍脂の初代ニンテンドーの接触部分にしきりと息を吹き付けている。

「またバグだよー。もう、お母さん新しいゲーム買ってくれないから。ねえ、お姉ちゃん、遊ぼう。遊ぼう。足し算ゲームしよう」

風に吹き付けられた雨粒が網戸を通過して毛羽だった畳に黒い染みを残し始めたものだから、タカネは子供部屋と廊下の硝子戸を閉めて回った。

少女のシンプリシティが左手をグーにして、右手は人差指だけ立てて突き出した。

「0+1=1」そう言って、左手の人差指を立てる。それから、「1+1=2」と言って、右の中指も立ててチョキにした。「ねえ、お姉ちゃん、次は？ こっちが1で」と、左手を振る。「それでこっちは2だから、次は？」

「1+2=3」と、タカネは答えた。「次は、2+3=5。次は、3+5=8」

「うわー、すごい」少女は右手をパーにして、左手はパーにしてから、少し迷い、カミながら親指から順番に三本折り曲げた。「ねえ、お姉ちゃん、何年生？」

「高校三年」

「コウコウって何するところ？」

「退屈するところ」

「じゃあ、ココは何するところ？」

「此処？」建て付けが悪い最後の硝子戸をやっとの思いで閉めて振り返ると、すぐ後ろに両手を後ろに回した少女が立っていた。

「ココは、お姉ちゃんと私の二人がいるよね。私とお母さんは同じなんだから、O＋私＝お母さん。私＋お母さん＝二人目、さあ、誰？」と言いながら、少女はタカネの鼻先を指さした。

「私。此処にはあなたとお母さんと私しかいないけれど、あれ。私は三人目じゃなくて？」

少女はゆっくりと首を左右に振った。「よく考えて、お姉ちゃん。高校生なんだから、お姉ちゃんらしく、よく考えて。お姉ちゃんが三人目だとしたら、お母さんは二人目だよね。お母さんは私のお母さん？ それとも、お姉ちゃんのお母さん？」

「お母さんは、どうやら此処であなたのお母さんとして暮らしているみたいだけれど、あれは私のお母さんよ。どっちも同じだけ本当みたいね」タカネはそう正直に答えた。

「ほら。お母さんを一人分余計に数えてた。もう分かったね」少女は大人びた微笑を浮かべた。タカネはその、「もう分かった」と言う、耳許で囁きかけられるような語調に覺えがあった。何処で聞いたんだろう。思い出せますか、で聞いたか。

「教えて上げる、教えて上げるから、〈境界〉に来て。シンプリシティの反対はコンプレキシティ。単一性の反対は、多様性。お姉ちゃんと私でココには二人。一人目がシンプリシティで二人目がマルチプレキシティ」囁き聲は歌い懸けるように続く。「マルチプレキシティのお母さんはシンプリシティの母集合。シンプリシティのお母さんはシンプリシティだからお姉ちゃんも私も両方私で、ホイ！」と叫んで、シンプリシティはタカネの顔の前でパチンと両手を叩きあわせた。

眼の前が真っ白になって、タカネの頭の中で電線がショートした。

タカネ

その次の瞬間、気がついたら私はまた総武線に乗っていたのを、オーディション会場のエレベーターに乗った私は思い出していた。時計を確かめる。オーディションの案内葉書には午後一時集合と書いてあったから、約二十六分の遅刻だった。私は二十一世紀に帰ってきていた。帰ってきた直後にもう一度あの仮そめに急ごしらえされた「境界」を訪れて確かめたかったことを聞き、そこで私が八〇年代の家に帰ったのはもう一度人生をやり直すためであったと思いついたのだった。私にとってそれは、妄想の中で実現したつもりになつていた女優になるという夢を現実に叶えるために一から努力をすることに他ならなかった。生い立ちによって押しつけられた妄想でも、私自身にとってはやはりそれが掛け替えのない夢だったからである。取り合えず私はインターネットで見附けたタレント事務所のオーディションに完全な初心者として応募してみたのだが、その前にこっちに帰ってきた直後のことを話したい。私は高校の制服のまま、右の中央線ではなく左の総武線に乗った。それは私が取りも直さず「境界」を目的地をしている証拠だった。

階段の最後の螺旋を回転する。明かりが見える。いつもの元氣なスタッフの歓迎は、――聞こえなかった。カウンターの誰もいないけど、電氣が点いているから、休みではない。立ち往生してたら後ろから肩を叩かれ、振り向いた。

「――また、お会いしましたね」

前回運び込まれた医務室の、あの和服の青年の平和な微笑だった。

「あの、今日は「境界」は……」

「イチドウさんに聞いてませんか？」あれ、と青年が首を傾げる。「そうか。「境界」は当分閉鎖です。とうとう公安の手が回ってきたから」

どうしてイチドゥリョウと私のことを知ってるんだろこの人は？　そう思いながら青年の後ろについて、暗がりの階段を恐る恐る上った。

「お待ちしておりました、タカネさん。あんな事故があったものだから、もしかしてもう来られないんじゃないか、なんて、それは、もう。一日千秋の思いで」

「あの、どうして私の名前とか」

「ああ」立ち止まって、青年がすげなく振り返った。「失礼致しました。私はナカジマと申します。それから此処の室長の、私の先生に当たる方ですが、あの人はクミコ先生」
「あっちのアンドロイドは？」

「コトと呼んでいます。はは。アンドロイド、そうですね。その呼び名は間違っています。正確ですよ、ロボットってわけじゃありませんからね」

「ねえ、どうして」ナカジマと名乗った青年に従って私は敷居を跨ぎ、開いた襖の中に入った。「私を連れてくの？ 私だけ？」

部屋の中は、この間見たときより狭く感じられた。普通の和室。小さいけどへ窓もあって、西日が差し込んでいる。この間は、もう日が暮れていたから気づかなかったんだ。畳で、十畳。その中に、〈例〉の円筒形の硝子タンクや、古びて黒ずんだ桧の薬棚、ラップトップ・パソコンなんかが並んでいて、そこにさらに四人全員で入ると窮屈だ。白衣のお医者さん（クミコ先生）、それからシリコン製の「コト」は朝顔柄の浴衣を着て、みんな、そこにいた。

「解かったわ」三人の笑顔を眺めて私が呟いた。「あなたたちでしょ、私を監視していたの。全部知ってるんですよ。誰とした会話も、部屋で一人でいるとき私がしたことも。だから、イチドウリョウとのも知ってるんですよ。あと、ジェリコのこと。アイリたちとのことも——」

ナカジマやクミコ先生は狼狽えた表情を見せたものの、アイリやキヨミと違ってヒステリックに突き放したりはしなかった。その替わりに二人とも、ちょっと寂しそうな表情で私を見ていた。

「仰ったその言葉を、否定することは出来ませんね」と、医者。「だけど、あなたは勘違いしておられる。否、むしろあなたは何も知らない」

「そのことについてお教えするために、実はあなたをこちらにお連れしたのです」そう言ったかと思うとナカジマは私に近寄り、いきなり頭の手を伸ばした。キュッと身をすくめる私の髪の中に両手の指を差し込み、後頭部と前頭部の髪の生え際から、何か光るものを取り外した。ピツという電子音がして、細い注射針を刺されたときみたいな微かな鈍痛が一瞬頭の中を走り、じんじんした。ナカジマは取り外した金属製の物體を掌に載せて、私に見せた。錠剤みたいな、ポータブル・オセロの石みたいな白い粒が二つ。直径は五ミリくらい、だけどよく見ると真ん中のところからよく撓る細い針金が飛び出していて、その根元のところでは赤いLEDがゆっくりとした周期で点滅している。

「何、何ですか、コレ」

「微弱磁場で脳の断層映像を撮影する装置です」とナカジマが説明する。「此処の送信機からその映像を電波で本部のスーパー・コンピュータに送り、そこで画像解析にかけてあなたの知覚と運動が再合成するのです。このくらいの小型送信機で抽出するには、その二つのパラメータが限度。思考や情動をプロットすることは出来ないはずだから、安心して」

私は驚いて、思わずそこにしゃがみ込んだ。
「何で？ 何でそんな装置が私のアタマに？ もしかしてあなたたちがやったの？ それとも誰か他に。何時の間に？ ねえ、教えてください。それ、いつから私の頭についていたんですか」

「おそらく、十年以上装着された状態だったと思われます。焦点の甘い磁気だけで脳の活動を分析するには、幼少期からの長いデータの蓄積が必要ですから」呆然とする私の眼をまるで恐れる動物を宥めるように凝つと見据えて、ナカジマが冷静に返答する。「きつと、あなたが五歳か六歳ぐらいの頃です。タカネさん、その頃に病院にかかった記憶はありませんか？」

「……一度、交通事故で。ダンブに轢かれたの。出血多量、意識不明の昏睡状態で救急病棟に運ばれたわ。それから一ヶ月入院した」

「じゃあそのときでしょうね、きつと」

「でも、でも何で？ 教えて、何で私だけこんな目に遭わなきゃいけないの？ 私が何を

したって言うの！ 教えてよ！ 今までどれくらいの人が私を観察してたの？ 何の目的で」

「そうですね、少し専門的な話になりますが」と、クミコ博士が進み出た。「私たちがそれを発見したのは――正確には、このコトが発見したんですが――、この前あなたが鏡事故で消滅試験をされて、此処に担ぎ込まれたときのことでした」

私がコトの顔を見ると、コトはツンとそっぽを向き、向かって右側の壁の扉を開けて中の暗闇に消えた。

「その場で除去することは躊躇われました。躊躇うに足る事情があったのです」と、博士が続ける。「あのとき、あなたは知覚においても運動においても完全に脳の活動を停止していた。だから同時にその送信機から本部への電波も途絶えていたわけですが、あなたを組成して解放し、それでもなお電波が途絶えたままであれば本部は真っ先に私たちを疑うでしょう。従って、あのときは細工して数日のうちに電池が切れるようにすることしか出来ませんでした。そこで電波が途絶え、本部はあのイチドウリョウに、あなたを回収するよう命令したのです。もう一度、新しい送信機をあなたの頭部に装着するために」

「ねえ、本部ってなに？ それから、こんな目に遭ってる人は他にも沢山いるんですか」クミコ博士は頷いて、話を続けた。「本部とはわれわれが属している組織の中央司令塔のことです。ですがわれわれのような末端の部署に、本部から直接指令が下ることはまずありません。内部で処理しなければならぬ情報量が剩りにも多いため、われわれの組織は作業の完全な分散制を採用しています。そのため、監視の眼は隅々まで行き届いておらず、私たちのように殆んど仕事らしい仕事もせずのんびりしている部署も出てくる始末です。まあ、私の場合には利用されて、私の脳の中に入ってたデータが全部中央のコンピュータにコピーされてからは組織のブレーンとしての立場すら認められなくなった。逃げ出さずに、あるいは恐怖のあまり機密事項を叫んでしまわず、此処に留まること以外何も望まれている」

「クミコ先生は」ナカジマが横から咳払いして話を告いだ。「自然言語処理の世界的権威で、東京大学の助教授だったんだけど、その能力に眼を附けた組織に誘拐された、〈窓〉學者だ。直接お話しを交わされても構わないんですが、くれぐれも言葉遣いに気を付けて」

「マッド學者？ マッド・サイエンティストなんですか」

「いや、マッドじゃなくて、〈窓〉の研究」
「ずっと気になってたことなんですけど、聞いてもいいかな。〈窓〉って何なんですか？ 人間工學的に。ロボットの一種なのかしら？」

「あれは……」ナカジマが口籠り、クミコ博士が後を続けた。

「一種のサイボーグね。元々は人間。君と同じような女の子よ。因みに、カントはサイボーグは存在すると言っているわ。誰でもちょっと脳の神経接続を弄ってやるだけでああいう状態になる。それも全ての人間が、潜在的に〈鏡〉としての特性を持っているから」

「〈鏡〉？」

「そう。例えば、君の友達、アイリ、それから、キヨミといったかな――悪く思わないでください、コトが勝手にあの事故の後、本部のコンピュータに潜入して、君のデータを盗み出したんだ。私じゃない」

私が無言で頷く。

「君は、あの二人に習慣的に暴行を受けていた。君も察知している通り、二人とも仮そめに急ごしらえされた人間なの。実は、理由なんてなかったの。何の因果関係も、必然性もない。ただ、君はそれまで漠然とした人間玩弄への慾望を持っていた。あの仮そめに急ごしらえされた二人はそれらを君自身に向けて映し出す鏡の役割を果たしたに過ぎないのね。勿論、世界の中心にあるべき意識を君の神経の中にしかないものと仮定しているわけだか

ら、これは極論ね。だけど君にはアイリやキヨミの頭の中にも自分のと同じような意識が入ってるなんて確かめようがないの、だから、この仮定を、ただの仮定として一笑に附すのは軽率よ。少なくとも、世界を一つと仮定する場合、そこに宿る意識も当然一つでなきゃ、複數あったらおかしい。そして実際、世界はバルクと呼ばれる、母なる海の中に漂う一枚の膜なの。バルクとは、君の全てのことなんだけど、全てって分かるかな。君の本能も、お母さんやお父さんも、友達への愛情や憎しみも、生まれてから死ぬまでしか生きられないって言うその時間的規定性も超越した、君の全て。君の本質。だけど、このバルクの自分自身に君は気づくことがない。君は、この漂う膜世界の中に位置を占める、小っちゃな體の中に宿った魂に過ぎないんだから。君は、そして私たちはこの膜から外に出ることが出来ない、だから、膜自體の歪みとか、穴とかには普段、気づくことすらないわけだね。だけどそれにも関わらず、膜の外、特にその膜に反定立される反物質の膜との関係の中でわれわれの存在は規定されている。そのもう一枚の膜、もう一つの世界とこっち側との境界を媒介するのが、つまり、〈鏡〉なの」

「ごめんなさい、よく分かりません。ええっと、全ての他者は潜在的に私を映す〈鏡〉なわけよね。それは分かった。うん。それで、私たちの世界の外にパラレル・ワールドみたいなところがあって——両方とも、包み込んでいる単位が〈私〉ってことでいいのかな。それで、そここのリンクが貼ってある特別な領域がある。じゃあ、その特別な鏡と普通の他者連鎖とはどう違うわけ？ 俟って、さっき〈窓〉はサイボーグだって言ったわよね。」

「そう。手術は至って簡単。ようは、その全ての他者に潜在する鏡像性を増幅させるだけ。他者って言うとは教みたいんだけど、原語はアルテル、英語のアザー。腦の一部に余剰次元をコンパクト化して組み込むだけでいい。理論から言うよね。後は、コストの問題と、それから、資源確保の問題——」

「資源？」私が反応する。「資源って、だって、鏡の材料は他者なんですよ、つまり人間なんですよ」

「組織は資源確保地を東新宿としたんだ」ナカジマがそつなく説明する。「『人攫い』って言う古典的な手法でね。一人ずつ。ほら、君だって歌舞伎町を歩いてたらキャッチとかスカウトとか言って寄って来るお兄さんがいるだろ？ あれは実はわれわれの組織の構成員なんだ。新宿を歩いてる女の子なんて、キャバ嬢だとか、風俗嬢だとか、身元の知れない、知れたとしても問題になり難い憐れな子が多い。それが狙われた理由だ」

「それで、——攫って、どうするの」

「一人ずつ手術室で腦を開いてワイプ因子受容装置を埋め込む。でも〈鏡〉には三種類あって、普通の左右を転置する〈鏡〉だけじゃなくて、他に、時間の〈鏡〉とジャヴァの〈鏡〉があるの。ジャヴァのことを君はまだ知らないだろうけど、一人は此処に、もう一人はジャヴァにいる人間は、同時に同じ感覚を味わったり、それを意識したり尋ねあったり、確実に答えあったりするという相互関係を持つわけ」

「ジャヴァって、地名ですか」

「そうね、あなたもジャヴァ・ラングを覚えてそこに行くといいわ」

「でも何で言語の専門家が腦の手術とかしてるんですか」

「文句あるの」突然クミコ博士は眼鏡の奥で意地悪な目附きをした。「手術なんて誰にでも出来るよ。それに腦髓も言語も原理は同じなのよ。昔ある腦髓學者が、無意識は言語によって構造化されている、って言ったんだけどあれは、無意識は集合論的に射像化されているって言った方が正しい。彼は射像の一種に過ぎないものを究めて乱暴に言語と呼んだ言語學者の真似をしたわけ。言語學者がやったのは、本人は言語學のデカルト座標を創った気でいたのかもしれないけれど、結果的に残ったのは言語即ち文字なりって主張だけで、

横光利一が同じことを言ったら莫迦にされるのに米軍御用言語學者なら崇められるって言うのは腑に落ちないわね。この辺りの事情は一度みんな反省してみろ必要があると思うの、今後のために。何せ、言語學者はゲーデルやチューリングが集合論の數論的に不徹底で御都合主義に言語を用いた部分を完膚なきまでに粉碎した後にあれをやっちゃったわけだから。言語が人間の腦髓の後に発生したのだとしたら、言語の機能は腦髓には出来ない機能の補完であるはずでしょう。腦に簡単に考えられることを言語が考えているとは思えないわ。集合論には數の世界に言語の世界を先在させるような數秘主義的などころがあって、例えばデデキンントだと、『一者』よりも頁的にも論理的にも前に『私』の一語が言語的なものの〈例〉として出てくるわね。そのように無限小としての分數と無限としての整數の間として『一者』を循環的に定義するのは數秘主義の特徴で、要するにその循環的な定義遂行って言うのが論理學では論理式の記号式と区別してメタ言語って言うんだけど、謂わゆる自然言語の特徴なわけだな。言語現象って言うのは一見記号的って言うか、射像的って言うか、つまり離散的な現象なんだけれど、それを支配する單純な規則性は仮象に過ぎなくて、嚴密に実証しようとするればするほどアッチの世界に行っちゃうものなのね、カオス的に。例えば、私が言語は存在するって言うとするでしょう。存在という單語の意味を定義することにします。存在論は常識的には認識論の對義語だと思われてるわけだけど、その場合、存在は神の存在証明という歴史的バイアスを背負った言葉であると同時に、存在論の原語である *ontologia* はギリシャ語の *ὄν* 動詞にあたる *ov* を使って箔を附けた用語よね。その上、和訳は存在も認識も仏教用語。そんな風に考えていくと、存在というたった一つの單語も無限に再帰した言語の全體との相互作用の運動の中で規定されているとしか言えないのが見えてこない？ 徹底的に離散的に考えるとどうしてもそういうことになるの。勿論、実証科學の立場からは文法的に正確な文と非文法の差異なんて意味をなさないし、文脈にしてもあるフレーズやテクストに接している固有の腦髓についてなら実証できても、言語の方に解答を求めることは出来ないわけね、どうしても。そうしたカオスの実例として、性とか女性とかいう單語の意味が陥った不確定性が挙げられる。ジェンダー・ブラインドって言うやつはみんなで寄ってたかって男性に対する女性の不利を規定しようとした結果起こったカオス現象なわけよね。その背景にあるのは男女の無差別、連続性ではなく正反對に離散性、差異の不自然なまでに持続的な措定なわけ。言語學を実証科學として位置付けようとすると辞書に出てくる單語の意味やその強度の差が、観測者としての言語學者の介入によってジェンダー・ブラインドやアフーマティヴ・アクションと同様に全て抹消されてしまうことになる。ちなみにアフーマティヴ・アクションってのは腦髓學用語なんだけどね、元々は。何だか話が脱線してきたわね。フゥ、私、疲れちゃった」とクミコ博士は溜息を吐いて、さしたる長話でもなかったと思うのだが額にハンカチを押して当てた。

そんな風に眼鏡を外すと小鼻の上を向いた素顔は「侍女たち」のマルガリータのようにフェミニンで頑是無く、十歳若返ったように見えた。貌だけではない。ナカジマ君、ちよつと麦茶、と命ずる聲もさっきまでの大學教授口調の濁聲から打って変わって「パルムの僧院」の深窓の高慢稚氣なあの嬢さまヒロイン、クレリアのように少女らしく、女の私でも拝跪したくなるくらいに可愛らしさで、もう……それは人間の形をした名もない寶石だった。活力の塊の輝石をミルフィユのようにいかつい眼鏡と地味なスーツが、さらに學者という社会的ステータスが軟らかく包んでいたのである。神様は不公平だ。知的な女性に理解がない男性は一度実物に接するとよい。彼らは本物に接したことがないか、子供の頃優等生に見下された數度の經驗を終生根に持って癖んでるのに決まっているのだから。彼女は微笑んで眼鏡を掛け直し、元の口調で後を続ける。その目まぐるしい変貌は下手をする

と漫画的だったが、可愛い。

「そんなわけで、言語だけを使ったコミュニケーションはそれが厳密であればあるほど、すぐに水掛け論や愚痴の言い合いみたいな無意味なものに墮してしまうのよ。そういう皮肉な混乱を解決する世界観を提示したのは哲學者ではなくマルコフという一人の數學者だった。マルコフ連鎖って言うのは射像に確率論を合體させてゲーデルとは別のやり方で集合論の不徹底を補完した一種の數學的アマalgamで、美々しくはないけれど現実的で哲學的な優れた解決になっていると思う。とりわけマルコフが優れているのは、二つ以上の別個の原理に支配された統計的連続體を並置する技術の必要を認識していたこと。普通、統計では數値に取り込めなかった遺物がバイアスとして外部に放置されてしまうけれど、マルコフならそれをさらに反復して數の世界に送り返すことが出来るし、そうすることを構造的に迫られるわけ。一マイクロメートル四方にどれだけ豊かな情報や意匠があったとしてもそれは一キロメートル四方、一光年四方の規模で起こる出來事の重要性を損なうものであってはならない、それがマルコフの哲學よ。マルコフも無限性に魅せられた世紀末精神の一へ例ね。無限を惹起するには切断が、真空が、空虚が實在しなければならぬ」

「切断されて二つになった世界は没交渉なんですか」

「没交渉であることが容認される」

「世界が本当にそんな形をしているとしたら、不安ですね。経験したことの全てを記録しても真の認識には近づけないってことですよね」

「タカネちゃん、囲碁弱いでしょう。囲碁とか将棋とかチェスとか」

私は頷いた。「あれ、ゲームを始める前に、二人の人間が盤を睨み続けることの必然性は何処に、とかそっちの方向に思考が飛んじゃうんです」

「あなたはアリストテレス主義者ね。空間恐怖とか真空嫌惡とか。ラテン語ではテッロル・ワクウィーって言うんだけど、要素で充滿していない集合を認めない発想。世界には内部はあっても外部はなく、物語には始まりと中間と終わりがなければ落ち着かないタイプ」

「そうか。初めて知りました、私はアリストテレスだったのか。ところでどうして逃げ出さないんですか。先生みたいに頭のいい人が復帰しないのは社会の損失です」

「大學に戻る気はないわ。幾ら男性的に振る舞ってもあそこじゃ私は結局ペティ・ブープ扱いだったし、私だって一応、既婚者だから、あの嘲笑の下に隠れたものの如何に取るに足りないかをよく知っているわ。それに日本で一番頭がいい人が集まると言われる研究機関で自分が一番頭がいいって言うのは精神的にきついものよ。勿論學會の表舞台にはコネがないけの組織は私の能力を過不足なく評価してくれるし、研究の予算も自由になる。鬼と女は陰陽師。電子計算機もかは蟲も自ら手を汚して本地を尋ねてこそおもしろかれ、ってね。少なくとも今やってる研究をあの大學で続けるのは無理ね」

「何を研究されてるんですか」私は松竹新喜劇の、江戸時代のあばら家のセットみたいな医務室を見回した。

「神経接続の不可逆性の証明。説明……。このアキシヨムは比喩的に次のような現象を指したものである。人が二人います。仮りに、SとS。Sはプラトンの『国家』を読んでいます。Sは読んでいます。何らかの点でSはSに含まれると言えるでしょうか。言えないよね、別人なんだから。じゃあ、二人が同一人物だとしたら、『国家』を読む前と後のSはSさんだったらどうでしょう。それでもやっぱりSはSに含まれないと私は思うの。直観的に。それを實際の脳を使って実証しようとしているのね。それが私が此処でやっている研究よ。書物のシンボルは位置を特定し難いから、被験者の脳に最も強くインプリントされている人物の表象を使っていて。この問題は例えば、ユークリッドの正方形の対角線が有理數でないことの証明に似ているから、その人物——私のイヴ——を、

と名附けたの。一方は対角線の長さの二乗を、他方はある経験を媒介しての意識の自乗を証明の鍵に使っているからね。歴史的に長く解決されずに放置されてきた唯名論が実証的に否定されるの。脳内のその人物に未来の同じ人物をバッティングさせたらどうなるかって言う実験ね、簡単に言うよ」

「そんな不自然なこととしていいんですか。まるでヤラセみたい」

「あなたは人間の主體性を心としてとらえているのね、きっと」

「心じゃないんですか」

「考え方が狭いのよ。心はね、コミュニケーションのやり方でいうと、メディアみたいなものね。心がメディアだとすると、意識は書物かな。同じ比喻を敷衍すると、脳のニューラル・ネットはインターネットね。これら三界はまったく別のトポスに属していて、ちょっとでも類推的に考えるとパラノイアックな誤謬に陥る」

「でも、じゃあ、私は先生の研究には関係ないんですね。私の名前はルートじゃないし」

「まあ、直接的にはね。でもあなたの家族に關係あることがあなた自身と無關係だと言いつけるかしら。あなたにとって一番大切な家族が」

「私にとって一番大切な。誰だろう」

「生まれたばかりの自分で栄養を摂取できないあなたを養い、守ってくれた人物よ。その人の表象が実数集合だとしたら、すべての人間、すべての存在の表象はそこから寫像の連鎖だけを使って演繹できるはず。勿論、自分自身の身體的統合も〈例〉外ではない。だけどその前に、あなたには結婚して貰わなきゃいけないの。あなたの結婚によって実験は開始されるんだから。恐がらなくていいのよ、その結婚はあなたに科せられた模〈偽史〉驗なんですから。兎に角、あなたはそこに赴かねばならないってわけね」

「シケンですか。合格したら何が俟っているの」

「妣が国つてところかしらね」と言って博士は惡戯っぽく嗤った。「そこではフローラや大きなの相關なんて無視して無數の植物が爛茂しているの。あなたは確実に幸せになれる」

「幸福。それは私が望んだものだったかしら」

「行って確かめればいいんじゃない」

「でもその話、嘘でしょう」私は苦笑いし、思い切ってペコリと頭を下げる。「ごめんなさい、トイレ、貸して貰えます」

「なんだ、我慢してたの？ 早く言えばいいのに」

ナカジマが私を、さっきアンドロイドのコトが飛び込んだ扉の、隣の扉に案内した。

トイレは結構広くて、綺麗で、誰が掃除してるんだろう？ コト、あるいはナカジマ？ という疑問が湧きつつも壁を見回すと一面に白黒の寫眞が張ってある。草藪に埋もれてビツシリと蔦が絡まった物置小屋の寫眞とか、ロジと壁の前に鶏頭が一叢咲いてる寫眞とか、民家の引き戸の脇に附けられた郵便受けに手紙や明細票が詰め込まれ、溢れている寫眞だとか。どれも、共通して痛々しいほど殺風景な印象を与えるのは、人がいるはずの風景なのに人影がまったく寫っていないせいだとそのうち気づいた。トイレを出てナカジマにそれを聞いてみた。

「あの寫眞、誰が撮ったんですか？」

「コトだよ」答えるナカジマ。「あの子、寫眞が趣味なんだ。毎日デジカメ持って出かけていく」

「でも、人が寫ってないんですね」

「そりゃあ。失敗作で全然寫らないとはいえ、コトも一応〈窓〉だからね。あれ、聞いてなかったっけ？ 〈窓〉は〈境界〉の外では、人目に触れちゃいけないようになってるんだ」

「人目に触れるとどうなるんですか？」

「強制瞬間移動。視線が體にぶつかった瞬間、消えて、他の人のいない場所にワープさせられる。元々、〈窓〉には瞬間移動の能力があつてそれを自由に使えるから、差し引きプラマイ・ゼロってとこだと思うけど、まあ、お外で人と会えないって言うのは悲しい定めだわナ」

「へえ、それで、人が寫ってないわけだ」

注意して見回してみると、この部屋の壁にも所々モノクロの寫眞が貼つてある。趣味としては、十分大暴走と言われても文句が言えないレベルに達していると思う。しかも自分の部屋まであつて――、「コトさんって、皆さんにとってどういう存在なんですか」

「まあ」ナカジマが頭をかいてクミコ博士を見やる。「うちの部署はこの三人だけだけど、中央から指令が来ることなくて滅多にないから。下の〈境界〉には救急医務室として機能しつつ先生が逃げないように見張られてるってだけで、他に仕事って別にないし。先生が逃げたところで此処の組織ほどの科學技術を持った団體が他にない限り、何の害もないわけだし、私の仕事といえはコトの世話、コトの仕事といえは趣味の寫眞とネット・サーフィンってくらいで、それで食いつぶれてないんだから杜撰な組織に感謝しなきゃって話なんだけど」

「ふーん」

「タカネちゃんも後で寫眞撮るからね」

「はい？」

あらためてその部屋を見ると、コトの部屋とトイレの他にもあちこちに扉がついている。寝台ルームもバスルームも完備してるってわけだ。それにしても、と、私はモノクロの寫眞を見詰めた。人に会うことを禁じられたアンドロイドの眼から見た世界って、どんなに無意味で悲しい世界なんだろう？ 想像もつかない――。

後ろから肩に視線を感じて振り返ると自分の部屋の扉を薄く開けて私のことを凝つと見詰めていたコトが、アップにしたナイロンの髪を翻してさつと闇に消えて扉を閉めた。コトの部屋はまったくの暗室らしい。〈窓〉だから、それで不自由しないのだろう。

「〈窓〉ってことは、あの子も元々人間だったんだ」

「そう」クミコ博士が答える。「新宿で引っかけた手術室に回された、地方出身で身元の怪しいホテル嬢だったと聞いている。あの子を攫ってきたのは、それも確かイチドウリョウじゃなかったかな」

後ろで、ナカジマが、うんうんと頷いた。

「へえ。リョウさんってつまり、ホストっぽい格好をして女の子を連れて来る、組織の人攫い要員だったんですね。で、彼みたいなのやつが他にも無数にいます。納得」

「人攫いは酷いな。うちはタレントさんの自由意志を尊重しているよ。募集要項通り、高校の制服を着て来たのは君自身じゃないか」

「うち、って」と振り返ると、そこはさっきまでの医務室ではなかった。忙しそうな聲が聞こえる。うん、うん、うん、うん、うん、いいえ、はい、いいえ、はい……。

「はい（若い女の聲）」

「あの、私―――此处、オーディション会場ですよね？」

「はい、お疲れ様です」と聲がして、扉が開いた。私は疲れてなどいない。

普通の貸事務所だけど事務机が四つあるだけで仕事感はない。巨大な水槽にならずが一匹。オクシ何とか？

「では」と事務口調でジーンズ姿の女がその事務机の一つに私を通す。破れた事務椅子を勧めるその女はクミコ博士に骨格はよく似ているんだけど、表情は見るからに元ヤンだった。眼の前に座ってるのは、ちりちりの癖っ毛を伸ばして後ろで束ねてるアロハシャツの、気のよさそうな眼鏡の兄ちゃん推定年齢三十一歳。

「えーっと、何チャンだっけ？」

熟れた感じの猫なで聲で、ものすごく薄っぺらい書類を繰っている。そこに貼ってある写真で一発で判っているのだろうと思われる。だって多く見積もってもその書類の束、束といいつつ四枚くらいしかない。

「あの、他の応募者の方は？」

「あ、君が最後だから、気にしないでいいよ」

「じゃあ何処に、他の人、いるんですか」

「奥（と長髪男は簡易カーテンを指差す）。みんなもう合格して、センザイ撮ってるから」

見ると確かにカーテンの隙間からカメラの機材らしきものが覗いている。部屋のもう一方の隅には、棚の陰になってよく判らないんだけど鏡とかお化粧セットが広げてあって、そこに座って退屈そうにラックに並んだCDのブックレットとか読みながら煙草ふかしてのお姉さんがメイクさんだろう。カーテンの中で誰か、多分此処の事務所のボスさんらしき人が金切り聲を上げている。チンピラだ。カーテンに隠れてるから姿は見えないんだけど、ありありと想像できる。よく日に焼けた小太りの小男。金のネックレス。どうやらその推定小男は水槽のなまずのことで憤っているらしい。「サカキ（推定小男の金切り聲の合間合間に、サカキと呼ばれた男の、ハア、ハア、という頭悪そうな相槌が聞こえる）よう、お前ちゃんといっただろうが、水替えとかなきや死ぬんだよ！死ぬんだよ！死ぬ！おめ、死ななかったからいいじゃねえかとか思ってたんだろぶっ殺すぞ！（ハア）水替えろよ水サカキ！濁っちゃってんじゃねえかこれどうすんだよ？今度やったら死ぬからよ！（ハア）」

眼鏡の長髪男も含め、事務所員たちはすっかりこの金切り聲には慣れっこらしい。意に閑せず、平然と話を進める。

「えーっと、問題なければうち、タカネちゃん？使わせて貰いますけど、そこはほらちゃんと説明しなきゃいけない点ってあってさ、タレントってお仕事はやっぱり実力社会なわけ。みんなが幸せになれるってわけじゃない。むしろ、幸せになった人なんて俺見たことないな、結構さ、売れてる子、……ちゃんって知ってる？知らない、あそう、まあ彼女なんかも俺仕事したんだけどさ、まああんな不幸な結果になっちゃって。知らない？あそ。まあ、みんな結婚してやめていくわけですけどね。ちゃんと結婚して子供育ててる人も知ってるよ。この世界のことなんてさって足洗ってさ……じゃ、合格ってことでいいかな？オッケイですか？（とカーテンの中へ）あ、じゃあ前の女の子、もう撮り終わるみたいだから、センザイって言うんだけどね、製作会社サンの方に回して仕事を取るためのお写真ね、じゃあ、メイクして貰って」

さっき煙草を蒸かしてた女が眼を上げる。結構若い、高校生くらいにも見えるお姉さんだった。鏡の前に座る。コットンで自分がしてきた化粧を落とし、ファンデーションから手際よく、流石にプロの仕事だ。参考になるけど、こんないっぱい道具持っていないし、自宅では実践不可能ってやつ。物凄く簡単なメイクで五分くらいで終わったけど、それでも私は鏡の中の自分を見違えた。すごい、自分のイメージ通りってわけじゃないんだけど謂わゆる綺麗系って言うか、むしろマスカラもゴージャスに附けて、ゴージャスに、ゴージャスに……ケーキ・ラインを派手に強調してるのは私の一重を隠してて、ハイトーンのルージュはむしろ安っぽいくらい、あれ？

カーテンの中に通される。高橋源一郎似の優しそうなカメラマン。そういう日の目を見ない仕事、楽しんで、むしろ望んでやってる感じ。ナイスミドル。その彼が私を見るなり、期待してた通りの大學教授風のよく通る聲で、「ハイ。ジャア脱イデ」

結局、要求されたのは顔寫眞と下着寫眞だったんだけど（しかも下着は私物NG。きわどい上下一そろいのブランド物で、何種類ものサイズのブラが出てきたときは驚いた）、その時点で私はようやくと宣言した。

「帰ります」

そんなこんなで、ズタボロのブライドを引き摺って道路に出た私に、「あなたも、さっきのオーディションにいらしたんでしょ」と背後から聲がかかった。

「ええ、そうですが」

「JRですよ。原宿駅まで、一緒に歩きましょうよ」

私と同じくらいの年頃の、ルーズなカジュアルを着た女の子だった。レイヤード族だった。五年ほど前にはやった重ね着のスタイルに、バッジを幾つかつけている。私は内心、あんな目に遭った上、待ち構えて話しかけて来るなんて、どうかしている、と感じて女の子の顔を見た。私と同じ、完璧メイクが施された顔は、遠くから見れば双子にでも見えただろう。だけど、眼の作り方がちょっと違う。女の子は、くっきりとした二重で、そこに自然な茶色が乗っている。私のほうは、一重に近い二重を隠そうとした結果、全體の輪郭というか、バランスが犠牲になっている。そうか、眼だけでこうも違うか、と、私はちょっと憂鬱になった。

「ところで未成年の高校生をこういう仕事に就かせることは違法、見つければ手錠ものですよね。手錠、怖くないのかしら。此処まで水面下のプロダクションも、減多にありますんよ。私も初めて。えっと、あなたも高校生ですよ」

「でも、下着寫眞、撮られたんですよ」

「え、あなたはセンザイ撮らずに逃げ出したんですか？ うーん、莫迦だな。あ、申し訳ありません。あんな会社、どうせ長続きするわけじゃないんですから。寫眞、貰えたんですよ。それに下着も」と、私にバッグの中を見せる。「高いだろうな。ショップで買ったなら、二万は難くない」

「へえ、貰えたんですか。ああいう面接、よく行くんですか」

二人はロータリーの横断歩道を渡って、駅に入った。

「ええ。だって、お寫眞好きなんですもの！」

「ですよ。可愛いし。とくに、眼が」私の聲音が、心なしか僻みっぽくなる。「完璧な二重ですね。後藤久美子ちゃんみたい」

「ありがとうございます。後藤久美子か。懐かしいですね。今どうしてるんだろう。ゴクミは正統派美少女だったけれど、その後の日本人男性の嗜好は圧倒的に、どちらかという異端だったキョンキョンの方に偏っていったみたい」と、女の子は私の顔を見詰めた。

「あれ、でも、あなたは剥がさないんですか」

「剥がす？ 何を」

改札を抜けたところで、二人は立ち止まった。

「モウコヒダですよ、モウコヒダ。剥がしたほうがきっと可愛いですよ」

「モウコヒダ？」

「あれ、まだご存じないんですか。ファッション誌、読まれないんですか」

「『ノンノ』とか『アンアン』なら、読んでいます」

「そこら辺の定番だけじゃなくて、押さえるなら、『美的』とか、『装苑』まで手を伸ばして欲しいわ。ティーン誌なら少なくとも、『ジル』とか『セダ』辺りかな。広範にチェックしたほうがいいですよ。大切な情報を見逃します」

「俟ってください。『装苑』なら聞いたことあるけど、『美的』？ それ、本当にファッション誌の名前ですか？ 『ジル』なんて、聞いたことない」

「あなただって何処かで見たことがあるはずよ、二千年代の女の子なら。後で一緒にコンビニ寄りましょう」

「私、さっきまで八〇年代にいたから、それで忘れてるのかも」

女の子は手を引いて、私を化粧室に連れ込んだ。

「眼を閉じて」

女の子はそう言って、私の目蓋に手を伸ばし、目尻のところを指先でつまんで、ゆっくりと引っ張った。ついで、もう一方の眼も。

「ほら、剥がれた」

鏡を見ると、私の眼がくっきりとした二重になっているではないか。女の子は水道をひねって、剥脱した私の皮膚を流した。

「お化粧、落ちちゃいましたね」

「いや、あの。一重睨って、剥がれるんですね」

「勿論ですよ。だって、日本人はみんな、生まれたときは一重じゃないですか。二重の人はみんなアイプチしてるとでも、思い込んでなさったの」

「吃驚ですよ」

化粧室を出て、別々のホームに分かれた。

「ありがとう。これで自分に少し自信が持てそうです」と、私が手を振ると、

「情報は、きちんとチェックなさってね」と女の子がすっきりとした笑顔を作った。

その日から、私の瞼は二重になったのであった。

「ねえ、名前は何ていうんですか」

「オチャメサンって呼んで」と女の子は答えた。「ニックネームだけどね」

「オチャメサンですか。ムーミンの登場人物みたいですね。本名は」

「コスメです。コスメメスコ」

「雌子？ すごい名前ですね」

「本当に。親は何考えてたんでしょね、まったく」女の子がぼやく。「察して戴けるなら、出来るだけニックネームの方で呼んでください」

「分かりました、オチャメサンさん」

靖国通りを学校帰りの子供たちや、会社勤めの人たちが束になって歩いている。私は悪徳プロダクションのオーディションのことを思い出していた。一生懸命仕事をしている人たちに、私は悪いことをしてしまった。私は彼らにくれたチャンスを価値のないものとして、投げ捨てたんだ。「帰ります」って言って帰ったんだ。

「そうだ」地下鉄の駅に降りるところでオチャメサンが言った。「もう少し歩きませんか。地下道を通して、アトリウムの方へ。お茶にしましょうよ」

時計を見ると、三時半になんなんとしていた。

地下道に入ったところで二〇代後半くらいの背の高いサラサラの髪を長く伸ばし、メタルフレームの眼鏡を掛けた女性に聲を掛けられた。「ちょっと、此処で何してるの」女性性は頭を下げた。「うちの制服着てるから。私、知らない？ 生物の川上」

「あ、先生ですか」私も曖昧に頭を下げた。生物の先生ってこんな人だっけ。近附くと煙草の匂いがした。

「いいのよ、學校に言いつけたりしないから」川上先生は優しく微笑んでウィンクした。

「高校の先生なんですか」と、歩きながら、美人に目がないオチャメサンが早速川上先生に話しかける。「お綺麗ですね。でも、眼鏡が惜しいな。いや、普通、女性でも男性でも眼鏡を掛けたら実際より可愛く見えるものなんですけどね。でも、先生は例外だと思う。」

コンタクトをお薦めします」

「あ、そおう？」川上先生は例文のような曖昧な答え方をした。「最近、眼鏡が流行ってるのかしら」

「此処数年ですね。二〇〇〇年辺りから」

「二〇〇〇年？」と川上先生は驚いて見せるのだが、驚いていないようにしか見えない。「私、ついさっきまで八六年だと思ってたけれど。でも、あなたが言うのなら二〇〇〇年なのかもしれないし、そうじゃないのかもしれないわね。何時の間にタイム・マシンに乗ったのかしら」川上先生は相変わらず優しく微笑んでいる。

「私、何だか先生と仲良くなれそう」オチャメサンが手を伸ばして握手を求めた。「初めまして。コスメメスコと申します」

「まあ、回文みたいな名前ですね」と川上先生。

「先生のお話の仕方は例文みたいですね」とオチャメサン。「ところでSF好きなんですか」

「ええ。お茶の水の学生時代はサークルで書いてましたよ。本当は教師より作家になりたかったんですけど。堅い仕事は肌に合わないみたい」

「もし作家になるんだったら、堅い仕事で身に着けた仮面も役に立つはずですよ。お茶の水って、平塚明が出たところですよね。『青沓』発刊の文は日本近代文学中で審美的には最高の部類に入ると思うんですけど、或る歴史的抑圧が美文を生む素地となったとすれば、歴史って何なんでしょう。ところで文学のテーマって最終的に何だと思います」とオチャメサンが尋ねる。

「セックス？」川上先生はそんな唐突な質問にもローテンションのまま即答した。

土偶

ドンキで買った咳止め錠剤をポケットから出して咳込ながら水道水で八錠流し込んだ。おれは二百錠入りの壘が四日で空になるペースで錠剤を消費していた。フィリップ・K・ディックは妻の浪費癖を満たすために、また、ジャンリポール・サルトルは聖ジュネを書き上げるためにアンフェタミンを常用したというが、一パケ一万円もするそんな薬を使ったら家賃が払えなくなってしまう。咳止めなんて、少量なら頭が冴えたりするかもしれないが、多量に飲んでも意識昏倒したり何時の間にか睡眠時間が十二時間を越えていたり、副作用を中和するために調剤してある無水カフェインのせいで苛々したりといった程度の薬なのだが、手に入る最も安価な薬だったし、何よりドンキの薬局で買える。それに、おれは薬物の不法所持なんかに耐えられる程の神経は持っていない。信じて欲しい、おれは警察の御世話になったことも精神科にかかったこともこれまで一度だってない。警察で身長を計る縞の棒の横に立たされて寫眞を撮られたことも、巨大なコピー機のような機械に手の平を押しつけられて指紋を記録されたこともない。従って、監視カメラや盗聴器の妄想に苦しめられるに至るような心的外傷を受けるような経験は何一つ身に覚えがないんだ。煙草に火を点けながら薬が脳に回ってくるのを俟ち、また灯りを落としてパソコンに向かった。PDFになった自分の原稿を何の気なしに読み返しているうちにまた自己嫌悪に陥る。書いた本人がすでに退屈しているような小説を誰が読むって言うんだろう。質が悪ければ却下なんて契約書には書いていなかったのが救いだ、書き手というのはそういう心配をするものだ。例え金が入っても自作の出来が悪ければ嫌になる。しかも契約の方さえ先行きは怪しくなってきた。今日は木曜日で、後二時間半で金曜日が来てしまう。予定は大幅に遅れており、明日の夕切までの脱稿は殆んど絶望的だった。

——おれは毎週金曜日の午後、二時間半だけ鈴木高音さんのマンションを訪れ続けた。赤い目印はドンドン彼女に近付き、今ではおれは彼女と鼻を触れ合うような距離で原稿を書いている。そして簡単な仕事だとたかを括ったおれの当初の予測はどうやら甘かったようだった。数枚だった原稿の量は、次の週には十数枚になり、あつという間に百枚を越えた。当然、彼女と会う一時間では終わらない。一週間徹夜で書き続けてなんとか次の金曜日まで枚数だけ埋め、タイピング・ミスを直す暇もなくまたマンションに向かう。ノルマは必ず、倍以上に増えている。跳躍力をアップする忍者のあの修行みたいだ。高音さんの瞳の色も、見慣れてしまった。虹彩の放射状の模様の数さえ覚えてしまっていた。

前回、高音さんは扉を閉めるなり、「あなたの、あなたの」と早口で切り出した。「何でしたっけ、提出して戴いた、あれ。そうだ、時計でした。あなたの時計の漢字表記、一部変更したから、ファイルを確認しておいてください。人間の體には無機質な『體』を用いて慾しいの。『軀』も『骸』も見た目が生々しくて愛らしくないから。関数は『函數』じゃなきゃ駄目。今までのそういう感じでサーチ・アンド・リプレイス・オールしといったから、それを確かめて以後の分ではその表記に従って提出して頂戴。数学は『數學』という字が好きだから、他の部分も『數』、『學』で一括変換しちゃった。『華』は古き良き中国を思い出すので好き、『花』の方が少女らしい可憐な印象を持つ人の方が圧倒的に多いかも知れないけどね。パソコンだと、何時でもやまとことばと常用漢字だけで行くのが易なんだろうけど、日本語のためには外来語である片仮名言葉も漢語も最大限に保守すべきだと思う。それから内容についてなんだけど、あなた、ネタに困ったら『ドグラ・マグラ』を丸寫ししてるでしょう。夢野久作しか読んでないんじゃない、それで物書き志望だなんて、嗤わせるわね」

「小栗虫太郎の『黒死館』からもパクってます」おれはムツとして言い返した。「読んでないんでしょう」

「『時刻感』？ 何それ。もっと詩的なやつを模倣しなさいよ、模倣するなら。そうね、ランボーがいいわ」

おれはいつものようにパソコンのワープロ・ソフトを起動して、前回のファイルを開いた。

「……ワインを葡萄酒に変換しましたか」

「あら、気づいた？」

「ワイン・レッドが葡萄酒・レッドになってます。後先考えずにこういうことされると……」

「ごめんなさいね、直しといてくださいな。ところで私の『全體』ってどんな感じ？」と、彼女が尋ねた。「私の〈窓〉は、ほら、ちょうど六十度左右に開いているでしょう。普通、斜視って右か左だけのものなんだけど、私の場合両〈窓〉がちょうど三十度ずつ外に向いているの。そして、鏡に映った自分を両〈窓〉で見たことがないの」

「対称的ではないですね」と、おれは答えた。

「率直なのね。もうちょっと具體的に、私の顔の対称性がどのように破れているか、説明してくれないこと」

「左右が並行していません。普通の顔は、まっすぐ前を向く瞬間というのがありますが、でもあなたの場合、右の瞳が前を向いているときは左の瞳はよそ見しているし、左の瞳がこちらを向けば、今度は右の瞳があっちに逃げてしまう」

「何故？ 何故、右の〈窓〉があなたを見ているときと、左の〈窓〉があなたを見ているときとを別々に考えるの、両方私なのに」と言いながら高音さんは、こちらに差向いになっていた姿勢を、ゆっくりと、元の左眼だけこちらを向けたポーズに戻すのだった。「〈窓〉は認識することをその機能とする器官でしょう。対象は時間の経過の中で徐々にその性質を露にするんだとすれば、〈窓〉の対称性には時間の経過を予め前提としておくべきなんじゃないかしら。あらゆる瞬間にあってつねに並行性を保った〈窓〉は、三次元的な独我論に陥った瞳だって言えないこと。一つの特徴が優位に立つときにはすでに、上位の対称性を壊してしまっているとは主張できませんか。個々人の内に罪がなければ、共同體の法もなくなってしまうでしょう、同様に。ところで、あなた、土偶さん。あなたの仰る対称性をもう少しわかりやすく定義してみて」

おれはキーボードを叩く手を休めずに答えた。「そうですね。特に深い意味はないんです。強いて言うなら、僕の言う対称性とは、美的なるものの名祖です。可愛いとか、綺麗

だって言うこと」

「そう。それじゃあ堂々巡りだわ。私はその可愛いとか綺麗だとかの定義を要求したわけですから」と言って高音さんはクスクスと空笑するのだった。「対称性って言うのはね、私の思うに、違いが識別できないということなの。分かる？　存在論じゃなくて、認識論の範疇なわけね。普通の、並行な〈窓〉が持っている対称性は、私の四次元の対称性に較べると、弱いと思いませんか？　睫や瞼、涙袋の形の不整合が一目で瞥見できてしまうでしょう。私の〈窓〉のような、時間の経過の中で抽象される対称性のことを滑り鏡映とか映進って言うんだけど、例えば、巻き貝の渦巻がそうね。そっちの方が識別不可能性が高いはずよ。それが理解できないのは、存在論と認識論の混同というか、要するに、自分の視力を過信しているのよね。均整のとれたソナタよりも、永遠への諦念というか、時間を内包することに骨を折ったフーガに近い造形原理が強烈であればあるほど、美的體驗は強烈になる。ソナタにはメモント・モリーがないのよ。同じ理由から、私は手鏡に映る自分を観察し飽きてしまったの。視覺の瞬間的な円満に憎惡すら抱くようになったわ。グラビアに映った自分にも、映像になって自分にもね。私の瞳の美しさは、非視覺的なメチエにしか寫し取ることが出来ないんじゃないかって、そう信じるようになり、その確信は日増しに固くなったのです。世界の諸部分の機能は対称性をその構成単位としています。ワタシたち人間もまた世界の一部分であり、従って、様々な対称性を〈例〉示しているの。それが、心的仮定としての美よ。じゃあ、何故私の〈窓〉を直接、自然主義的に言語に寫し取ってはいけないのか、物語の形で表現しなければならないのかって言う顔をしているわね。描寫では、言語がその世界性、世界の一部であるという性質を超越することは出来ないのよ。描寫は世界の他の一部分との対称性であるという点で、世界的なの。世界を超越するためには、言語はそれ自體がもう一つの世界にならなければならない。それ自體の内部にもう一つの対称性を持たねばならない。独自の閉じた対称的な原理を持った言語的構造體を此処で、狭義の時計と呼ぶことにしましょう。その最もミニマルな例は、勿論ライムよね。音素のモジュールが一定の周期で反復すれば、対称性を触知することが出来ますよね。この様な最小限で一眸監視しやすいモジュール性なら、組合せを数え上げるのも比較的容易になります。四行詩の脚韻なら、全ての行が同じ韻を持つ場合と、全て異なる場合を含めて、四番目のベル數、二十一の組合せが見附かるはず——」

彼女の辿々しい話を聞きながら、おれは密かにワープロ・ソフトに附屬の函數電卓でそのベル數ってやつを計算してみた。答えは十五だった。——計算が間違っている。

「——まるで華柄の鏡面體ね、硝子體に水晶體の〈鏡〉が黄金律で嵌め込まれた私の〈窓〉って。兩〈窓〉の瞳孔が目一杯散大したまま固定しているのは私の第三腦神經が壊死しているからなの。第三だけじゃないわ。生まれたときから私の腦髓は大部分が死んでいた。甲状腺の機能も大分亢進しているみたいだし、でも解剖學的には部分的にしか生きていない腦が私という一つの人格を結んでいることが私という奇蹟なの。部分的であることは哀しい。一人であることは儚く美しい。私の蒼い虹彩は一時間しか咲くことが出来ない華の花卉模様。瞳孔の球面はあなたを映す〈鏡〉」

それまで書いたところを読み返し、凡庸なところやデータが曖昧なところを消して行くと見る見る枚數は減っていき、一枚も残らないのではないかと思えるほどだった。一時間ほど削除の作業を続けた結果、結局残余はたった二枚弱、それもランボウの詩からの引用とそれから膨らんだイメージの描寫だけだった。

不幸のわれを牽きずり下ろさば、
そが屈辱は確かならまし。

不遜なるそが侮蔑に冀ば、
近しき闇にわれを葬らん。

巡る季節や！ ああ、城々や！
まったき魂をわれらは持たず！

それは「地獄の季節」中にあるテキストの別ヴァージョンであり、ランボーが詩を書いた最後の年である1872年の一番最後のテキストであり、その後半のランボー自身の手により線で消されて^{パレ}いる部分であった。それすらも見ているうちにちゃんと訳せていない気がして、関連する部分諸共消してしまった。すると、パソコンの画面には白紙が残った。これからいかなる文字によっても埋めることが出来る、無限の可能性であるところの空白。この空白はもしや、至高の美の表現たりえていないだろうか。この空白こそがまったき魂の謂いなのではないだろうか。そうだ、明日はあの女に白紙を提出してやろう、とおれは珈琲と咳止め錠剤による慢性的な過呼吸と寝不足に掻き曇った意識で氣違いじみたことを考えるのだった。そしてそのうちに机に突っ伏して眠り込んでいた。

数時間が過ぎただろうか。無論寝ているおれに正確な時間の間隔があったわけではなく、実際に経過したのは数分だったかもしれない。おれはまばゆい光線によって眼を覺ました。スタンドの灯りは消えており、パソコンもスリープしていて、光源は思い当たらなかった。おれは眠い眼を擦った。コンタクトが両方ともずれていて、そこに何がいるのか判然としなかった。囁くような羽ばたきが聞こえた。鳥だろうか。奇跡の鳥？

「羽があるのを全部鳥にしちゃうのは乱暴ね」おれの心を読んだ何者かが聲を発した。倍速で再生したみたいな奇妙な聲だった。するとそこに今度は回転速度を落としたみたいな間延びした聲が続いた。

「鳥でいいじゃない、この人が私たちのことを奇蹟の鳥だって思ったなら」

「だって今にバレるわよ、起きて私たちの姿を見たら」

「その時になってから本当の名前を言えればいいじゃない。——はい、私たち、鳥でーす」次第に闇に眼が慣れて、どうやらそこにいるのが二人の仮そめに急ごしらえされた人間らしいと知れた。背丈はおれの半分位だろうか、それでも大人の女の形をしていた。古い真鍮のようなヴォリュームのある長く伸ばした金髪を無造作に束ね、ボッティチェリの「春」みたいな透け透けの羽衣を體に巻き付けていた。一方は蹲って顔を隠しており、スローモーションで動いていた。他方は背中その羽を羽ばたかせて早回しの一定の速度で左右に飛び交っていた。

「何者？」とおれは尋ねた。

「私は『換喩』」と飛んでる方が答えた。

「私は『暗喩』」と蹲っている方が答えた。「でも鳥でいいのよ、お望みなら。あなたの言う奇跡の鳥。ただ、私には羽がなくて、あるのは『換喩』だけだけれど」

ゆっくりと喋る『暗喩』の言葉が終わるのを俟ち切れないように、『換喩』が横から瘡高い聲を挟んだ。「『暗喩』なんて抛って私と一緒に飛び回りましょうよ！ ランボーでしょ？ あの美少年の！ あなた、ランボー研究者？ つまり、ホモ？」

「いや、おれは理科系の高卒で、文学研究者なんかじゃ。失礼な」とおれは眠い眼を擦る。

早くコンタクトを元に戻したい。

「ランボー最後の詩ね！」と『換喩』が早口でおれを遮った。「季節よ、城よ！ 季節よ、城よ！」

saisons, châteaux!
Quelle âme est sans défauts?

全部複数、詩的表現における複数！ 読めば単数！ Saisons は希臘語、羅展語では hora で仏蘭西語の heure や bonheur の語源、temps の対概念、反復する時間！ Longtemps, je me suis couché de bonne heure！ 次の parfois の fois は反復する等質な時間、数えられる時間！と早口言葉のように捲し立てる『換喩』の横で、『暗喩』がゆっくりと言う。

「見逃しちゃ駄目、ランボーを苦しめた私的財産と労働の象徴ね、châteaux は」

「Bleu château！ フォー・リーヴス！ ところでその部分を中原中也がどう訳したか知ってる？」

とき
季節が流れる、城塞が見える、

もの
無疵な魂なぞ何処にあらう？

すごい意識だけどランボーの勢いがよく出てるわ、まるでサイケデリック！ 細部を見ると意識というより直訳ね、細部を見ると！ 『翻訳者の使命』の絶望的なまでに方法的な直訳！ ルターの聖書！ 日本聖書協会は誤訳だらけ！

「魂をモノって読ませてるのは死んだ中也の息子のことね。テムポ正しく握手をしませう。愛するモノが死んだときには自殺しなけありません。ね。無疵なという訳は従って中也の私情が入った誤訳なんだけど、小林秀雄が多分無意識に自分の訳にこの語を残してしまっているのが泣かせる」と『暗喩』が中断する。

「ときがながれるおしろがみえる」おれは復唱した。「そうだ、おれには時間がない。明日までに原稿を仕上げなきゃいけないんだ」

「大丈夫、私と一緒にサクサク書き上げちゃいましょ。私の別名は『速度』」と『換喩』が言った。

「私の別名は『切断』と『秩序』。いくら『換喩』の力を借りても無理ね、明日までに何百枚も。それより、あなたの原稿って元々〈鏡〉のことなんでしょう、依頼者の瞳を映す。それなら、自分で書くより私と一緒に買いに行きましょう」と『暗喩』が言った。

おれは二人を見比べて、『暗喩』の提案を採用することにした。もう数日の間はパソコンの画面を見る気もなかった。

「物語における空間と時間の延長は『換喩』が産み出した幻覺なの。言語記号は本来離散的なもので、現実の持つ連続性はそれよりもつねにすでに豊かなものだから。私を信じて。私の言葉を」と言う『暗喩』の手に引かれて、おれは何ヶ月も掃除機をかけていない本と塵だらけの狭い部屋から、その言葉に向かって跳躍した。

「あいいうえお！ あなぐらむ！ あいうえお！ あなぐらむ！ あいうえお！」と『換喩』が背後で叫ぶと『暗喩』が「黒、赤、緑、白、青！」と間の手を入れた。

「あ、眩しいやうな蠅たちの毛むくぢやらの黒い胸衣はむごたらしい悪臭の周囲を飛びまはる、暗い入江」

「はいさあ！」と『暗喩』は合の手を続けた。

「い、緋色の布、飛散った血、怒りやまた熱烈な悔悛に於けるみごとな笑ひ」

「はい！」

「x4f, "cycle, vibrations divins des mers virides"」

「はいはー」

「Bayeux, その高貴なレースの緋色の内に高く、てっぺんはその最後の母音の古金に照明されて」

「さあさあ！」

「六十九、蒸気や天幕の 306F 305F 309D 308I 304D」

「はい」

「69、蒸気や天幕の 00110110 11110011 00000101 111100110 01011101 00110000 10000001 00110000 0100101」

「おっと」

「O、至上的な喇叭の異様にも突裂く叫び、人の世と天使の世界を貫く沈黙、その目紫の光を放つ、物の終末！」と最後の連を読み上げた『換喩』の叫び聲が聖書の最後を飾るあのラッパの音に掻き消されるのを聞きながら、おれは『暗喩』に導かれて物語の始まりに飛び移ったのだった。

「——何処もかしこも暗い中、二階に灯りが点いている建物があった。喫茶店らしい店名を書いた看板もあったが、その電灯はもう消えており、その前に階段があった。上ると、何故か扉は開いていた。おれは後ろ手にその扉を閉めた——」

何時の間にか『換喩』の姿は消えていた。

「一人称で語ってるんだね」とおれが言うと、『暗喩』は、「そう言うこと。いい、これから会う人は重要人物だから、その人に〈鏡〉を下さいつて言うのよ」と諭して次第にその姿も見えなくなり、扉の彼方に消えた。

おれは後ろ手にその扉を閉めた。看板にある通り喫茶店だった。あなたは窓際の卓、ソファに腰かけてオレンジ色の街頭に照らされた外を見ていた。

あの斜視気味の女だ。ふいにそう思ったのは、彼女とあなたがほぼ同年代だからだろう。そして、振り向いた眼の前のあなたもやはり、軽い斜視があるようだったが、何故かおれはそれを不思議なこととは感じなかった。

あなたの前の卓には原稿用紙が積まれていた。あなたが夢んでいるように見えたのは、あなたがその原稿に没入しているからしかなかった。白いブラウス。少しウエーブのかかった髪。近くに立っておれは驚いた。あなたはおれが思った程は、若くなかったのである。四十過ぎといったところだろうか。おれは他人の年齢の鯖を読むようなお人好しではない。深夜の喫茶店。あなたがいる窓際の隅の卓だけ、スタンドに灯りが点いている。まるで引き寄せられるようだった。おれは背後からその卓に近附いた。

「そこで何をしているんですか、って聞こうとしているんでしょう」と、先に発聲したのはあなただった。

「逮捕する！ 不法侵入ですよ」

「扉が開いていました。そっちこそ、そこで何をしているんですか？ 深夜の喫茶店に一人」

「そう」あなたは邪れるような口附きをした。「私達は共犯者なのです。深夜の喫茶店に二人」

「呆れた。どうして入ったんですか」

「昔ね、この喫茶店があった場所には小さな雑貨屋さんがあったんだけど、そこで私、店員のアルバイトをやったの。その頃借りてた合鍵、今に至るまで何故か鍵入れにくく附けたままになっててね。すごいと思わない？ ウン十年前のことだよ。開くかなーって思っ、鍵穴に入れて、回してみたら、ピシャリ。あれから、此処、何回かテナント入れ替わってるんだよ。鍵とか付け替えるよね、普通。何、幻影ですって。それにきつと、今、この原稿を読み返していたから。物語の主人公に感情移入していたからでしょうね」

「しがない舞台女優よ。刑事に恋しているの」おれの尋ねにあなたは答えた。

おれが尋ねる。「その女性は、斜視がありますか」

「いいえ。何でそんなこと訊くの」あなたは奇異そうに聞き返した。「実はね、彼女は若い頃の私なの。回想録って言うか。私もそんなものが書きたくなる歳になったのかしら。どうして」

「幻影の女性は、斜視だったから。ところでどんな話なんですか。掻い摘んでいいですか」

「掻い摘んでなんて、無理よ。私にとって大切なお話だから」

おれはそのとき残念そうな顔をしたようで、あなたの表情が見る見る呆れ顔になり、パチンと弾けたように崩れて、笑顔になった。

「それに多分、あなたはこの話に引き込まれてしまうことになると思う。とても面白い話なのよ。ところでブルーストは好き？」

「神です」

「そう」あなたは満足そうに二つ頷いた。「ブルーストを読んだ方なら、長い長い身の上話には慣れておられるのよね、きつと。ブルーストってあの、自分がすでに若くないということを理解するためだけに長い長い回想録を書いた小説家でしょ。そして結局それを理解できないままに死んだ人。ところであなた、時間はあるの？ 何を探して、此処に來たのかしら。随分疲れているように見えるけれど」

「へ鏡」おれは臉を閉じて低語した。「恋人に――、そうです。恋人に贈ろうと思つて、へ鏡」を買いにきたのです。――時間なら、あります。どうやら明日の始發まで足止めを食らうことになりそうなんですよね」

「嘘だあ。この時間帯、この通りに來る男なんて、セイカンに決まってるよ」

「本当ですよ！ 恋人が鏡をどうしても慾しがるのです。やむにやまれぬ事情があるのでしよう。風俗なんて、今のところ僕には関心ないですね。そういう仕事をしている女の子を悪く言うつもりはないですけど、はっきりさせときます。僕は好きじゃない。僕は、鏡を、探しているんです」

「お氣の毒に」あなたはおれの表情を確かめながら呟く。独白のように。「此処は喫茶店であつて、雑貨屋さんじゃないのよ。こんな深更に、へ鏡」のプレゼントを催促するなんて、どんな可愛らしい彼女さんかしら。それから、もう一つ。必死で否定すると逆に肯定してるみたいにか見えません」あなたは惡戯っぽくクスクスと嗤った。「ところで今、へ鏡」と仰ったけど、それって本当の、硝子の裏に金属を貼ったようなへ鏡？ それとも、何かのメタファーですか」

「メタファーとは？」

「あなたと、あなたの仰った彼女さんとの間に存在する、何か抽象的なもの。例えば、私なら、そうね、この物語のこと。この物語は、私が初めて正直に書いたフィクションなの。いや、フィクションと呼ぶべきか、ノンフィクションと呼ぶべきか。その他の作品では、ハッピー・エンドの絵空事ばかり書いてきた。一般人が見るテレビ向けのドラマでね。うん。私はシナリオ・ライターなの。でも、本物の物語は時代と風俗を映すへ鏡」のような

ものなのよ。夢物語だけじゃない、ね。〈鏡〉にどんな退屈な風景が映っても、それは

「鏡」自身の責任じゃない」

「それ、何処かで読んだことがあるな」

「意識して引用したわけじゃないけれど」あなたはそう言いながら、手元の原稿に眼を落とした。「あなたのお好きなブルーストじゃなかったかしら」

「いや、違う。ブルーストはそんな殺伐とした発言はしない」

「あら、そうでしたっけ。ごめんなさい。実は私、ブルーストは未読なの。知ったかぶりはよくないわよね。得意なのは、どちらかというと、クリスティの方かな。この物語も推理小説なのよ」と言って、あなたは、ポンポンと原稿を叩く。早く語り出たくて溜らなといった様子。

「推理小説？ さっき、ノンフィクションって言いませんでしたっけ、確か」

「実話なのに、推理小説なの！ 実話にして、私小説にして、推理小説。ウン。舞台は二十年前、一九八四年。私は二十四歳だった。うーん、今のあなたよりも、どうやら年上ね。二十五歳は、若くない？ でも、私はその頃とても若かったの、そんな気がする。結婚を約束した、恋人がいたわ。四ツ谷署の刑事だった。私はあなたの彼女さんほど可愛くはなかっただろうけど、彼は素敵だったわ。あなたよりも、きっと。闇雲な、プロレス・ゲーム乗りの正義感を持っている警察官ならいくらでもいる。でも、彼が持っていたのはレキとした倫理観だった。そのせいで彼は、警察手帳を返上しちゃうだけだね。一つは、私と結婚するために。もう一つは、勃発した大量虐殺事件の真犯人を突き止めるために。その事件の解決に、私は素人名探偵として一役買うのよ。あのときはドキドキしたな」

「その部分聴きたいな。ちょっと朗読してよ」

「年上の女性に向かってタメ口はよくないわ。あなた、最初入ってきたときに較べて、馴れ馴れしくなっておいでよ」心なしか、微笑んだあなたの頬はこわばっていた。何故だろう。「じゃあ、ちょっと読みますね。今夜は帰れなくなるけど、大丈夫？ 今から走ったら終電に間に合うかも知れないけど。ごめんなさい、眼鏡、眼鏡、と」と、あなたはいそいそと老眼鏡をケースから取り出した。

「私はラップトップを鞆に突っ込み、電車に乗ってハイテク犯罪総合対策センターに駆けつけました。それは恋人の遠藤くんを救うためだったんだけど、説明しないから我慢して聴いて下さいね。場所は知っていた。遠藤くんがそこに勤めていた頃に、仕事帰りを俟ってよく通ったものだったからである。違う、切りが悪いなあ、もうちょっと前、移動の直前から読みますね。ええと」

そんな風に心なしか得意気に遠近両用眼鏡を鼻に乗せ、あなたは原稿を読み始めたのだった。それが物語の始まりだった。嘘じゃない。

二名子

芝居が終わって私は楽屋の鏡の前でぐったりとしていた。項垂れているのは私だけではなかった。芝居が惨澹たる結果に終わった後はいつでもそうだ。

観客の反応など気にしている余裕はなかったが、開演時満席だった客席の五分の一くらいが幕が閉じるときには空席になっていた。

私はラップトップを鞆に突っ込み、電車に乗ってハイテク犯罪総合対策センターに駆けつけた。

私が会議室に飛び込むと、座っていた背広の面々が一斉に無言で振り向いた。中に一人、女性がいる。あれが二十年後の私であるに違いなかった。

「ちょっと、君い、此処は関係者以外、立入禁止だよ、ほら、外に出て」と聲がかかった。「君、それに何だ、そのけたたましい華柄のスカートは。此処は警察だよ」と他の刑事が言う。「誰だ。君は一體誰なんだ」

「申し訳ありません、エスカルゴ・スカートはさっきまで舞台に立っていたもので。私は、遠藤の」私は言い返した、「遠藤の許婚者です」

「遠藤の許婚者？ あの遠藤のことか。よりによって。被害者の方居られるから、席外してくれない。って言うか君、何しに來たんですか」と言っ私を追い出そうと立ち上がった一人の刑事を女性が遮った。「いいわ。話があるなら、どうぞ」

私は無言で頷いて息を静め、壁のスイッチを操作してホワイトボードの前にスクリーンを下ろし、鞆から電源を入れっ放しで持ってきたラップトップを取り出して、「女だから機械は苦手なんですが」と言いながら端子に接続した。スクリーンに Windows XP™ の見慣れたデスクトップの画面が映し出されたのを確かめて、私は電車の中で大急ぎで作ったファイルを開き、Power Point™ を全画面表示に切替えた。

「私は何かみなさんにとって新しい情報を提供するために此処にきたわけではありません。ただ、私たちにとって何が既知であるのか、確認する必要があると考えるのです」

$$\sqrt{2} = \frac{t}{D}$$

スクリーンに数式が映し出された。

「これが、遠藤君……遠藤警視の所属するハイテク犯罪総合対策センターが、連続殺人事件の最初の被疑者、大川典秀少年のハード・ディスクから復元したデータに含まれた、TeXによる数式でした」二名子は俯いてラップトップを見ながら説明を始めた。「ルート2も、tもDも、どれも見慣れた変数や定数であるように思えます。tは時間変数、Dは微分変数か、あるいは差異の可変項ですね。しかしこれらも元を辿れば、tはtime、DはDifferentialの頭文字なわけで、アルファベットの選択は厳密な規則に基づくわけではなく恣意的です。何故私たちはtを見れば時間、Dを見れば切断や差異を想起してしまうのか。tは時間だとかDは微分だとかを一も二もなく想起する擦り込みを数学の能力であると考ええるようなモノの見方に沈溺した慣習によるわけですが、私は幸か不幸かこの能力を持っていなかったゆえに別の解釈を許容することが出来ました。みなさんもこの慣習を意識的に宙吊りにすれば秘密の解答は自ずから見えてきます。分かりますか」と言いながら二名子はスクリーンの数式を切替えた。

$$\sqrt{2-nako} = \frac{t-akane}{D-oguu}$$

「御覧のように、これらの変数と定数は人名の頭文字だったのです。極めて単純です」そこで二名子は一息おき、満足げにオーディエンスを見回した。感心の溜息も拍手も聞こえない。反応がない。憐れみを帯びた微笑すら散見する。一言で表現するなら当惑がその場を支配していた。二名子は気にせず先に続けた。「nakoは私、二名子のことです。

takaneとDoguuは、遠藤が担当しておりました連続殺人事件の概要を把握して来られた方にはもしかすると見覚えがある名前かもしれません。あ、御存知なくても結構です。今、覚えて戴ければ。何しろこの二人があ的事件の最重要人物なのですから。こうして見ると、名前の選択が人為的です。二なる数、時間、差異という概念が先行していて、人名がそれに調和するように選択されたと考えた方が自然じゃないですか。その事実に気づいたとき、私は得も言われぬ悪寒が背筋を走るのを感じました。自然選択と人為選択とは、マクロコスモスとミクロコスモスとは目的論的に完全に相似なのでしょうか。次に私は私自身の物語の形態を分析することにしました。表層に発話者である私か、それ以外の人物が手掛かりを残しているかもしれないと考えたからです。私が物語を始めたのが零時五七分でした。それから三時二七分過ぎまで続け、休憩を挟んで四十分にも再開し、劇が終了したのは六時過ぎです。概算される持続時間はそれぞれ、二時間三一分と、二時間二十分ですね。この

数値は一連のディターミニスティックな操作の結果であるはずですが、プログラムの内部は、偶然手に入った一部を除いて隠されています。その一部分なんですが、私独自の調査によってジャヴァのバイト・コードであることが明らかになりました。ジャヴァはブラック・ボックスというより慣れてくると見通しのよい筈庭に見えてくるくらいオープンな言語なので比較的簡単に逆アセンブラを書くことが出来ます。逆アセンブルしたものをスクリーンで見えて戴きます」

```
import java.util.Stack;

public class Fibb
{
    public Fibb(int s)
    {
        t = Integer.valueOf(1);
        D = Integer.valueOf(0);
        for(voci = new Stack(); voci.size() < 12,)
        {
            voci.push(Integer.valueOf(D.intValue() * unit.intValue()));
            t = Integer.valueOf(t.intValue() + D.intValue());
            voci.push(Integer.valueOf(t.intValue() * unit.intValue()));
            D = Integer.valueOf(D.intValue() + t.intValue());
        }
    }

    public Stack sicAlt()
    {
        return voci;
    }

    private Stack voci;
    private Integer t;
    private Integer D;
    private final Integer unit = Integer.valueOf(s);
}
```

「フィールド名にtとDという、さっきのTeXと重複するキャラクタが表れていることにお気づきでしょうか。そして全體としてはインスタンス化時に与えられた数値を単位数変数に格納し、それを十二番目までのフィボナッチ数列で整数倍して返すだけの簡単なクラスであることがわかります。此処までは警察での調査と一致しているはずだと思いますが、どうでしょう。もう一つの手掛かりは遠藤くんが逮捕された物証である巻き貝の貝殻ですが、貝殻の形状は御存じのように……」

「異議あり」刑事の一人から聲が掛かった。「二つの事件の間に関連性はない」

「静粛にしてください。この事件は存在論的な議論に根ざしているのです。全ての事件は単一な原理によって演繹されねばなりません。二つの事件は私の聲を媒介にして間接的に関連しあっています。私は警察官ではありません。御覧のように物語の語り手です。従って、私が因って立っているのは日本の刑法ではなく、存在論——国の全體性ではなく世界の全體性——です。貝殻の形態は御存じのように貝の成長に伴う母曲線の増加が、外部から統制する視点なしに、いわば無意識に生み出すものです。貝の成長は二を底とする等比級数で近似することが出来ます。一見不規則な時間、フィボナッチ数列、巻き貝。犯人の人為はどの順序で作用したと考えるのが自然でしょうか。現象としての犯罪はその人物の作品です。そこで私は最初の仮定を一度逆転させる必要があることに気づきました。犯人は結果として貝殻を創りたかったのです。そして貝殻というヴェクトル状の連続體を事後的に分節する上で、比喩を美しいフィボナッチ数列に基づいて決定したかった、犯罪が芸術製作であったとするなら、そう考えるのが自然ではないでしょうか。私の不規則な時間はその二つの結果を現象させるために逆算された作業時間の一部であるはずです。この仮説にしたがって試算した結果、全體を一日、二四時間と仮定した場合のタイム・テーブルを見て戴きます」

01:43:42.36
01:51:26.23
01:58:30.90
02:03:49.37
02:08:38.13
02:12:57.29
02:16:59.01
02:20:45.90
02:24:21.21
02:27:46.50
02:31:03.09

「私の語りの時間、二時間三十分と、二時間二十分に近い数値が十二番めと九番めに見附かると思います。ところでフィボナッチ数列を生成するクラスはラストイン・ファーストアウトのスタックを使っているので順番は逆転します。つまり、私は第一と第四のパートを担当させられていたのです。此処からは予言になります。私が回帰するまでの間に経過する第二と第三のパートもそれぞれ担当の語り手がいたはずなんです。そして第四以降は第一から第三までの単純な反復となっているのではないのでしょうか。確証はないのですが、貝殻やフィボナッチ数列を選択する犯人の単純な均整美への志向からの類推です。そして現在の私は、推理が正しいとすれば、第七パート、御覧のタイム・テーブルでは下から七番目の二時間八分三八秒コンマー三の作業を消化している途中なのです」

「その予測がもし当たっていたとしたら独創的な推理だね」と刑事の一人が、当たっているわけがない、という見下した口調で感想を述べた。「面白いけれど、複数あり、しかも入れ子になりうる世界ならそれは人為的な思考実験、則ち虚構的と言える。少年の粉々になったハード・ディスクからたまたま読み取ることが出来たわずかなデータの中に、この世界すべてを読み解く鍵が含まれているなんて、誰か、神なり作者なりの作意が入った虚構でないとは不可能だよ」

私は機械的に頷いた。「虚構だとしたら、書いてるやつは悲しい人物ですよ。自分の人生にこんな御粗末な物語に勝る程度の逸話すら含まれていないって言ってるようなものなわけだから。恐らく、アレックという組織は厳密に決定論的なパラレル・インファレンスのプログラムであり、疑似乱数生成器ではありません。この点、リュ・クルは偽証しているのです。つまり複雑に聲が絡まりあったこの世界という脳髓を線形的に分節して三人

の離散的な語り手に割り振るための物語生成器——カクテル・パーティ・プロセッサ——なんです」

後ろの方から、「莫迦げた理窟だ、警察は遊ぶところじゃないぞ！」という聲が聞こえたが私は気にしない。気にしないフリをしながら内心はビクビクしていたのである。

「……コンピュータはミメティック・ウェポンです。さて事件の下手人ですが、内部にいないことは確かです。組織の内部のみならず、世界の内部にも。動機に於いても手段に於いても内部の人間は除外されねばなりません。従ってリュ・クルはシロです。動機は世界的な立場をとりたいので、複雑性を極度に減少させるこのプログラムが内部から自然発生したとは考えられないのです。決定論的な差異の網目の中では表象と意志との曖昧性は単純増加します。すると外部との境界に位置する三人、私と、タカネさんとドグウさんに容疑を絞ることに異存はないはずです。状況は、世界的な事象と世界的な事象が混合しているという意味において先験的であり、犯罪は理性の越権行為です。この状況に適切な批判を与えて内在と超越とを切り分けなければ事件の解決に近附くことは出来ません。さらに、現在の語り手である私は内部にもプロットされているので除外することが出来ます。他の二人が語っている状態では私も容疑者となるでしょうけれど、現在はそうではありません。つまり、下手人はドグウさんとタカネさんのどちらなのか。私は此处では断定を控えたいと思いますが、現在この世界の内部にいないのは誰か、すでにテレビの外部にいるのは誰かを勘案すれば答えは自ずと明らかでしょう。そして残った一人が次の被害者です。これは不可能な結婚の犯罪なんです。そして私は部外者であって、それらの歯車の一部には組み込まれておりません。私は無罪です。そして私は、ふうは！」恐怖心の余り突如右頬がチツクを起こし、同時に鼻息ともしゃっくりともつかぬ奇妙な空笑が洩れた。

「言いたいことはそれだけか」と即座にオーディエンスから聲が掛かった。

私は背筋を凍らせて頷いた。「以上で私の発表を終えることにします。当会議室を占拠致しましたこと、深くお詫びする次第です」

「担当刑事の湊君は逃走中のリュ・クルを追って郊外の精神病院に行ったところだ。素人が頭を使ってくれなくても事件はもうすぐ解決するんだよ」

いそいそとパソコンを鞆に納めてスクリーンを片付ける間も痛い沈黙が私を刺し続けた。私は俯いたまま頭を下げた部屋を出た。

「俟って」と被害者の二名子が飛び出してきて私に駆け寄った。「あなた、これから外に帰るんでしょ、地下鉄に乗って。多分ね、私、あなただと思うの。二十年後の。驚いた？　って言うか、ごめんね、おばさんで。毎晩お肌のお手入れしてたのよ」

私は無言で首を左右に振って綻んだ。「あなたの方から言って戴いて嬉しく存じます。私、帰ります。二十年後にもう一度お会いしましょう」

「あ、でも、もう一度二十前に神経接続するにはあなたは滞在し過ぎたみたいよ。状態が不可逆的な遷移を起こしてしまった。今なら、一九八六年行きの地下鉄に間に合うわ」と言って懐中時計を確かめる彼女はすでに個的な実態としての印象を失っていた。「今すぐ、エスカレーターに向かって。遠藤君のことは諦めなさい。彼は私と一緒にこの世界に残るの。帰った先のあなたはすべてを失ったところ、許婚者もいなければ、彼との間に出来た一人娘も事故で死んだ後よ。天涯孤独。それでもシナリオを書いて生きて行けるかしら」

「大丈夫です。多分」

「去りゆく者となりなさい」と無人称となった彼女が囁き、私の手を取ろうとしたときにはその體はもう泉のように透明になり、コンマ數秒で華になり罫の残像を残して消えた。私は新宿の都庁前に向かった。もうすぐ未來に所属するものとなって消えてなくなる地下鉄に乗って。

物語は後少しで終わる。お茶を淹れてゆったりと寛ぐために葉を挟んで立ち上がる前に読み終えてしまおう。読書の後には所々に最後まで傍線が入り附箋がついたこの本と、心地よい疲労を背景に自ずから立ち上がる逡巡が俟っているだろう。

タカネ

「セックスもそうだけど、一番大きいのは『死』だと思う」とオチャメサンが答えた。

「ダーウィンも研究ノートの始めで書いてますでしょ。『生は何故短いのだろう』」

「ダーウィンなんて古いわよ」オチャメサンが自分の専門分野で知ったかぶりを言ったからだろうか、川上先生は急に先生の口調になった。「分子生物学ではね、ストラグル・フォー・ライフって言うのはアプリアリじゃないのよ。例えば、アポトーシスって言うんだけど、秋に木の葉が紅葉して枯死するのは何故だと思う。生存競争に負けたからじゃないのよね」

「へえ」とオチャメサンが感心した。「じゃあ、そのアポトーシスについて書けばいいじゃないですか。きつと新しいブングクの可能性がそこに開けるはずですよ。そういえば、生物學でSFって言うと、イタロ・カルヴィーノは好きですか」

「知らないわ」と川上先生。

「確か、ハヤカワに『レ・コスミコミケ』って言う作品の翻訳が入ってると思います。是非探してみてください。私のお気に入りなんです」

旅は世につれ世は人につれ。仲良く会話を交わす二人の横で、ちょっと嫉妬心をくすぐられながらも、ホクホクと笑顔の私なのであった。

「でも私は長い書けないのよね。生理的に」と川上先生。

「先生が書いたショート・ショートに触発されて下手な長編を書く小説家も出てくるに決まってますわ!」

地下鉄の駅で、川上先生が「じゃあ、私はこれで」と手を振り、私たちは別れた。

次の瞬間、私たちはファミコンのある子供部屋に帰っていた。夢だったのだ。

過剰な酩酊はハンカチの無から数を取り出して見せる手品師の言葉のようなもので、内部に自乗した覺醒を隠し持っているのだろうか。

「それ、フラッシュ・バックだよ。まだ自分が知らないものに会おう度に驚いちゃいけないわ」

「お母さんは何処よ。私はお母さんに会いに、多分そのためだけに此処まで帰ってきたの。あなたは誰よ。あなたは関係ない」

「私はこの部屋から出られないわ」

「やめてくれない、そうやって私のことを私って言うのは!」と私が怒鳴っても、コトは

気に止めようとしなかった。「私の〈異〉を私って言うてるのは、あなたの方じゃない。ふふふ。私はこの子供部屋から出られないし、階下に下りて確かめても無意味よ。お母さんはもういないから。だってそうじゃない。あなたは最初、小學生だった。次に足し算遊びをしたときには幼稚園生くらいだったでしょう。今は赤ちゃん。それが私のお母さんにとって何を意味するか、解かるでしょう。灰と埃になったあの人は黒い淵取りがある寫真の中よ」

「出して。お願い」

「無理だよ。そんなの不可能。此処は何処？ 私の子供部屋でしょ。子供の私の部屋。部屋は子供だった私」

「あなたじゃないわよ、私よ」

「変わんないわ。いや、違っただけど、証明のしようがないの。違っって〈異〉が」
本当に訳が分からない。

「あのね、私はもうテレビの外にいるはずなの。ずっと前、十八年前にテレビの外に一回出たの。でも、テレビの中なの。それは許されない〈異〉なの」

「此処はテレビの外よ！」

「此処は、記憶も、時間も置き忘れてきてしまった私の、テレビの中に映った最後の場所。信じられないって言うんだったら、テレビの外を見てみる、一度」コトはそう言って、ツインビーのカセットが入ったファミコンの電源を切り、チャンネルのダイヤルを回した。

砂嵐が、ニュースに切り替わり、キックマンのCMに替わって、それから最後に、吃驚するほど対照的に解像度の高い暗い画面になった。マンションの一室らしい。背後にカーテンと箆筥。そういう風にテレビ画面を通して見ると、個人の生活風景というのは多かれ少なかれ所帯じみたところが強調される。前景では、私と同じくらいの年頃の女の子——つて言うか、率直に私がソファに座って全身を光のシャワーに照らされている。ちょうど、アクションの多い映画かテレビを観ているような感じだった。

「ほら。あそこが、テレビの外だよ。残念だね。此処からじゃ、テレビの中に何が映ってるのか分からない」と、コトが言う。

「じゃあ、此処は何処なの？ テレビの中でも外でもないとしたら」

「さあ。テレビの背後じゃないかしら。電灯の傘にも、電話にも、ラジオにも、テレビにも、背後はあるみたいだし」

「テレビの後ろ？ 後ろに誰がいるって言うのよ！」

「さあね。ほら、テレビの外の私を見れば解かるんじゃないかしら。もっと音量を上げてみる？」

コト——私の〈異〉はそう言って、テレビの音量ダイヤルを回した。今まで消音されていたテレビのスピーカーからこぼれ落ちる割れるような語り聲に私は耳を澄ますのだった。

私は二名子さんを愛している。二名子さんは私の母親。私は彼女を俟っている。六時半に起床して顔を洗ってから、後後九時の消灯時間まで、彼女の事を考えてるの。繰り返して、繰り返して。一番素直に二名子さんのことを考えられるのは、朝と夜、それから就寝の直前のお薬の時間だと思う。お薬は私の墮落した頭脳を洗い浄める。でもその時だけじゃないわ。お朝食の後には、患者みんなが集まって、ラジオ体操の音楽にあわせて体を動かす。その時も私は二名子さんのことを考えていて、まるで、二名子さんが私に皮膚を浸透して物理的に満たしてくれるようだ。陰核が、私の——。いいえ、それだけじゃないわ。お昼食の後には、祈りを込めて作業療法。此処では無口で従順な人ほど優遇される。外の世界とは正反対。此処では、

大きな聲を出すことは背信の証拠と見做される。出してくれと叫べば叫ぶ程、危険人物扱いされる。二名子さん以外のことは考えてはいけないの。特別な社会的手続きを経て入院された方ばかりなのに、一月に一人は、此処が外部から境界によって隔てられた内部であると勘附いてしまう人がいる。そんな場合は、バージン・スノーの服を着た人のいる小部屋で罪を悔い改めるための告白をすることになる。それで普通は、お祈りの――お薬の量を倍に増やされるだけで済むのですけれど、症状が悪化して、異形の人に変貌してしまわれたケースには、悪魔祓いの小部屋に収監される。そこで数日に渡ってかごめごつこの鬼にならされる。私はその小部屋に入れられたことがないけれど、遠くから延々と聞こえてくるその歌にいつも慄く。

周囲を回転する看護士さんは、二を法とし、一とならなければならぬという、誰も疑問を持ったことがないけれど何らかの空虚な御座成りの理由から遵守されている掟に従う。そして誰かが必ず鬼の正面で止まるようにするものだから、後ろの正面はいつも空っぽになる。空もメンバに含まれる、それも規則。空をなぎすことは許されない。名前を得た瞬間に、空は空ではなくなってしまうからだと思っているけれど、本当の理由はその律法が私達の生を耐えやすくするからに違いない。病院の、歓待のルールは病に耐える患者の快樂、エウポリアのためにあるはずだから、そうでないと、考えることが増えて、みんな困る。また振出に戻って。繰り返す。でも大丈夫。

境界の外側、壁の内側。私たちは此処で暮らしている。私たちもあなたたちと同じ、多分。そういうことにしておきましょうよ。内側と外側の間には空隙があり、一つの地平線上に乗っからないものだから、比較した人はいない、第一区別を立てるのは何となく莫迦げているのですもの。少なくとも此処には土偶さんは存在しない。そちらには、いるのでしょうか？ 現前しているから、被うことすら許されないの。こっちではね、あの人はただの文字記号。見て分かるでしょ。でも、土偶さんも私達も、私達を創った二名子さんにとっては同じ、ペーパークラフトなのかもしれない。でも少なくとも私には聲があるし、少しは余計に自由が――否、筋書きを予定したのは私じゃない。まだよく分からない。私は二名子さんのことを考えている。至福。二名子さんに近づけるかもしれない。土偶さんから距離を置くために。土偶さんの足音が聞こえる。私はまだ。

私も何時また、此処に連れてこられたときのように土偶さんにこの體を乗っ取られて、悪魔祓いの小部屋に送られるか分からないけれど、そのときは私も、歯車の歯のように回転する群像の籠に囚われた小鳥になる。でも大丈夫。例え土偶さんが来ても、今度こそ、彼のスペースを空っぽにしてやるつもり。秘密が守れるなら教えて上げる、実は、今までそうして幾度かごまかしてきたの。土偶なんて恐くない。与えられた集合の部分集合には必ず空集合が含まれていなければならないのだから、それが前提なのだから。此処には不在、土偶の趾音が聞こえてくる。

〈異〉はテレビの音量を搾ると暗黒の外界に降りしきる残酷の雨が前景に復帰した。

「どう、分かったでしょう。私は社会をドロップ・アウトしてメリディエスに帰り、修道女になったの。社会的にはもう死んだも同然よ」

「もしそうだとしたら、真実は『テレビの中』の存在だとしたら、此処にいるこの私は何なの」

「どうして自分で分からないの。私はただの言葉よ。現実には、言葉と言葉の間隙に存在するのであって、言葉自體の中には空虚しかない。次に眼を放して頁を見失ったら最後、私

はプリンタの黒のトナーに還っているわ。コピーのコピー、模倣の模倣、メタフィクションのメタフィクション」

「私は還りたくない」

「じゃあずっと此処にいることね」と言って、後に〈窓〉を残して〈異〉は消えた。

土偶

原稿から顔を上げてあなたは眼鏡を外しておれを見たが、それはあなたの癖なんですよね。

「それでどうしたんですか。〈窓〉とか〈鏡〉とか意味不明なんですけど」

「やっぱりね。物語は最初から最後に向かって順番に読まないという意味がないものだから」

「じゃあ、最初から順に聞かせてくださいよ」

「困ったことに何処が最初なのか忘れちゃったわけよ、私。もう歳なのかしら」

「歳じゃないですよ、しっかりしてください」

「最初が分かれれば最後も分かるんだけど。最初でも最後でもない部分なら比較的はっきりしてるのよ。例えば」と言っただけあなたは原稿の別の部分を読み始めたのだった。

「しっかりと背広を着込んだ湊警部を前にして、精神病院の受附に座っていた看護師は拳動不審になった。

『恐がらないで。私は礼状を持ってきたわけではありません。捜査は飽くまで任意です』受附の小窓から消え、暫くして横の扉を開いて出てきた看護師は小脇にファイルを持っていた。『こちらが御用の患者様のプロフィールでございます。いらしてください』看護師は茶色い艶のある髪を束ねて薄桃色の古風な看護帽をヘアピンで留め、同じ色のワンピースの上に紺色のカーディガンを羽織っていた。鼻と頬を覆うマスクが丁寧にメイクされた眉と鋭い眼を鎧戸から覗くように露出させていた。

精神病院の看護にマスクが必要なものだろうか、と湊警部は逡巡した。それも、花粉症や風邪のマスクではない、歯医者が使うような巨大なやつである。精神病院に長く勤めていれば、そういう不可解な習慣が身に付くものなのかもしれない。あるいは、元々が不可思議な人々だからこそ、そういう職業に集まるのかもしれない。もしかするとあのマスクの中には大きな火傷の跡が隠されているのかもしれないし、そう考えるとエンドウ監視には言及することが躊躇われた。湊警部は意を決して、看護師に尋ねた。

『マスクが必要なのですか？ この病院では。以前訪問した精神病院では看護師のマスク着用は義務付けられていないようでしたか』

『ID番号が識別されないように』と、看護師が答える。『ご存知ないかもしれませんが、精神病院には至るところに監視カメラが設置されているのです。患者様方の罹病状態を考慮すれば、致し方のない処置といえましょう。ほら、あそこにも』と彼女が指さした天井

の片隅には、確かに黒いカプセル状の球體が螺どめされていた。

それは明らかに納得のいく理由ではなかったが、湊警部は感心したようにしきりと頷くのだった。

『あの患者様は、毎日同じドラマを考えているんです。毎日別のドラマを考える方なら、何処にでも居られるでしょう。でも同じドラマを次から次へと考え出しているのは、あの患者様くらいです。昨日は私にそのドラマをお話なさいました。今日は、ロビーで先生に。私たちが飽きずに毎日聞いているのはドラマが面白いからでしょうか、それとも飽きないことが私たちの仕事だからでしょうか』

マスクの看護士が指さした先に眼を凝らし、湊警部は驚きを隠すことは出来、表情には変化がなかったものの、無言で一心に見詰めるその動作の不在が雄弁に多言な性格の彼の動揺を物語って余りあった。

中庭からの白い光に満たされたロビーには、古びて毛羽だった二人掛けの黒いソファに腰かけた患者の相手をする白衣の医師の姿が浮かびあがり、白く滲んでいた。患者はまるで無憂宮の紡ぐ永遠が織りなした穢れなき熾天使のタピストリのように寛いでいた。

『あれが、現実にあれが、二年前に措置入院した人ですか』湊警部が看護士に尋ねた。

『私たちははっきり、男性かと』

『人違いでしたの？』と、看護士が首を傾げた。

『いや』と、湊警部が受けた。『あの人に間違いありません』

燻んだソファの患者は枯葉色と桃色のギンガム・チェックのパジャマを着て、天然の光線よりも透明なその白い素肌の奥深くまで陽光が浸透している様子だった。それよりも印象的だったのは、彼女の毛髪の美しさだった。患者はあどけない表情の少女だった……。そうだ、今何時でしょう」とあなたは原稿から眼を上げた。「二十二日になったみたいですね。お薬飲まなきゃ。一日二錠」と言いながら、あなたは調理場に立ってコーヒーをセツトした。

ブルーストは、物語の価値はそこに込められた時間の量に比例するということのように言っている。

ブルーストの場合それはダブル・ミーニングで、反故になった「ジャン・サントウイユ」や「コントロール・サントロブルーヴ」から始めて「失われた時」に至るまで実際の作業に長い時間を掛けてしまったことと、「失われた時」自體が長い時間の作用、老いが与える悲しみと偶然の想起がもたらす恩寵とをテーマにしていることを意味する。あなたの回想録には長い時間ではなく、同時に並行する幾つもの時間が描かれているようだった。時刻はもうすぐ午前四時だった。おれはプラトンがアテネ市民と未來のソクラテスの中傷者たちにしたように、出版を断った人々と未來の読者たちに対してあなたの作品を弁明するべきだと思う。あるいは近接して、あるいは遠く離れて並列する幾つもの時間。実在は名によって規定された属性から滑り抜け、名は幾つものアイデンティティを指し示して自己矛盾に陥る。そんな混沌から脱出するために人類は數を持つ。數と美意識さえ忘れなければコミュニティの混乱も消えて行くだろう。だがあなたは數學者ではないから、自然言語の無秩序に忠実に身を任せるしかなかったのだ。

「珈琲が湧いたみたい」と言って奥の調理場に立ち、あなたは自分だけのために珈琲カップを用意しておれの俟つ卓に帰って來た。内用、泉二名子様、一日一回就寝前服用、ジプレキサ（5）と書かれた紙袋から錠剤を取り出し、二錠口に含んで湯氣を立てる珈琲を手にとった。

おれは、珈琲にミルクを一雫落とすあなたの指先に属目した。

ミルクの液滴が中心に触れた瞬間、水面に窪みが出來た。窪みの周囲には円形に珈琲が隆起し、それが次第に薄く、高くなりながら円周を増大させていく。月のクレーターから

円形競技場に近付き、その液膜の客席部位に縦に幾つかの亀裂が入って紙の切先のような第二の波形は釣鐘草の口に変形する。さらに鶏冠の部分の突起が數十の液滴となって千切れ、再び水面に落下するのである。そのクレーターが平坦に戻ると中心に液柱が立ち上がった。珈琲の柱はバベルの塔のように高く上昇し、神の怒りに触れてだろうか、それもまた液滴となって弾け飛んだ。

後には細かな波紋の刺繍が残った。

二名子

あのときにしたって、土偶君の気持ちが分からなかったわけではない。むしろ逆に、私は自分の内心が彼に見透かされているのではないか、恐かったのである。違う、それでは逆の逆だ。語り手に作者の内面を語ることがどうして許されよう。私が語らねばならないのは物語の世界の人物なのだった。

「先生」と少女に語りかけられた医師は穏やかに頷くのだが背中しか見えないパースペクティヴにいる。「先生、あのね。このシナリオ、本物のアイドル・タレントを使ってドラマ化するつもりなんです。モデルにした団體からクレームがつくかも。そしたら、どうしましょう」

医師が何か答えた。エンドウ警視は無心に少女の右の瞼が華柄の凸面鏡になって澄んだ空中を漂う病院の空気清浄機に浄化された甘い香りのする空気を反射するのに注視していた。

だがそんな終末の情景も一瞬の出来事だったのである。少女は医師から茶色く変色したコピー用紙の束を受け取り、鈴を振るような聲で「深夜の喫茶店での聴き手と語り手の対話から始まって私が蛇足中の蛇足を語る病院に正午に辿り着き、最後は日出と日入の時間対称が自分自身へと再帰する折り畳み式の物語。要約してみるとたったそれだけだけれど、長い、複雑なお祈りだった。付き合って戴いてどうもありがとうございます。じゃあ、私はこれで。また」と言い、ゆっくりと立ち上がった。茶色いビニールのスリッパがリノリウムにペタペタと擦れ付き、彼女の伸長まで育ったゴムの木の蔭に隠れて非常通路の方向に消えた。後には医師が同じ姿勢のまま取り残された。マスクの看護師は手元のファイルを差し出して見せた。

「スズキタカネ十八歳。統合失調症です。小さい頃に妹を殺害して小學校に上がる七歳まで入院されています。二年前に、携帯電話や照明器具の傘の裏などに盗聴器が仕掛けられているという固定思念を発症し、カウンセリングを受けている最中に譫妄状態に陥ってこちらに入院されました。お母様は高校への復學を希望されていますが、年内に退院できるほど症状が快復する見込みはないようですし、例え今年度中に退院されても、三學年のギャップを背負って高校に通うことに意味があるのか、彼女にそれに耐えるだけの強さがあるのか。あんなに元氣そうにされているのに、心の病氣は分らないものです」

「あの子は誰かに操られているようだったが、本当でしょうか。確信がありません」と、

ミナト警部。「誰にも、私たちの意志の由來を透視する能力はありません。私たちの意志を操る能力さえ存在すれば解決できたでしょうが今回は迷宮ですな、どうやら」と、ミナト警部が締め括っている場面なのだが、物語を切り出した私は、病院から譲り受けたコピー用紙の束のコピーの束を帰りの電車で膝に広げた警部を残して此処で消えるしかない。飽くまで平等に作られたこのゲームは後手必勝。物語の締め括りは土偶君のオーダーになっているが彼に与えられた文字数は零。安手のコピーで複製された判読困難な薄い鉛筆の変體少女文字の解読はミナト警部に委せることにしよう。

タカネ

平行線を辿る

鈴木タカネ著

献辞

東大の久美子先生に。
此の虚構の登場人物
は何れも作者より能
く彼女の面影を留め
てゐる。

一體誰が太陽は虚偽だと主張するだらうか。

———マルシリオ・フィチーノ、*Liber de Sole*

次の瞬間テレビの雑音を消した私の光り輝く瞳から滴り落ちた水滴は球形の鏡の煌きの
外側にも私がいるのは内側に私はいるからで、外側の私は硝子戸と面紗カーテンを透かす

内光が鏡板に反射する伽藍堂のマンションの一室で反射板となった鏡板によって上から照らされた被寫體の瞳から涙がこぼれ、球形になって空中を漂い白い洋服に落ちる直前その外側に内側の景色が照らし出された部屋の天井にワイン・レッドが高層ビルの飛行障害灯のように明滅し、そのレンズに捉えられた廢墟は磁気ディスクに記録されて涙がこぼれ落ちる私の瞳に映る像となり雑居ビルの地下にこぼれ落ちた水滴は幸福の光を結晶させた硬い水晶が融ける物語と共に溶けた物語は砂糖水になって私のベッド・ルームを漂うから私はもう恐くないのに流れるのはこぼれた涙は内側の私を外の私と鏡像対称に置き球體の外をクリーム色の布で囲んだ寢台で私は涙が表紙に溢れるほど分厚い本に没頭して検温の間を待ち、こぼれた水滴の外部の素材は内部の部屋で私を表象する時間は系列であると同時に並列の關係を含み、私自身の外的な反映を媒介にして内側の部屋の表象が涙の中に包括された部屋の瑠璃戸から光粒子が雨になって降り注ぎ、私の體を焼き尽くしてその外部を内部に漂わせ、私の腦が平行線を辿って溶けた次の瞬間テレビの雑音を消した私の光り輝く瞳から滴り落ちた水滴は球形の鏡の煌きの内側にも私がいるのは外側に私はいるからで、内側の私は瑠璃戸と面紗カーテンを透かす外光が鏡板に反射する伽藍堂のマンションの一室で反射板となった鏡板によって下から照らされた被寫體の瞳から涙がこぼれ、球形になって空中を漂い白い洋服に落ちる直前その内側に外側の景色が照らし出された部屋の天井にワイン・レッドが高層ビルの飛行障害灯のように明滅し、そのレンズに捉えられた廢墟は磁気ディスクに記録されて涙がこぼれ落ちる私の瞳に映る像となり雑居ビルの地下にこぼれ落ちた水滴は幸福の光を結晶させた硬い水晶が融ける物語と共に溶けた物語は砂糖水になって私のベッド・ルームを漂うから私はもう恐くないのに流れるのはこぼれた涙は外側の私を中の私と鏡像対称に置き球體の中をクリーム色の布で囲んだ寢台で私は涙が表紙に溢れるほど分厚い本に没頭して検温の時間を待ち、こぼれた水滴の内部の素材は外部の部屋で私を表象する時間は系列であると同時に並列の關係を含み、私自身の内的な反映を媒介にして外側の部屋の表象が涙の中に包括された部屋の硝子戸から光粒子が雨になって降り注ぎ、私の體を焼き尽くしてその内部を外部に漂わせ、私の腦が溶けた。

土
偶